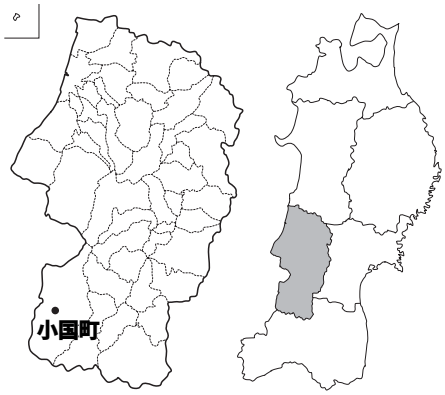
飛泉寺跡遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第134集



２００４

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

ひせんじあと

飛泉寺跡遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第134集

平成16年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

調査区全景（東から）

ＳＢ２大型掘立柱建物跡（東から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、飛泉寺跡遺跡の調査成果をまとめたものです。

飛泉寺跡遺跡は、西置賜郡小国町大字市野々字寺ノ前に所在します。置賜地方でも、新潟の県境に近いこの町は、豊かな自然に恵まれ、新潟と米沢を結ぶ越後街道の宿場として発展してきました。

この度横川ダム建設事業に伴い、工事に先だって飛泉寺跡遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、中世から近世にかけての掘立柱建物跡を中心とした集落跡が確認され、飛泉寺を中心として栄えた門前町としての様相が明らかになりました。遺物では、中世の輸入陶磁器、江戸時代では、北前船によって運ばれ、越後街道を通ってもたらされた肥前産陶磁器などが出土しました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育ててきた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　　木　村　宰

例　　言

1　本書は、国土交通省北陸地方整備局横川ダム建設事業に係る「飛泉寺跡遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は、国土交通省北陸地方整備局横川ダム工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　　飛泉寺跡遺跡（ひせんじあと）

遺 跡 番 号　　平成９年度登録

所　在　地　　山形県西置賜郡小国町大字市野々字寺ノ前

事業委託者　　国土交通省北陸地方整備局横川ダム工事事務所

調 査 主 体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター

　　理　事　長　　木村　　宰

受 託 期 間　　平成13年４月１日～平成14年３月31日

　　平成14年４月１日～平成15年３月31日

　　平成15年４月１日～平成16年３月31日

現 地 調 査　　平成13年８月20日～平成13年11月２日（第１次調査）

　　平成14年５月13日～平成14年10月25日（第２次調査）

　　平成15年５月12日～平成15年７月４日（第３次調査）

調査担当者

第１次調査　　調査第一課長　　野尻　　侃（国土交通省関連事業担当・調査主任）

　　主任調査研究員　　黒坂　雅人

　　調　　査　　員　　大村　和弘

　　副　調　査　員　　黒沼　幹男

第２次調査　　調査第一課長　　野尻　　侃（国土交通省関連事業担当）

　　主任調査研究員　　黒坂　雅人・伊藤　邦弘

　　調 査 研 究 員　　菅原　哲文(調査主任)・佐竹　弘嗣・山口　博之・高桑　弘美・水戸部秀樹

　　副　調　査　員　　石垣　岳彦

第３次調査　　調査第一課長　　野尻　　侃（国土交通省関連事業担当）

　　主任調査研究員　　須賀井新人

　　調 査 研 究 員　　菅原　哲文（調査主任）

　　副　調　査　員　　関根　桂子

4　本書の作成・執筆は、Ⅰ～Ⅴ・Ⅶ章を菅原哲文が担当し、佐竹弘嗣、石垣岳彦がこれを補佐した。Ⅵ章は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。全体については、野尻　侃が監修した。

5　委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測　　国際航業株式会社・アジア航測株式会社

基準点測量　　寒河江技術コンサルタント

出土遺物保存処理（金属製品）　　株式会社京都科学

理化学分析（放射性炭素年代測定・樹種同定）　　パリノ・サーヴェイ株式会社

6　出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

7　発掘調査及び本書を作成するにあたり、以下の方々や関係機関から御指導・御協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。（敬称略）

小国町教育委員会、置賜教育事務所、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、八戸市博物館

佐々木浩一、大橋　康二、宮本長二郎、関根　達人、吉田　款

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

ＳＡ…杭列	ＳＢ…掘立柱建物跡	ＳＤ…溝跡
ＳＫ…土坑	ＳＸ…性格不明遺構	ＥＰ…柱穴
ＲＰ…登録陶磁器・土器	ＲＱ…登録石器・石製品	ＲＷ…登録木製品
Ｐ…陶磁器・土器	Ｓ…石	Ｗ…木・木製品

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（日本側地系）により、高さは海抜高で表す。

4　遺構実測図は１／40・１／100・１／200の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中の網■は柱痕を表す。

5　土層観察においては、遺構を覆う基本層序をローマ数字で示し、遺構覆土については算用数字を付して区別した。また、「Ｘ－０」は出土地点・層位が共に不明であることを示す。

6　本文中の遺物番号は、遺物図版・写真図版とも共通のものとした。

7　遺物実測図・拓影図は、原則的に１／２、１／３、１／５で採録し、各々スケールを付した。

8　遺物挿図中の網は、特に指示しないものについては、以下の通りである。

■…炭化物付着　　■…漆付着

9　遺物観察表中の（　）で示した計測値は、図上復元による推定値、〔　〕で示した計測値は残存値である。出土地点欄の層位では「Ｆ」は遺構覆土内出土、「Ｙ」は遺構底面出土を示す。

10　遺物図版については任意の縮尺とした。

11　基本層序及び遺構覆土の色調の記載については、1998年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の方法と経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
　1　地理的環境……4
　2　歴史的環境……4
Ⅲ　遺跡の概要……9
　1　遺跡の層序……9
　2　遺構と遺物の分布……9
Ⅳ　中・近世の遺構……13
　1　第１遺構ブロック（Ａ区北・Ｃ区北・Ｄ区）……13
　2　第２遺構ブロック（Ｂ区北）……23
　3　第３・４遺構ブロック（Ｂ区南）……25
　4　第５・６遺構ブロック（Ｃ区南・Ａ区南）……35
Ⅴ　出土した遺物……39
　1　中・近世の遺物……39
　2　縄文時代の遺物……43
Ⅵ　自然科学分析……44
Ⅶ　調査のまとめ……48

報告書抄録……巻末

表

表１　飛泉寺跡遺跡関連年表 ……8
表２　放射性炭素年代測定結果 ……45
表３　植物遺体の同定結果 ……45
表４　建物跡・柵列観察表 ……109
表５　陶磁器観察表……129
表６　石製品・礎石観察表 ……131
表７　金属製品観察表……132
表８　木製品観察表……132
表９　縄文土器観察表……132
表10　石器・石製品観察表 ……132

図　版

第 1 図　調査区概要図 …… 3
第 2 図　遺跡位置図 …… 7
第 3 図　遺跡層序図 ……10
第 4 図　遺構配置図 ……11
第 5 図　第１遺構ブロック　遺構配置図……51
第 6 図　第１遺構ブロック　ＳＢ901・ＳＡ902……53
第 7 図　第１遺構ブロック　ＳＢ903 ……54
第 8 図　第１遺構ブロック　ＳＢ２ ……55
第 9 図　第１遺構ブロック　ＳＢ904・905……57
第 10 図　第１遺構ブロック　ＳＢ906・907……59
第 11 図　第１遺構ブロック　ＳＢ908・909……60
第 12 図　第１遺構ブロック　ＳＢ910～912……61
第 13 図　第１遺構ブロック　ＳＢ913・914……62
第 14 図　第１遺構ブロック　ＳＢ841・915・916 ……63
第 15 図　第１遺構ブロック　ＳＢ917～920……64
第 16 図　第１遺構ブロック　ＳＢ842・921～923 ……65
第 17 図　第１遺構ブロック　ＳＢ924～928……66
第 18 図　第１遺構ブロック　ＳＢ929～933……67
第 19 図　第１遺構ブロック　ＳＢ934～938……68
第 20 図　第１遺構ブロック　ＳＢ840・939～942 ……69
第 21 図　第１遺構ブロック　ＳＢ943～948……70
第 22 図　第２遺構ブロック　遺構配置図……71
第 23 図　第３・４遺構ブロック　遺構配置図……73
第 24 図　第２遺構ブロック　ＳＢ714・990……75
第 25 図　第２遺構ブロック　ＳＢ726・727……76
第 26 図　第２遺構ブロック　ＳＢ991～993……77
第 27 図　第２遺構ブロック　ＳＢ719 ……78
第 28 図　第２遺構ブロック　ＳＢ994～996……79
第 29 図　第２遺構ブロック　ＳＢ715・997……80
第 30 図　第２遺構ブロック　ＳＢ844・998・ＳＫ605 …81
第 31 図　第３遺構ブロック　ＳＢ999・1000 ……82
第 32 図　第３遺構ブロック　ＳＢ1001～1003……83
第 33 図　第３遺構ブロック　ＳＢ1004～1007……84
第 34 図　第３遺構ブロック　ＳＢ1008～1010……85
第 35 図　第３遺構ブロック　ＳＢ1011～1014……86
第 36 図　第３遺構ブロック　ＳＢ1015～1019……87
第 37 図　第３遺構ブロック　ＳＢ1020～1024……88
第 38 図　第３遺構ブロック　ＳＢ1025～1030……89
第 39 図　第３遺構ブロック　ＳＢ1031～1035・
ＳＫ606・704 ……90
第 40 図　第４遺構ブロック　ＳＢ610 ……91
第 41 図　第４遺構ブロック　ＳＢ572・1048～1050 ……92
第 42 図　第４遺構ブロック　ＳＢ517・1051 ……93
第 43 図　第４遺構ブロック　ＳＢ1052～1054……94
第 44 図　第４遺構ブロック　ＳＢ1055～1058・
ＳＫ570・571 ……95
第 45 図　第５遺構ブロック　ＳＢ1059～1062……96
第 46 図　第５・６遺構ブロック　遺構配置図……97
第 47 図　第５・６遺構ブロック　ＳＢ1063～1066……99
第 48 図　第６遺構ブロック　ＳＢ617 ……100
第 49 図　第６遺構ブロック　ＳＢ724・1067・1068……101
第 50 図　第６遺構ブロック　ＳＢ723・1069……102
第 51 図　第６遺構ブロック　ＳＢ1070～1072 ……103
第 52 図　第６遺構ブロック　ＳＢ１・1073～1075 ……104
第 53 図　第６遺構ブロック　ＳＢ1076～1081 ……105
第 54 図　第１遺構ブロック　建物重複関係図１ ……106
第 55 図　第１遺構ブロック　建物重複関係図２ ……107
第 56 図　第２～６遺構ブロック　建物重複関係図 ……108
第 57 図　青磁・白磁・青花・瀬戸美濃系陶器・珠洲 …113
第 58 図　珠洲・戸長里・肥前系陶器他 ……114
第 59 図　肥前系陶器・瀬戸美濃系陶器他 ……115
第 60 図　在地系陶器他 ……116
第 61 図　肥前系磁器 ……117
第 62 図　肥前系磁器 ……118
第 63 図　肥前系磁器他 ……119
第 64 図　肥前系磁器 ……120
第 65 図　近代の陶磁器・かわらけ・瓦器・石製品 ……121
第 66 図　礎石……122
第 67 図　礎石……123
第 68 図　礎石……124
第 69 図　礎石……125
第 70 図　礎石・金属製品・木製品 ……126
第 71 図　縄文土器・石器 ……127
第 72 図　石器・石製品 ……128
付図１　飛泉寺跡遺跡調査区全体図
付図２　飛泉寺跡遺跡調査区全体図

写真図版

巻頭写真	調査区全景・ＳＢ２大型掘立柱建物跡
写真図版１	遺跡遠景他
写真図版２	調査区近景・調査状況・ Ｂ区南北土層断面他
写真図版３	調査区全景
写真図版４	第１遺構ブロック（Ａ区）完掘状況
写真図版５	第１遺構ブロック（Ａ・Ｄ区）完掘状況
写真図版６	第１遺構ブロックＳＢ２完掘状況他
写真図版７	ＳＢ841・842完掘・ ＳＢ901・904・905柱穴
写真図版８	第２遺構ブロック（Ｂ区北）完掘状況
写真図版９	第２遺構ブロックＳＢ844・715完掘状況他
写真図版10	第３・４遺構ブロック（Ｂ区南）完掘状況
写真図版11	第３・４遺構ブロック（Ｂ区南）完掘状況
写真図版12	第３・６遺構ブロック完掘状況他
写真図版13	第６遺構ブロックＳＢ617・723完掘状況
写真図版14	第５遺構ブロック完掘状況・ 遺物出土状況他
写真図版15	青磁・白磁・青花・瀬戸美濃系陶器
写真図版16	珠洲・戸長里
写真図版17	戸長里・瀬戸美濃系陶器・肥前系陶器他
写真図版18	肥前系陶器・瀬戸美濃系陶器・ 在地系陶器他
写真図版19	在地系陶器・墨書赤外線写真他
写真図版20	肥前系磁器
写真図版21	肥前系磁器
写真図版22	肥前系磁器
写真図版23	肥前系磁器他
写真図版24	近代の陶磁器・瓦器・かわらけ・石製品
写真図版25	礎石
写真図版26	礎石
写真図版27	礎石・金属製品・木製品・縄文土器・ 石器・石製品
写真図版28	石器
写真図版29	木材・炭化材・種実遺体（１）
写真図版30	木材・炭化材・種実遺体（２）

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

横　　川

小国町市野々地区を流れる横川は、飯豊連峰に水源を発し、小国町内で一級河川である荒川と合流し、新潟県を通り日本海へと注ぐ。昭和42年８月に、荒川流域では死者・行方不明者が90名に及ぶ「羽越水害」が発生し、流域の市町村も大きな打撃をうけた。このため、翌年荒川水系工事実施基本計画が制定され、この経緯の中で横川ダムは、洪水調節・発電や水資源の有効活用の多目的ダムとして、平成２年から建設に着手されることとなった。

建設省（現国土交通省）の横川ダム建設事業計画に伴って、県教育委員会は平成７年度にダムに関わる遺跡詳細分布調査を実施し、市野々向原遺跡・野向遺跡・千野遺跡等の存在を確認した。山形県埋蔵文化財センターは、平成９年度にこの３遺跡の発掘調査を行っている。

飛 泉 寺 跡

飛泉寺跡は、昭和55年に小国町教育委員会に町指定史跡として登録されていたが、横川ダム建設事業が計画されたため、ダム水没区域にかかることとなった。町教育委員会は、遺跡の保護をはかるため、遺跡の存在確認を県教育委員会に依頼した。これを受け、県教育委員会は、平成８年に表面踏査・一部試掘調査を行い、平成９年５月12～14日、11月11・12日に試掘調査を実施した。その結果、飛泉寺跡とされる拡張区では遺構は確認されなかったが、寺院北側の周辺に多数の柱穴等の遺構が確認されたため、「飛泉寺跡遺跡」として、平成９年度に県の遺跡に登録された。山形県埋蔵文化財センターでは、横川ダム工事事務所の委託を受け、平成13年から発掘調査を実施することとなった。

2　調査の方法と経過

発掘調査は、平成13年から15年にかけて、第１次～第３次調査を実施した。調査面積は、第１次調査1,700㎡、第２次調査6,500㎡、第３次調査820㎡、合計9,020㎡である。調査区は（第１図）、第１次調査時に表土除去を行った部分の、調査区中央を南北に走る溝跡（ＳＤ510）を境に、東側をＡ区、西側をＢ区とし、それぞれを南北に分けている。第２次調査時に新たに拡張した部分をＣ区とし、Ａ区北の柱穴密集部分の東側にあたる部分をＣ区北、南側の斜面上方をＣ区南とした。Ｄ区は、第３次調査区に該当する。調査区のグリッドは、国土座標の平面直角座標系第Ｘ系：Ｘ＝－220420.000・Ｙ＝－89170.000を原点（Ａ－０）とし、東西軸、南北軸を基準に５ｍ方眼で設定した。グリッド番号は、原点から東と南に向かってそれぞれ５ｍごとに、アルファベットでＡ、Ｂ、Ｃ…、アラビア数字で０、１、２…と順に番号を振り、「Ａ－１」のように表記した。グリッドの帰属は、北西隅の杭を基準にした。遺構番号については、第１次調査では、１～300番台の遺構番号を設定し、第２次調査では、501～700番台を、第３次調査では、800番台を設定した。第３次調査後の整理作業で設定した建物番号については、901～1000番台を設定している。遺物番号は、第１次調査は１～24、第２次調査では、101～119を設定している。次に、調査の経過について以下に述べる。

《第１次調査》

平成13年８月20日より調査を開始する。環境整備と、調査区内の立木の伐採や除草を行う。27日より、重機による表土除去作業を開始し、併行して南部の面整理に入る。９月中旬まで遺構検出をほぼ終了する。掘立柱建物跡、柱穴、土坑、溝跡等の多数の遺構を確認する。

21日、小国町教育委員会、文化財保護室担当者が来跡する。これまで確認された遺構より、町教育委員会から、町の文化財として飛泉寺跡遺跡の性格と内容を明らかにするため、さらなる拡張調査の要請をうける。これを受けて、文化財保護室との調整後、横川ダム事務所と協議を行うことにする。雨の日が予想以上に多く、作業の進行が遅れる。検出遺構も多く、当初の調査の終了予定が困難になってきたため、10月22日に今後の調査日程について横川ダム工事事務所、小国町教育委員会、埋蔵文化財センターの三者で協議する。その結果、11月２日まで調査を延期し、調査区を拡張することの了解を得た。Ａ区の東側（平成14年度調査のＣ区）にＴ１～Ｔ４の試掘トレンチを入れることとする。

調査を延期

遺構の精査、記録を進めるとともに、10月23日に調査説明会をに開催する。31日にトレンチに重機を入れ、遺構確認面まで掘り下げる。多数の遺構を検出する。11月１日に空中写真撮影を実施し、２日に第１次調査を終了した。

《第２次調査》

平成14年５月13日に調査を開始する。20日から重機によりＣ区の表土除去と、面整理作業を開始する。24日、叶水中学校生徒と教職員14名が発掘作業見学に訪れる。

31日、Ｃ区の表土除去を終了。遺構の分布は、北側にかけて密度が高く、北側の調査区外へ分布が拡大する可能性が高いと考えられた。６月10、11日、北東部調査区域外（Ｄ区）にＴ１～Ｔ３トレンチを入れる。その結果、柱穴等の遺構が確認された。

14日、Ｃ区遺構検出状況の空中写真撮影を実施。Ｃ区南の精査を開始する。掘立柱建物跡３棟を検出。建物の主軸は南北方向と考えられ、参道を意識した配置になっている。

肥前産の陶磁器

７月上旬からＢ区の遺構精査に入る。Ｂ区南で掘立柱建物跡２棟を検出。柱穴から肥前産の陶磁器が出土し、江戸時代の建物と判断した。８月上旬から、Ａ区及びＣ区北の遺構精査にかかる。昨年、Ａ区で掘り方の直径が１ｍに及ぶ大型の掘立柱建物跡、ＳＢ２が検出されていたが、Ｃ区にかけてさらに柱穴が検出され、桁行の総長約20ｍに及ぶことが確認された。８月６日、八戸市博物館佐々木主査学芸員に来跡を仰ぎ、調査全般にわたっての指導助言を受ける。

大型の掘立柱建物跡

８月23日、調査期間の延長とＤ区の調査を横川ダム工事事務所に要請し協議を行い、大筋で合意を得る。９月10日、第２次調査説明会を開催した。９月20日、２回目の空中写真撮影を実施。10月４日、置賜教育事務所管内社会教育協議会40名が現場見学に来跡。10月５日より18日まで、Ｄ区の重機による表土除去、併せて面整理を行う。南側は、Ａ区北から続く柱穴が密に分布するが、北側は希薄である。道路以北には広がらないと推測される。25日、越冬のためＤ区の保護を施し、第２次調査を終了した。

《第３次調査》

平成15年５月12日に調査を開始する。15日からＤ区の遺構の精査にとりかかる。西側から柱穴の精査を行い、併行して平板測量により平面図の作成作業を進めた。新たに３棟の掘立柱建物跡（ＳＢ840・841・842）を確認する。昨年度の調査区についても遺構清掃を行い、掘立柱

建物跡の検出に努めた。Ａ区では、柱穴の検討の結果、ＳＢ２大型掘立柱建物跡が少なくとも４回の建替えを行っていたことが確認された。

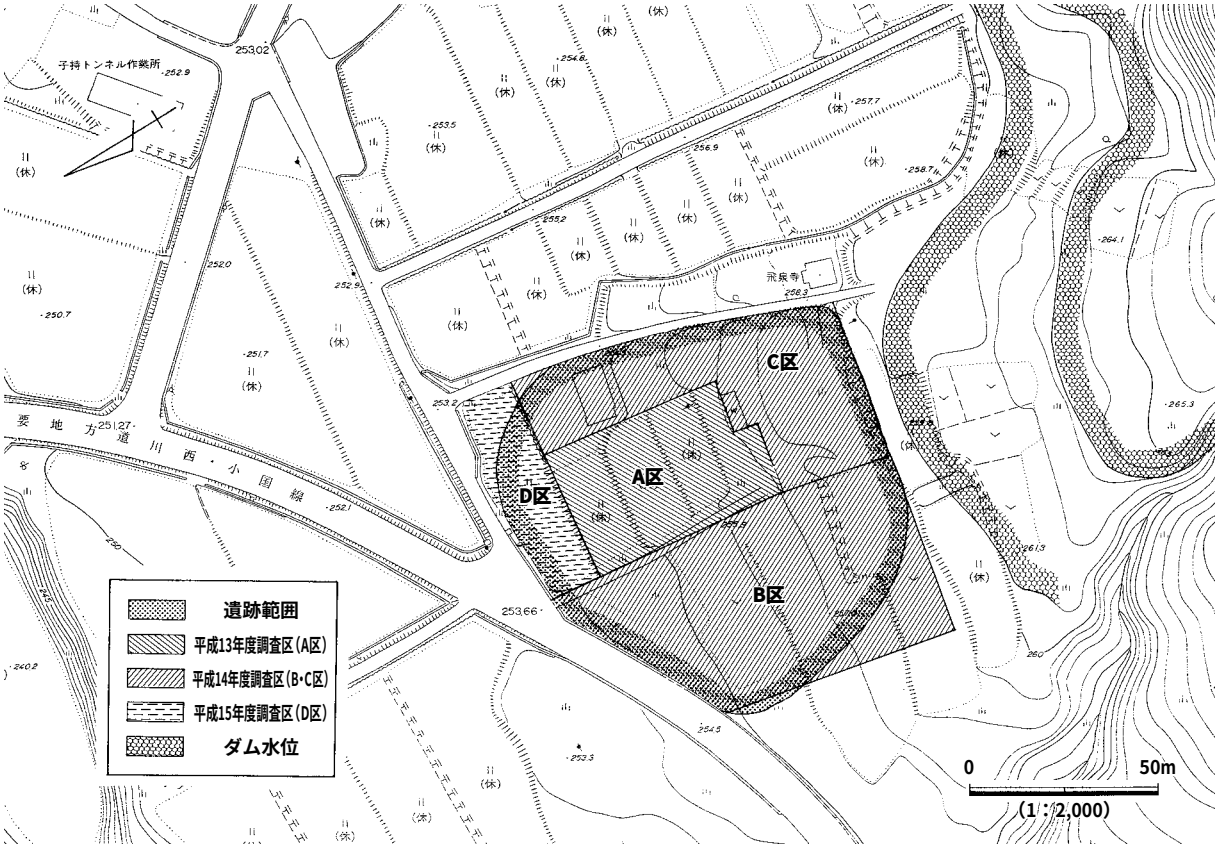
６月27日、空中写真撮影を実施する。29日、調査説明会を実施する。３カ年にわたる調査区、Ａ～Ｄ区について調査の成果を公開した。７月４日、機材を撤収し調査を終了する。

《掘立柱建物跡の調査と検討》

当遺跡では、同じ地点に何度も建物が建替えられており、柱穴が密集して分布する。このため、Ａ・Ｂ区などでは、調査中に個々の掘立柱建物跡を確認することが困難であった。現場段階で確認した建物は、わずか20数棟ほどである。第２次調査時に、膨大な数の柱穴の調査を、迅速かつ有効に進めるために、八戸市博物館の佐々木学芸員より指導を仰ぎ、柱穴の検出、柱穴の新旧関係の把握、柱痕の位置の記録に重点を置いて調査を進めた。柱穴の新旧関係の決定の際は、新旧を判断できるまで１段ずつ平面的に下げ、平面のプランで新旧を判断した。

整理作業では、１／100の平面図を基に、図面上で掘立柱建物跡の検討を行った。建物の検討の際には、建物の桁・梁のラインが、柱穴の柱痕の位置を通るように考慮しながら作業を進めた。第１・３遺構ブロックは、柱穴の分布が最も密で重複も著しいため、この地区の建物跡の検討は佐々木氏より全面的な指導と助言をいただいた。検討の結果、合計197棟の建物跡を抽出した。主要な建物については、１／100の図面で提示し、柱穴の深さ、建物の柱心心間の距離を記載した。柱痕が確認された柱穴間の距離は、実際の距離を記載している。柱痕が確認できなかった柱穴間の距離は、尺に換算した場合の切れの良い値で推定し、メートルに換算して提示している（１尺＝0.303mとして換算）。

197棟の建物跡



第１図　調査区概要図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

遺跡の所在する小国町は、山形県の南西部に位置しており、西側で新潟県と県境を接する。北側には、標高1870mの大朝日岳を中心とした朝日連峰が連なり、南側には、標高2105mの飯豊山を中心とした飯豊連峰がそびえ、福島県との県境を分けている。町内には、飯豊連峰に源流をもつ横川と、朝日連峰から流れる荒川が合流し、西の新潟へと流れ日本海に注ぐ。横川と荒川の合流地点は、小国盆地となっている。町の面積は、約737㎢と県内市町村では最大の広さである。このうち、平野部の面積は約４％にしか満たず、大部分が山地と丘陵から構成される。森林面積は約90％を占め、このうち約78％がブナを主体とする広葉樹林であり、豊かな自然に恵まれている。また、この地域は寒暖の差が大きく全国有数の豪雪地帯である。

地質について述べる。山地及び丘陵の表層地質は、町の北半で花崗岩質岩石、南半は新第三系中新統から構成される。荒川流域には第四系の河成段丘堆積物が分布しており、横川流域の地質は礫・砂および粘土からなる未固結の堆積物である。さらに山間地に向かうと「箱ノ口塁層」と呼ばれる砂岩や珪岩から成る古生層に当たり、横川の中流部では珪質頁岩が採取される。また、横川と明沢川との合流地点までの間に、南北約４㎞にわたり河岸段丘が発達する。

市野々地区

飛泉寺跡遺跡は、横川とその支流明沢川との合流地点から南へ約４㎞の市野々地区に所在する。地番は小国町大字市野々字寺ノ前である。横川右岸の河岸段丘上に立地し、横川から南へ約100m程の地点である。標高は250m前後を測る。横川の対岸北には、角子崛（つくしぐら）がそそりたち、その麓には出生（いづるぎ）の滝が流れる風景が望まれる。

詳細は後述するが、本遺跡の南東部に隣接して、室町時代創建と伝えられる曹洞宗の「飛泉寺」があった。飛泉寺跡遺跡は、街道から寺へ向かって登る参道の右側に広がる。参道をはさ

大銀杏

んで遺跡の向かい側には、樹齢200年を超えると言われる大銀杏がそびえ、市野々のシンボルとなっている。市野々は米沢から新潟へと通じる、越後街道の宿場町として発展・存続してきた歴史的経緯がある。

2　歴史的環境

小国町の主な遺跡と、その歴史的経緯について、その概要を時代順に述べていきたい。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、縄文時代との複合遺跡も含め現在まで10カ所が確認されている。荒川の河岸段丘上位面には、東山遺跡・平林遺跡・湯の花遺跡・東山紺野遺跡、低位面には横道遺跡・鳥谷沢遺跡・岩井沢遺跡等が分布する。これらの遺跡群は昭和35年以降、山形大学を中心とした調査が行われた。横道遺跡からは「杉久保型ナイフ形石器」が出土しており、また東山遺跡は、「東山型ナイフ形石器」の標準遺跡である。これらの遺跡からは、東日本の後期旧石器時代研究の上で、貴重な成果が上げられた。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、これまでに朝篠遺跡・蟹沢遺跡・団子山遺跡（小国町教育委員会）、下

野遺跡・暮窪遺跡・谷地遺跡(山形県教育委員会)、古屋敷遺跡・市野々向原遺跡・野向遺跡・千野遺跡（山形県埋蔵文化財センター）の発掘調査が実施されている。

古屋敷遺跡では、早期前葉から前期前葉にかけての住居跡６棟が検出された。墓窪遺跡では、前期の大木１式、中期の大木７ｂ式～10式土器と共に、33棟の竪穴住居跡が検出された。谷地遺跡は中期中葉の時期で、出土土器には、北陸の馬高式系の土器が見られる。下野遺跡は中期末で、複式炉をもつ竪穴住居跡が確認されている。蟹沢遺跡は、中期後半から後期初頭にかけての集落跡で、北陸の三十稲場式土器が多量に出土した。

野向遺跡

市野々向原遺跡

飛泉寺跡遺跡に隣接する野向遺跡では、縄文時代中期末の竪穴住居跡１棟、陥し穴11基が検出された。市野々向原遺跡では、早期から晩期に至るまでの遺構が確認された。千野遺跡は、中期末葉から後期前葉の時期が中心で、敷石住居１棟を含む竪穴住居跡４棟が確認された。このうち敷石住居跡は、県内初の検出事例である。朝篠遺跡は、後期から晩期にかけての遺跡で、晩期の竪穴住居跡が３棟検出されている。

これらの調査内容から、小国町の縄文時代の遺跡は北陸方面の影響が強くみられ、古くから日本海側と内陸を結ぶ交通路としての性格が表われている。

弥生時代では、市野々向原遺跡で土坑が検出され、前期後葉から中期前葉にかけての土器が出土している。古墳時代・奈良・平安時代の遺跡は、現時点では確認されていないが、今後の調査の進展により確認される可能性が十分考えられる。

古代以降の経緯について述べる。律令制下の小国盆地は、『和名抄』に見える置賜郡七郷の内の余部郷に比定され、東方の宇津峠で長井盆地と分断され、越後方面に通じる交通の要衝であった。古代末になると、置賜郡は奥州藤原氏の配下にあり、藤原清衡の系統である橋爪太郎俊衡が小国山城に拠ったとされ、越後との関門として軍事上の要衝であった。

小国山城

文治５年（1189)、源頼朝の奥州征伐により藤原氏は滅亡し、大江時広はその功によって置賜郡を賜り、長井庄の地頭となった（後、長井氏を名乗る)。小国地方はその支配下に入った。北村館は、『米沢里人談』によると、長井備中守秀広がここに居たとし、長井氏一族の居館とされている。

南北朝時代の康暦２年（天授６年、1380）に伊達宗遠は、長井広房を攻め、米沢を攻略し置賜は伊達氏の所領となる。以後、政宗が陸奥岩出山に移封される天正19年（1591）まで伊達領であった。当初小国は、粟生田氏の所領となったが、後に上郡山氏に代わり、小国城を構築し、光岳寺をはじめ曹洞文化の導入があった。大永元年（1521)、伊達氏十四代の伊達稙宗が、小国から玉川を経て沼に至る、大里峠越えのルートを開削した。これに伴い、白子沢から桜峠、市野々、黒沢峠を通って小国に入る道が主要な街道となってゆく。天文７年（1538)、小国の郷名が初めて文献に現れる。天文22年（1553）の『(伊達）晴宗公采地下賜録』には、小国郷における二十数カ所の在家名が載せられ、その中に、箱ノ口や市野々、叶水などの在家名が確認される。市野々の名の由来は諸説あるが、平家の落ち武者を「一布」といったので「いちのの」となったという説と、山野に自生する麻で布を作っていたことからという説がある。江戸時代初期慶長年間（1596～1615）の記録に「一布」という記載がみられることから、古くは「一布村」と呼ばれていたと思われる。

大里峠越えのルート

天正19年から慶長３年（1598）までの７年間、小国は蒲生氏統治の時代であった。文禄４年

（1595）の『邑鑑』による市野々の戸籍は、総戸数21、人口89人、肝煎・小走・役屋が５軒、諸職人・寺・山伏・問脇あわせて16人、石高は百十三石で、桑の栽培が少しあるという村であった。

慶長３年（1598）上杉景勝が越後から会津に移封され、重臣の直江兼続は伊達、信夫、米沢の三郡を領して米沢に入った。以後、小国は上杉領となる。慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いの後、上杉氏は減俸され、伊達、信夫、米沢の三十万石のみとなる。兼続は米沢と中山間の主要な村々に駅場を設け、物資の輸送に当たらせた。米沢藩では大町札の辻を起点として各村への里程を定め、玉川口や折戸、荒沢の三カ所に口留番所を設置した。この時期に米沢と越後を結ぶ越後街道は、宿駅・伝馬などの制度を整えた本格的な街道へ整備されてゆく。越後街道は、宇津峠や桜峠、大里峠など十三もの峠を有することから十三峠路とも呼ばれている。兼続はさらに街道の整備を進め、駅場と伝馬宿送りの制度を敷いて円滑な物資の輸送に当たらせた。

越後街道
十三峠路

寛永21年（1644）、越前松平直基が最上に移封となった際、越後街道を通過するにあたって、越後街道沿道の六宿駅（玉川・小国・市野々・白子沢・手ノ子・小松）に布令を発している。この後、寛文年間（1661～1673）に沼沢宿と松原宿が加わり、通称「西通八ヶ宿」と呼ばれる宿駅体制が整えられた。市野々は、小国から黒沢峠を越した所の宿駅であるが、定宿場となったのは享保３年（1718）からである。宿屋が14軒と桜峠に茶店が１軒あったという。

黒沢峠

幕末期の天保10年（1839）、安政５年（1858）、慶応３年（1867）には、三度にわたって峠の敷石道が整備されている。これは米沢城下の豪商や青苧を生産する在郷の有力者や手ノ子の問屋横山五郎左右衛門らが施主となって普請人夫を供出して行われたものである。

明治以降の経緯について述べる。慶応４年（1868）、戊辰戦争で米沢藩は新政府軍に降伏し、明治４年（1871）の廃藩置県で藩は米沢県となり、後に置賜県と改められた。その後、山形県に併合され、初代山形県令には三島通庸が就任した。

明治17年（1884）、「小国新道」が完成する。桜川渓谷の難所に新しく道路が開かれ、翌年には県道山形・新潟線が小国まで開通した。この新設道路によって、小国から黒沢峠を越えて市野々に向かう道、また子持峠から叶水にいたる道など旧来の街道や峠は次第に衰退してゆく。

イザベラ・バード

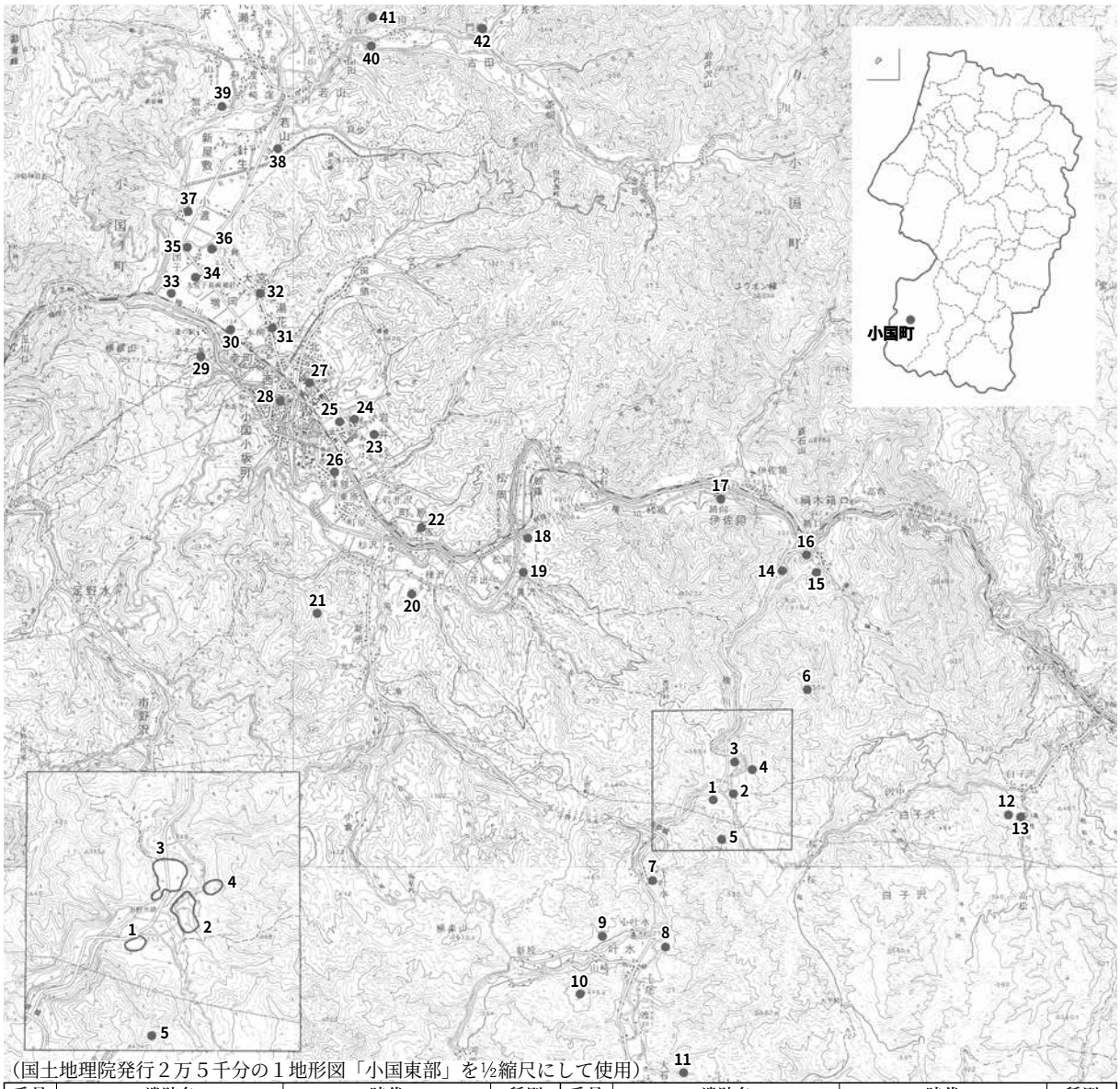
またこの頃、明治11年（1878）に英国人旅行家のイザベラ・バードが、東北・北海道など日本各地を旅行し、その際の記録を『日本奥地紀行』に記した。この時、新潟から越後街道を通り小松に抜ける際、７月12日に市野々宿を通っている。旅行記には、当時の市野々の様子について、「蚕を飼うのに精を出しており、どこへ行っても純白と硫黄色の繭が日さしのよい蓆の上に乾かしている」と記述している。

明治22年（1889）の町村制施行により小国本村、南小国村、津川村の四カ村が誕生した。市野々は叶水、白子沢、大石沢、新股、河原角、東滝、西滝、沼沢などと津川村に属した。

昭和35年（1960）津川村は、小国町に編入合併した。

市野々において、歴史上注目される飛泉寺について述べる。飛泉寺は曹洞宗の寺院で、越後村上の耕雲寺の末寺として、応永34年（1427）に、楠木正成の四男、正儀の子である正勝、傑堂能勝和尚により開山されたと伝えられる。しかし傑堂和尚が事実上楠氏の子孫にあたるのか、開山の年代については諸説あり伝説の域を出ない。飛泉寺は、宝暦４年３月に火災にあって焼失したが再建されている。明治12年の記録によれば、飛泉寺の本尊は阿弥陀如来、堂の規模は

傑堂能勝和尚



（国土地理院発行２万５千分の１地形図「小国東部」を½縮尺にして使用）

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	飛泉寺跡遺跡	中世～近世	集落跡	22	金比羅砦		砦
2	野向遺跡	縄文	集落跡	23	平林遺跡	旧石器	集落跡
3	市野々向原遺跡	縄文	集落跡	24	東山遺跡	旧石器	集落跡
4	市野々砦		砦	25	岩井沢遺跡	旧石器	集落跡
5	城ノ口遺跡		館　跡	26	兵庫館跡		館　跡
6	火山遺跡		砦	27	北村館跡		館　跡
7	下叶水遺跡	縄文	集落跡	28	小国城跡	中世～近世	館　跡
8	小叶水遺跡	縄文	集落跡	29	小国山城跡		館　跡
9	中田遺跡	縄文	集落跡	30	墓窪遺跡	縄文	集落跡
10	叶水城山遺跡		館　跡	31	横道遺跡	旧石器	集落跡
11	城ノ平遺跡		館　跡	32	鳥谷沢遺跡	縄文	集落跡
12	白子沢城山遺跡	中世	館　跡	33	下野遺跡	縄文	集落跡
13	的場遺跡	縄文	集落跡	34	団子山遺跡	縄文	集落跡
14	千野遺跡	縄文	集落跡	35	才頭遺跡	縄文	集落跡
15	綱木沢向遺跡	縄文	集落跡	36	谷地遺跡	縄文	集落跡
16	古屋敷遺跡	縄文	散布地	37	小渡館跡		館　跡
17	小妻坂遺跡	縄文	集落跡	38	若山館		館　跡
18	朝篠遺跡	縄文	集落跡	39	蟹沢遺跡	縄文	集落跡
19	黒沢遺跡	縄文	集落跡	40	古田遺跡	縄文	集落跡
20	中平山遺跡	縄文	集落跡	41	古田山城跡		館　跡
21	杉沢城跡遺跡		館　跡	42	門松遺跡	縄文	集落跡

第２図　遺跡位置図（国土地理院発行５万分の１地形図「小国」・「手の子」・「飯豊山」・「玉庭」を½縮尺にして使用）

東西七間半、南北五間半、境内の坪数256坪、檀徒人員は22名となっている（山形県管轄社寺明細調）。しかし、大正２年３月２日に、再度火災に遭い、伽藍什器はことごとく焼失してしまった。ただ、寺院内に安置されていた子育地蔵尊は焼失をまぬがれたため、寺の跡地に堂を建て地蔵尊を安置した。平成５年、横川ダム建設事業により、市野々では離村式を行い町内の東原に移転した。地蔵尊も、平成７年に市野々より町内東原へ遷座している。

大正２年に焼失

表１　飛泉寺跡遺跡関連年表

年号	事項
文治５年（1189）	源頼朝、奥州藤原氏を滅ぼす。
建久３年（1192）	頼朝、征夷大将軍となる。大江時広、置賜郡を賜り、長井庄の地頭となる。
文中元年（1372）	市野々熊野神社が建立される。
康暦２年（1380）	伊達宗遠、米沢を攻略し、置賜は伊達氏の領地となる。
応永34年（1427）	傑堂能勝和尚、飛泉寺を創建すると伝えられる。
大永元年（1521）	伊達氏十四代の伊達稙宗が、大里峠越えのルートを開削する。これ以降、白子沢から桜峠、市野々、黒沢峠を通って小国に入る道が主要な街道となる。
天文22年（1553）	『晴宗公采地下賜禄』にて、はじめて「市野々」の在家名認められる。
天正19年（1591）	小国、蒲生氏領地となる。
文禄４年（1595）	『邑鑑』に、市野々の戸籍、総戸数21、人口89人、肝炒・小走・役屋が５軒、諸職人・寺・山伏・問脇あわせて16人、石高は百十三石の記述。
慶長３年（1598）	上杉景勝、越後から会津に移封される。直江兼継、伊達・信夫・米沢の三郡を領する。小国は上杉領となる。
慶長３年（1598）	領内の主要街道の整備が開始される。市野々が宿場となる。
元和元年（1615）	『邑鑑』に、市野々村、戸数21（役屋四・肝煎一・間脇十六）、人口89人の記述。
慶安４年（1651）	当時の市野々の問屋兼肝煎は、伊藤甚九朗。
元禄５年（1692）	小国城が御役屋と改められ、城代を廃止して御役屋将とされる。
享保３年（1718）	市野々、定宿場となる。宿屋が14軒、桜峠に茶屋が１軒。
宝暦４年（1754）	飛泉寺焼失する。その後、享和３年（1803）に再建。
宝暦年間（1751～1764）	高井七右エ門、問屋兼肝煎となる。伊藤氏の後援を得て職務を行う。
宝暦11年（1761）	市野々熊野神社再建される。
天保10年（1839）～安政元年（1854）	黒沢峠付近で、敷石の切り出し、新道の開削、敷石工事と集中的な改修が行われる。
藩政時代末期	市野々宿、問屋一軒、宿屋九軒、背負子宿三軒、牛馬宿二軒、店が二軒、茶屋が一軒。
慶応２年（1866）	市野々の大火、22戸の内５戸11棟焼失する。
明治元年（1868）	熊野神社、神仏分離令で熊野神社として祭祀。
明治４年（1871）	廃藩置県、米沢県設置、上杉茂憲知事に任じられる。
明治４年（1871）	米沢県を置賜県と改める。
明治９年（1876）	置賜・鶴岡２県を山形県に併合する（置賜県は置賜郡となる）。
明治11年（1878）	イザベラ・バード、市野々に宿泊する。
明治17年（1884）	小国新道が完成する。翌年、県道山形・新潟線が小国まで開通する。
明治22年（1889）	町村制施行により、小国本村、南小国村、津川村誕生する。市野々は、津川村に入る。
明治34年（1901）	市野々に津川村役場庁舎建築（木造２階建65坪）。
大正２年（1913）	飛泉寺再度焼失する（３月２日）。 飛泉寺跡に地蔵尊堂宇を建築する（５月）。
昭和７年（1932）	夏、大水により、市野々大橋、津川橋、才の神橋流される。
昭和８年（1933）	仙野街道（市野々～箱ノ口）完成する。
昭和11年（1936）	米坂線全線開通する。
昭和13年（1938）	市野々熊野神社再建される。
昭和17年（1942）	小国町制施行される。
昭和29年（1954）	小国町、南小国村、北小国村合併する。
昭和35年（1960）	津川村が小国町に編入合併する。
昭和42年（1967）	羽越水害起こる。
昭和45年（1970）	滝集落36戸の集団移転決まる。
昭和46年（1972）	熊野神社、寺ノ前の飛泉寺跡の裏へ移転する。
昭和62年（1987）	横川多目的ダム実施計画調査始まる。
平成２年（1990）	横河ダム工事事務所開設される（建設着手）。
平成３年（1991）	横川ダム基本計画告示。
平成５年（1993）	市野々離村式　市野々と下叶水の熊野神社、合祀をして東原へ移転する。
平成６年（1994）	飛泉寺、東原へ建立される。
平成13年（2001）	飛泉寺跡遺跡第一次発掘調査（山形県埋蔵文化財センター）を実施する。

Ⅲ　遺跡の概要

1　遺跡の層序

遺跡の基本層序については、第３図にＡ区とＢ区南の土層断面図を示し、これを基に内容を述べる。基本層序は、Ⅰ～Ⅴ層を設定した。調査区北側のＡ区では、田地の造成のため盛土されており、表土が厚い。遺構検出面までの深さは、地表から約１ｍ程で、旧表土からは35～50㎝程である。調査区南側のＢ区では、検出面までの深さは、約40～70㎝である。

基本層序

Ⅰ・Ⅱ層は、表土で畑の耕作土と思われる。Ⅰ層は耕作の撹乱を受けており、しまりが無い。Ⅱ層はややしまりがある。Ⅲ層は、黒褐色の細砂質シルト層で、地山由来の亜角礫の混入が多く、固くしまる。旧表土と思われる。壁面では、Ⅲ層上面から掘り込みをもつ、遺構と思われる落ち込みが観察されるが、近現代の所産と推測される。Ⅳ層は、下層のⅤ層と上層のⅢ層との漸移層である。Ⅴ層は、上面で江戸時代から中世にかけての遺構が検出された層である。Ａ区北では、黒褐色粘土層であるが、Ｂ区では、部分的に暗褐色粗砂のⅤａ層、その下層の灰黄褐色粘土層のⅤｂ層に細分される。Ⅴ層は、層内容が多様であり、部分的には礫層や粗砂となり、それらを除去するとシルト質や粘土質の層となる。横川による沖積層と考えられる。なお調査区内では、遺構の検出されたⅤ層内の礫層や砂層から、縄文時代の石器等の遺物が出土している。しかし、Ⅴ層より下層に遺構面は確認されていない。

2　遺構と遺物の分布

当遺跡には、掘立柱建物跡を中心とした遺構が多数検出され、これらの建物跡の分布する地点には、特に集中が認められる幾つかのまとまりがある。これらの建物・柱穴の集中する、ある一定の広がりをもつ区域を、「遺構ブロック」と仮称する。この遺構ブロックは、遺跡内に６カ所確認される（第４図）。

遺構ブロック

これらの遺構ブロックは、ちょうど遺跡の中央部分を南北に走るＳＤ510を境に、大きく東西に分割され、その中で段々畑状の地形に沿ってそれぞれ３カ所の区域に分けられる。その広がりは、東西に長い短冊状を呈し、地形や参道を意識した配置を取っていると思われる。最も遺構が集中する調査区北東の区域を第１遺構ブロックとし、そこから反時計回りに、それぞれの遺構ブロックに、第２～６のブロック名を与えることとする。

第１遺構ブロックは、Ａ区北・Ｃ区北・Ｄ区に相当する。最も掘立柱建物跡が集中する。ここでは、桁行の総長が20mを超え、遺跡内で最も規模が大きい、ＳＢ２大型掘立柱建物跡が確認された。この建物跡は数度にわたって建替えが行われており、柱穴から16世紀代の陶磁器が出土している。北側（Ｄ区）は、開田の際の削平のためか、柱穴の分布が希薄である。

第２遺構ブロックは、Ｂ区北に相当する。ブロック南端に牛舎のコンクリート基礎があり、撹乱を受けている。牛舎に近い南側に、小規模な建物跡の集中地点があり、その北側に、東西方向に長軸を持ち、桁行が長大な建物跡が分布する。遺物の出土はほとんど認められない。

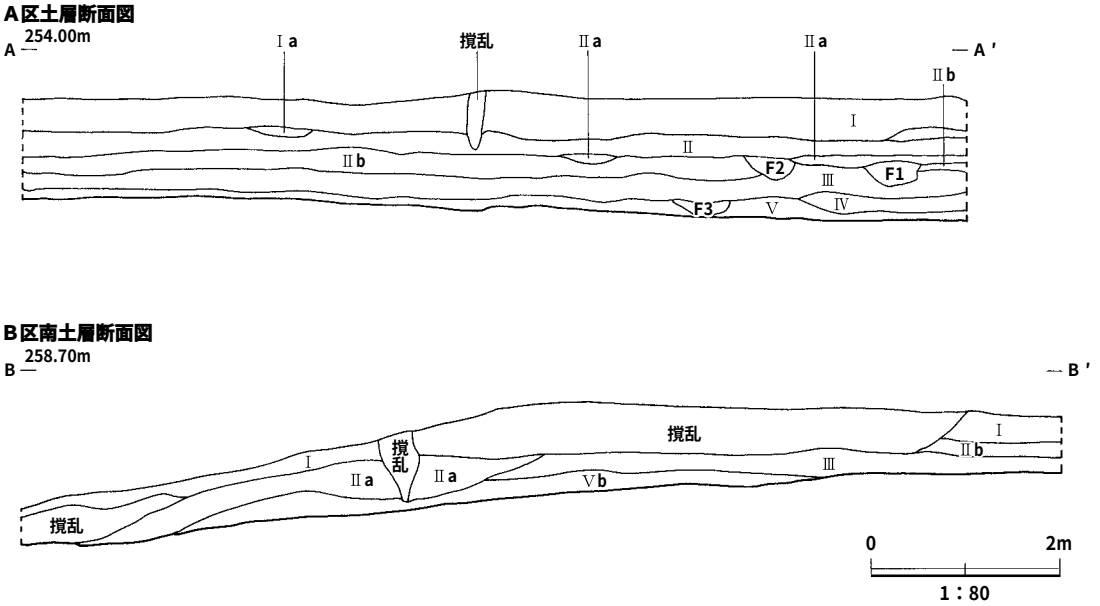
１ｍを超える大型の柱穴

第３遺構ブロックは、Ｂ区南の北半部に相当する。遺跡で２番目に遺構が集中する地点である。柱穴の掘り方直径が１ｍを超える大型の柱穴が集中する。出土遺物は、建物の柱穴から近世の肥前産を中心した陶磁器片が出土している。中世の遺物は少ない。

第４遺構ブロックは、Ｂ区南の南端にある。第３遺構ブロックとの間には、約１ｍ程の段差がある。平坦面には、ＳＢ517を中心とした掘立柱建物跡が分布する。出土遺物は、中世から近世の陶磁器が柱穴や溝跡から出土している。

第５遺構ブロックは、Ｃ区南の南東隅の小規模な柱穴の集中地点である。西側に建物（高井氏家屋）のコンクリート基礎の撹乱をうけており、この部分には柱穴は検出されない。

第６遺構ブロックは、Ｃ区南、Ａ区南に相当する。参道の銀杏の木のすぐ西側に隣接し、ＳＢ617、ＳＢ723を中心とした建物の分布が認められる。北側には、ＳＢ１などの建物跡が認められるものの、遺構の分布が希薄である。第５・６遺構ブロックでは、柱穴を中心に、少量ながらも中世から近世にかけての陶磁器が出土している。また、近現代のＳＸ324などのゴミ棄て穴からは、この集落の移転の際に廃棄したと思われる陶磁器片が多量に出土している。



調査区基本層序

Ⅰ	7.5YR2/1黒色シルト	径10㎜未満の風化礫、径10㎝未満の亜角礫を多量に含む、しまりなくぼそぼそ
Ⅰａ	7.5YR3/2黒褐色シルト	粗砂・径１㎝未満の風化礫を多量に含む、ぼそぼそ
Ⅰｂ	7.5YR3/1黒褐色シルト	粗砂多量、径５㎝未満の亜角礫を含む、しまりなくぼそぼそ
Ⅱ	10YR3/2黒褐色シルト	Ⅰ層に比べ、若干粘質が強くしまりあり、径５㎝未満の亜角礫多量、径１㎝未満の風化礫、炭化物含む、現代
Ⅱａ	7.5YR3/1黒褐色シルト	質的にⅡ層に同じ、亜角礫の混入密度Ⅱ層より高い、固くしまる
Ⅱｂ	7.5YR3/1黒褐色シルト	Ⅱ、Ⅱａ層に比べ粘質弱い、粗砂やや多く混入、亜角礫・風化礫の混入少ない、固くしまる
Ⅲ	7.5YR3/1黒褐色細砂質シルト	Ⅰ、Ⅱ層に比べ径５㎝未満の亜角礫の混入密度が非常に高い、径１㎝未満の風化礫を若干含む、微細な炭化物を含む、固くしまる
Ⅳ	7.5YR3/1黒褐色シルト	径１㎝未満の風化礫を含む、固くしまる
Ⅴ	10YR3/2黒褐色粘土	径10㎝未満の亜角礫を若干含む、固くしまる
Ⅴａ	10YR3/3暗褐色粗砂	径12㎝未満の亜角礫を多量に含む、固くしまる
Ⅴｂ	10YR4/2灰黄褐色粘土	粗、細砂多量に混入、径５㎝の亜角礫・円礫を含む、固くしまる
Ｆ１	細砂質シルト	径15㎝未満の角礫を含む、しまりなくぼそぼそ
Ｆ２	シルト	微細な風化礫を含む、炭化物を若干含む、固くしまる
Ｆ３	シルト	径５㎝未満の亜角礫を含む、若干粘質、しまりなくぼそぼそ

第３図　遺跡層序図

Ａ区ＳＢ２精査状況（東から）

Ｂ区精査状況（北東から）

Ｃ区ＳＢ617柱穴精査状況（北から）

Ａ区記録作業状況（東から）

第４図　遺構配置図

Ⅳ　中・近世の遺構

１　第１遺構ブロック（A区北・C区北・D区）

第１遺構ブロックの概要

第１遺構ブロック（第５図）では、88棟の掘立柱建物跡と、１基の柵列が確認された。掘立柱建物跡には、桁行が４間以上で梁行が２～３間の大型の建物、桁行３～４間で桁行が２間の中規模の建物跡、桁行２間×梁行２間または、梁行１間で桁行が５～２間の小規模の建物跡がある。

主な大型建物跡は、第１ブロック南東側に、ＳＢ２・901・903・904・905、やや西側にＳＢ906・908、ブロック中央やや北よりにＳＢ913がある。第１遺構ブロック建物重複関係図を第54・55図に示した。南東側の大型建物跡は柱穴の新旧関係から、ＳＢ903→ＳＢ901→ＳＢ905→ＳＢ２→ＳＢ904の変遷が推定される。この変遷の系列に加わるのがＳＢ906・913で、ＳＢ905→ＳＢ906→ＳＢ913の新旧関係がある。ＳＢ908は、南西側に位置し、これらの建物と地点を異にする。新旧関係は、ＳＢ908→ＳＢ906である。ＳＢ901・903と併行して建っていた可能性がある。柱穴の重複では、大型建物跡の変遷は５期確認されたが、変遷は７期を想定できる。

大型建物跡

変遷は７期

また、主な住居としての規模を考慮し、大型及び中型建物跡の変遷と分布を考えると、２棟１組となって建替えが推移していったことが想定される。１つは、ブロック南東・東側に展開する、ＳＢ２を中心としてそれに前後する建物の変遷であり（A系列とする）、２つ目は、ＳＢ908とそれに前後する建物の変遷（B系列とする）である。A系列は、大型建物跡の出現する以前の建物群（Ａ１系列）と、大型建物跡群（Ａ２系列）、大型建物跡以後の建物群（Ａ３系列）の変遷が想定できる。主なＡ１系列の建物では、ＳＢ841・909・911・915・916・918・924がある。Ａ２系列の建物は、前述したＳＢ２・901・903・904・905・906・913の大型建物跡である。Ａ３系列の建物として、ＳＢ917・924がある。B系列の建物跡は、ＳＢ907・908・914・925・926・929がある。Ａ１系列・Ａ２系列の途中までB系列が併行し、その後Ａ３系列に収束してゆくと思われる。

大型建物跡の構造であるが、北や南に庇を持つものがしばしば見受けられ、ＳＢ904・905以外は間仕切りを持ち、身舎内は２～３に区切られる。最も大型になるのはＳＢ２で、桁行の総長は21.69mである。間尺であるが、８・９・9.5・10尺が主に認められる。柱穴は、ＳＢ903・901は柱穴の底に根石を用いず、直径も１mを超えないが、ＳＢ904・905・２は、柱穴の底に根石を用い、さらに柱痕の周囲を礫で根固状に組むものも見られ、柱の掘り方直径も１mを超えるものがある。ＳＢ906・908・913の柱穴では、根石を用いないものが主体である。古い段階の建物には根石を用いないが、ある時期になると柱穴が大型化し根石を用いるようになり、その後再び根石を伴わなくなるという時期的な傾向が窺われそうである。

出土遺物の傾向と、建物の時期について述べたい。遺構からは、中国産の青花、瀬戸・美濃系陶器、珠洲が出土している。表土中からは、中国産の青磁碗、白磁皿、近世の肥前や波佐見

中国産の青磁碗

産の陶磁器が出土した。遺物の時期は、最も古いものが青磁碗で、13世紀末から14世紀前半であるが、表土の出土である。珠洲は、15世紀代と考えられるが、２点のみの出土である。16世紀代の遺物では、青花、白磁、瀬戸・美濃系陶器で、特に瀬戸・美濃系陶器が約10点ほどとこの中では最も多い。江戸時代の肥前・波佐見産の陶磁器は、17世紀から18世紀までのものが出土しているが、表土中からの出土であり、遺構からの出土はほとんど見られない。

珠　　洲

肥前・波佐見産

出土遺物と、遺構の新旧関係から推定される遺構の時期は、ＳＢ２が16世紀末から17世紀初頭以降、新旧関係よりＳＢ904・959も、16世紀末から17世紀初頭以降となる。ＳＢ906は16世紀以降で、新旧関係よりＳＢ913・917・924・941・949・953・974・988も、この時期以降である。ＳＢ932は珠洲片口鉢を出土し、15世紀以降の年代が考えられる。新旧関係により、ＳＢ908・925・931・934もこの時期以降になる。ＳＢ948は、出土遺物により16世紀末から17世紀前半以降、ＳＢ978は、16世紀代以降である。

遺物の年代を考慮すると、このブロックは、15世紀から始まり、16世紀から17世紀初頭には、ＳＢ２を中心とする大型建物が建てられ、江戸時代も、遺構に伴わないが遺物が出土していることから、建物の存続が考えられる。系列に当てはめて考えると、Ａ１系列とＢ系列が15世紀以降に始まり、16世紀から17世紀初頭以降には、Ａ２系列とＢ系列が存続し江戸時代に入り、Ａ３系列となって小規模ながら建物が存続してゆくと考えられる。

掘立柱建物跡・柵列

ＳＢ901（第６図・第５図黒）　Ｓ～Ｖ－５～７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行３間、東側から１間目に間仕切りの柱がある。身舎の北側の東側から１・２間に、張り出し部分を持つ。規模は、桁行11.52m（38尺）、梁行は、西側で6.21m（20.5尺）、東側で張り出し部分を含めると、9.39m（31尺）を測る。柱心心間の距離は桁で、8.5・９・10・10.5尺があるが、中心となる間尺は９・10尺である。梁は西側で、北側から７尺－５尺－8.5尺である。主軸方向は、Ｎ－9.0°－Ｅである。柱穴は、直径40～90㎝の円形・楕円形である。掘り方覆土は、黒色・暗褐色シルトに、小礫や黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量含む。重複は、ＳＢ910・942→ＳＢ901→ＳＢ905・962の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ910・922と重複する。出土遺物はない。

ＳＡ902（第６図・第５図黒）　Ｕ・Ｖ－５～７グリッドに位置する。４本の柱穴から構成される。規模は、総長9.24m（30.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－9.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～55㎝の円形である。当初は、ＳＢ901の一部を構成すると考えていたが、柱穴の並びが合わない部分があるため、分離して建物に付随する柵あるいは塀と考えた。

柵あるいは塀

ＳＢ903（第７図・第５図黒）　Ｒ～Ｕ－５～７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行６間、梁行２間、庇が北側１面に付く。西側から２間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行16.52m（54.5尺）、梁行6.81m（22.5尺）を測る。柱心心間の距離は、身舎の桁で7.5・8.5・９・9.5尺があるが、9.5尺が中心である。梁は東西それぞれ18尺である。主軸方向は、Ｎ－9.5°－Ｅである。柱穴は、直径約20～65㎝の円形で、掘り方覆土は、黒褐色・暗褐色シルトが主体である。重複は、ＳＢ916・930→ＳＢ903→ＳＢ904・913・942・959の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ２・924・927・962・985・986と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ２（第８図・第５図黒）　Ｒ～Ｖ－４～８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行８

間、梁行３間、曲屋状に、北側桁の西から１・２間目から、北へ３間建物が伸びる。規模は9.09m×5.3mである。また、北側桁の東から１・２間目に、北へ２間延びる張り出し部分がある。庇は南側の１面に付く。規模は、身舎については、桁行21.69m（71.5尺）、梁行7.79m（約25尺）を測る。柱心心間の距離は桁で、８・8.5・8.8・９・11尺が確認されるが、主な間尺は8.5尺である。身舎の梁は、西側で、北から5.5尺－８尺－７尺、東側で北から６尺－8.5尺－5.5尺である。主軸方向は、N－8.°－Eである。北西張り出し部の、東・西側桁の柱心心間の距離は、各10尺等間隔で、北側梁の柱間隔は、西から８尺－9.5尺である。北東張り出し部分は、北側に９尺延びる。柱穴は、直径30～140㎝の円形・楕円形である。柱穴ｄ・ｇ・ｉ・ｎ・ｓの底面には、根石が認められる。特に、柱穴ｎ（ＥＰ653）では、柱穴底面に根石を据え、その周囲を礫で根固状に補強を行っている。柱穴ｌでは、断面で直径25㎝の柱痕が確認され、掘り方の覆土は褐色や暗褐色シルトで、礫を多く含みしまりは強い。重複は、ＳＢ905・985・989→ＳＢ２→ＳＢ904・959の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ903・927・928・946・966・986と重複する。出土遺物であるが、陶磁器は、柱穴ｄ（ＥＰ84）から第57図16・17の瀬戸・美濃系陶器灰釉小皿が出土した。木製品は、柱穴ｗ（ＥＰ248）から、第70図158の杭が、柱穴ｐ（ＥＰ55）から、第70図159の柱材が出土した。礎石は、柱穴ｔ（ＥＰ62）出土の第69図151、柱穴ｉ（ＥＰ655）出土の第69図152、柱穴ｓ（ＥＰ130）出土の第69図150を図化した。最も新しい遺物の年代は16世紀末から17世紀初頭である。

根　　石

瀬戸・美濃系陶　　器

ＳＢ904（第９図・第５図赤）　Ｓ～Ｕ－５～７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行３間、庇が南北２面に付く。規模は、桁行9.92m（32.5尺）、梁行9.16m（30.3尺）を測る。柱心心間の距離は桁で、約7.5・８・8.5尺が確認され、８・8.5尺が中心である。梁は西側で、北から5.5尺－6.5尺－約6.5尺、東側は撹乱のため、柱穴は不明である。主軸方向は、N－7.°－Eである。柱穴は、直径25～100㎝の円形・楕円形である。柱穴ａ・ｆには、根石が認められる。特に、柱穴ａ（ＥＰ68）では、柱痕の周囲を丸く扁平な自然礫で囲い、根固状に補強を行っているのが確認された。これらの礎石・根固石は、第67～69図143～149に提示している。断面で観察された柱痕の直径は約30㎝程で、掘り方の覆土は黒褐色シルトが主体で、褐色シルトブロックと小礫を多く含む。重複は、ＳＢ２・903・978→ＳＢ904の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ916・930・942と重複する。出土遺物については、柱穴ｅ（ＥＰ85）から、第57図17の瀬戸・美濃系陶器灰釉小皿が、柱穴ｋ（ＥＰ94）から第57図21の珠洲壺が出土した。建物の年代は、新旧関係により16世紀末から17世紀初頭以降と考えられる。

根固状に補強

ＳＢ905（第９図・第５図赤）　Ｒ～Ｕ－５～８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行３間、庇が西と南の２面に付く。身舎の北側桁の東側から１・２間目に、北へ１間延びる張り出し部分がある。規模は、桁行12.60m（41.5尺）、梁行8.09m（26.5尺）を測る。柱心心間の距離は桁で、8.5・９尺が確認される。梁は西側で、北から11尺－12.5尺、東側で北から約8.5尺－７尺－７尺である。庇と身舎の間隔は、約４尺である。北東部分の張り出し部分は、身舎から14尺である。主軸方向は、N－6.5°－Eである。柱穴は、直径30～140㎝の円形・楕円形である。柱穴ａ・ｂ・ｅ・ｊ・ｖには根石が認められる。柱穴ｊ（ＥＰ57）の詳細な平面図を第９図に示した。大きさ45㎝の扁平な自然石を底面に据えている。出土した礎石

は、第66・67図139～141に示した。柱穴の掘り方覆土は、暗褐色シルトで小礫を多く含む。柱穴ｃ・ｄ・ｋでは、断面で直径約20～30㎝の柱痕跡が確認された。重複は、ＳＢ901・927・928・940・945→ＳＢ905→ＳＢ２・906・922・927・935・960・974の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ910と重複する。

ＳＢ906（第10図・第５図黒）　Ｑ～Ｓ－４～７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行３間、庇が南側１面に付く。桁の北から１間目・梁の西から１間目以外は、全て間仕切りの柱が入り、総柱状になる。規模は、桁行14.07m（46.5尺）、梁行8.04m（26.5尺）を測る。柱心心間の距離は桁で、8.5・9.5・10・10.5尺が確認され、8.5・10・10.5尺が主に使用される。庇と身舎の距離は6.5尺である。梁は北側で、西から９尺－９尺－8.5尺である。主軸方向は、Ｎ－9.5°－Ｅである。柱穴は、直径35～80㎝の円形・楕円形で、掘り方覆土は、黒褐・暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトブロックや礫を多く含む。断面で観察された柱痕は、柱穴ｈ・ｉ・ｆで直径約20～25㎝程である。重複は、ＳＢ905・908・911・937・940・960・976・981・982→ＳＢ906→ＳＢ974の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ926・984と重複する。他に建物の西・南辺に巡る溝跡、ＳＤ233がある。出土遺物は、柱穴ｏ（ＥＰ79）から第57図11の瀬戸・美濃系陶器天目茶碗が、柱穴ｇ（ＥＰ45）から第66図137の礎石が出土した。遺物の年代は16世紀である。

天目茶碗

ＳＢ907（第10図・第５図赤）　Ｏ～Ｒ－３～５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間である。東側から２間目の建物中央に間仕切りの柱がある。規模は、桁行11.82ｍ（39尺）、梁行5.3m（17.5尺）を測る。柱心心間の距離は、北側桁で、西から９尺－10尺－9.5尺－10.5尺、南側桁で、東から11尺－９尺、梁は東側で、北側から9.5尺－８尺である。主軸方向は、Ｎ－1.0°－Ｗである。柱穴は、直径30～90mの円形である。重複は、ＳＢ952・976→ＳＢ907→ＳＢ913の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ908・926・932・969と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ908（第11図・第５図赤）　Ｎ～Ｑ－４～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行３間、西側から１間目の桁の列と、北側から１間目の列に間仕切りの柱（柱穴ｏ・ｐ・ｑ・ｒ）が入る。庇は南側の１面に付く。規模は、桁行11.52m（38尺）、梁行9.54m（31.5尺）を測る。柱心心間の距離は、北側桁で、西から8.5尺－９尺－10尺－10.5尺、梁は西側で、北側から8.5尺－８尺－10尺、東側で北から、８尺－９尺－10.5尺である。庇の身舎からの距離は、西側梁で1.44m（約4.7尺）、東側梁で1.21m（４尺）である。主軸方向は、Ｎ－9.5°－Ｅである。柱穴は、直径45～110㎝の円形・楕円である。重複は、ＳＢ914・926・929・932・947・955・963・969→ＳＢ908→ＳＢ906・925の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ907・934・971・986と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ909（第11図・第５図黒）　Ｓ～Ｖ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間である。東側の梁に１間幅の張り出し部分を持つ。西側から１・２間目に間仕切りの柱を持つ。規模は、桁行11.22m（37尺）、梁行5.46m（18尺）を測る。張り出し部分は、北側の桁側で７尺、梁側で９尺である。柱心心間の距離は、北側桁で、西から9.5尺－9.5尺－９尺－９尺、南側桁も北側桁と各々の柱心心間距離は同じである。梁は、東西とも７尺等間隔である。主軸方向は、Ｎ－5.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～110㎝の円形・楕円形で、掘り

方覆土は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトブロックや小礫を多く含む。断面で観察された柱痕は、柱穴ｆ・ｎで直径約15㎝である。重複は、ＳＢ909→ＳＢ915・938・962・980の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ910・913・916・920・939・987と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ910（第12図・第５図黒）　Ｔ～Ｖ－５～７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間、庇が北側１面に付く。身舎の北側から１・２間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行10.61m（35尺）、梁行5.15m（17尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－9.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～70㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ910→ＳＢ901の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ905・909・945と重複する。出土遺物はない。

間仕切りの柱

ＳＢ911（第12図・第５図黒）　Ｑ～Ｓ－３～５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間、西側梁の１間に張り出し部分を持つ。規模は、桁行が北側で8.93m（29.5尺）、梁行が西側で5.91m（19.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－11.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～70㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ912・915・943→ＳＢ911→ＳＢ906・951・981の新旧関係がある。新旧は不明であるが、ＳＢ913・917と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ912（第12図・第５図黒）　Ｏ～Ｑ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間、庇が北側に付くが、東側の１間が欠ける。西側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行10.67m（35.25尺）、梁行7.17m（23.75尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－5.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～90㎝の円形である。重複は、ＳＢ914・937・977→ＳＢ912→ＳＢ911・957・970の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ924・934と重複する。出土遺物は、柱穴ｈ（ＥＰ718）から第65図126の徳利が出土した。遺物は明治から大正の時期であるため、柱穴に撹乱が入ったと思われる。

ＳＢ913（第13図・第５図黒）　Ｑ～Ｔ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行６間、梁行２間、庇が北側１面に付く。西側から１～３間目に間仕切りの柱がある。また、東側梁に１間幅の張り出し部分がある。規模は、桁行14.84m（49尺）、梁行5.45m（18尺）を測る。身舎の柱心心間の距離は、主に８尺が用いられる。主軸方向は、Ｎ－6.5°－Ｅである。柱穴は、直径40～100㎝の円形で、掘り方覆土は黒褐色シルトで小礫を含む。断面で観察された柱痕の直径は、柱穴ｅで約15㎝である。重複は、ＳＢ903・907・909・915・917・918・920・926・940・941・943・952・972・980・981・987・988・ＳＤ233→ＳＢ913の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ911・916・947・962・976と重複する。出土遺物はない。建物の年代は、新旧関係により16世紀以降と考えられる。

ＳＢ914（第13図・第５図青）　Ｏ～Ｑ－３～５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間、東側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行10.15m（33.5尺）、梁行5.45m（18尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－8.0°－Ｗである。柱穴は、直径45～60㎝の円形である。重複は、ＳＢ933・971→ＳＢ914→ＳＢ908・912・929の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ937と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ915（第14図・第５図青）　Ｒ～Ｕ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行５間、梁行２間である。規模は、桁行11.51m（38尺）、東側の梁行4.24m（14尺）を測る。西側の梁行は、3.94m（13尺）と１尺短い。主軸方向は、Ｎ－2.0°－Ｅである。柱穴は、直径

30～80㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ909→ＳＢ915→ＳＢ911・913・939・962・983の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ959・967・984と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ841（第14図・第５図赤）　Ｓ～Ｕ－２～４グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間、庇が南北２面に付く。規模は、桁行8.49m（28尺）、梁行7.84m（25.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－6.0°－Ｅである。柱穴は、直径25～65㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ841→ＳＢ943→ＳＢ940の新旧関係がある。出土遺物であるが、柱穴ｈ（ＥＰ818）から第70図154の礎石と、柱穴ｐ（ＥＰ817）から第69図153の礎石が出土した。

礎石が出土

ＳＢ916（第14図・第５図赤）　Ｓ～Ｕ－４～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間、庇が南側に付く。西側から１間目に間仕切りの柱が入ると推定される。規模は、北側の桁行9.24m（30.5尺）、東側の梁行7.37m（24.45尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－13.5°－Ｗである。柱穴は、直径35～90㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ939・950→ＳＢ916→ＳＢ903の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ904・909・913・918・967・981・987と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ917（第15図・第５図赤）　Ｑ・Ｒ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間、庇が北側１面に付く。規模は、北側の桁行7.43m（24.5尺）、梁行6.66m（22尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－1.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～60㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ923・952・ＳＤ233→ＳＢ917→ＳＢ913・924の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ911・941と重複する。出土遺物はない。建物の年代は、新旧関係により16世紀以降と考えられる。

ＳＢ918（第15図・第５黒）　Ｓ・Ｔ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。西側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、南側の桁行7.23m（23.9尺）、梁行5.00m（16.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－15.0°－Ｗである。柱穴は、直径35～60㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ938・943→ＳＢ918→ＳＢ913・920・924・939・951・959・981・983の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ916・940・967・987・989と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ919（第15図・第５図黒）　Ｓ～Ｕ－８・９グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間と推定される。西側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行7.88m（26尺）、梁行5.46m（18尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－19.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～45㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ920（第15図・第５図黒）　Ｒ～Ｔ－４・５グリッドに位置する。構造は、西側の１間を庇と考えると、身舎の桁行２間、梁行２間となる。中央に間仕切りの柱がある。規模は、南側の桁行8.41m（27.5尺）、東側の梁行6.06m（20尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－3.5°－Ｅである。柱穴は、直径30～60㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ918・942・987→ＳＢ920→ＳＢ913の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ909・980・981と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ921（第16図・第５図赤）　Ｏ・Ｐ－３～５グリッドに位置する。構造は、北側の１間を身舎とすると、桁行３間、梁行２間となる。規模は、桁行7.43m（24.5尺）、北側の梁行6.21

m（20.5尺）を測る。主軸方向は、N－5.0°－Eである。柱穴は、直径35～80㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ969→ＳＢ921→ＳＢ944の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ931・975と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ922（第16図・第５図青）　Ｓ～Ｕ－７・８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。西側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行6.45m（21尺）、東側の梁行4.55m（15尺）を測る。主軸方向は、N－2.5°－Eである。柱穴は、直径30～50㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ905・928→ＳＢ922の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ901・945と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ842（第16図・第５図赤）　Ｔ～Ｖ－１・２グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間である。規模は、南側の桁行9.24m（30.5尺）、梁行4.70m（15.5尺）を測る。主軸方向は、N－4.0°－Eである。柱穴は、直径25～50㎝の円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ923（第16図・第５図赤）　Ｏ～Ｑ－５・６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は、桁行7.26m（24尺）、梁行4.54m（15尺）を測る。主軸方向は、N－6.5°－Wである。柱穴は、直径30～55㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ923→ＳＢ917・931・935の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ924（第17図・第５図黒）　Ｑ～Ｓ－４～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。中央に柱が２本あり、総柱状になる。規模は、桁行6.06m（20尺）、梁行6.21m（20.5尺）を測る。主軸方向は、真北となる。柱穴は、直径30～70㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ960→ＳＢ924→ＳＢ917・918・937の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ903・912・941・943・989と重複する。出土遺物はない。建物の年代は、新旧関係により16世紀以降と考えられる。　**総　柱　状**

ＳＢ925（第17図・第５図黒）　Ｏ・Ｐ－４～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。北側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行7.27m（24尺）、梁行5.00m（16.5尺）を測る。主軸方向は、N－2.5°－Wである。柱穴は、直径45～80㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ908・ＳＤ335→ＳＢ925の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ926（第17図・第５図赤）　Ｐ・Ｑ－４～６グリッドに位置する。構造は、北側１間目を身舎に含めると、身舎の桁行３間、梁行２間である。北側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、西側の桁行6.66m（22尺）、梁行5.15m（17尺）を測る。主軸方向は、N－1.0°－Eである。柱穴は、直径25～50㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ926→ＳＢ908・913・932の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ906・907・934・947・960と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ927（第17図・第５図黒）　Ｒ～Ｔ－５～７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は、桁行8.49m（28尺）、梁行6.06m（20尺）を測る。主軸方向は、N－7.5°－Wである。柱穴は、直径約20～60㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ905・962→ＳＢ927の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ２・903・960・981と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ928（第17図・第５図赤）　Ｓ・Ｔ－７・８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は、桁行6.81m（22.5尺）、梁行3.56m（11.75尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－8.5°－Ｅである。柱穴は、直径20～45㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ928→ＳＢ905・922の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ２・974と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ929（第18図・第５図黒）　Ｎ・Ｏ－４～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間で、南側に庇を持つ。中央に間仕切りの柱がある。規模は、西側の桁行8.79m（29尺）、梁行6.13m（20.25尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.0°－Ｅである。柱穴は、直径50～85㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ914・964→ＳＢ929→ＳＢ908の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ930（第18図・第５図黒）　Ｓ・Ｔ－７・８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。中央に間仕切りの柱がある。規模は、南北を桁とすると、桁行5.76m（19尺）、梁行4.84m（16尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－6.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～65㎝の円形である。重複は、ＳＢ930→ＳＢ903の新旧関係がある。また、ＳＢ904と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ931（第18図・第５図赤）　Ｏ・Ｐ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。建物中央に間仕切りの柱がある。北側に庇が付く。南側には、１間幅で張り出し部分がある。規模は、桁行6.67m（22尺）、梁行5.15m（17尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－6.5°－Ｅである。柱穴は、直径40～80㎝の円形である。重複は、ＳＢ923・934・961→ＳＢ931の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ921・949と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ932（第18図・第５図黒）　Ｏ～Ｑ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。建物中央に間仕切りの柱がある。規模は、東西を桁とすると、桁行5.61m（18.5尺）、梁行4.70m（15.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－9.5°－Ｅである。柱穴は、直径40～75㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ926・932→ＳＢ908・934の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ907・947と重複する。出土遺物は、柱穴ｃ（ＥＰ721）から第57図22の珠洲片口鉢が出土した。遺物の年代は15世紀代と考えられる。

珠洲片口鉢

ＳＢ933（第18図・第５図赤）　Ｐ・Ｑ－３・４グリッドに位置する。構造は、南側の１間を身舎に含めると、身舎の桁行２間、梁行２間である。建物中央に間仕切りの柱がある。規模は、東西を桁とすると、桁行4.36m（約14.4尺）、梁行3.79m（12.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.0°－Ｗである。柱穴は、直径25～40㎝の円形である。重複は、ＳＢ933→ＳＢ914の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ934（第19図・第５図赤）　Ｐ・Ｑ－３～５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。建物中央に間仕切りの柱がある。規模は、桁行7.43m（24.5尺）、梁行6.06m（20尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－14°－Ｗである。柱穴は、直径35～40㎝の円形である。重複は、ＳＢ932→ＳＢ934→ＳＢ931の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ908・912・926・969・970と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ935（第19図・第５図黒）　Ｐ～Ｒ－５・６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行

３間、梁行１間である。南側に庇があるが、南西隅の１間が欠ける。規模は、桁行9.09m（30尺）、梁行5.30m（17.5尺）を測る。主軸方向は、N－3.0°－Eである。柱穴は、直径25～45㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ905・923・942・955→ＳＢ935の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ936（第19図・第５図黒）　Q～S－６～８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。建物中央に間仕切りの柱がある。規模は、南北を桁とすると、桁行5.30m（17.5尺）、梁行5.00m（16.5尺）を測る。主軸方向は、N－12.5°－Eである。柱穴は、直径35～80㎝の円形・楕円形である。新旧は不明であるが、ＳＢ955と重複する。出土遺物はない。

桁行２間、梁行２間

ＳＢ937（第19図・第５図赤）　P・Q－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。規模は、桁行6.81m（22.5尺）、梁行4.70m（15.5尺）を測る。主軸方向は、N－6.0°－Wである。柱穴は、直径30～50㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ937→ＳＢ906・912・924・941の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ914・957・977と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ938（第19図・第５図赤）　T・U－３～５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。規模は、桁行5.76m（19尺）、梁行4.54m（15尺）を測る。主軸方向は、N－13.0°－Eである。柱穴は、直径35～60㎝の円形である。重複は、ＳＢ909・965→ＳＢ938→ＳＢ918・983の新旧関係がある。また、新旧は不明であるがＳＢ939・981と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ939（第20図・第５図青）　S～U－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。北側に庇をもつ。規模は、北側の桁行で8.93m（30.5尺）、西側の梁行で4.40m（14.5尺）を測る。柱心心間の距離は、主軸方向は、N－13.0°－Eである。柱穴は、直径35～70㎝の円形である。重複は、ＳＢ915・918→ＳＢ939→ＳＢ916・951・983・989の新旧関係がある。また、ＳＢ909・938と重複するが、新旧は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ940（第20図・第５図赤）　S・T－３～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行５間、梁行１間である。規模は、桁行11.97m（40尺）、梁行3.33m（11尺）を測る。主軸方向は、N－11.0°－Eである。柱穴は、直径35～60㎝の円形・楕円形である。

重複は、ＳＢ841・943→ＳＢ940→ＳＢ905・906・913の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ918と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ941（第20図・第５図黒）　Q・R－４～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行１間である。規模は、桁行10.00m（33尺）、梁行3.48m（11.5尺）を測る。主軸方向は、N－7.0°－Wである。柱穴は、直径35～65㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ937・960・988→ＳＢ941→ＳＢ913の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ917・924・959と重複する。出土遺物はない。建物の年代は、新旧関係により16世紀以降と考えられる。

ＳＢ942（第20図・第５図赤）　R～T－５・６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行１間である。規模は、桁行10.15m（33.5尺）、梁行3.63m（12尺）を測る。主軸方向は、N－10.5°－Eである。柱穴は、直径40～65㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ903→ＳＢ942→ＳＢ901・920・935の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ904と重

複する。出土遺物はない。

ＳＢ840（第20図・第５図黒）　Ｏ・Ｐ－２・３グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行１間である。規模は、南側の桁行7.58m（25尺）、梁行3.79m（12.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－0.5°－Ｅである。柱穴は、直径30～50㎝の円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ943（第21図・第５図黒）　Ｒ～Ｔ－４・５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行１間である。規模は、桁行11.06m（36.5尺）、梁行3.33m（11尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－10.０°－Ｗである。柱穴は、直径30～80㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ841・987→ＳＢ943→ＳＢ911・913・918・940の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ924・950・989と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ944（第21図・第５図黒）　Ｏ・Ｐ－３・４グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、桁行8.64m（28.5尺）、梁行4.09m（13.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.5°－Ｅである。柱穴は、直径30～50㎝の円形である。重複は、ＳＢ921→ＳＢ944の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ945（第21図・第５図赤）　Ｓ・Ｔ－７・８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、南側の桁行7.92m（26尺）、梁行3.10m（10尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－6.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～40㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ945→ＳＢ905の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ910・922と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ946（第21図・第５図赤）　Ｓ～Ｕ－７・８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、北側の桁行6.67m（22尺）、西側の梁行3.33m（11尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－9.5°－Ｅである。柱穴は、直径35～70㎝の円形・楕円形である。新旧は不明であるが、ＳＢ２と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ947（第21図・第５図赤）　Ｐ・Ｑ－３～５グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、桁行7.26m（24尺）、梁行3.94m（13尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－6.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～75㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ970→ＳＢ947→ＳＢ908の新旧関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ913・926・932・957と重複する。出土遺物はない。

ＳＢ948（第21図・第５図黒）　Ｕ・Ｖ－７・８グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行１間である。規模は、北側の桁行5.54m（約18.3尺）、梁行2.12m（７尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－9.5°－Ｅである。柱穴は、直径25～50㎝の円形・楕円形である。重複はない。出土遺物は、柱穴ｂ（ＥＰ615）から第57図７の青花小坏が出土した。遺物の年代は16世紀末から17世紀前半である。

青花小坏

以上のように、１／100の平面図を掲載した掘立柱建物跡について述べた。ＳＢ949～989については、梁間が１間で桁行が数間の規模の建物であるが、これについては表４で内容を提示することとした。平面図は第５図に示した。

2　第２遺構ブロック（Ｂ区北）

第２遺構ブロックの概要

第２遺構ブロック（第22図）では、15棟の掘立柱建物跡を確認した。南側には、やや小規模な掘立柱建物跡が集中し、北側には桁行が15m近くに及ぶやや大型の掘立柱建物跡が分布する。このブロックからは、遺物の出土がほとんどないため、建物跡の時期的位置づけが困難である。第２遺構ブロック建物重複関係図を第56図に示した。建物跡の配置状況であるが、ブロックの南側に最も柱穴の集中する地点がある。この地点には、桁行が３・４間の建物跡、ＳＢ714・726・727・991・992があり、小型の建物跡では、身舎の規模が２×１間のＳＢ990・993がある。この中の遺構では、ＳＢ726→714の新旧関係がある。これらのまとまりを、第２遺構ブロック南としておく。

桁行が３・４間の建物跡

第２遺構ブロック南より北側に、建物の規模が５×２、４×２間などのやや大型の建物がある。第２遺構ブロック南に重複して、ＳＢ719・994がある。柱穴の重複があるが、新旧関係は不明である。この２棟は、時間的に前後するものと推定される。この建物よりさらに北側に、重複してやや大型のＳＢ715・844があり、小型の建物跡ＳＢ995・996がある。この建物の新旧関係は、ＳＢ715→ＳＢ844、ＳＢ995→ＳＢ996である。これらを第２遺構ブロック中央とする。第２遺構ブロックの北端には、ＳＢ997・998の２棟の建物跡がある。

互いのブロックは新旧関係に乏しく、時期的な変遷は不明であるが、あえて推測すれば、第２遺構ブロック南は、重複する建物が多く、規模や柱穴がやや小型であること、第２遺構ブロック中央が、建物の規模が大型で柱穴の掘り方もやや大きいことより、第２遺構ブロック南から中央へ、建物の規模を大型化しながら建替えられていったと考えられる。

掘立柱建物跡

ＳＢ714（第24図）　Ｊ～Ｌ－５～７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間、庇が南側と東側の２面に付く。東側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行10.90m（36尺）、梁行7.68m（約25.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－7.5°－Ｅである。柱穴は、直径40～60㎝の円形である。重複は、ＳＢ726→ＳＢ714の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ990（第24図）　Ｉ・Ｊ－６・７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行１間、庇が南北２面に付く。規模は、桁行6.66m（22尺）、梁行4.55m（15尺）を測る。柱穴は、直径25～70㎝の円形である。主軸方向は、Ｎ－5.0°－Ｅである。重複、出土遺物はない。

ＳＢ726（第25図）　Ｊ～Ｌ－５～７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は、桁行10.39m（34.5尺）、梁行6.21m（20.5尺）を測る。庇が東・西・南側の３面に付くが、４面庇の可能性も考えられる。柱穴は、直径40～70㎝の円形・楕円形である。主軸方向は、Ｎ－7.0°－Ｅである。出土遺物はない。重複は、ＳＢ726→ＳＢ714の新旧関係がある。

ＳＢ727（第25図）　Ｊ～Ｌ－５・６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間、南北２面に庇がつく。規模は、桁行8.19m（27尺）、梁行6.00m（19.8尺）を測る。柱穴は、直径35～60㎝の円形である。主軸方向は、Ｎ－8.5°－Ｅである。重複関係、出土遺物はない。

ＳＢ991（第26図）　Ｊ～Ｌ－５～７に位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行１間で、北側に庇が付く。規模は、桁行12.72m（42尺）、梁行6.21m（20.5尺）を測る。柱穴は、直径35～65㎝の円形である。主軸方向は、Ｎ－5.5°－Ｅである。重複関係、出土遺物はない。

ＳＢ992（第26図）　Ｊ～Ｌ－５～７に位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、桁行7.88m（26尺）、梁行5.45m（18尺）を測る。柱穴は、直径35～50㎝の円形である。主軸方向は、Ｎ－9.5°－Ｅである。重複関係、出土遺物はない。

ＳＢ993（第26図）　Ｌ・Ｍ－６・７グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行１間で、南側に庇が付く。規模は、桁行4.54m（15尺）、梁行4.70m（15.5尺）を測る。柱穴は、直径30～55㎝の円形である。主軸方向は、Ｎ－5.0°－Ｅである。他の遺構との重複関係であるが、ＳＤ685→ＳＢ993の新旧関係がある。出土遺物はない。

桁行５間、梁行２間

ＳＢ719（第27図）　Ｉ～Ｌ－４～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行５間、梁行２間で、東側から１間目と２間目に間仕切りがある。庇は、南北と東の３面に付く。規模は、桁行16.85m（55.5尺）、梁行9.44m（約31尺）を測る。柱穴は、直径30～95㎝の円形である。主軸方向は、Ｎ－4.0°－Ｅである。ＳＢ994と柱穴ａ・ｌで重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ994（第28図）　Ｈ～Ｋ－４～６グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行５間、梁行２間である。東側から１間目に間仕切りがある。南側と西側の２面に庇が付く。規模は、桁行15.92m（52.5尺）、梁行6.51m（21.5尺）を測る。柱穴は、直径30～90㎝の円形・楕円形である。主軸方向は、Ｎ－8.5°－Ｅである。出土遺物はない。ＳＢ714と柱穴ｂ・ｒで重複するが、新旧関係は不明である。遺物はない。

ＳＢ995（第28図）　Ｋ・Ｌ－３・４に位置する。構造は、身舎が桁行２間、梁行１間で、北側に庇が付く。規模は、桁行6.36m（21尺）、梁行3.63m（12尺）を測る。柱穴は、直径35～75㎝の円形である。主軸方向は、Ｎ－0.5°－Ｅである。ＳＢ995→ＳＢ996の重複がある。出土遺物はない。

ＳＢ996（第28図）　Ｋ・Ｌ－３・４グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行１間である。規模は、桁行5.45m（18尺）、梁行3.48m（11.5尺）を測る。柱穴は、直径30～35㎝の円形である。主軸方向は、Ｎ－1.0°－Ｗである。ＳＢ995→ＳＢ996の重複がある。出土遺物はない。

ＳＢ715（第29図）　Ｈ～Ｋ－３・４グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間である。東から１間目と２間目に間仕切りの柱があり、田の字状になる。規模は、南側の桁行11.97m（39.5尺）、西側の梁行7.58m（25尺）を測る。柱穴は、直径40～115㎝の円形・楕円形である。主軸方向は、Ｎ－1.0°－Ｗである。ＳＢ715→ＳＢ844の重複関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ997（第29図）　Ｋ～Ｍ－１・２に位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、桁行5.56m（18.5尺）、梁行3.94m（13尺）を測る。柱穴は、直径30～60㎝の円形・楕円形である。主軸方向は、Ｎ－9.0°－Ｅである。重複関係、出土遺物はない。

ＳＢ844（第30図）　Ｋ～Ｍ－３・４に位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。南北と東側の３面に庇が付く。規模は東西（桁行）7.57m（25尺）、南北（梁行）8.03m

（26.5尺）を測る。さらに西側に建物が延びる可能性も考えられる。柱穴は、直径40～85㎝の円形・楕円形である。主軸方向は、N－1.0°－Eである。ＳＢ715→ＳＢ844の重複関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ998（第30図）　Ｌ・Ｍ－０～２に位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。規模は、桁行9.09m（30尺）、梁行4.54m（15尺）を測る。柱穴は、直径35～75㎝の円形・楕円形である。主軸方向は、N－7.0°－Eである。重複関係、出土遺物はない。

溝跡（第22図）

ＳＤ685　第２遺構ブロック東端に位置する。南北に走る溝跡である。２つに分かれるが同一の溝とした。南側の溝は長さ10.5m、北側の溝は長さ10.7mで、現代の撹乱、ＳＤ700に切られている。幅は、35～60㎝、深さは約20～30㎝である。覆土は暗褐色・黒褐色シルトで礫・粗砂を含む。自然堆積と考えられる。性格は、区画溝としての役割が考えられる。ＳＤ685→ＳＢ993の重複関係がある。

土坑（第30図）

ＳＫ605　Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、大きさは95×84㎝、深さは26㎝である。地山の砂礫層を掘り込んでいる。覆土中から、第59図35の肥前産陶器皿が出土している。完形品である。遺物の年代は、1580～1610年代である。

肥前産陶器皿

３　第３・４遺構ブロック（Ｂ区南）

第３遺構ブロックの概要

第３遺構ブロック（第23図上半）では、56棟の建物跡を検出した。柱穴の分布は、第１遺構ブロックに次いで密集している。ブロック中央部分には、直径１mに及ぶ大型の掘り方の柱穴が集中している。出土遺物は、特に17世紀代のものが多い。それ以前の16世紀末から17世紀前半の肥前陶器も少量ながら認められる。16世紀代の白磁・青花も出土しているが、僅かである。遺物から考えると、この遺構ブロックは16世紀前後から始まり、17世紀から19世紀に至るまで存続したと考えられる。次に出土遺物と遺構の新旧関係から推定される建物の時期を以下に述べる。建物の新旧関係は、第56図の第３遺構ブロック建物重複関係図と、表４に示した。

大型の掘り方の柱穴

16世紀から17世紀以降の建物跡…１棟（ＳＢ1000）
16世紀末から17世紀前半以降の建物跡…２棟（ＳＢ1003・1045）
17世紀前半以降の建物跡…４棟（ＳＢ1010・1012・1013・1035・1037）
17世紀中葉から末葉以降の建物跡…10棟（ＳＢ1004・1006・1007・1018・1019・1022・1023・1025・1028・1047）
17世紀後半から18世紀前半以降の建物跡…１棟（ＳＢ1015）
18世紀から19世紀以降の建物跡…３棟（ＳＢ1002・1005・1011）
江戸時代と考えられるが、詳細な時期が不明の建物跡…１棟（ＳＢ1016）

時期の推定可能な建物は、17世紀中葉から後葉以降にかけてが最も多い。傾向としては、ＳＢ1002・1004・1015・1023・1025・1028など、柱穴の掘り方の直径が１m近くに及ぶ建物は、17世紀代の遺物を伴う傾向がある。遺物を伴わないが、同様の柱穴を持つ建物として、ＳＢ1001・1008などは、17世紀代以降の時期と推定される。また、ＳＢ1035は、礎石建物になると

17世紀中葉から後葉

礎石建物

推定され、これを切る建物跡もないため、江戸時代でも新しい時期と考えられる。

中世の建物の存在も考えられるが、具体的にどの建物跡が相当するか不明である。しかしながら、ＳＢ999などは、柱穴の掘り方が小さく、近世以前の可能性が考えられる。

掘立柱建物跡

桁行４間、梁行２間

ＳＢ999（第31図）　Ｇ～Ｊ－12・13グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行は２間である。南側に庇が付く。庇は、南西隅の１間が欠ける。規模は、桁行11.36m（37.5尺）、梁行7.12m（23.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～60㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1033（柱穴ｄ）→ＳＢ999の新旧関係がある。他にＳＸ551と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1000（第31図）　Ｉ～Ｋ－13・14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行は２間である。東側の桁から１・２間目に間仕切りの柱がある。規模は、南側の桁行11.51m（38尺）、梁行5.61m（18.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－14.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～90㎝の円形・楕円形である。重複はない。出土遺物であるが、柱穴ｋ（ＥＰ599）から、第57図５青花皿（16世紀前葉～中葉）が出土した。柱穴ｊ（ＥＰ550）からは瀬戸・美濃系陶器（16～17世紀）が出土した。柱穴ｃ（ＥＰ589）からは、第57図３白磁皿が出土した。遺物の年代から考えると、16世紀から17世紀以降にかけての時期と考えられる。

青花皿・白磁皿

ＳＢ1001（第32図）　Ｈ～Ｋ－10～12グリッドに位置する。構造は、東端・西端の１間を身舎に含めると、身舎の桁行４間、梁行は２間である。東側から１・３間目に間仕切りの柱がある。規模は、北側の桁行11.96m（37.5尺）、梁行5.15m（17.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－12.0°－Ｅである。柱穴は、直径40～125㎝の円形・楕円形である。ＳＢ1002・1009・1033と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1002（第32図）　Ｈ～Ｊ－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。北側から１間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行10.00m（33尺）、梁行6.36m（21尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－8.0°－Ｗである。柱穴は、直径60～110㎝の楕円形・隅丸方形である。重複は、ＳＢ1005（柱穴ｊ）・1008（柱穴ａ）・ＳＸ551（柱穴ｉ）→ＳＢ1002の新旧関係がある。他に、ＳＢ1001・1007・1025・1028・1037・1046・1055と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｉ（ＥＰ553）から第61図66の肥前磁器染付碗と肥前陶器皿が出土した。柱穴ｇ（ＥＰ556）からは、写真図版27の175、寛永通寶文銭が出土している。ただし、この柱穴は、ＳＢ1025と重複している。建物の年代は、新旧関係より18～19世紀以降と考えられる。

寛永通寶文銭

ＳＢ1003（第32図）　Ｇ・Ｈ－10～12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。北側から１間目に間仕切りの柱が付く。規模は、桁行7.88m（26尺）、梁行4.54m（15尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－16.5°－Ｅである。柱穴は、直径30～50㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1045（柱穴ｆ）→ＳＢ1003の新旧関係がある。他にＳＢ1017・1039と重複するが、前後関係は不明である。出土遺物はない。建物の時期は、新旧関係より、1590～1610年代以降と考えられる。

ＳＢ1004（第33図）　Ｈ～Ｊ－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。南側に庇がつく。規模は、桁行7.88m（26尺）、梁行7.57m（25尺）を測る。主

軸方向は、N－17.5°－Eである。柱穴は、直径35～85㎝の楕円形である。重複は、ＳＢ1025（柱穴ｋ）→ＳＢ1004の新旧関係がある。他にＳＢ1005・1007・1011・1014・1015・1037と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｃ（ＥＰ588）から第59図45の肥前陶器呉器手碗と、第58図30の戸長里瓶が出土している。この柱穴は他の建物、ＳＢ1015・1007・1014と重複するため、この柱穴の遺物が建物の時期を反映しているのかは不明である。建物の時期は、新旧関係から17世紀中葉から末葉以降と考えられる。

肥前陶器呉器手碗

ＳＢ1005（第33図）　Ｇ～Ｉ－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行は２間である。規模は、桁行9.69m(32尺)、梁行4.54m(15尺)を測る。主軸方向は、N－9.0°－Eである。柱穴は、直径40～90㎝の円形である。重複は、ＳＢ1011（柱穴ｂ）・1028（柱穴ｆ）→ＳＢ1005→ＳＢ1002（柱穴ｅ）の新旧関係がある。他にＳＢ1004と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物は、柱穴ｋ（ＥＰ552）から肥前磁器染付碗が出土した。建物の年代は、新旧関係より18～19世紀以降と考えられる。

肥前磁器染付碗

ＳＢ1006（第33図）　Ｇ～Ｉ－11～13グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。北側から１間目に間仕切りの柱が付く。規模は、桁行8.33m(27.5尺)、梁行6.51m（21.5尺）を測る。主軸方向は、N－8.0°－Wである。柱穴は、直径30～90㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1025(柱穴ｆ)→ＳＢ1006の新旧関係がある。他に、ＳＢ1008・1011・1046の重複があるが、新旧関係は不明である。出土遺物は、柱穴ａ（ＥＰ608）から第59図37の肥前陶器皿（1590～1610年代）が出土している。建物の時期は、新旧関係から17世紀中葉から末葉以降と考えられる。

ＳＢ1007（第33図）　Ｉ・Ｊ－12・13グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。南に庇がつく。規模は、桁行5.45m（18.5尺）、梁行5.91m（19.5尺）を測る。主軸方向は、N－7.5°－Eである。柱穴は、直径40～60㎝の円形・楕円形である。ＳＢ1002・1004・1008・1014・1015・1025・1037と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物は、柱穴ｊ（ＥＰ588）から第59図45の肥前陶器呉器碗と第58図30の戸長里瓶が出土した。柱穴ｅ（ＥＰ587）からは、第59図45の肥前陶器呉器手碗と写真図版27の178銭貨が出土した。また柱穴ｃは、ＥＰ585を切るが、ＥＰ585からは、肥前陶器呉器手碗が出土している。これより、最も新しい遺物は、肥前陶器呉器手碗で、年代は17世紀中葉から末葉にかけてである。

戸長里瓶

ＳＢ1008（第34図）　Ｇ～Ｉ－11～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。中央の桁に柱が２本入り、各４間×１間の間取りとなる。規模は、桁行9.40m（31尺）、梁行7.88m（26尺）を測る。主軸方向は、N－15.5°－Eである。柱穴は、直径40～100㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1008→ＳＢ1002（柱穴ｃ）・1014（柱穴ｄ）・1025（柱穴ｆ・ｇ）の新旧関係がある。他にＳＢ1006・1007・1011・1019・1039と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1009（第34図）　Ｊ・Ｋ－11～13グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。北側から１間目に間仕切りの柱がある。庇が東側に付く。規模は、桁行6.66m（22尺）、梁行6.52m（21.5尺）を測る。主軸方向は、N－17.5°－Wである。柱穴は、直径25～90㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1046(柱穴ｅ)→ＳＢ1009→ＳＢ1035(柱穴m)の新旧関係がある。他にＳＢ1001・1013・1042との重複があるが、新旧関係は不明である。出

土遺物はない。

ＳＢ1010（第34図）　Ｇ・Ｈ－12・13グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。間仕切りの柱が２本入り、総柱となる。規模は、桁行7.28m(24尺)、梁行3.94ｍ（13尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.5°－Ｗである。柱穴は、直径30～60㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1010→ＳＢ1037（柱穴ｆ）の新旧関係がある。出土遺物であるが、柱穴ｄ（ＥＰ597）から、第61図71の肥前磁器染付碗が出土した。遺物の年代は、1630～1650年代である。

ＳＢ1011（第35図）　Ｇ・Ｈ－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行は２間である。間仕切りの柱が２本確認されるが、３本の可能性もある。規模は、桁行9.54m（31.5尺)、梁行5.15m（17尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－8.5°－Ｅである。柱穴は、直径40～80㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＸ551（柱穴ｄ）→ＳＢ1011→ＳＢ1005（柱穴ａ）の新旧関係がある。他にＳＢ1004・1006・1008・1045と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｆ（ＥＰ584）から第59図36の肥前陶器皿（1590～1610年代）と、第70図157の漆器鉢が出土した。柱穴ｈ（ＥＰ333）からは、在地系陶器で、18～19世紀の時期と考えられる碗の破片が出土した。

漆　器　鉢

ＳＢ1012（第35図）　Ｊ～Ｌ－10・11グリッドに位置する。構造は、南側１間を身舎に含めると、身舎の桁行３間、梁行は３間である。南側から１間目の桁に柱が２本入り、３間×２間と３×１間に間仕切りされる。規模は、桁行6.52m（21.5尺)、梁行5.46m（18尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－8.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～65㎝の円形・楕円形である。ＳＢ1013と柱穴ｇで重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｇ（ＥＰ332）から第61図66の肥前磁器染付碗（1610～1640年代）が出土した。

ＳＢ1013（第35図）　Ｊ～Ｌ－10～12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。庇が南側に付く。規模は、桁行7.88m（26尺)、梁行6.21m（20.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－8.0°－Ｅである。柱穴は、直径40～65㎝の円形・楕円形である。

重複は、ＳＢ1013→ＳＢ1035（柱穴ｌ）の新旧関係がある。他に、ＳＢ1009・1012と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物は、柱穴ｅ（ＥＰ332）から第61図66の肥前磁器染付碗の同一個体が出土している。遺物の年代は、1610～1640年代である。柱穴は、ＳＢ1012と重複している。

ＳＢ1014（第35図）　Ｈ～Ｊ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。中央の桁に柱が２本入り、総柱となる。規模は、桁行8.03m(26.5尺)、梁行5.76ｍ（19尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－9.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～95㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1008（柱穴ｈ）→ＳＢ1014→ＳＫ606（柱穴ａ）の新旧関係がある。他にＳＢ1004・1007・1015・1030と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｆ（ＥＰ588）から第59図45肥前陶器呉器手碗と第58図30の戸長里瓶が出土している。しかし、この柱穴は他の建物ＳＢ1004・1015と重複しているため、この建物に関連するとは断定できない。最も新しい遺物の年代は17世紀中葉から末葉の時期である。

ＳＢ1015（第36図）　Ｉ～Ｋ－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間と推定される。規模は、桁行8.19m（27尺)、梁行6.06m（20尺）を測る。主軸方向は、

Ｎ－19.5°－Ｅである。柱穴は、直径35～110㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1015→ＳＢ1024（柱穴ｉ）・1031（柱穴ｇ）の新旧関係がある。他に、ＳＢ1004・1007・1014・1016・1023・1041と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｃ（ＥＰ588）から、第59図45の肥前陶器呉器手碗と第58図30の戸長里瓶が出土した。柱穴ｊ（ＥＰ557）から第62図129のかわらけと、肥前陶器碗が出土した。最も新しい遺物はＥＰ557の肥前陶器碗で、年代は17世紀後半から18世紀前半である。

ＳＢ1016（第36図）　Ｊ～Ｌ－12・13グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。規模は、桁行7.72m（25.5尺）、梁行4.84m（16尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－7.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～75㎝の円形・楕円形である。ＳＢ1015・1023と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物は、柱穴ｈ（ＥＰ331）から第65図130の土器瓶が出土した。柱穴ｇ（ＥＰ334）からは、肥前磁器染付瓶の破片が出土したが、年代は不明である。

ＳＢ1017（第36図）　Ｈ・Ｉ－10～12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。規模は、桁行7.57m（25尺）、梁行3.33m（11尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－11.0°－Ｅである。柱穴は、直径40～70㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1017→ＳＢ1021（柱穴ｇ）・1039（柱穴ｂ）の新旧関係がある。他にＳＢ1003と重複するが新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1018（第36図）　Ｊ・Ｋ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。規模は、桁行7.28m（24尺）、梁行4.7m（15.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－11.5°－Ｗである。柱穴は、直径25～60㎝の円形・楕円形である。ＳＢ1046と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1019（第36図）　Ｈ～Ｊ－13・14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間である。規模は、桁行6.66m（22尺）、梁行4.24m（14尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－23.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～70㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1025（柱穴ｅ）・ＳＸ551（柱穴ａ・ｂ）→ＳＢ1019の新旧関係がある。他にＳＢ1008と重複するが新旧は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｇ（ＥＰ593）から、第59図42肥前または福岡産の壺・甕類の体部破片と、第59図46の肥前陶器呉器手碗が出土した。最も新しい遺物の年代は、17世紀中葉から末葉になる。

福岡産の壺・甕類

ＳＢ1020（第37図）　Ｊ・Ｋ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行は２間である。規模は、南北を桁とすると、桁行5.01m（16.5尺）、梁行4.09m（13.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～75㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1032（柱穴ｉ）→ＳＢ1020→ＳＢ1042（柱穴ｉ）の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ1021（第37図）　Ｈ・Ｉ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行は２間である。規模は、東西が南北よりも長いので、東西を桁とすると、桁行4.54m（15尺）、梁行4.39m（14.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－10.0°－Ｗである。柱穴は、直径25～55㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1017（柱穴ｃ）→ＳＢ1021の新旧関係がある。他にＳＢ1014・1030と重複するが、前後関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1022（第37図）　Ｉ～Ｌ－13・14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行

は１間である。北側の桁で西から１・２間に庇が付く。規模は、桁行10.62m(35尺)、梁行4.39m（14.5尺）を測る。主軸方向は、N－1.0°－Eである。柱穴は、直径25～60㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1025（柱穴ｉ・ｋ）→ＳＢ1022の新旧関係がある。他にＳＢ1028と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。建物の時期は、新旧関係より17世紀中葉から末葉以降と考えられる。

ＳＢ1023（第37図）　Ｊ～Ｌ－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。南側に庇が付く。規模は、桁行10.75m（35.5尺）、梁行4.01m（約13.2尺）を測る。主軸方向は、N－12.5°－Eである。柱穴は、直径25～115㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1023→ＳＢ1047（柱穴ｂ）の新旧関係がある。他に、ＳＢ1015・1016・1041と重複するが新旧関係は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｂ（ＥＰ329）から第58図27の戸長里瓶が出土した。柱穴ｈ（ＥＰ562）から、第58図30の戸長里瓶と、第61図79の肥前磁器染付碗（一重網目文）が出土した。最も新しい遺物は肥前磁器染付碗（1650～1700年代）である。

肥前磁器染付碗（一重網目文）

ＳＢ1024（第37図）　Ｊ～Ｌ－13・14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、桁行9.69m（32尺）、東側の梁行2.88m（9.5尺）を測る。主軸方向は、N－8.0°－Wである。柱穴は、直径25～50㎝の円形である。重複は、ＳＢ1015（柱穴ｇ）→ＳＢ1024の新旧関係がある。出土遺物はない。建物の年代は、新旧関係により、17世紀後半から18世紀前半以降と考えられる。

ＳＢ1025（第38図）　Ｈ～Ｊ－13・14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、桁行9.09m（30尺）、梁行3.03m（10尺）を測る。主軸方向は、N－18.5°－Eである。柱穴は、直径75～140㎝の円形・隅丸方形である。重複は、ＳＢ1008（柱穴ｇ・ｈ）→ＳＢ1025→ＳＢ1004（柱穴ａ）・1006（柱穴ａ）・1019（柱穴ｃ）・1022（柱穴ｃ）の新旧関係がある。他にＳＢ1002・1007・1028と重複するが、新旧は不明である。出土遺物は、柱穴ａ（ＥＰ601）から、第61図71肥前磁器染付碗が出土した。柱穴ｃ（ＥＰ587）から、第59図44肥前陶器の呉器手碗、写真図版27の178銭貨が出土した。柱穴ｄ（ＥＰ586）から、第58図26戸長里擂鉢、第61図72肥前染付皿が出土した。柱穴ｆ（ＥＰ556）からは、写真図版27の175寛永通寶文銭が出土した。柱穴ｇ（ＥＰ598）からは、肥前陶器呉器手碗が出土した。最も新しい遺物は、肥前呉器手碗で、17世紀中葉から末葉になる。

ＳＢ1026（第38図）　Ｋ・Ｌ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、南側の桁行7.27m（24尺）、梁行2.73m（９尺）を測る。主軸方向は、N－6.0°－Wである。柱穴は、直径35～45㎝の円形・楕円形である。ＳＢ1046が重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1027（第38図）　Ｋ・Ｌ－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、桁行8.18m（27尺）、梁行2.58m（8.5尺）を測る。主軸方向は、N－0.5°－Eである。柱穴は、直径25～60㎝の円形・楕円形である。ＳＢ1046と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

梁行１間

ＳＢ1028（第38図）　Ｈ～Ｊ－13・14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、桁行8.79m（29尺）、梁行3.33m（11尺）を測る。主軸方向は、N－15.0°－Eである。柱穴は、直径60～70㎝の円形である。重複は、ＳＸ551→ＳＢ1028→ＳＢ

1005（柱穴ａ）の新旧関係がある。他に、ＳＢ1002・1022・1025が重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物であるが、柱穴ｅ（ＥＰ558）から第61図74の肥前磁器染付碗と、第58図30の戸長里瓶が出土した。最も新しい遺物の年代は、肥前磁器染付で、1650～1670年代である。

ＳＢ1029（第38図）　Ｊ～Ｌ－14・15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、桁行8.34m（27.5尺）、梁行3.40m（約11.2尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－11.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～70㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1030（第38図）　Ｈ・Ｉ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、桁行5.46m(18尺)、梁行2.73m(９尺)を測る。主軸方向は、Ｎ－7.5°－Ｗである。柱穴は、直径40～55㎝の円形・楕円形である。ＳＢ1014と重複するが新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1031（第39図）　Ｋ・Ｌ－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、桁行9.08m（30尺）、梁行2.42m（８尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－26.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～60㎝の楕円形である。重複は、ＳＢ1015（柱穴ｄ）→ＳＢ1031の新旧関係がある。出土遺物はない。建物の年代は、新旧関係により、17世紀後半から18世紀前半以降と考えられる。

ＳＢ1032（第39図）　Ｉ～Ｋ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は１間である。規模は、桁行6.36m（21尺）、梁行2.12m（７尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－15.0°－Ｅである。柱穴は、直径20～40㎝の円形である。重複は、ＳＢ1032→ＳＢ1020（柱穴ｄ）の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ1033（第39図）　Ｉ・Ｊ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行は１間である。規模は、桁行4.84m（16尺）、梁行1.97m（1.97尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－23.0°－Ｅである。柱穴は、直径25～50㎝の円形である。重複は、ＳＢ1033→ＳＢ999（柱穴ｄ）の新旧関係がある。他に、ＳＢ1001と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1034（第39図）　Ｋ・Ｌ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行は１間である。規模は、桁行4.66m（約15.4尺）、梁行3.03m（10尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－22.5°－Ｗである。柱穴は、直径30～40㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1043（柱穴ｃ）→ＳＢ1034の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ1035（第39図）　Ｋ・Ｌ－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行６間、梁行は１間以上と推定される。規模は、桁行5.46m（18尺）、梁行主軸方向は、Ｎ－6.0°－Ｅである。柱穴の掘り方は、直径60～80㎝の円形で、５～25㎝大の円礫を敷きつめている。厚さは、10㎝程度である。本来は、礎石建物であったと考えられる。重複は、ＳＢ1009(柱穴ｉ)・1013（柱穴ｉ）・1042（柱穴ｇ）→ＳＢ1035の新旧関係がある。出土遺物はない。

礎石建物

以上のように、第３遺構ブロックで１／100で平面図を掲載した主要な掘立柱建物跡について述べてきた。ＳＢ1036～ＳＢ1047については、表４で主な内容について示した。平面図については、第23図の１／200の平面図に掲載した。

土坑（第39図）

ＳＫ606　Ａ－11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、大きさは130×94㎝、深さは25㎝

である。覆土は、黒褐色シルトである。土坑底面から、大きさ10～30㎝の礫が十数点出土した。この中には、縄文時代の遺物である、第69図173・174の凹石、石皿が含まれる。覆土の状態から考えると、中世～近世の廃棄土坑と考えられる。

ＳＫ704　Ｍ－10グリッドに位置する。平面形は円形で、大きさは直径142㎝、深さは75㎝である。覆土は、５層に分かれる。４・５は、自然堆積と考えられるが、上層は人為堆積の可能性がある。黒褐色シルトが主体である。遺物は、肥前磁器皿の小破片が出土している。年代は、1630～1640年代である。

第４遺構ブロックの概要

ここでは、14棟の掘立柱建物跡が確認された。第23図下半に全体図を示し、建物の重複関係は、第56図の第４遺構ブロック建物重複関係図に示した。ブロックの内容であるが、中央部分には、３×２間、４×２間の規模の建物跡が重複している。家屋としての建物が繰り返し建替えられている場所と推定される。南側には、ＳＢ610・1048・1049などの、庇をもつ建物が重複する。連続して建替えられていると推定されるが、柱穴の重複がないため、新旧は不明である。ＳＢ1049の柱穴から珠洲焼が出土していることや、これらの３棟が比較的類似した構造をもち、柱穴も小型であることより、中世の建物である可能性がある。

珠　　洲

この建物跡の北側には、ＳＢ517・1052・1053・1055・1056がある。ＳＢ517・1052・1053については、ＳＢ1049→ＳＢ517→ＳＢ1052、ＳＢ610→ＳＢ1052、ＳＢ1048→ＳＢ1053の重複関係がある。また、ＳＢ517からは、17世紀後半の遺物が出土している。これらの建物は、江戸時代になると考えられる。

ブロックの東側には、１×数間、３×２間の小型の建物跡が重複する。この場所は小屋などの建物が配置される場所と考えられる。建物では、南端にＳＢ572・1050・1054が重複している。このうち、ＳＢ1050→ＳＢ572の重複関係がある。ＳＢ572からは、16世紀末～17世紀前半の遺物が出土している。北側には、ＳＢ1051・1057・1058があるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ610（第40図）　Ｆ～Ｉ－15～17グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行は２間である。北・西・南側に庇が付く。規模は、桁行12.94m（43尺）、梁行7.88m（26尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－7.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～75㎝の円形・楕円形である。建物の南側に溝跡が付く。中央が途切れているが本来は続いていたと考えられる。重複は、柱穴Ｗ（ＥＰ531）でＳＢ1052と重複する。切り合いの前後関係は不明であるが、柱穴の掘り方の規模がＳＢ1052の方が大型になることより、ＳＢ610→ＳＢ1052の新旧関係が推定される。出土遺物はない。

ＳＢ1048（第41図）　Ｇ～Ｉ－15～17グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。北側と西側の２面に庇が付く。現地調査では、北西隅の庇の柱穴を確認していないが、柱穴があった可能性もある。規模は、桁行10.37m（34尺）、西側の梁行6.14m（20尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－11.5°－Ｅである。柱穴は、直径35～55㎝の円形・楕円形である。重複は、柱穴ｍでＳＢ1053と重複する。柱穴の掘り方規模がＳＢ1053の方が大型になること、柱穴ｍで柱痕跡が検出されなかったことより、ＳＢ1048→ＳＢ1053の新旧関係があると推定される。出土遺物はない。

ＳＢ1049（第41図）　Ｇ～Ｊ－15～17グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行

２間である。庇が、東・西・南側に認められる。現地調査では、南西隅の柱穴を確認していないが、柱穴があった可能性もある。規模は、桁行10.01m（33尺）、梁行6.06m（20尺）を測る。主軸方向は、N－10.0°－Eである。柱穴は、直径20～50㎝の円形・楕円形である。重複は、柱穴bでＳＢ1052に切られ、ＳＢ517の柱穴と重複する。ＳＢ517の柱穴掘り方は、ＳＢ1049より大型である。以上より、ＳＢ1049→ＳＢ517（推定）・ＳＢ1052の新旧関係がある。出土遺物は、柱穴m（ＥＰ548）から、第58図24の珠洲擂鉢が出土している。柱痕をふさぐような出土状況から、柱穴の抜き取り後などに落ち込んだものと思われる。

ＳＢ572（第41図）　Ⅰ・Ｊ－17・18グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間である。建物内に間仕切りの柱が２本入り、総柱状になる。規模は、桁行5.72㎝(19尺)、西側の梁行3.94m（13.0尺）を測る。主軸方向は、N－4.5°－Wである。柱穴は、直径35～75㎝の円形である。重複は、ＳＢ1050→ＳＢ572の新旧関係がある。柱穴ｂ～ｄで新旧が確認される。柱穴ｆ～ｉでは、プランの重複は明瞭ではない。出土遺物は、柱穴ｂ（ＥＰ577）から肥前陶器皿（1590～1630年代）が出土している。

ＳＢ1050（第41図）　Ⅰ・Ｊ－17・18グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は、北側の桁行5.87m（19尺）、梁行3.94m（13尺）を測る。主軸方向は、N－1.0°－Eである。柱穴は、直径35～75㎝の円形である。重複は、ＳＢ1050→ＳＢ572の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ517（第42図）　Ｈ～Ｊ－15・16グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間である。規模は、桁行9.08m(30尺)、梁行4.84m(16尺)を測る。主軸方向は、N－12.5°－Eである。柱穴は、直径30～100㎝の円形・楕円形である。北側・南側の桁の柱穴には、抜き取り跡がある。柱穴掘り方の覆土は、暗褐色シルトが主体で、黄褐色シルトブロックが少量入る。建物の南・西辺にかけてＳＤ514が巡る。この溝跡の幅は、30～65㎝、深さは15～35㎝である。覆土は２層に分かれ、黒褐色シルト・暗褐色シルトが主体である。ＳＤ515と重複するが、前後関係は不明である。また、ＳＢ1052に切られる。重複は、ＳＢ1049→ＳＢ517→ＳＢ1052の新旧関係が推定される。出土遺物は、柱穴ｉ（ＥＰ525）から第59図47の肥前陶器擂鉢（17Ｃ前半）が、柱穴ｊ（ＥＰ526）から第61図77の肥前磁器染付碗（一重網目文・1650～1700年代）が出土した。ＳＤ514からは、第57図９の青花皿（16Ｃ後半～17Ｃ初）、第61図75の肥前磁器染付碗（17Ｃ後半）が出土している。出土遺物から考えると、建物の時期は17世紀後半以降と考えられる。

抜き取り跡

青　花　皿

ＳＢ1051（第42図）　Ⅰ～Ｋ－16～18グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、桁行8.79m(29尺)、梁行2.73m(９尺)を測る。主軸方向は、N－7.0°－Eである。柱穴は、直径25～70㎝の円形・楕円形である。南側桁の柱穴は、抜き取り痕がある。北側桁の柱穴は、南側に比して小さく浅い。削平のため、柱痕跡のみが残ったと考えられる。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1052（第43図）　Ｈ～Ｊ－15・16グリッドに位置する。構造は、桁行４間、梁行３間である。建物内に間仕切りの柱穴が６本入り、総柱状になる。規模は、桁行9.08m（30尺）、西側の梁行6.66m（22尺）を測る。主軸方向は、N－13.0°－Eである。柱穴は、直径40～75㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ610・ＳＢ517→ＳＢ1052の新旧関係が推定される。出土

遺物はない。建物の年代は、新旧関係により、17世紀後半以降と考えられる。

ＳＢ1053（第43図）　Ｆ～Ｈ－14～16グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間と推定される。北西側は、削平されたと考えられ、北西梁側の２本の柱穴は確認できなかった。規模は、桁行7.43m（24.5尺）、梁行4.54m（15尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－27.0°－Ｅである。柱穴は、直径75～85㎝の円形・隅丸方形である。掘り方覆土は、暗褐色シルトである。重複は、ＳＢ1048・ＳＤ515→ＳＢ1053の新旧関係が推定される。出土遺物はない。

ＳＢ1054（第43図）　Ｉ～Ｋ－18・19グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間以上と推定される。規模は、桁行7.42m（24.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－8.0°－Ｅである。柱穴は、直径40～65㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1055（第44図）　Ｈ～Ｊ－14～16グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間である。規模は、桁行8.48m（21尺）、梁行5.16m（17尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－17.5°－Ｅである。柱穴は、直径55～85㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＤ515→ＳＢ1055の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ1056（第44図）　Ｈ～Ｊ－14・15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間以上と推定される。西側に庇が付く。規模は、桁行6.37m（21尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－14.0°－Ｅである。柱穴は、直径45～55㎝の円形である。この建物跡の南・西側に沿って、ＳＤ559がある。幅約20～55㎝、断面はＶ字状で、深さ約10～40㎝である。覆土は２・３層に分かれ、上層は黒褐色シルト、下層は暗褐色シルトである。この建物跡に付随する溝跡の可能性が考えられる。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1057（第44図）　Ｊ・Ｋ－15・16グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行は１間である。規模は、桁行4.39m（14.5尺）、梁行2.27m（7.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－5.5°－Ｅである。柱穴は、直径40～50㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1058（第44図）　Ｊ・Ｋ－16・17グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行１間である。規模は、桁行5.76m（19尺）、梁行2.73m（９尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－9.5°－Ｅである。柱穴は、直径15～55㎝の円形である。重複、出土遺物はない。

土坑（第44図）

ＳＫ570　Ｊ－17グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、大きさは165×120㎝、深さは30㎝である。覆土は、黒褐色シルトが主体で、自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

ＳＫ571　Ｊ－16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、大きさは156×112㎝、深さは20㎝である。東側を他の柱穴が切っている。覆土は、黒褐色シルトが主体で、自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

溝跡

ＳＤ516（第23図）　Ｅ・Ｆ－15グリッドに位置する。全長6.8mで東西方向に走る溝である。幅は50～90㎝、深さ10～20㎝、覆土は、暗褐色シルトである。溝の底面に不規則な凹凸が認められた。生け垣などが植えられていた可能性が考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ515（第23図）　Ｇ・Ｈ－14・15グリッドに位置する。全長約5.5mで東西方向に走る、浅く平坦な溝である。幅は60～120㎝、深さ約10～15㎝、覆土は、暗褐色シルトである。重複関係は、ＳＤ515→ＳＢ1053・1055の新旧関係がある。ＳＢ517と重複するが、新旧関係は不明

である。遺物の出土はない。

４　第５・６遺構ブロック（Ｃ区南・Ａ区南）

第５・６遺構ブロックの概要

第５遺構ブロック（第46図）では、調査区南東隅の参道に面する部分である。ＳＢ1059～1062・1064の５棟の建物跡が確認された。重複関係に乏しく、建物跡の変遷課程は不明である。遺物を伴う建物としては、ＳＢ1059から、16世紀末から17世紀前葉の肥前陶器が出土している。また、ＳＢ1060から、16世紀後半の瀬戸・美濃系陶器と18世紀中葉から末葉の肥前磁器が出土している。このブロックの西側には、現代の建物による撹乱が入っているため、この部分には遺構は確認されていない。明治以降の遺構として、ＳＤ501・ＳＤ503・ＳＸ508がある。

第６遺構ブロックは、第５遺構ブロックの北側、参道の東側に広がる。合計21棟の建物跡が確認されている。建物の新旧関係については、第56図の第６遺構ブロック建物重複関係図に示した。この中でも幾つかの建物のまとまりがある。銀杏の木のすぐ東隣に、９棟の建物、ＳＢ617・723・724・1063・1065～1067・1069・1070がある。中央ブロックと呼称しておく。このうち、重複関係が明らかな例としては、ＳＢ1069・1070→ＳＢ723がある。このうち、ＳＢ617・723は、身舎が間仕切りをもつ２つの空間で構成され、四面に庇を持ち、柱穴の間尺が７尺を主とする構造から、同時期か、近接した時期に建てられていた可能性が高いと思われる。建物には関係しないが、ブロックを構成する柱穴（ＳＰ667）から、16世紀の瀬戸・美濃系灰釉小皿、また18世紀後半、19世紀の遺物が出土していることから、ブロックの時期もこの期間に関係すると思われる。

四面に庇

中央ブロックの南西側に、ＳＢ1074～ＳＢ1080の７棟の建物が重複している。この場所を南西ブロックと呼称しておく。この中で重複関係が明らかな例として、ＳＢ1076→ＳＢ1074がある。これらの建物は、柱穴の間尺が６・6.5・７尺であり、連続して建替えられたと思われる。建物の時期については不明であるが、ＳＢ1074に重複する柱穴から16世紀末から17世紀前半の陶磁器が出土していることより、この時期を含む前後する期間と考えられる。ＳＢ1074は、比較的柱穴の掘り方が大きいため、このブロックの中でも新しい建物と推測される。

中央ブロックの北側に、小型の建物跡、ＳＢ1071・1073がある。この地点を北東ブロックと呼称する。建物の時期や前後関係については不明である。ブロックを構成する柱穴の１つ（ＥＰ509）から、珠洲の擂鉢が出土している。

珠洲の擂鉢

中央ブロックの北西側に、ＳＢ1068・1072・1081の３棟がある。この地点を北西ブロックと呼称する。ＳＢ1072がやや大型の建物で、その他は中型・小型の建物である。遺構の密度は薄い。建物の時期や新旧関係については不明である。

以上第６遺構ブロックについてまとめると、中央ブロックには家屋となる主要な建物があり、ある程度の時間幅が想定される。南西ブロックも重複が多いことより長期にわたると考えられるが、中央ブロックよりも建物規模が小型の建物になる。北東、北西ブロックは、遺構密度が薄く、時折中央ブロックに平行して建物が断絶しながら建てられていたと思われる。

掘立柱建物跡

ＳＢ1059（第45図）　Ｓ・Ｔ－18～20グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行

は２間以上と推定される。南側に庇が付く。規模は、桁行10.30m（34尺）、梁行の全長は不明である。主軸方向は、Ｎ－3.0°－Ｅである。柱穴は円形で直径約35～70㎝である。重複は、ＳＢ1062と柱穴ｂ・ｃで重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物は、第58図32の肥前陶器皿（1580～1620年代）、第59図39肥前陶器沓形碗（1590～1620年代）が出土している。

肥前陶器沓形碗

ＳＢ1060（第45図）　Ｒ～Ｔ－19・20グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間以上、梁行１間である。規模は、桁行7.88m以上（26尺以上）、梁行3.64m（12尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－5.0°－Ｅである。柱穴は、直径30～65㎝の円形・楕円形である。重複はない。出土遺物は、柱穴ｃ（ＥＰ512）から第57図12の瀬戸・美濃系陶器灰釉小皿（16Ｃ後半）が、柱穴ｇ（ＥＰ665）から、第61図88の肥前磁器染付小坏（18Ｃ中葉～末葉）が出土した。

ＳＢ1061（第45図）　Ｓ・Ｔ－18～20グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間以上と推定される。規模は、桁行8.33m（27.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－7.0°－Ｅである。柱穴は、直径60～75㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1062（第45図）　Ｒ・Ｓ－17・18グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、桁行5.46m（18尺）、梁行は、南側で4.90m（18尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－7.0°－Ｅである。柱穴は、直径25～70㎝の円形・楕円形である。重複は、ＳＢ1059と柱穴ｂ・ｄで重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

ＳＢ1063（第47図）　Ｓ・Ｔ－13～16グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行６間、梁行２間以上と推定される。規模は、桁行11.80m（39尺）を測る。柱心心間の距離は、西側桁で、各々1.97m（6.5尺）である。主軸方向は、Ｎ－2.5°－Ｅである。柱穴は、直径約40～60㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1064（第47図）　Ｒ～Ｔ－16～18グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は、桁行6.97m（23尺）、梁行6.06m（20尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－6.0°－Ｅである。柱穴は、直径40～90㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1065（第47図）　Ｓ・Ｔ－14・15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間以上と推定される。規模は、桁行5.91m（19.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－1.5°－Ｅである。柱穴は、直径約40～55㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1066（第47図）　Ｓ・Ｔ－14・15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間と推定される。規模は、桁行6.66m（22尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.5°－Ｅである。柱穴は、直径約25～55㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ617（第48図）　Ｐ・Ｑ－13～15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行５間、梁行２間、庇が４面に付くが、東側の庇の北側から２間が欠ける。身舎は北側から２間目に間仕切りの柱がある。規模は、桁行11.51m（38尺）、梁行6.66m（22尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.0°－Ｅである。柱穴は、直径約55～90㎝の円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ724（第49図）　Ｑ～Ｓ－13～15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間、庇が４面に付く。規模は、桁行8.34m（28.5尺）、梁行8.03m（26.5尺）を測る。主軸方向は、Ｎ－4.0°－Ｅである。柱穴は、直径35～85㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1067（第49図）　Ｑ・Ｒ－14・15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行

１間、庇が、西と南側に付く。規模は、桁行7.13m（23.5尺）、梁行4.39m（14.5尺）を測る。主軸方向は、N－5.0°－Eである。柱穴は、直径25～60㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1068（第49図）　N～P－10～12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間と推定される。北側桁の柱穴は削平のため本来より浅く、消失したものもあると思われる。規模は、桁行7.74m（25.5尺）、梁行4.24m（14尺）を測る。主軸方向は、N－10.0°－Eである。柱穴は、直径45～70㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ723（第50図）　R～U－12・13グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行２間、庇が４面に付く。東側から２間目に間仕切りの柱がある。ＳＢ617と類似した構造である。規模は、桁行10.45m（34.5尺）、梁行6.51m（21.5尺）を測る。主軸方向は、N－5.0°－Eである。柱穴は、直径45～95㎝の円形・楕円形である。柱穴ｉでＳＢ1070と重複し、柱穴ｊ・ｋで1069と重複する。ＳＢ1069・1070→ＳＢ723の新旧関係がある。出土遺物は、柱穴ｌ（ＥＰ681）から関西系の陶器（18Ｃ後半～19Ｃ）が出土しているが、この柱穴に重複する柱穴があり、遺物がこの柱穴に帰属するのかは不明である。

関西系の陶器

ＳＢ1069（第50図）　S～U－12～14グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間、庇が南側に付く。規模は、桁行9.09m（30尺）、梁行6.66m（22尺）を測る。主軸方向は、N－9.5°－Eである。柱穴は、直径25～55㎝の円形である。重複は、柱穴ａ・ｂでＳＢ1069と重複し、ＳＢ1069→ＳＢ723の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ1070（第51図）　S・T－12・13グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は、桁行7.57m（25尺）、梁行5.46m（18尺）を測る。主軸方向は、N－1.5°－Wである。柱穴は、直径25～80㎝の円形・楕円形である。重複は、柱穴ｈでＳＢ723と重複し、ＳＢ1070→ＳＢ723の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＢ1071（第51図）　T～V－10・11グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行１間と推定される。庇が南側に付く。規模は、桁行5.78m（19尺）を測る。主軸方向は、N－8.0°－Eである。柱穴は、直径45～85㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1072（第51図）　N～Q－11・12グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行５間、梁行３間と推定される。西側から３間目に間仕切りの柱が３本入る。建物の北西側の柱穴は削平されたためか、検出されなかった。規模は、桁行13.25m（43.7尺）、梁行6.96m（23尺）を測る。主軸方向は、N－10.0°－Eである。柱穴は、直径30～75㎝の円形で、掘り方覆土は、褐色・暗褐色シルトで小礫を含む。柱穴ｉ・ｈでは直径約20㎝の柱痕が確認された。重複、出土遺物はない。

ＳＢ１（第52図）　N～P－９・10グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は、桁行7.89m（26尺）、梁行5.16m（17尺）を測る。主軸方向は、N－6.0°－Eである。柱穴は、直径40～60㎝の円形で、掘り方覆土は褐色・にぶい褐色のシルトや砂質シルトである。柱痕の直径は、約15～20㎝である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1073（第52図）　T～V－９～11グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間、梁行２間と推定される。庇が、南側と東側の２面に確認されるが、４面になると推定される。規模は、南北を桁とすると、桁行の残存長は、6.21m（20.5尺）、梁行6.82m（22.5尺）を測る。

主軸方向は、N－6.0°－Eである。柱穴は、直径35～85㎝の円形・楕円形である。重複、出土遺物はない。

ＳＢ1074（第52図）　M・N－14・15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は不明である。庇が南側に認められる。北側の桁は、削平のため消失したと考えられる。規模は、桁行6.36m（21尺）を測る。主軸方向は、N－17.0°－Eである。柱穴は、直径約20～70㎝の円形・楕円形である。柱穴ａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｈは、他の柱穴と重複しており、ａ・ｂ・ｃでは、抜き取り痕がある。しかしながら、重複する柱穴との新旧関係は不明である。柱穴ｅ・ｈでＳＢ1076と重複する。ＳＢ1076→ＳＢ1074の新旧関係がある。出土遺物は、柱穴ｂ（ＥＰ728）で、第54図８の青花碗（16Ｃ末～17Ｃ前半）が出土している。しかし、帰属はこの建物の柱穴ではなく、他の重複する柱穴と考えられる。

青　花　碗

ＳＢ1075（第52図）　M・N－15グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行は２間以上と推定される。南側桁は、撹乱のため検出されなかった。規模は、桁行5.06m（16.5尺）を測る。主軸方向は、N－7.0°－Eである。柱穴は、直径25～40㎝の円形である。重複、出土遺物はない。

なお、ＳＢ1076～ＳＢ1081については、平面図を第53図に示し、内容については、表４に記載した。

Ⅴ　出土した遺物

1　中・近世の遺物

中世陶磁器（第57図１～第58図25）

青磁・白磁・青花などの中国からの輸入陶磁器と、瀬戸・美濃系陶器・珠洲などの国産陶器が出土した。青花には、明末清初の時期のものがあり、瀬戸・美濃系陶器については、大窯期の遺物が中心であるが、ここに併せて内容を述べることとする。

青　磁　碗

青磁は２点出土した。１は青磁碗で、鎬連弁文が施される。13世紀末から14世紀前半にかけての時期と考えられる。２は、青磁碗の体部破片で、単位が多い細描連弁文と思われる文様があり、15世紀後半から16世紀にかけての時期と考えられる。共に龍泉窯産である。白磁は、３・４の２点が出土した。端反の皿と考えられ、焼成は良好で、高台や底部に砂が付着している。景徳鎮窯産である。青花には、碗・皿・小坏が見られる。５は、端反の小皿と考えられ、内面に玉取獅子と思われる文様がある。６は小型の陶胎染付の皿で、焼成はやや不良で貫入が入る。７は小坏で、胎土は緻密で、薄く焼成が良い。削り出し高台である。８は碗の体部破片で、胎土・焼成は良好である。外面に龍の文様が描かれる。９は皿で、内面に菖蒲と思われる花の文様が描かれる。焼成は良好で、高台と底面は露胎になる。底面に、「×」あるいは「十」状の墨書がある。10は、芙蓉手の皿である。内面に宝物の文様がある。高台付近に砂が付着している。産地は、６・９は漳州窯、他は景徳鎮窯である。年代は、５・６が16世紀代、７～10が16世紀末から17世紀前半にかけてのものである。

芙蓉手の皿

瀬戸・美濃系陶器

次に、国産陶器について述べる。最も出土量が多いのは、瀬戸・美濃系陶器である。

11は、天目茶碗である。12～18は、灰釉の小皿である。14は、内面に丸彫りによる菊花文が施される。16は、口縁が折縁となる。18の内面には、印花の菊文がある。12・17・18の底面には、トチンの跡が認められる。19は、小破片で全体の形状は不明であるが、体部に屈曲があるので、腰折の外反する皿と考えられる。20は、志野の丸皿である。内面に、鉄絵の圏線がある。ほどんどが大窯期の遺物と考えられる。

珠洲では、壺・片口鉢・擂鉢が見られる。21は、壺の口縁である。焼成は良好である。22は片口鉢である。使用により、内面の卸目がかなり磨滅している。外面に漆の付着が見られ、補修を行ったと思われる。23・24は、擂鉢の体部破片である。卸目は密に施される。23は、胎土・焼成はやや不良で、灰黄色を呈する。24の焼成は良好である。概ねこれらは、珠洲第Ⅴ期の範疇に含まれると考えられる。

珠洲第Ⅴ期

25は、産地不明の瓷器系陶器の擂鉢である。D区試掘トレンチ３のⅡ層から出土した。胎土はにぶい橙色で、粗砂が混入し焼成はやや不良である。内底に卸目が見られる。

近世陶器（第58図26～第60図65）

近世の陶磁器で、最も出土量が多いのは、肥前産を中心とした陶磁器である。肥前以外の生産地では、福岡・瀬戸・美濃、在地の窯として、米沢の戸長里・福島の岸・大堀相馬・会津本

郷などが認められる。

米沢の戸長里窯　米沢の戸長里窯の製品について述べる。26・27は、擂鉢である。内外面に薄く鉄釉が施される。26は口縁部で、内面に１単位７条の卸目が施される。断面には漆接が見られる。27は底部である。内面は使用による摩耗が著しく、断面に補修の漆接が見られる。底部は回転糸切りと思われる。28は底部で、器種は不明である。底面には回転ヘラケズリが見られる。29・30は、瓶である。外面に厚く鉄釉が施され、ロクロ目が目立つ。29の体部下には、漆接がある。いずれの製品も、胎土は軟質で気泡が入り、焼成はあまり良くない。

31は、瀬戸・美濃系陶器と思われる。ロクロ成型で内面と底面にトチン痕が見られる。二次的な熱を受けている。器種は壺と推定されるが不明である。

肥前系陶器　次に肥前系陶器について述べる。32～34は、胎土目積みの皿である。32は、焼成は良好で灰黄色に釉が施される。底面に墨書があり、文字が薄く不明瞭であるが「鬼」と推測される。33は体部に屈曲があり、焼成はやや不良で釉薬が白くなっている。底面に墨書があり、「神」と推測される。34も皿の底部と考えられ、釉が白く濁っている。底面に墨書があり、33と同じ文字と思われる。35は完形の皿で、焼成は良く、緑色に釉薬が発色している。底部は回転糸切りである。36・37は皿の口縁部で、胎土目積みの時期である。36は焼成が良く、胎土は灰白色である。37は内面に段がつく。釉薬は透明である。38は、体部中央に屈曲をもつ皿である。底部は回転糸切りで、内面に胎土目跡がある。39は、胎土目段階の沓形碗である。同一個体の口縁部破片があり、鉄釉を施した上に長石釉で梅花文が施される。体部破片に漆接がある。40は絵唐津の皿である。41は瓶の体部破片で、外面には平行タタキ目、内面には同心円状アテ痕がある。42は壺または甕の体部破片で、外面に縄状の突帯が巡る。内面には同心円状アテ痕がある。41・42の産地は、肥前あるいは福岡と考えられる。43は、砂目積みの皿である。灰オリーブ色に灰釉がかかる。44～46は、呉器手の碗で、このタイプは当遺跡から比較的出土が多い。47は擂鉢で、体部上半に鉄釉が施される。49は瓶である。口縁から頸部にかけての部分で、釉は外面と口縁内面にかかる。50は、火入か線香立てと考えられる。口縁が肥厚する。

胎土目積み
底面に墨書
砂目積み

福岡産の陶器　肥前以外の産地の陶器について述べる。48は、福岡産の陶器碗である。焼成は良く、藁灰釉により青く発色している。胎土はにぶい黄橙色で砂の混入が多くざらっとした感触がある。高台内を荒くケズリ調整している。51は茶入れと考えられ、産地は福岡産と思われるが、他の産地の可能性もある。胎土は明るい褐色で、鉄釉が体部と口縁内面に施される。漆接がある。52は、瀬戸・美濃産の陶胎染付の広東碗である。外面と内面に花文がある。

53・54の碗と55の小坏は、大堀相馬産である。53は、緑色の釉で貫入が入る。54は白濁した釉がかかる。55は、白く軟質な胎土で透明釉がかかる。56は、産地不明の小坏である。褐灰色の胎土で、透明釉がかかる。57は水注で、白く軟質な胎土で淡い緑色に釉がかかる。58は涼炉で、流水文状の文様が青で描かれる。59は、会津本郷産の擂鉢である。砂を多く含む胎土で、荒いロクロ目があり、内外に薄く鉄釉が施される。60は、関西系の鉢と考えられる。61は、福島県の岸窯産と考えられる擂鉢の口縁部破片である。62～65は在地産と考えられる陶器である。62は鉄釉が施される甕である。63・64は擂鉢である。63は片口が付き、卸目が密に施される。口縁部には厚く鉄釉をかけ、体部に鉄漿が塗られる。65はこね鉢である。

近世磁器（第61図66～第64図123）

近世の磁器の生産地は肥前が中心で、18世紀以降は、波佐見の製品が多く見受けられる。瀬戸・美濃産の磁器は、19世紀以降のものが見られるが、少量で遺構には関係しない。

17世紀前半代の磁器

肥前産磁器から内容を述べる。66～73は、17世紀前半代の磁器である。66・71は碗である。文様は簡潔なものが描かれる。67～70・72・73は皿である。67～69は大きさ・文様がほぼ同じことから、揃い物の皿と思われる。68の見込みには、月に雁と思われる文様がある。70は型打ち成型の皿で、見込みに柳文がある。73は手塩皿で、見込みに菊花文がある。

17世紀後半代の磁器では、74・75～79がある。いずれも碗である。74は、口縁外面に２条の染付圏線が巡る。75も、内外面に２条の圏線が入り、外面に文様があるが意匠は不明である。76～79は、一重網目文の碗である。この文様の磁器は、当遺跡から出土が多い。

波佐見

18世紀以降の磁器であるが、肥前の他に、波佐見の製品が多く見受けられる。80～83は、波佐見産のくらわんか手の碗である。80・82は雪輪梅樹文が施される。82の底面には崩れた「大明年製」の銘がある。81は、二重網目文が施される。84～86は肥前産の碗である。84は雪持ち笹が、85は松竹梅文が施される。87・88は小坏で、共に笹文が施される。89～93は、湯飲碗である。89は外面に市松網目文が、見込みには崩した「壽」字文が入る。90は、外面に矢羽根状文、見込みに手描きの五弁花がある。92には笹文が、93には丸文が描かれる。

94は、肥前産の猪口である。呉須が青黒く発色し、外面には山水文が、内面には四方襷文が描かれる。95は、青磁の香炉である。焼成は良く胎土は白い。外面にケズリ出しにより鎬状の文様があり、口端の内側に返りが付く。96は青磁染付の深皿で、口縁内面に波頭文が描かれる。

18世紀以降の皿も、波佐見産が多い。97は肥前の皿で唐草文を施し、見込にコンニャク印判の五弁花が見られ、高台内に「大明年製」の銘がある。98は肥前系の皿で、底部が厚く蛇ノ目凹形高台である。内面に、扇と草花に蝶の文様がある。99は、口縁が輪花状になる皿である。外面に２本線描きの唐草文、内面に梅樹か松竹梅と思われる文様がある。100～104は、波佐見産の皿である。見込にコンニャク印判の五弁花が押され、蛇ノ目釉剥ぎがある。101の高台内には、崩れた渦「福」の銘がある。103は手塩皿で、見込に雪持ち笹の文様がある。105は肥前産の皿で、外面に唐草文が、内面には植物文がある。底部は蛇ノ目凹形高台である。

皿以外の器種について述べる。106・107は、肥前産の仏飯器で、106には菊花散らしが、107には氷割菊文が描かれる。108は猪口で、山水文が施される。109は、氷割菊文が描かれる碗である。110は広東碗で、外面に植物文がある。111は、広東形の猪口である。外面には、大きく展開する山水文が、見込には岩波に東屋の文様がある。112は、端反の小碗で、宝珠の文様がある。産地は瀬戸・美濃または在地の可能性がある。113は湯飲碗で、籠を模した宝物と両脇に扇を配した文様がある。114は、小碗である。詩文と思われる文字が書かれている。115は、外面に青磁釉をかけた鉢である。見込に植物文が描かれる。底面に砂が熔着している。116・117は小型の瓶である。仏花瓶になると思われる。116には笹文と思われる文様がある。117は漆接がある。118は段重である。荒い太描の線にダミを施した草花文が描かれる。

119～121は蓋である。119は色絵の碗蓋で、内外面に松竹梅の文様が入る。つまみ部分の内側には、金色の圏線が入る。120は蓋物の蓋で、外面に蛾と思われる昆虫を描く。121は、端反碗の蓋である。線描きにより、外面に牡丹文を描く。

123は大皿である。口縁が輪花となる。外面の文様には七宝結びを４単位配置し、見込には

山水と魚と思われる文様がある。高台内には、「太明成化年製」の銘がある。

近代以降の陶磁器も出土している。これらは、ＳＸ324・325などを中心に出土している。ここに掲載するのはその一部である。122は明治以降の時期の染付磁器蓋である。外面に草花文が、内面に雷文と崩れた環状の松竹梅文を描く。124は染付磁器鉢である。口縁に雷文があり、「屋」の文字がある。内面には、線描きの牡丹文が描かれる。125は、平清水の陶器である。焼成は良く器壁は薄い。徳利と考えられる。126は、外面と口縁内面に青磁釉がかかる磁器瓶である。焼成は良好である。127は、端反の色絵磁器小坏である。見込に色絵の文様がある。剥落しており文様の詳細は不明であるが、赤色で日を描き、山と思われる文様の痕跡がある。

土器（第65図128～131）

素焼きの製品について述べる。かわらけ・瓦質陶器の類もここに含める。

かわらけ　128・129はかわらけの皿である。128の口径の推定値は150㎜でロクロ成型である。胎土は橙色で焼成はあまり良くない。炭化物が薄く付着している。129は128と同一個体の可能性がある。130は袋状の形態から瓶とした。無釉の素焼きで、ロクロ目が見られる。胎土は白色で、砂が少量混入される。131は、瓦質陶器の火鉢である。全体を黒色処理している。

石製品（第65図132～135）

砥石　砥石は３点出土した。132は直方体状で、研面は４面ある。表面はよく研磨されている。133はやや歪んだ撥状で断面は台形状になる。石材は泥岩と思われ、軟質である。研面は４面と思われるが、２面が特に良く使用されている。荒い擦痕が残る。134は、大部分が破損し全体の形状は不明である。外面が黒変しており、熱を受けたと思われる。石材は、薄く割れる性質をもつ。135は石臼である。上臼部分で、大部分を欠損するが、推定される直径は28.3㎝である。

礎石（第66図136～第70図154）

掘立柱建物跡の柱穴の底面に据えられたもの、柱を据える際の根固めとして用いられた石である。大型の柱穴にしばしば見受けられる。円形で扁平な自然石が多い。

136は円形でＳＢ978ＥＰ722出土である。扁平な石の両面に柱痕跡と思われる炭化物の付着がある。137は、ＳＢ906ＥＰ45の出土である。表面には人為的な凹があり、その周囲の炭化物が付着する部分が柱痕跡と思われる。裏面には煤状のものが全面に薄く付着する。138はＥＰ75出土である。片面が平坦で滑らかで、研磨されたと思われる。139～141はＳＢ905ＥＰ57出土である。139は破損し、片面が平坦で煤状の付着物がある。柱穴側面の押さえに用いられたと考えられる。140・141は柱穴底面にあり、柱痕跡が残る。140の中央には、周囲より白く境界に酸化鉄が付着した円形の跡がある。141は、表裏に柱痕跡と思われる炭化物の付着がある。142はＳＢ905ＥＰ80の出土である。表面に柱痕跡と思われる炭化物の付着がある。143～149は、ＳＢ904ＥＰ68出土である。各々の礎石は、柱痕の周囲を囲むように配置されていた。柱穴側面の根固めとして使用されたと考えられる。143は扁平で、黒変した柱痕跡がある。144は扁平な円形で、片面に薄く炭化物の付着がある。145は、断面台形状で２つの平坦面をもつ。146は、角柱状の石で片面に擦痕がある。147は、片面に薄く炭化物が付着し、側面が被熱により赤変する。148は、両面に広い範囲で炭化物の付着がある。149は楕円形の扁平な自然石である。炭化物等の付着はない。150は、ＳＢ２ＥＰ130出土である。表面に広い範囲で炭化物が付着し、擦痕もある。151は、ＳＢ２ＥＰ62出土である。扁平な楕円形の石で、両面に薄く炭化物が付

着する。赤変し、熱を受けたと思われる。152は、ＳＢ２ＥＰ655底面の根石である。三角状の扁平な石で，柱痕跡と思われる円形のやや周囲より色が薄い部分がある。153は、ＳＢ841ＥＰ817出土である。柱痕の側面を押さえるような出土状況であった。破損し、片面に炭化物が付着する。154は、ＳＢ841ＥＰ818出土である。柱穴の根石である。大部分を破損し、全体の形状は不明である。両面の平坦面に擦痕がある。

金属製品（第70図155・156・写真図版27－175～178）

金属製品では、刀子と銭貨が出土している。155は刀子の鞘で，片面に溝状の装飾を程している。156も刀子で、鞘に入った状態で出土した。３片に破損し、両端を欠く。共に銅製と思われる。銭貨は、江戸時代の寛永通寶である。175は文銭、176は古寛永、177は新寛永である。178は、文字が不明瞭で銭種は不明である。渡来銭の可能性もある。

木製品（第70図157～159）

漆器と、杭・柱材が出土している。157は漆器で丸底になることから鉢と思われる。体部下半分から底部である。木胎部分は腐食しており漆膜部分が残っている。外面は赤色漆が塗られ、内面は茶褐色の漆膜が厚く残っている。漆を入れる容器として使用されたと考えられる。

158は、杭と考えられ、幅46㎜、厚さ28㎜の角材の先端を加工し尖らせる。159は、柱材と思われる。外皮は無く丸太材である。腐食が激しく外面の加工の有無は不明である。

２　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、縄文土器が１片、石器が十数点出土している。これらの遺物は、表土や、中・近世の遺構に混入して出土し、縄文時代に帰属する遺構はないと思われる。周囲に、市野々向原、野向遺跡など縄文時代の遺跡が存在し，これらの遺跡との関連が考えられる。

縄文土器（第71図160）

深鉢または鉢の体部破片と考えられる。風倒木痕と考えられるＳＸ671から出土した。横位に結節をもつＬＲ縄文が施文される。胎土はにぶい褐色で、胎土に粗砂を含む。晩期中葉に位置づけられると思われる。　**晩期中葉**

石器・石製品（第71図161～第72図174）

石器は、石箆・削器・凹石・石皿・剥片が出土した。161は、石箆である。背面と腹面のほぼ全周に二次加工が入る。162・163は削器である。縦長の剥片を用いている。162は背面の両側面と腹面の左側縁に二次加工が入る。163は破損し、剥片の打面側を欠く。二次加工は、背面の左側縁と先端に入る。164～169は剥片である。164は石刃状の縦長剥片である。側面に微小の剥離が見られる。165も同様の剥片である。縦長で白色の頁岩である。168は、自然面が残る。169は白色の頁岩で節理が入る。170・171は二次加工のある剥片である。背面の左側縁に二次加工が入る。171は、背面の右側縁と腹面の両縁に二次加工が入る。以上述べた剥片石器は全て頁岩製である。

172は、石棒である。両端を欠き、半分に割れている。外面は、研磨されて仕上げられている。１カ所に溝状に横方向に伸びる抉りが入る。173は、凹石である。凹以外には加工した痕は認められない。174は石皿である。楕円形の石を用い、緩やかに窪んだ磨面がある。側面や裏面には、成形時の敲打痕が残る。　**石棒**

Ⅵ　自然科学分析

1　はじめに

炭化材や種実遺体

飛泉寺跡遺跡は、室町時代に創建されたとされる飛泉寺の周囲に発展した中世～近世の門前町と考えられている。発掘調査により、多数の掘立柱建物跡に伴う柱穴が検出され、同一場所に何度も建替えが行われたことが判明している。柱穴内からは、炭化材や種実遺体等が出土している。

本報告では、柱穴内から出土した炭化材や種実遺体の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。また、炭化材の樹種同定と種実遺体の同定を行い、木材利用や植物利用に関する資料を得る。

2　試料

試料は、掘立柱建物跡の柱穴内から出土した木材17点（試料番号１，３～18）と種実遺体１点（試料番号２）である。木材17点のうち、試料番号５、６の２点を除く15点は炭化材であった。この中で、放射性炭素年代測定は、試料番号１～３、７の４点について行う。また、樹種同定は木材17点、種実遺体同定は試料番号２の１点を対象とする。

3　方法

⑴　放射性炭素年代測定

測定は、加速器質量分析法（AMS 法）で行い、放射性炭素の半減期は LIBBY の5568年を用いる。なお、測定は、株式会社加速器分析研究所（IAA）の協力を得た。

⑵　樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、３断面の破断面を作成し、双眼実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、種類を同定する。

⑶　種実遺体同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴および現生標本との比較から種類を同定し、乾燥重量を求める。同定後の種実遺体は、乾燥剤、緩衝材と共にタッパーに詰め、保存する。

4　結果

⑴　放射性炭素年代測定

年代測定結果を表２に示す。各試料の年代測定値は、試料番号１～３が170ＢＰ（補正年代290ＢＰ）～190ＢＰ（補正年代340ＢＰ）であった。一方、試料番号７は、490ＢＰ（補正年代580ＢＰ）であり、他の３点よりも古い年代を示した。

表２　放射性炭素年代測定結果

番号	遺構	試料の質	測定年代	δ13C	補正年代	Code No.
1	ＳＢ905Ｅ P40－Ｆ	炭化材	190±30ＢＰ	－15.48±0.81‰	340±30ＢＰ	ＩＡＡＡ－30107
2	ＳＢ905Ｅ P40－Ｆ	種実	170±30ＢＰ	－18.25±0.84‰	290±30ＢＰ	ＩＡＡＡ－30108
3	ＳＢ904Ｅ P94－Ｆ	炭化材	180±30ＢＰ	－18.52±1.17‰	290±40ＢＰ	ＩＡＡＡ－30109
7	ＳＢ904Ｅ P41	炭化材	490±30ＢＰ	－19.24±0.89‰	580±40ＢＰ	ＩＡＡＡ－30110

１）年代測定は、加速器質量分析法（AMS 法）による。
２）測定年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は δ13C の値を基に同位体効果による測定誤差を補正した値。
３）放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

⑵　樹種同定・種実遺体同定

同定結果を表３に示す。木材・炭化材は、針葉樹１種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹３種類（クリ・モクレン属・トネリコ属）に同定された。また、試料番号７には、モクレン属の炭化材の他に、炭化したイネ科タケ亜科の微細片も認められた。一方、種実遺体は、全てイネの胚乳に同定された。

表３　植物遺体の同定結果

番号	遺構	試料の質	種類
1	ＳＢ904Ｅ P40－Ｆ	炭化材	マツ属複維管束亜属
2	ＳＢ904Ｅ P40－Ｆ	種実	イネ
3	ＳＢ905Ｅ P94－Ｆ	炭化材	クリ
4	Ｅ P95－Ｆ	炭化材	モクレン属
5	Ｅ P65－Ｆ	生木	クリ
6	ＳＢ２Ｅ P248－Ｆ	生木	クリ
7	ＳＢ904Ｅ P41	炭化材	モクレン属 イネ科タケ亜科
8	ＳＢ988Ｅ P49	炭化材	クリ
9	ＳＢ953Ｅ P185	炭化材	クリ
10	ＳＢ908Ｅ P239	炭化材	クリ
11	Ｅ P701	炭化材	クリ
12	Ｅ P702	炭化材	モクレン属
13	Ｅ P705	炭化材	マツ属複維管束亜属
14	Ｅ P709	炭化材	クリ
15	Ｅ P711	炭化材	モクレン属
16	Ｅ P712	炭化材	クリ
17	Ｅ P716	炭化材	クリ
18	Ｅ P717	炭化材	トネリコ属

イネの胚乳

木材・炭化材の主な解剖学的特徴と種実遺体の形態的特徴を以下に記す。

〈木材・炭化材〉

• マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　　マツ科

軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部には樹脂道が認められる。放射祖組織は、柔細胞、仮道管、樹脂道等で構成される。分野壁孔は窓状となり、１分野に１個。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高。

• クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

• モクレン属（*Magnolia*）　　モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および２～４個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は

階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～40細胞高。

• トネリコ属（*Fraxinus*）　　モクセイ科

環孔材で、孔圏部は２～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～40細胞高。

• イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

試料は厚さ１㎜～２㎜程度の破片である。横断面では維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。

〈種実遺体〉

• イネ（*Oryza sativa* L.）

全て胚乳に同定された。完全に炭化した多数の胚乳が固結し、塊状。黒色を呈す。塊の大きさ５㎜、乾燥重量は8.98ｇ。胚乳は長楕円形でやや偏平。長さ3.5－５㎜、幅2.5㎜、厚さ１－1.5㎜程度。一端には胚が脱落した凹部があり、両面には２～３本の縦溝がみられる。焼け膨れや発泡した個体が多い。また、胚乳表面に穎の一部が残っている個体もみられる。穎表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。

5　考察

⑴　遺構の年代

年代測定を行った試料のうち、試料番号１、２の２点は、第１遺構ブロックの大型掘立柱建物跡（ＳＢ905）の柱穴から出土している。一方、試料番号３、７の２点は、ＳＢ904から出土した。ＳＢ904はＳＢ905に隣接し、柱の配置が平行することから、ＳＢ905に前後して建替えられた建物と考えられている。

ＳＢ905（試料番号１、２）の年代測定値は、炭化材が190ＢＰ（補正年代340ＢＰ）、種実遺体が170ＢＰ（補正年代290ＢＰ）であった。炭化材の樹齢の問題や測定誤差の範囲を含めれば、ほぼ同時期の試料であることが推定される。これらの試料の補正年代を用いて、INTCAL98（Stuiver et al., 1998）による暦年較正を行った。その結果、試料番号１の炭化材は、ＡＤ1520、1595、1620に交点があり、誤差範囲も含めるとＡＤ1485～1635となる。また、試料番号２の種実遺体は、ＡＤ1640に交点があり、誤差範囲も含めるとＡＤ1525～1650となる。このことから、ＳＢ905の炭化材・種実遺体は、16世紀～17世紀前半頃の年代が推定される。

一方、ＳＢ904ＥＰ41（試料番号３）は180ＢＰ（補正年代290ＢＰ）、ＳＢ904ＥＰ94（試料番号７）は490ＢＰ（補正年代580ＢＰ）であった。ＥＰ41の年代値は、暦年較正を行うと、ＡＤ1640に交点があり、誤差を含めるとＡＤ1520～1650となる。この結果は、ＳＢ905の年代値と一致しており、ほぼ同時期の木材であることが指摘できる。ＥＰ94の年代値は、暦年較正を行うと、ＡＤ1330、1340、1400に交点があり、誤差を含めるとＡＤ1315～1410となる。この年代値は、ＳＢ905の２点やＳＢ904ＥＰ41と比較すると、約200～300年古い年代を示している。この結果から、ＳＢ904ＥＰ94の炭化材については、14世紀代頃の年代が推定される。

大型掘立柱建物跡

以上のことにより、大型掘立柱建物跡ＳＢ904・905およびその周囲の建物は、16世紀～17世紀前半頃の可能性がある。ただし、これらの炭化材については、柱穴内から出土しているが、

埋土の部分を区別していないため、柱材ではない可能性もあるとされる。また、建物の建替えの際には、古い木材で再利用可能な木材が使われる可能性もある。木材を対象とした年代測定は、その木材の組織が形成された年代を示しており、実際の伐採・使用年代とは必ずしも一致しない。そのため、ＥＰ94の炭化材の年代差が建物の時期差を示すかについても断定できない。今後さらに他の試料の年代測定を行って、年代に関する資料を蓄積する必要がある。

⑵　木材利用について

柱穴内から出土した炭化材は、落葉広葉樹のクリが多く、他にモクレン属、トネリコ属、複維管束亜属が認められた。

クリは、強度や耐朽性に優れた材質を有し、柱など土に直接触れるような部位としての使用に適している。山形県内の民家の使用樹種に関する調査例は知られていないが、岩手県の南部民家の調査例では、柱にはスギやクリが多く見られ、その他に複維管束亜属、ヒノキ類、ノグルミ、オニグルミ等強度や耐水性に優れた木材が利用されている（布谷・中尾，1986）。このことは、本遺跡の結果とも一致する。これらのことを考慮すれば、本遺跡においても柱材にクリを主とした木材利用が行われていたことが推定される。民家の調査では、トネリコ属は柱に認められていないが、強度の高い材質を有することから、本遺跡ではクリと共に柱に利用された可能性がある。また、モクレン属については、ホオノキが鴨居や敷居等に利用されるが、柱としての利用は確認されていない。クリと比較すると強度や保存性が劣るため、柱以外の部材に利用された可能性もある。

ク　　リ

また、日本に生育する複維管束亜属（ニヨウマツ類）には３種類（アカマツ・クロマツ・リュウキュウマツ）がある。ただし、本州に生育するのはアカマツとクロマツの２種であることから、今回の試料もアカマツまたはクロマツと考えられる。いずれも強度が比較的高く、松脂を多く含むために耐水性も比較的高い。このような材質から、建築・土木材として適材とされる（平井，1980）。このため本遺跡においても、大型掘立柱建物をはじめとした柱材に用いられたと考えられる。

今後、他の出土木材についても樹種同定を行って木材利用に関する資料を蓄積すると共に、周辺地域での古民家の構築部材の樹種との比較・検討も行いたい。

⑶　種実遺体について

ＳＢ905の柱穴内から出土した種実遺体は、多量のイネが塊状に炭化したものであった。イネの胚乳には、表面模様などが確認され、穎の一部が残存した個体も認められる。このことから、胚乳が調理されて炭化したのではなく、脱穀前の稲籾の状態で塊状に炭化したことが推定される。柱穴内から出土していることから、廃棄された可能性がある。

今後、柱穴内の被熱の有無や他の出土遺物の状況等も含めて炭化から廃棄に至る過程を検討したい。

引用文献

平井信二　1980　木の事典　第７巻．かなえ書房．
布谷知夫他　1986　民家の構造材の樹種．大阪市立自然史博物館研究報告，40，ｐ．21－30.
Stuiver, M. 他　1998　INTCAL98 radiocarbon age calibration，24,000－0 cal BP. Radiocarbon，40，ｐ．1041－1083.

Ⅶ　調査のまとめ

今回の調査は、国土交通省北陸地方整備局横川ダム建設事業に伴う飛泉寺跡遺跡の緊急発掘調査である。１次から３次にわたる調査において、次のような内容が明らかとなった。

室町時代から江戸時代

飛泉寺跡遺跡は、中世後期の室町時代から江戸時代にかけて、約500年の間にわたり営まれた集落跡である。数多くの掘立柱建物跡が重複して検出され、この期間に建替えられた建物跡の総数は、延べ197棟以上に及ぶ。

遺跡内には、建物が繰り返し建替えられ、柱穴が密集する場所が認められる。これらは、寺の参道を中心として直交するように、６カ所ほどの区画に分けられる。当報告では、これらを「遺構ブロック」と仮称し、１～６遺構ブロックを設定した。これらは、集落内の屋敷割り、町割りに該当すると考えられる。

それぞれの遺構ブロックについては、次のような内容が明らかになった。

第１遺構ブロックは、88棟の掘立柱建物跡と、１基の柵列が確認された。このブロックの中で注目されるのは、桁行が４間以上で梁行が２～３間の大型掘立柱建物跡である。

このうち最も大型であるＳＢ２掘立柱建物跡は、身舎の桁行８間、梁行３間で、桁行総長21.69m、梁行総長7.79mに及ぶ。また、北側桁の北西隅に曲屋状に３間張り出す構造をもつ。柱穴は、１mを超える大型の掘り方を持ち、柱穴の底に根石を伴う。このような大型建物跡は、７期の変遷があったことが想定された。また、中型及び大型建物跡の変遷を検討した結果、このブロックでは、２棟１組の建物が、建替えられながら存続していった可能性がある。このブロックの存続期間は、出土遺物の年代より、15世紀に始まり、16世紀から17世紀にかけて大型建物跡が建てられ、以後の江戸時代も存続していたことが考えられる。

第２遺構ブロックは、15棟の掘立柱建物跡が確認された。年代については不明な部分が多いが、第１遺構ブロックと同様に、中世末から近世にかけて、一般的な家屋と考えられるような中型の建物を中心として存続していったことが考えられる。

第３遺構ブロックは、56棟の掘立柱建物跡が確認された。このブロックは、遺跡内で２番目の規模をもつ。遺物の様相から判断すると、このブロックは16世紀代から始まり、17世紀以降から18世紀にかけて最も建物が頻繁に建替えられるようになる。この時期の建物の柱穴も直径１mに及ぶ大型の掘り方を持つ。18世紀から19世紀にかけても存続したと推測される。

第４遺構ブロックは、14棟の掘立柱建物跡が確認された。このブロックは、３×２間、４×２間などの中型の建物跡が繰り返し建替えられた場所と考えられる。遺構の年代は、15世紀頃から開始し、16世紀・17世紀を通じて存続していたと考えられる。

第５・６遺構ブロックは、参道のすぐ東側の地点にあたる。第５遺構ブロックでは、５棟の建物跡が、第６遺構ブロックでは21棟の建物跡が確認された。第５・６遺構ブロックは、15世紀以降に始まり、16世紀、江戸時代に入る17・18世紀も存続していたことが考えられる。第６遺構ブロックでは、参道にすぐ面した地点に主な家屋としての建物が繰り返し建てられたと考えられ、やや離れた南西側に付属的な建物があり、北側に時折建物が建てられていたと考えら

れる。

出土遺物であるが、主な中世の遺物として、中国産の輸入陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、珠洲などの国産陶器が出土した。輸入陶磁器では、13世紀末から14世紀前半にかけての青磁鎬連弁文碗、15世紀代と考えられる青磁細描連弁文碗、16世紀代の白磁皿、16から17世紀前半にかけての青花が出土している。国産陶磁器として最も出土が多いのは、瀬戸・美濃系陶磁器で、ほとんどが16世紀代の大窯期になる。多くは灰釉小皿であり、他に天目茶碗が２点、志野小皿が１点出土している。珠洲は４点出土し、壺・擂鉢・片口鉢が見られ、概ね15世紀代と考えられる。

近世の遺物について述べる。この時期には、九州から北前船によって運ばれ、越後街道を通ってもたらされたと考えられる、肥前産陶磁器が多数出土した。肥前陶器は、16世紀末から17世紀初頭にかけての古い段階のものから出土が確認される。肥前産の磁器も、17世紀前半から出土が確認され、肥前産の陶磁器の流通が、早い段階からこの地に浸透していたことが伺われる。18世紀から19世紀にかけても、出土陶磁器の中心を占めている。また、肥前周囲の生産地では、16世紀末から17世紀にかけての福岡産と考えられる陶器が見られ、18世紀以降からは、波佐見産のくらわんか手の磁器が比較的見受られる。逆に、瀬戸・美濃系陶磁器は、江戸時代を通じてほとんど出土が見られない。

また、在地産の陶器として、米沢の戸長里窯で焼かれた製品が認められた。他に、福島の岸、会津本郷、大堀相馬などの製品も認められる。

このように当遺跡では、中・近世の陶磁器は日常什器が中心であるが、16世紀代の天目茶碗や、16世紀末から17世紀の沓形碗や、茶入と思われる陶器など、喫茶に関連する遺物が出土していることが特筆される。また、街道沿いの集落にもたらされた陶磁器の流通の様相が伺われる事例として興味深い。

街道沿いの集落

遺跡に隣接して建てられていた飛泉寺との関係であるが、出土遺物では、15世紀代の遺物が遺構から出土しており、15世紀以降の、飛泉寺の創建とされる応永34年（1427）に前後して集落が開始されたと解釈しても、矛盾しないと考えられる。遺物の内容は、前述したように主に碗・皿類など日常で使用する什器が中心であり、寺に関連するような調度品や仏具等は出土していない。集落の推移を考えると、大型掘立柱建物跡が建てられ始めた、16世紀から17世紀前半頃には、第１ブロックを中心として集落が構成され、17世紀代から18世紀前半頃には、第３遺構ブロックに中心となる建物が移ったと推測される。また、当集落遺跡は飛泉寺を中心とした門前町的な性格をもつと考えられ、17世紀から18世紀にかけて越後街道が本格的に整備され、市野々の集落が宿場としての形態が整って行く前段階的なものと考えられる。

門前町的な性格

大型掘立柱建物跡の性格については検討中であるが、市野々集落の有力者階級の屋敷跡の可能性が想定される。

参考・引用文献

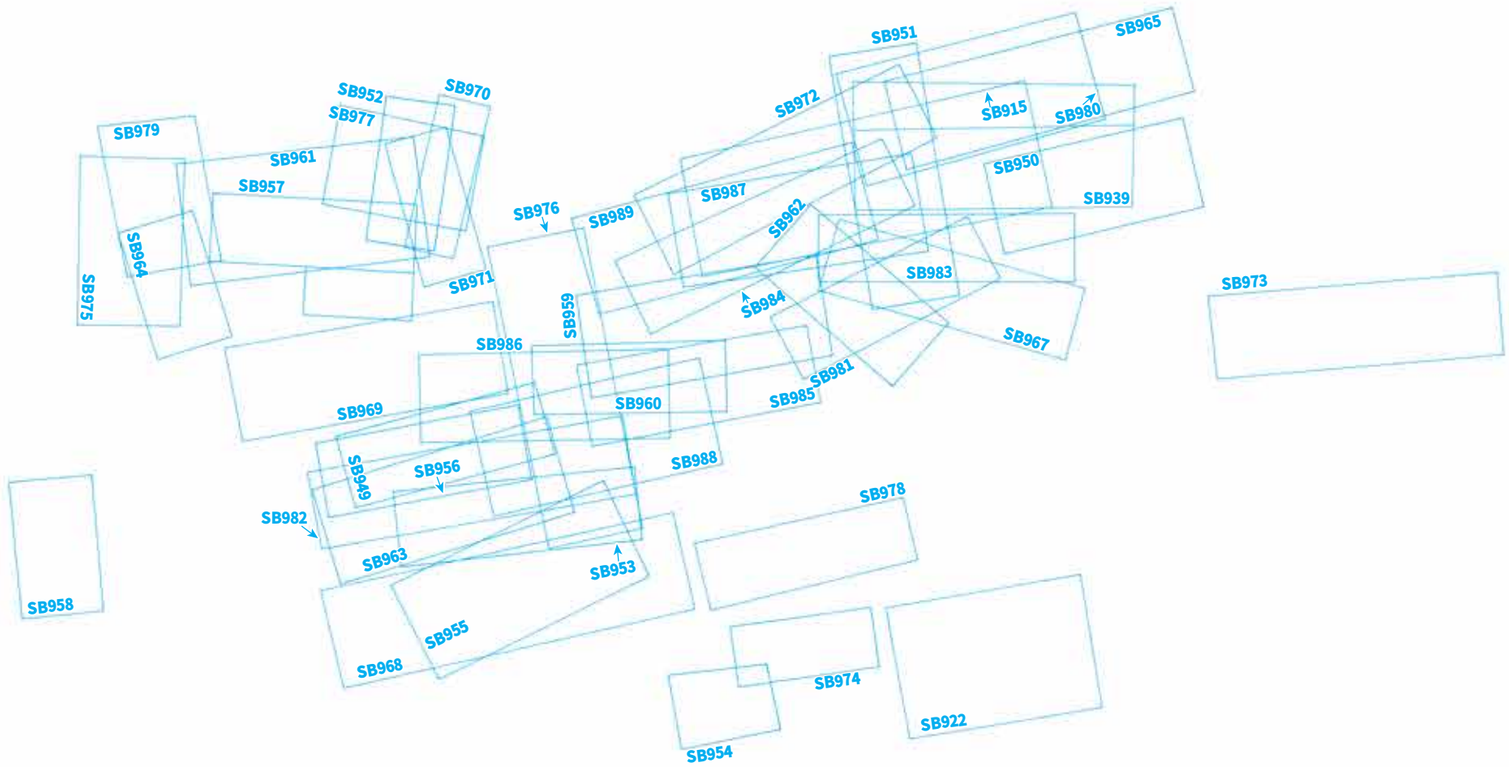
イザベラ・バード・高梨健吉訳　1973　『日本奥地紀行』

佐々木浩一・藤田俊雄・大野享他　1993　『根城－本丸の発掘調査－』（八戸市埋蔵文化財調査報告書　第54集）八戸市教育委員会

小国町史編纂委員会　1996　『小国の交通』

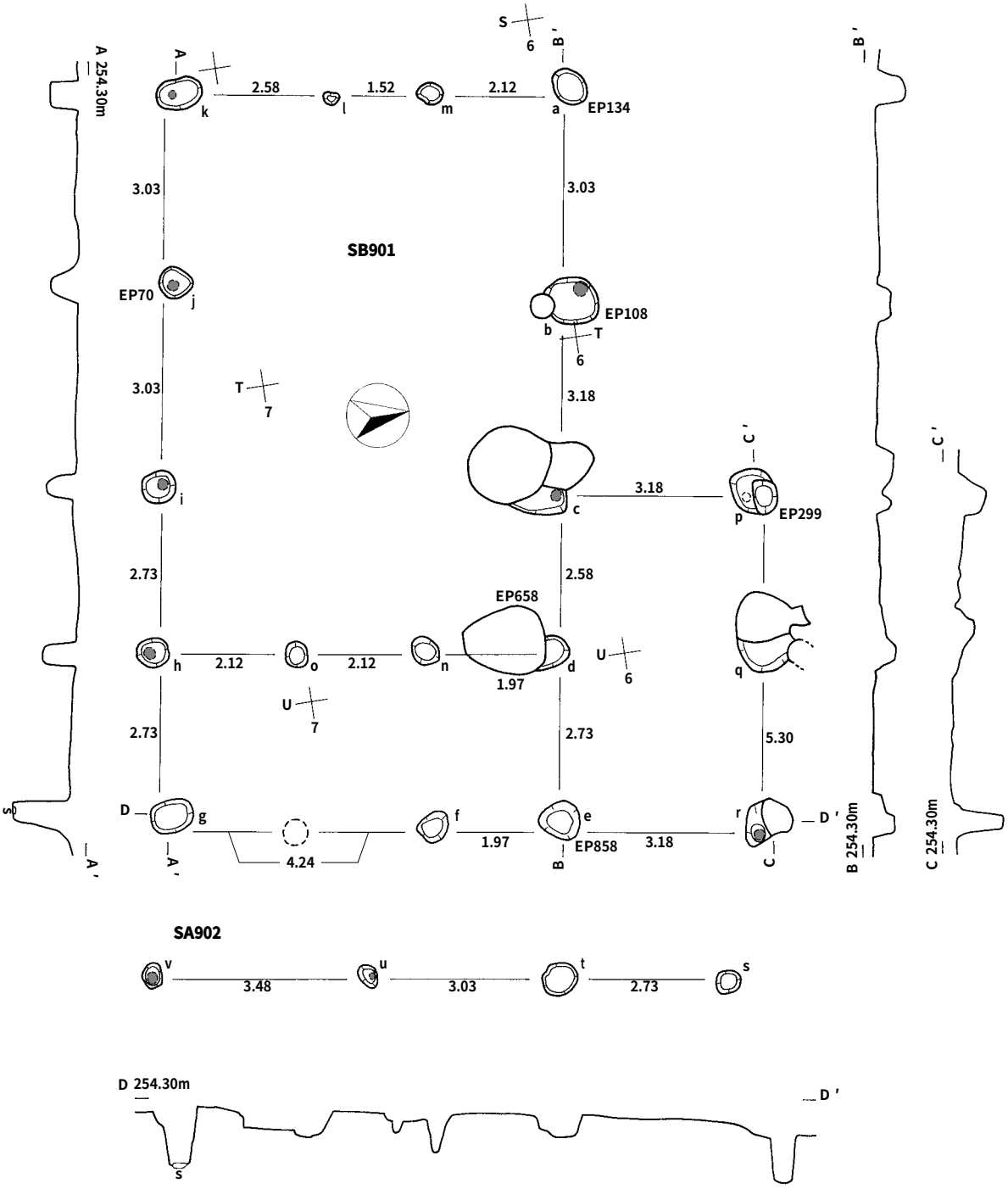
多聞山吉祥寺　1996　「伝楠正成の四男正義嫡男正能事　傑堂能勝禅師御愛用の鞍購入に当たって」

須賀井新人・國井修他　2000　『野向遺跡　市野々向原遺跡　千野遺跡　発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第71集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
国土交通省北陸地方整備局
横川ダム工事事務所　2001　『ふるさとへの想ひ－市野々・下叶水－』
宮本長二郎他　2001　『掘立と竪穴』東北中世考古学会


SB951
SB965
SB952
SB970
SB977
SB972
SB915
SB980
SB979
SB961
SB950
SB957
SB987
SB939
SB976
SB989
SB962
SB964
SB983
SB973
SB971
SB959
SB984
SB975
SB967
SB986
SB981
SB985
SB969
SB960
SB988
SB949
SB956
SB978
SB982
SB963
SB953
SB958
SB955
SB968
SB974
SB922
SB954

0 10m
1：200

第５図　第１遺構ブロック　遺構配置図

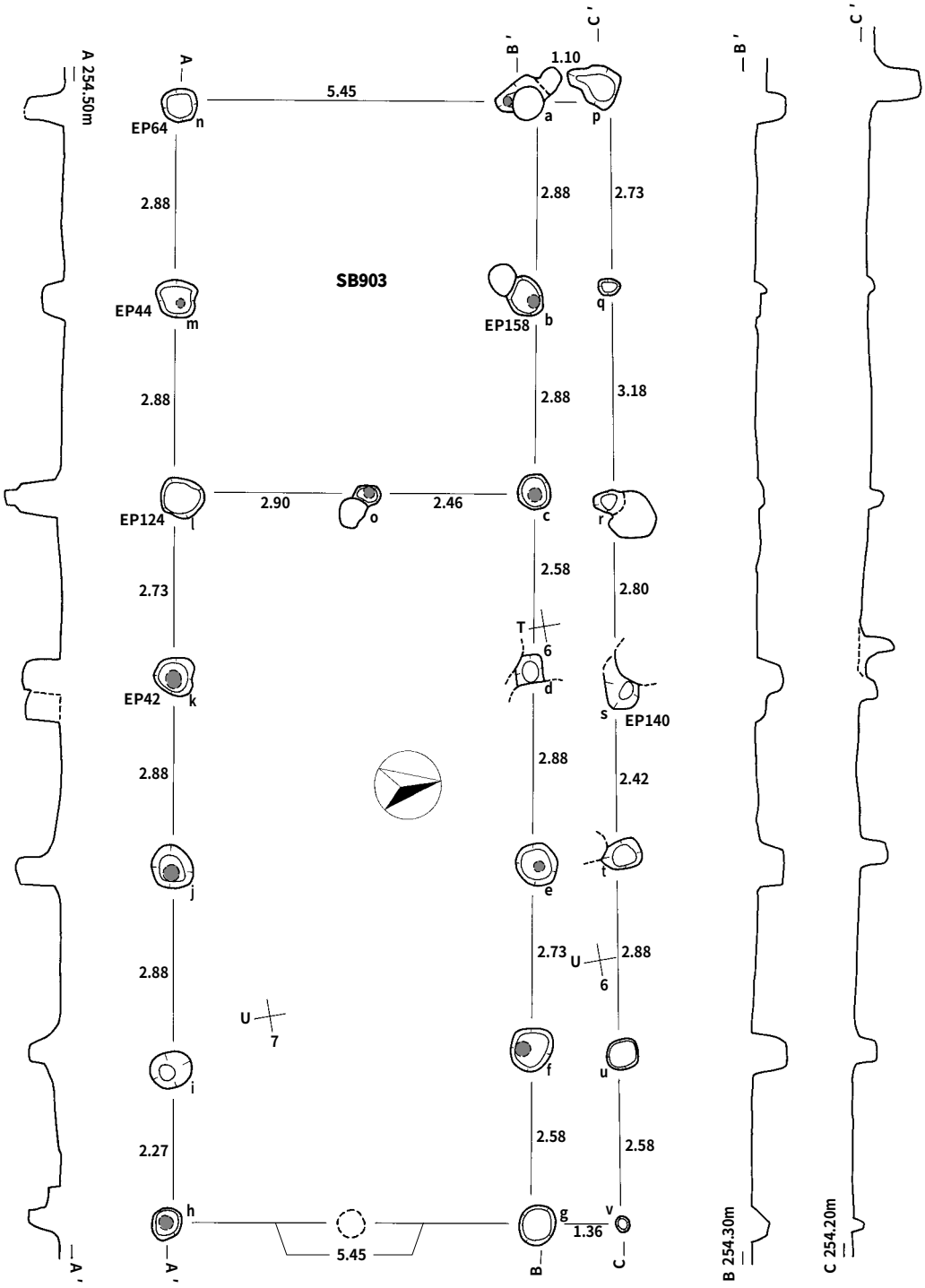


ＳＢ901・ＳＡ902

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	(41)	27	27	(33)	(34)	(49)	(88)	49	45	47	18
番号	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v
深さ	(11)	(21)	(12)	(47)	(45)	—	24	(15)	(40)	15	34

0　5m
1：100

第６図　第１遺構ブロック　ＳＢ901・ＳＡ902

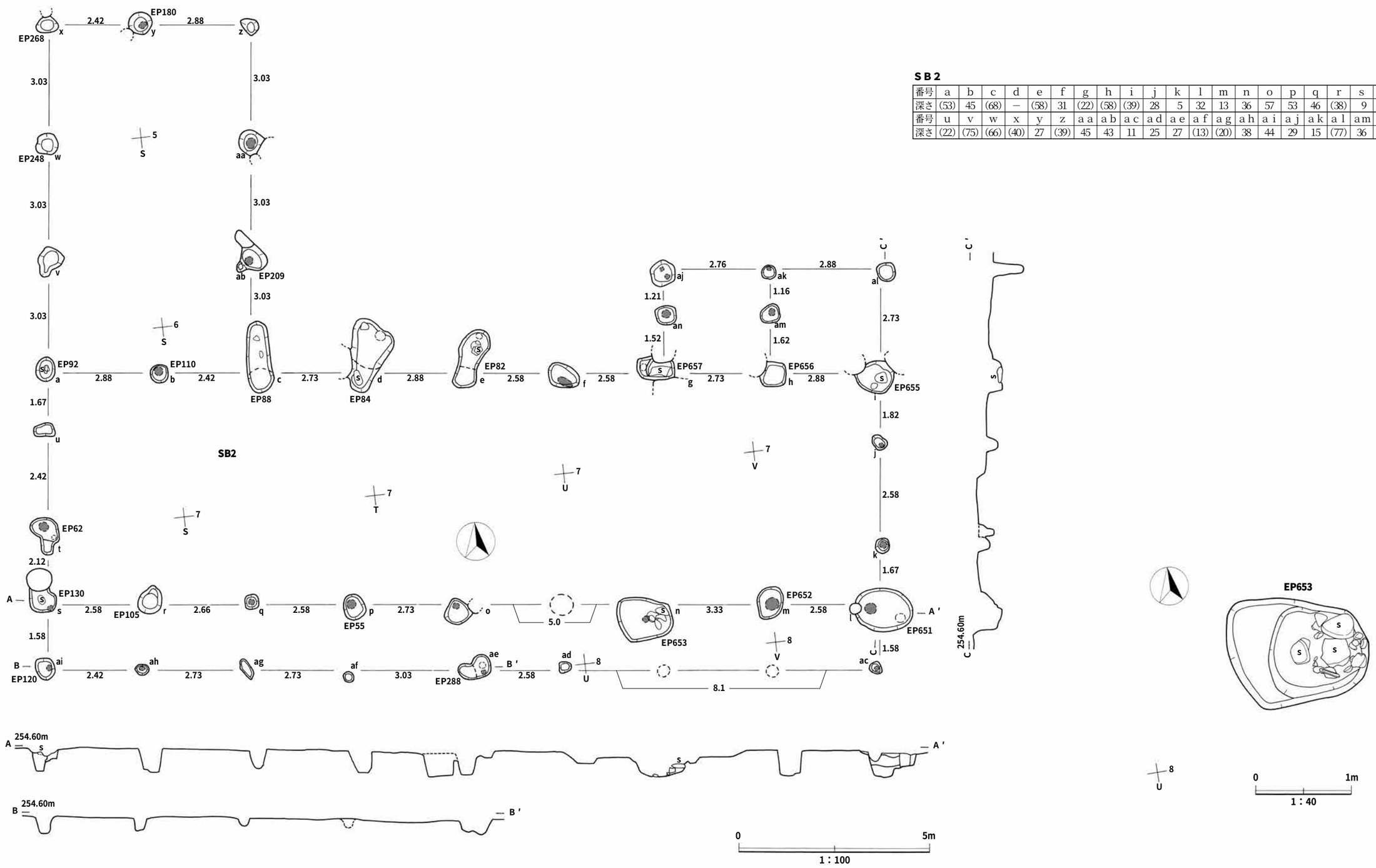


S B903

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	44	12	7	—	41	51	(28)	45	(44)	53	56
番号	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v
深さ	(64)	35	(59)	2	(75)	(13)	(24)	(28)	(44)	(33)	(17)

0 5m
1：100

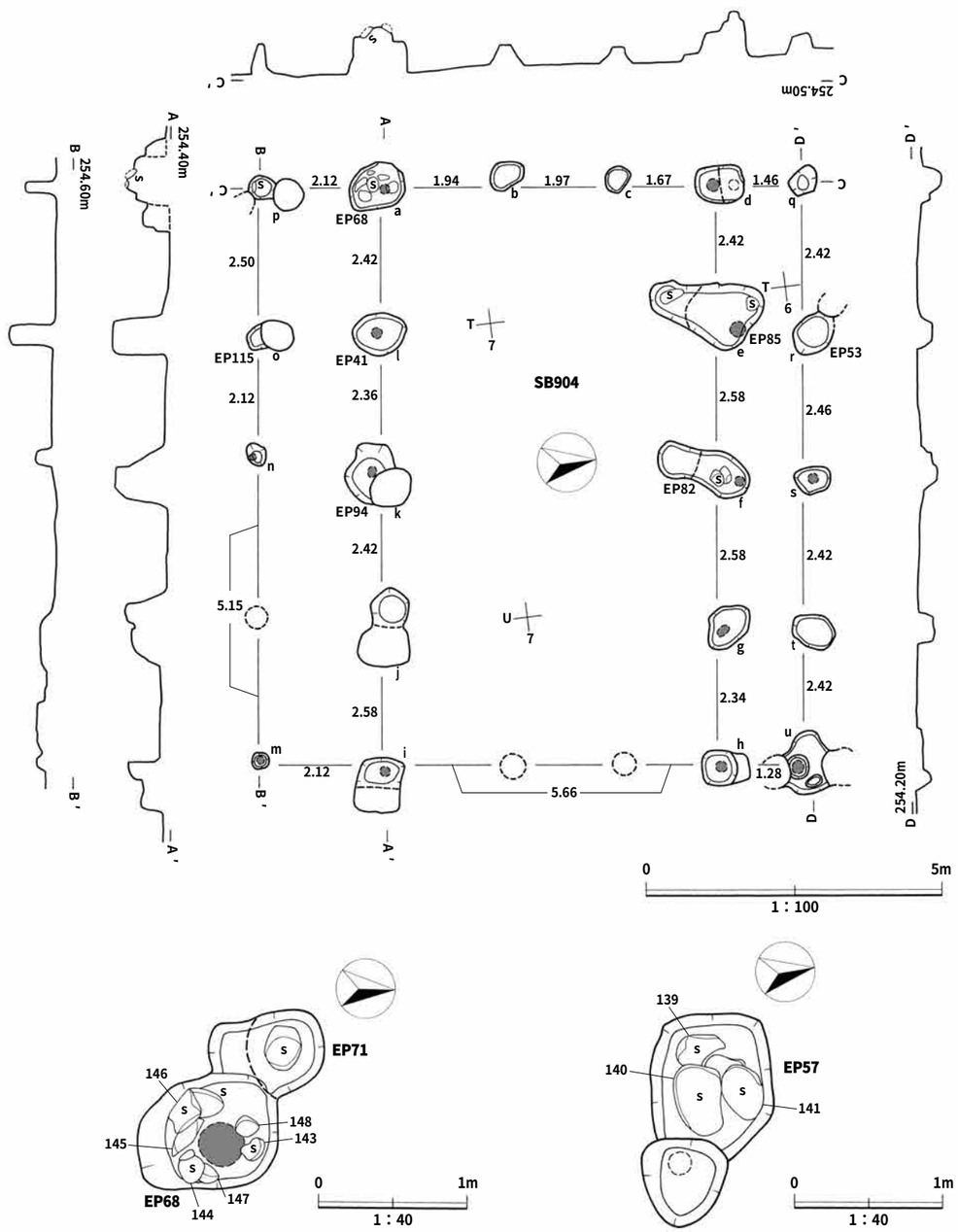
第７図　第１遺構ブロック　ＳＢ903

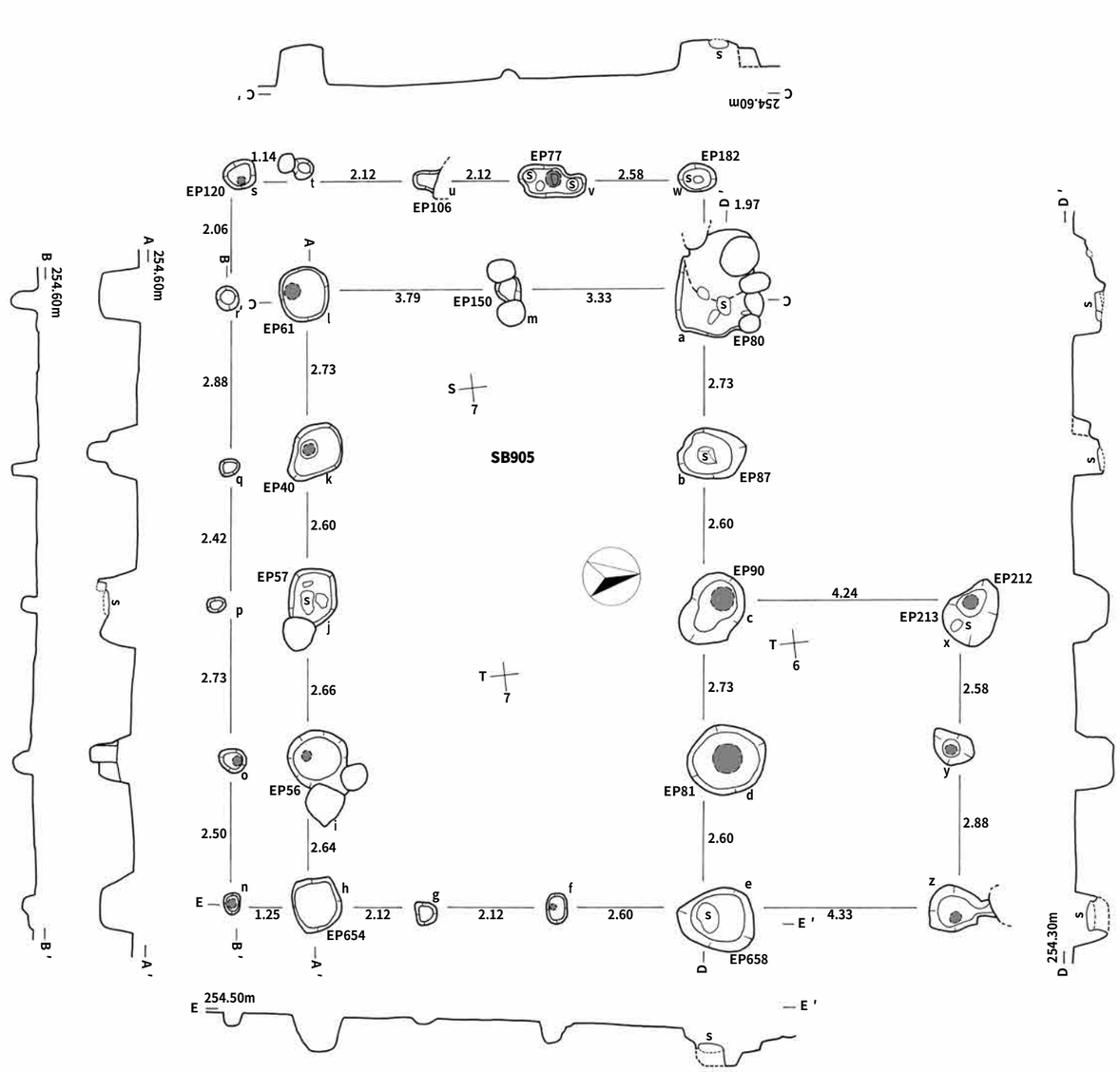


ＳＢ２

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t
深さ	(53)	45	(68)	—	(58)	31	(22)	(58)	(39)	28	5	32	13	36	57	53	46	(38)	9	32
番号	u	v	w	x	y	z	a a	a b	a c	a d	a e	a f	a g	a h	a i	a j	a k	a l	am	a n
深さ	(22)	(75)	(66)	(40)	27	(39)	45	43	11	25	27	(13)	(20)	38	44	29	15	(77)	36	37

第８図　第１遺構ブロック　ＳＢ２





S B904

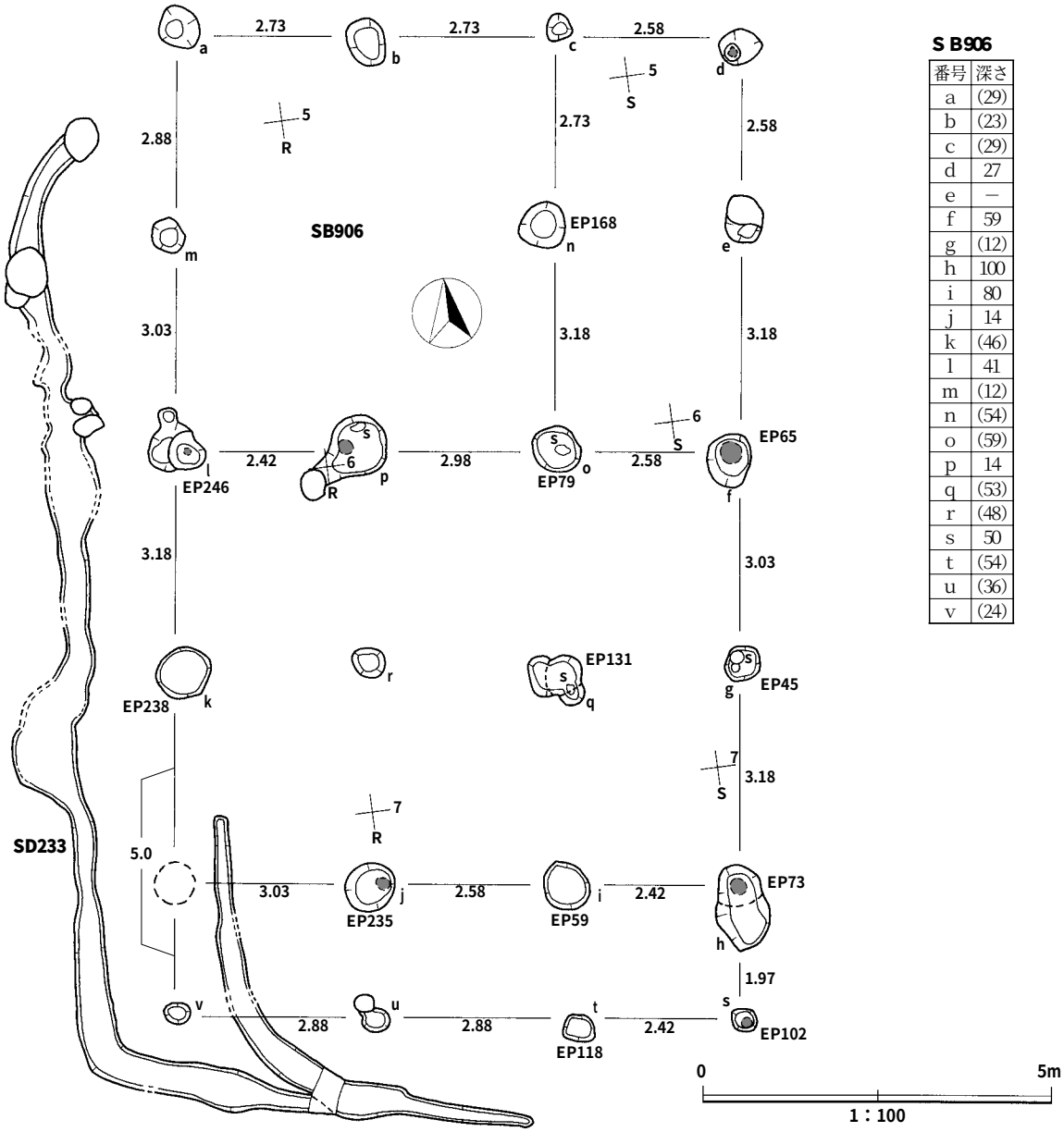
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	77	(29)	(26)	44	62	63	39	30	54	(56)	65
番号	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	
深さ	84	19	26	(40)	(62)	(32)	(25)	30	(27)	24	

S B905

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m
深さ	(59)	(62)	52	73	(29)	(35)	(7)	(58)	74	(72)	78	63	(25)
番号	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z
深さ	21	33	(26)	(42)	(48)	44	(20)	(5)	49	(53)	47	37	35

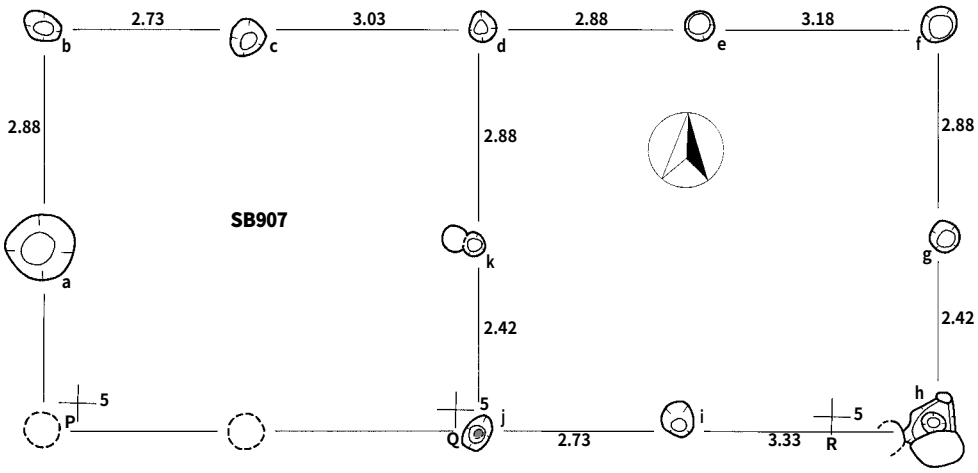
0 5m
1：100

第９図　第１遺構ブロック　ＳＢ904・905



S B906

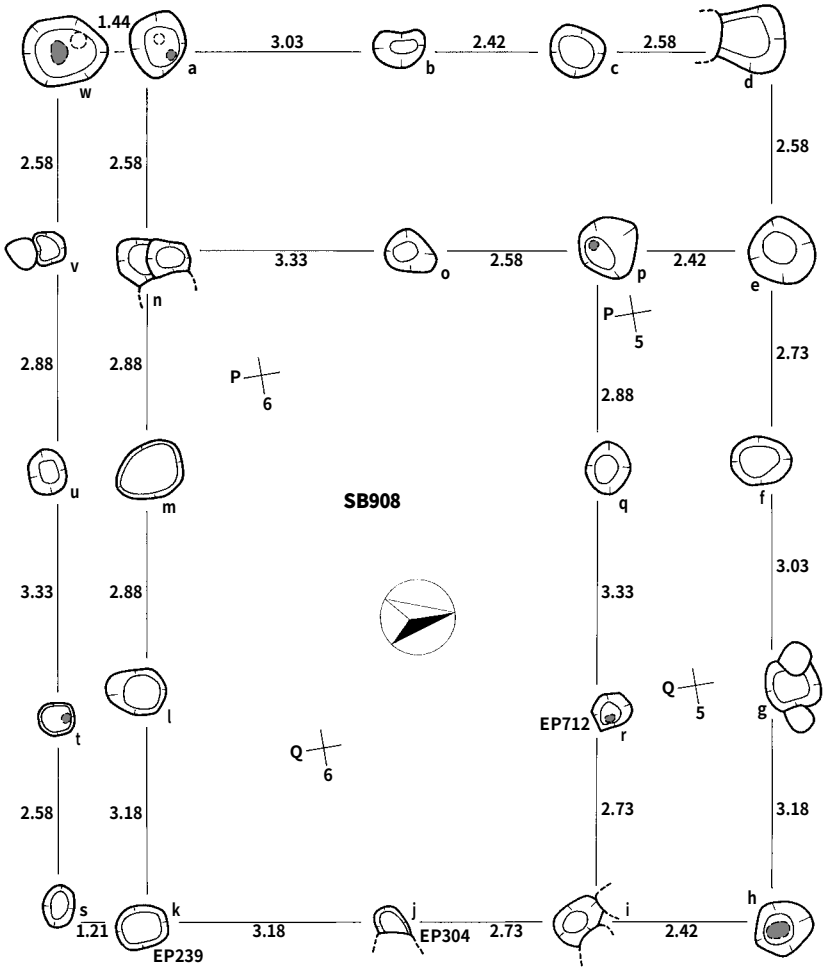
番号	深さ
a	(29)
b	(23)
c	(29)
d	27
e	—
f	59
g	(12)
h	100
i	80
j	14
k	(46)
l	41
m	(12)
n	(54)
o	(59)
p	14
q	(53)
r	(48)
s	50
t	(54)
u	(36)
v	(24)



S B907

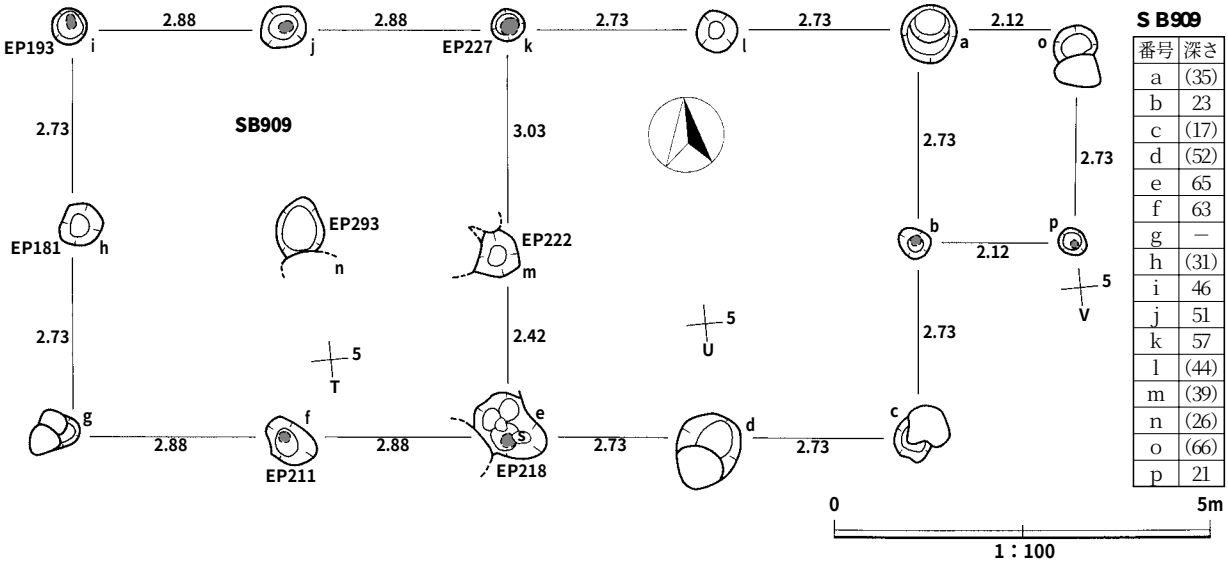
番号	深さ
a	(38)
b	(11)
c	(20)
d	(6)
e	(15)
f	(29)
g	(23)
h	(24)
i	(31)
j	26
k	(12)

第10図　第１遺構ブロック　ＳＢ906・907



S B908

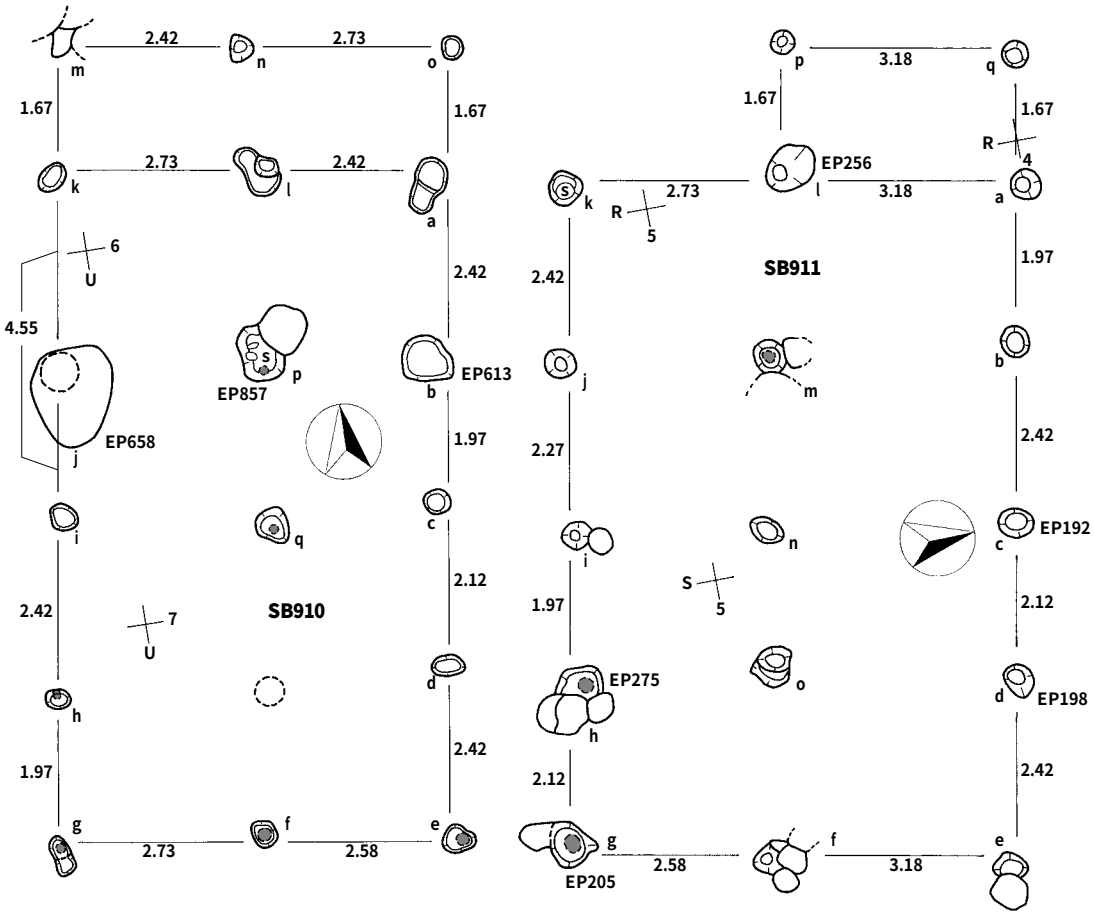
番号	深さ
a	49
b	(29)
c	(3)
d	(34)
e	(38)
f	(49)
g	(45)
h	54
i	(27)
j	(6)
k	(98)
l	(96)
m	(94)
n	(50)
o	(101)
p	55
q	(57)
r	46
s	(43)
t	38
u	(57)
v	(34)
w	61



S B909

番号	深さ
a	(35)
b	23
c	(17)
d	(52)
e	65
f	63
g	—
h	(31)
i	46
j	51
k	57
l	(44)
m	(39)
n	(26)
o	(66)
p	21

第11図　第１遺構ブロック　ＳＢ908・909

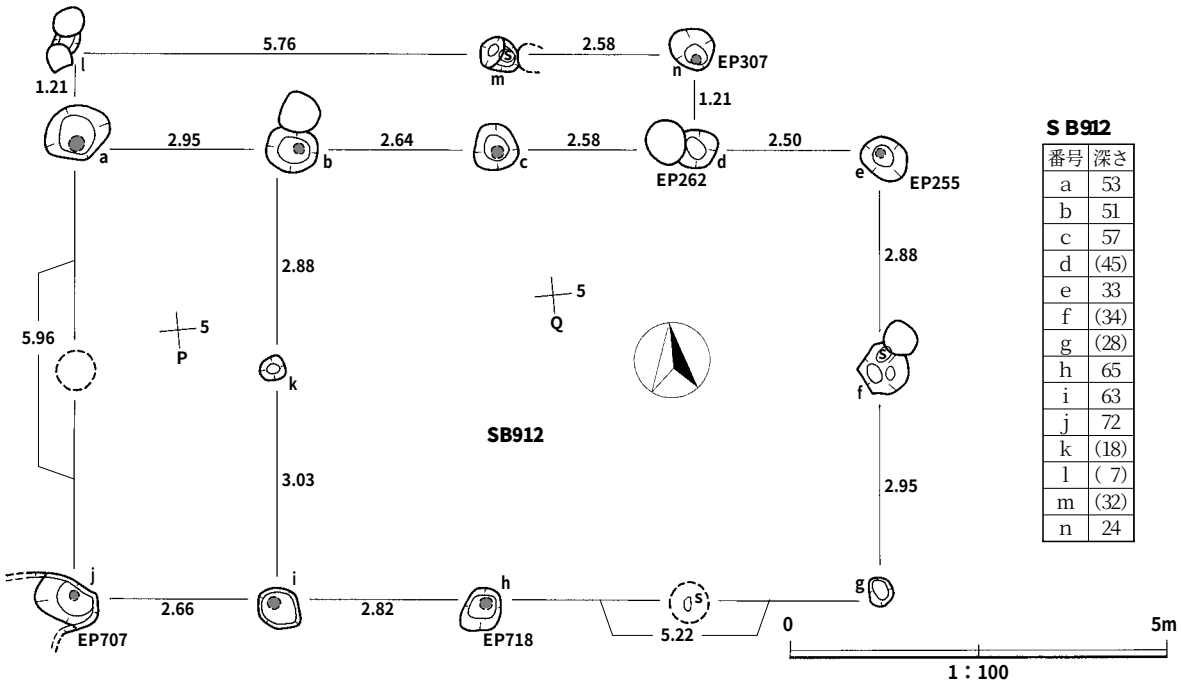


S B911

番号	深さ
a	(20)
b	(30)
c	(36)
d	(20)
e	(19)
f	(22)
g	42
h	34
i	(9)
j	(19)
k	(20)
l	(21)
m	20
n	(26)
o	(42)
p	(17)
q	(25)

S B910

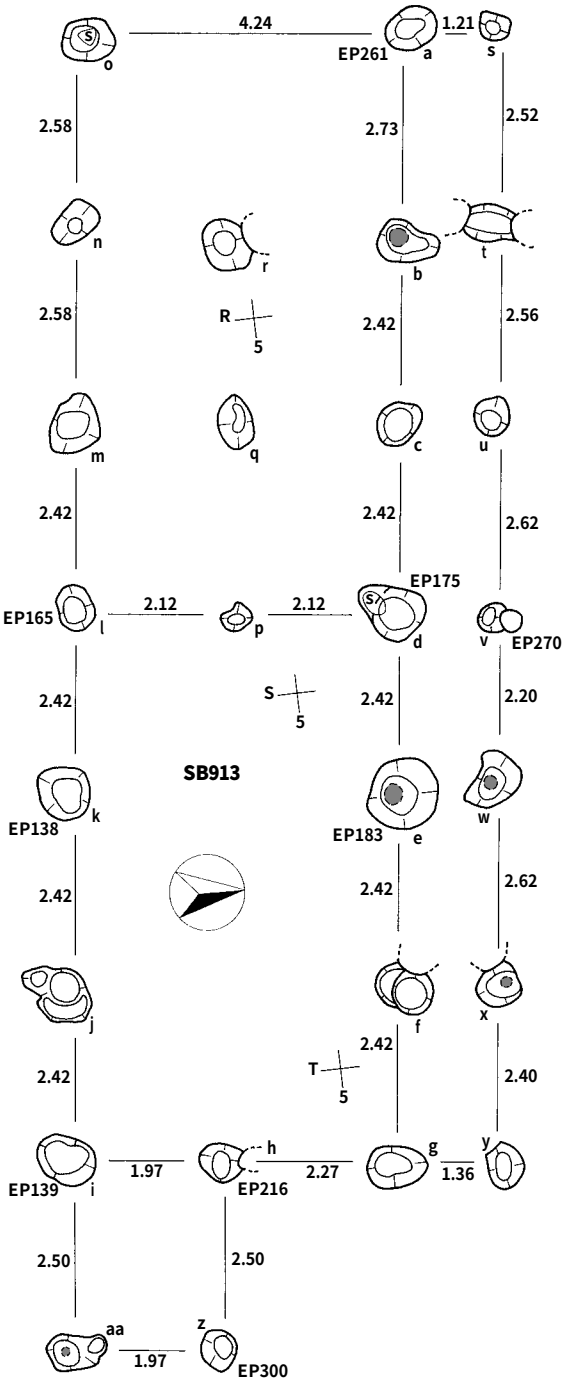
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
深さ	(10)	(30)	(83)	(11)	25	18	15	21	(23)	—	(27)	(27)	—	(17)	(8)	29	32

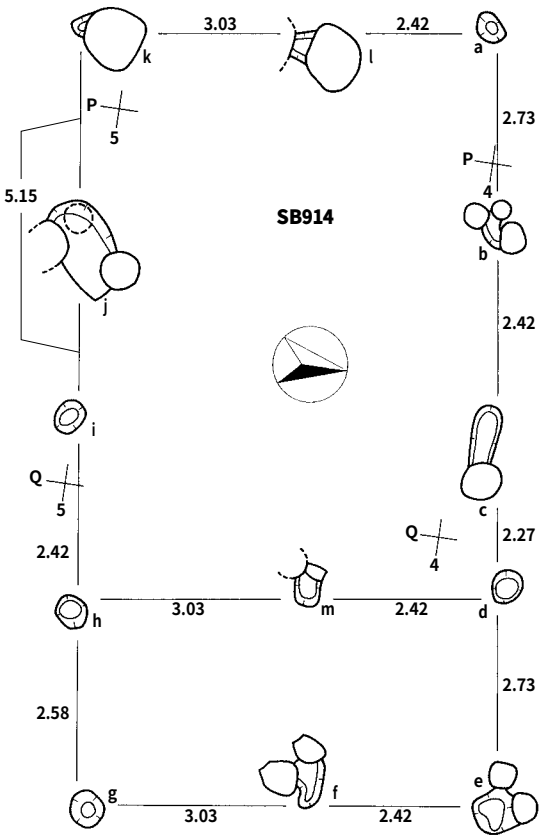


S B912

番号	深さ
a	53
b	51
c	57
d	(45)
e	33
f	(34)
g	(28)
h	65
i	63
j	72
k	(18)
l	(7)
m	(32)
n	24

第12図　第１遺構ブロック　ＳＢ910～912





S B913

番号	深さ	番号	深さ
a	(70)	o	(82)
b	35	p	(37)
c	(65)	q	(30)
d	(62)	r	(35)
e	65	s	(40)
f	—	t	(19)
g	(29)	u	(22)
h	(22)	v	(45)
i	(57)	w	50
j	(79)	x	33
k	(93)	y	(44)
l	(91)	z	(23)
m	(86)	a a	29
n	(31)		

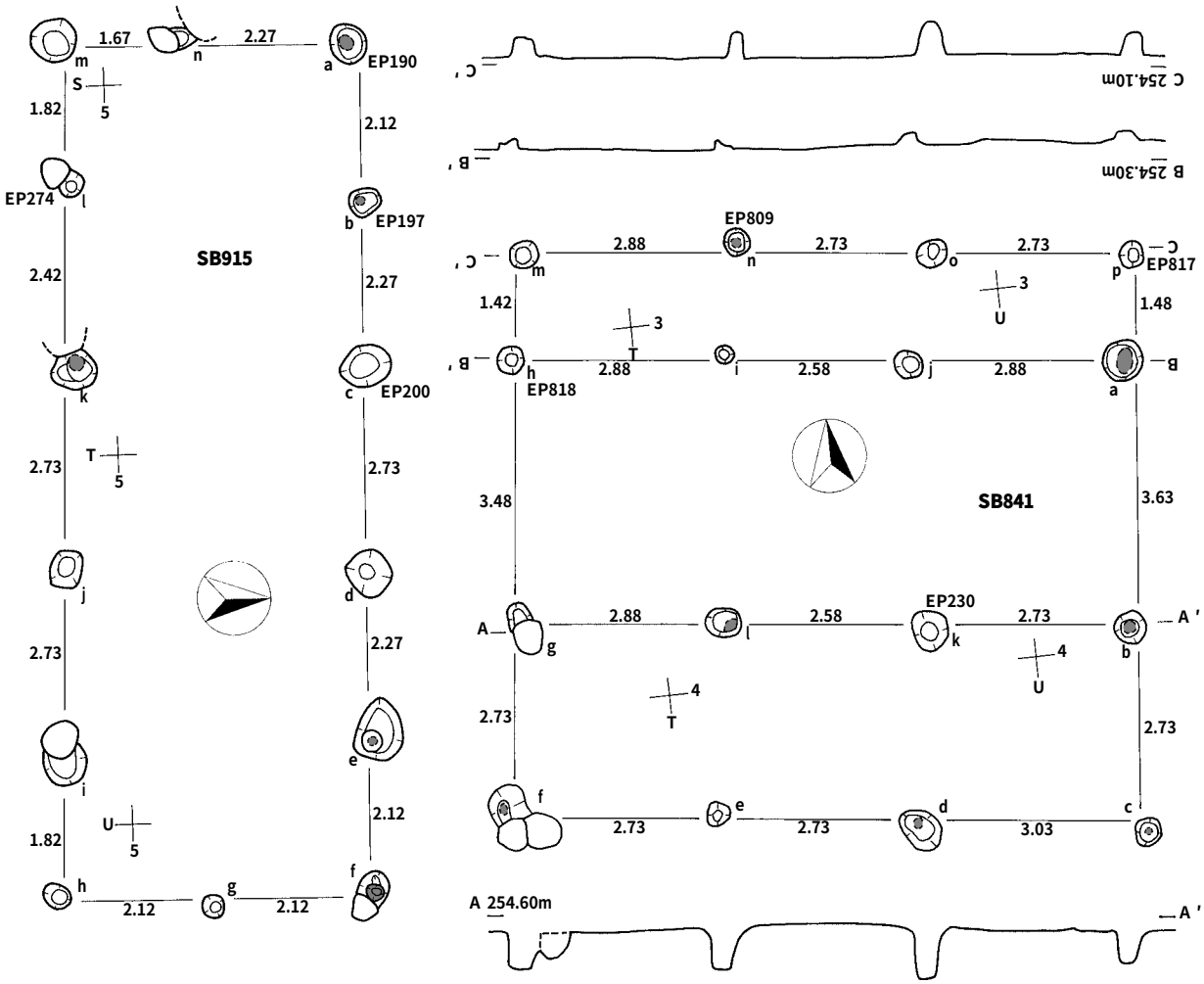
S B914

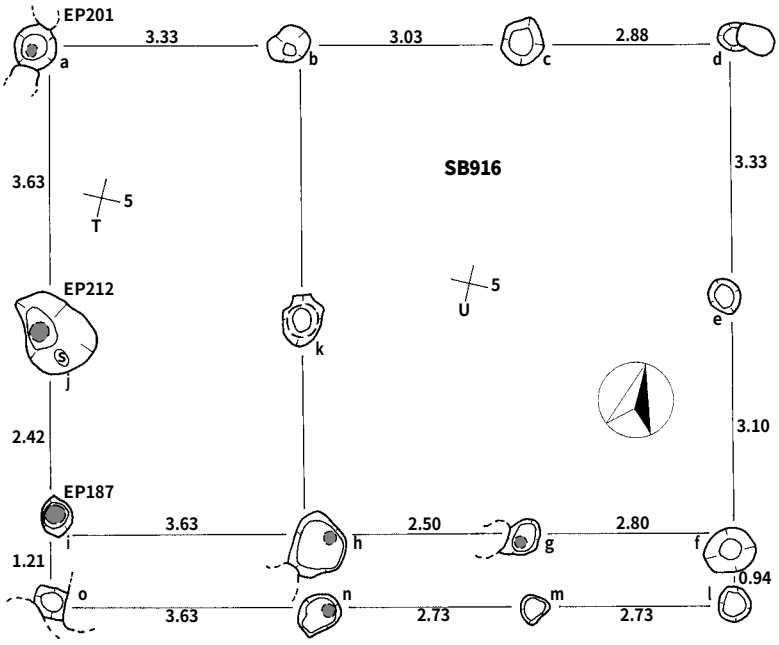
番号	深さ
a	(34)
b	—
c	(9)
d	(13)
e	—
f	(12)
g	(30)
h	(13)
i	(15)
j	—
k	(19)
l	(33)
m	(20)

0 5m

1：100

第13図　第１遺構ブロック　ＳＢ913・914





S B915

番号	深さ
a	25
b	35
c	(50)
d	(25)
e	32
f	16
g	(15)
h	(15)
i	(15)
j	(46)
k	29
l	(26)
m	(54)
n	(15)

S B841

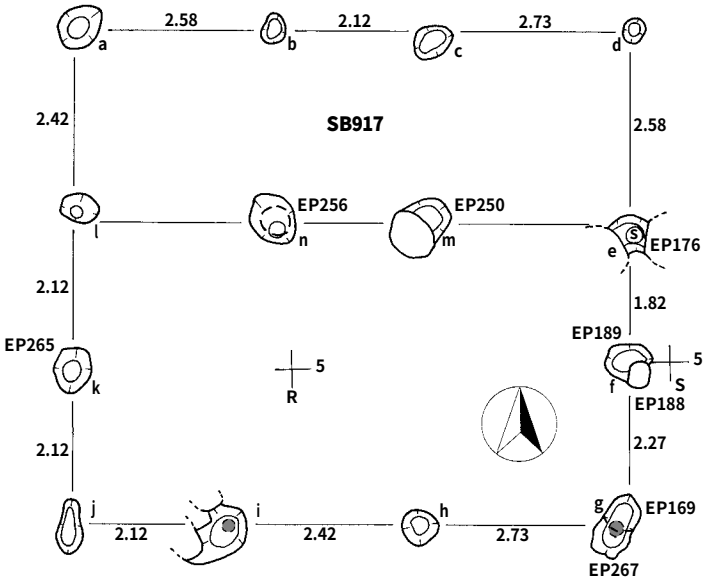
番号	深さ
a	16
b	47
c	17
d	20
e	(19)
f	21
g	(13)
h	(19)
i	(5)
j	(16)
k	(66)
l	57
m	(25)
n	34
o	(45)
p	(31)

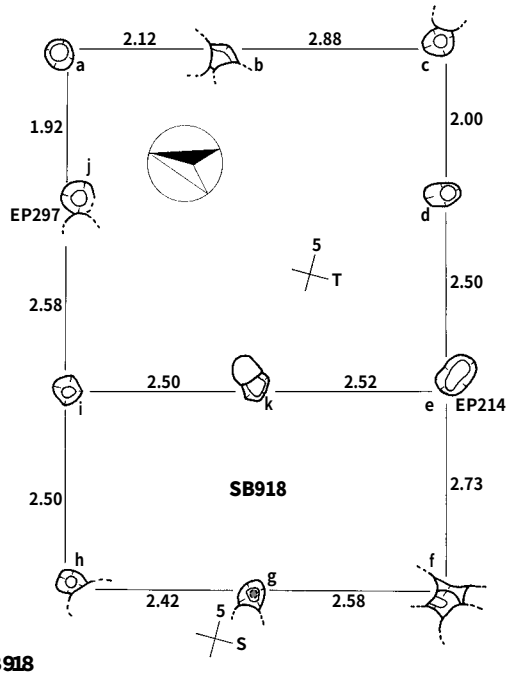
S B916

番号	深さ
a	34
b	(33)
c	(38)
d	(9)
e	59
f	(35)
g	(35)
h	41
i	54
j	47
k	(24)
l	(37)
m	(9)
n	36
o	(40)

0 5m
1：100

第14図　第１遺構ブロック　ＳＢ841・915・916



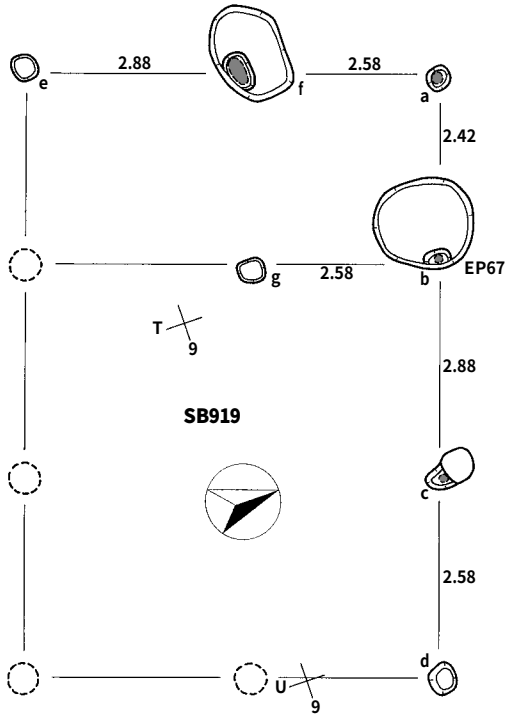


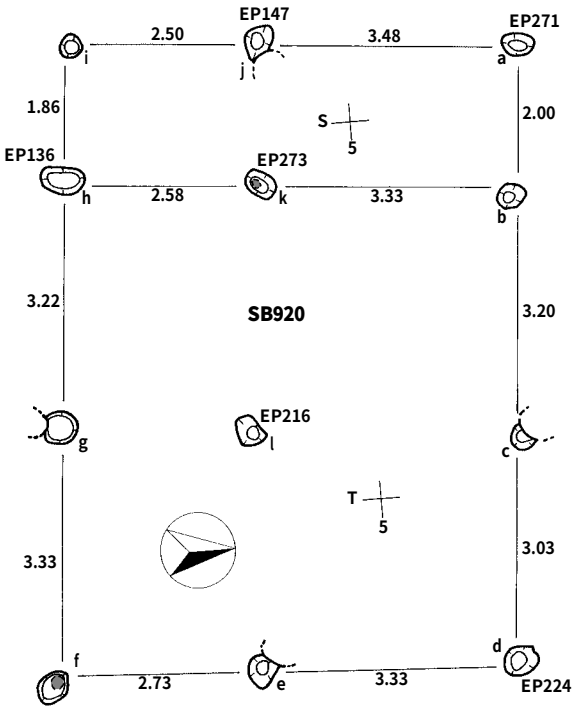
S B917

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
深さ	(20)	(6)	(22)	(13)	—	(49)	44	(49)	21	(9)	(29)	(29)
番号	m	n										
深さ	(10)	(21)										

S B918

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	(36)	(12)	(6)	(24)	(51)	—	16	(25)	(1)	(25)	(12)





S B919

番号	a	b	c	d	e	f	g
深さ	28	42	27	(55)	(27)	55	(31)

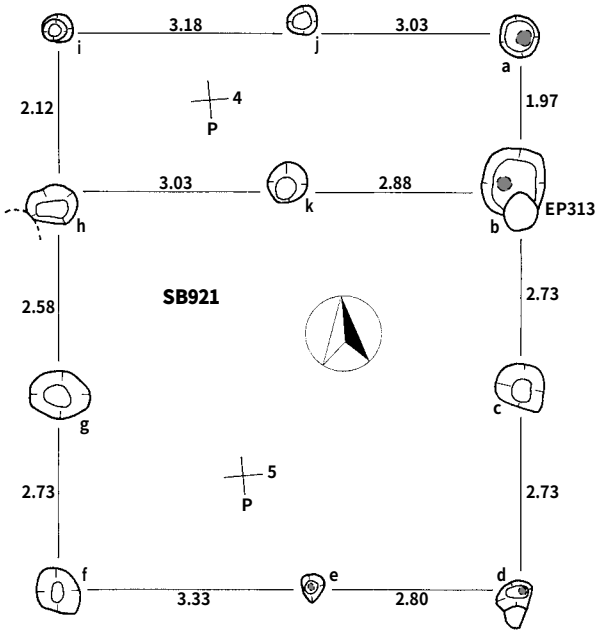
S B920

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
深さ	(24)	(22)	—	(38)	(21)	16	(16)	(53)	(20)	(47)	16	(24)

0 5m

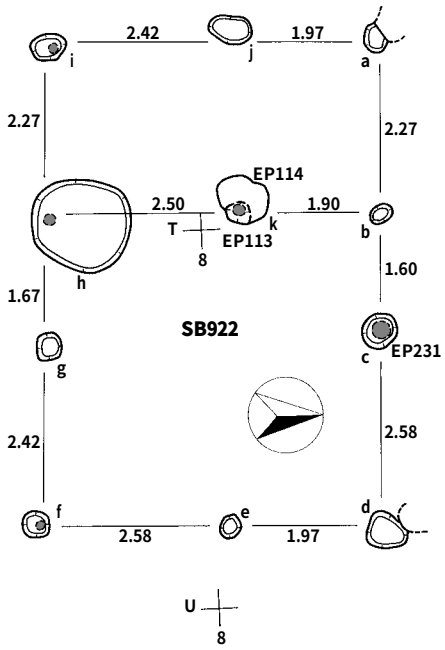
1：100

第15図　第１遺構ブロック　ＳＢ917～920



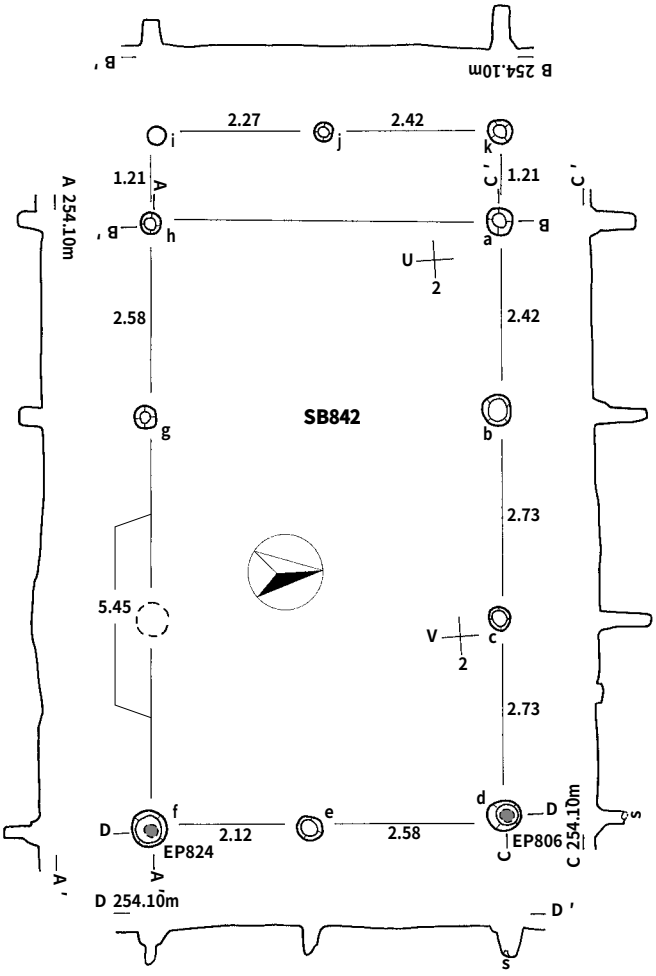
S B921

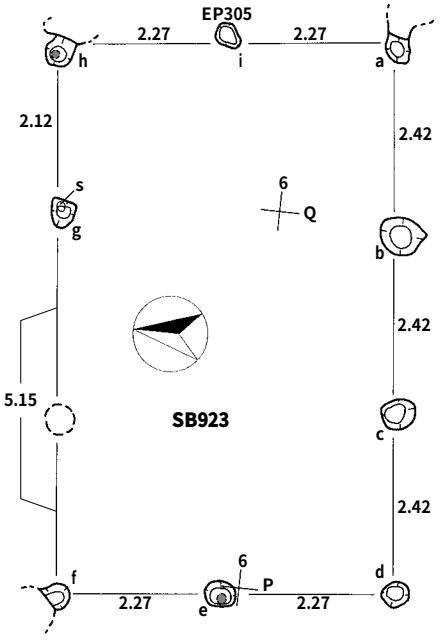
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	35	17	(21)	26	12	(33)	(64)	(16)	(12)	(31)	(29)



S B922

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	(21)	14	—	(57)	(6)	49	(24)	24	35	(33)	38





S B923

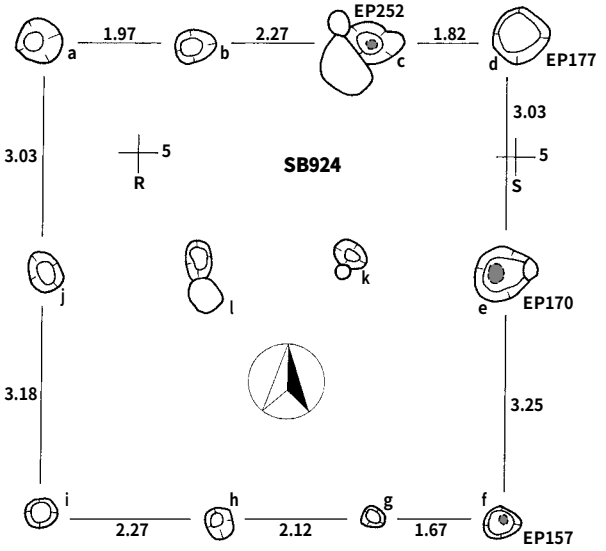
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
深さ	(15)	(39)	(61)	(23)	31	(16)	(45)	14	(16)

S B842

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
深さ	(58)	(70)	(71)	19	(39)	45	(32)	(34)	—
番号	j	k							
深さ	36	47							

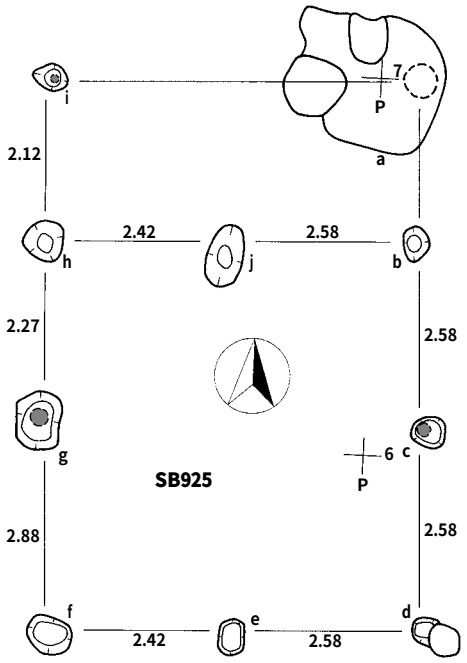
0 5m
1：100

第16図　第１遺構ブロック　ＳＢ842・921～923



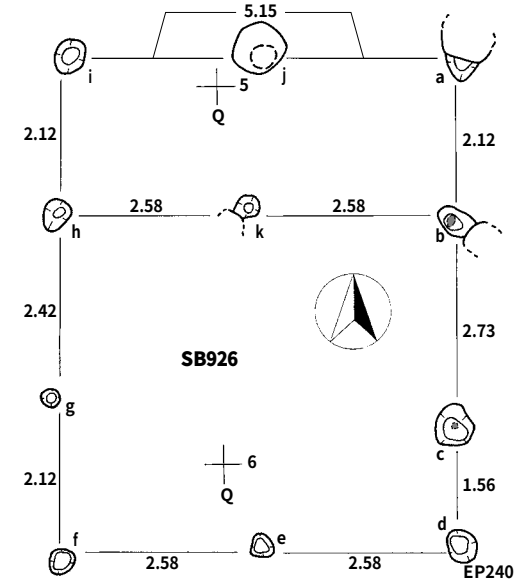
S B924

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
深さ	(29)	(26)	32	(25)	—	—	(15)	(45)	(20)	(46)	(26)	(15)



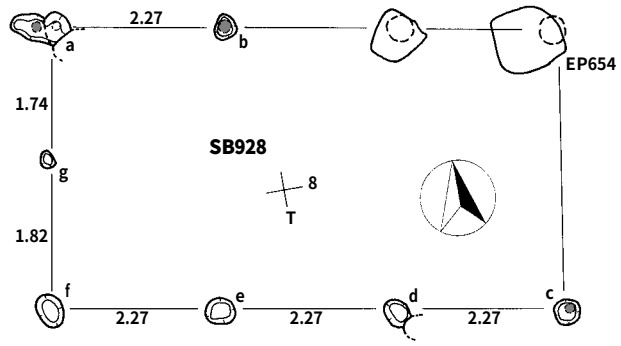
S B925

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(37)	(23)	36	(29)	(35)	(30)	72	(14)	8	(36)



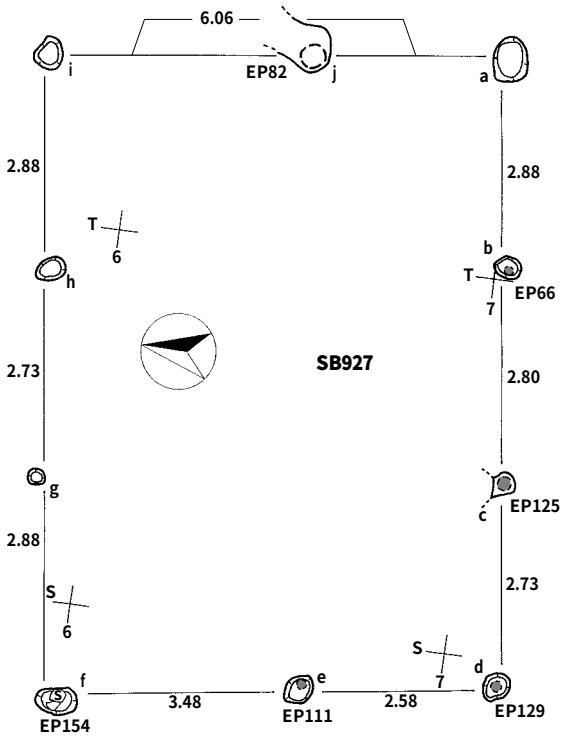
S B926

番号	深さ
a	—
b	17
c	41
d	(50)
e	(13)
f	(31)
g	—
h	(24)
i	(15)
j	(57)
k	—



S B928

番号	a	b	c	d	e	f	g
深さ	42	42	42	(25)	(42)	(35)	(28)



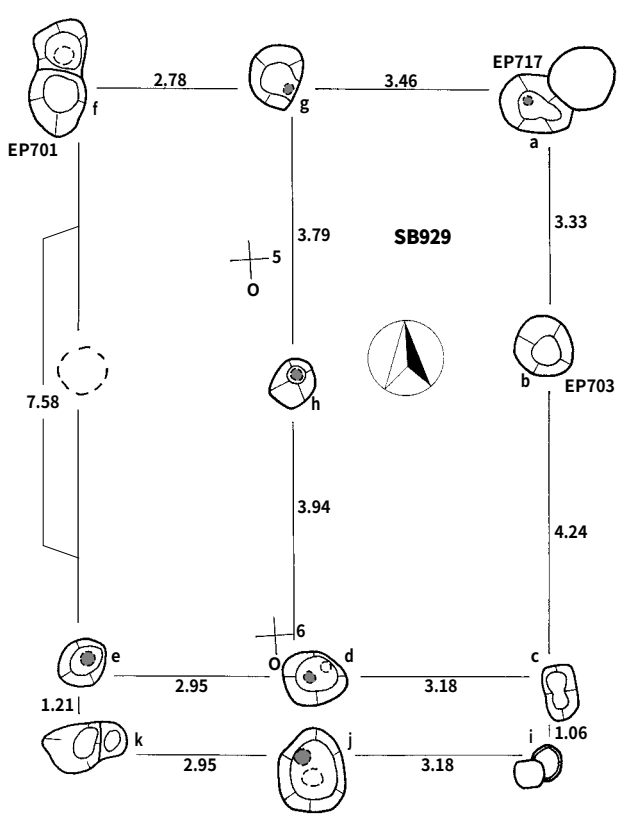
S B927

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(49)	29	29	23	18	(29)	(10)	(55)	(36)	(58)

0 5m

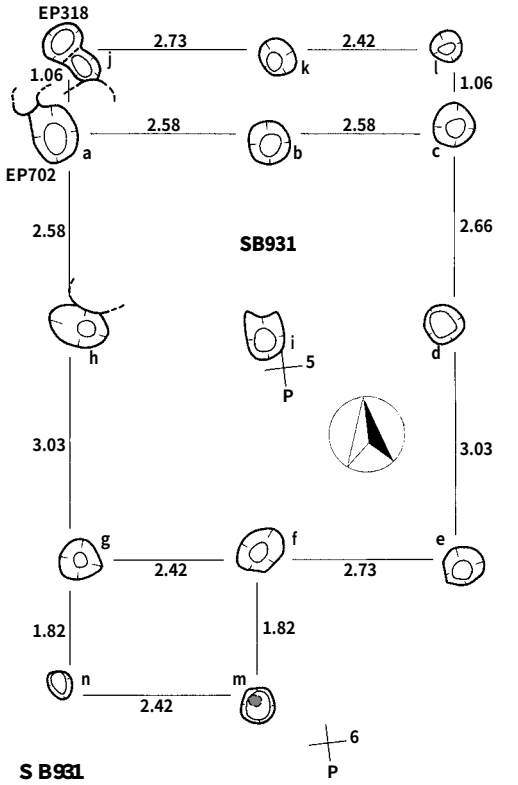
1：100

第17図　第１遺構ブロック　ＳＢ924～928



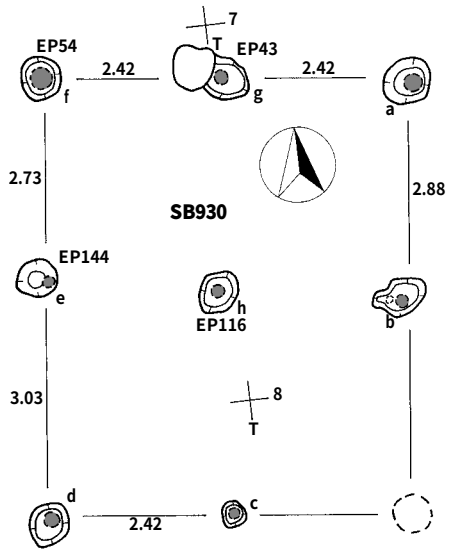
S B929

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	59	(74)	(61)	59	54	(50)	41	35	(27)	—	(68)



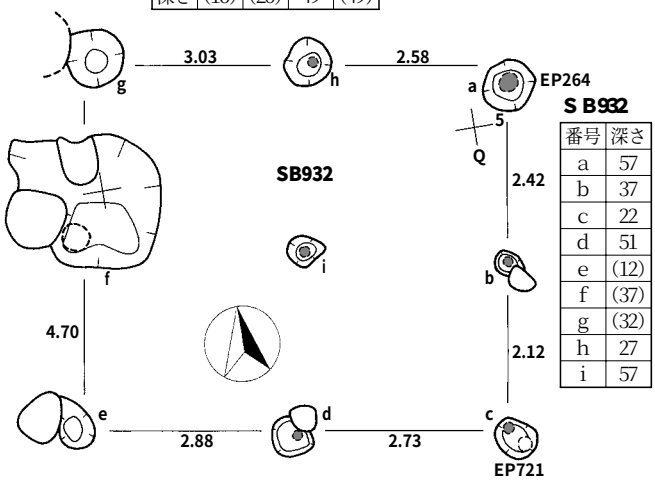
S B931

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(53)	(36)	(15)	(42)	(26)	(71)	(29)	(23)	(32)	—
番号	k	l	m	n						
深さ	(16)	(20)	49	(49)						



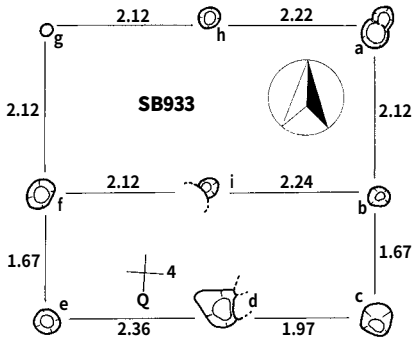
S B930

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	53	61	57	36	82	46	64	73



S B932

番号	深さ
a	57
b	37
c	22
d	51
e	(12)
f	(37)
g	(32)
h	27
i	57



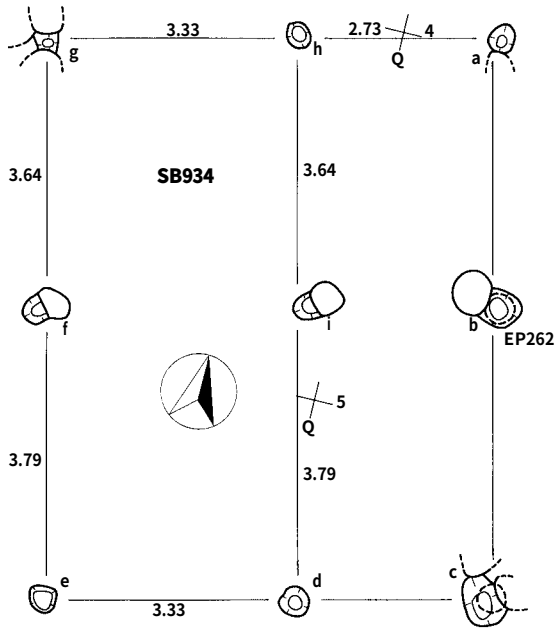
S B933

番号	深さ
a	(9)
b	(13)
c	(27)
d	(15)
e	(28)
f	(13)
g	—
h	(3)
i	(12)

0 5m

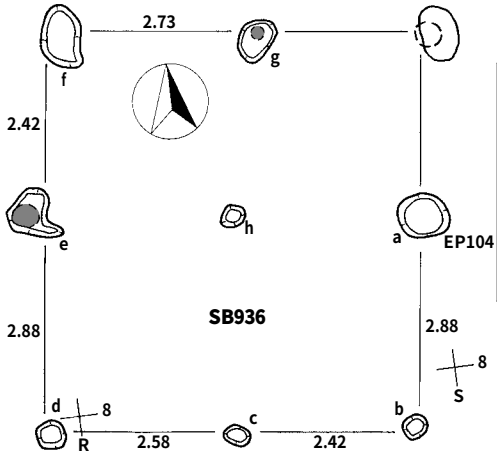
1：100

第18図　第１遺構ブロック　ＳＢ929～933



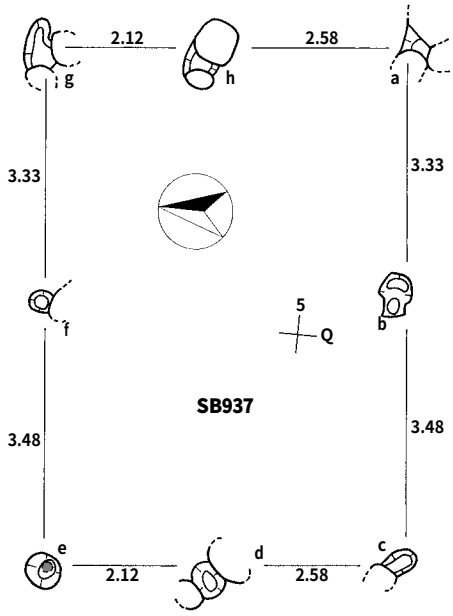
S B934

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
深さ	(11)	(45)	(27)	(32)	(20)	(19)	—	(19)	(13)



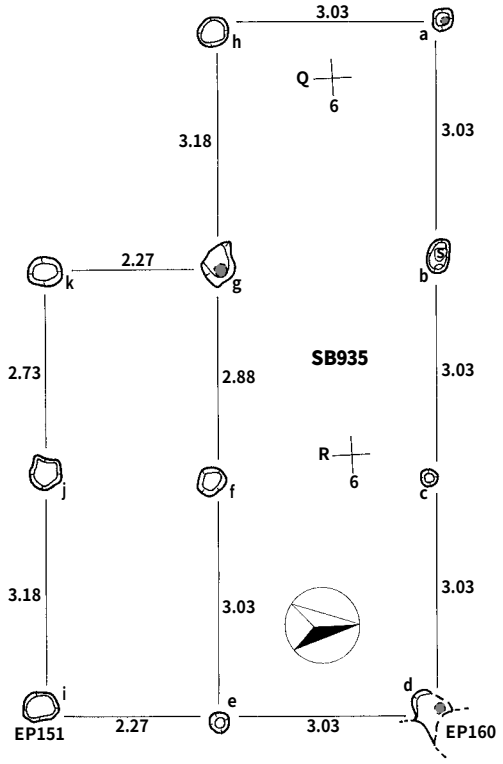
S B936

番号	深さ
a	(77)
b	(32)
c	(24)
d	(14)
e	48
f	(52)
g	57
h	(58)



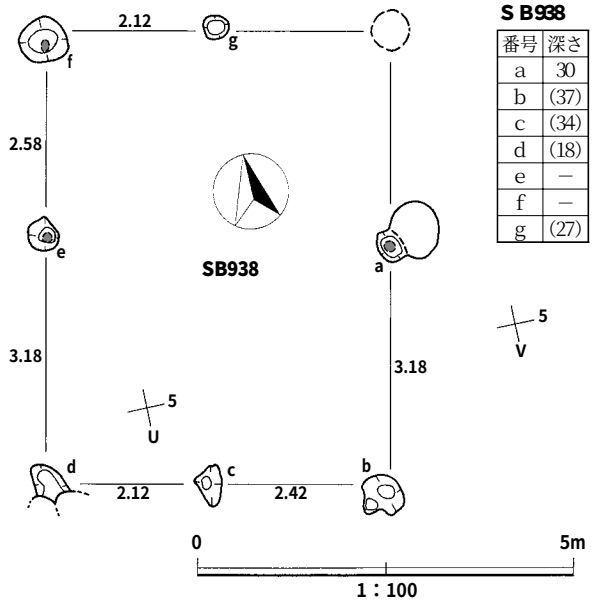
S B937

番号	深さ
a	—
b	(22)
c	—
d	(28)
e	18
f	(22)
g	(12)
h	—



S B935

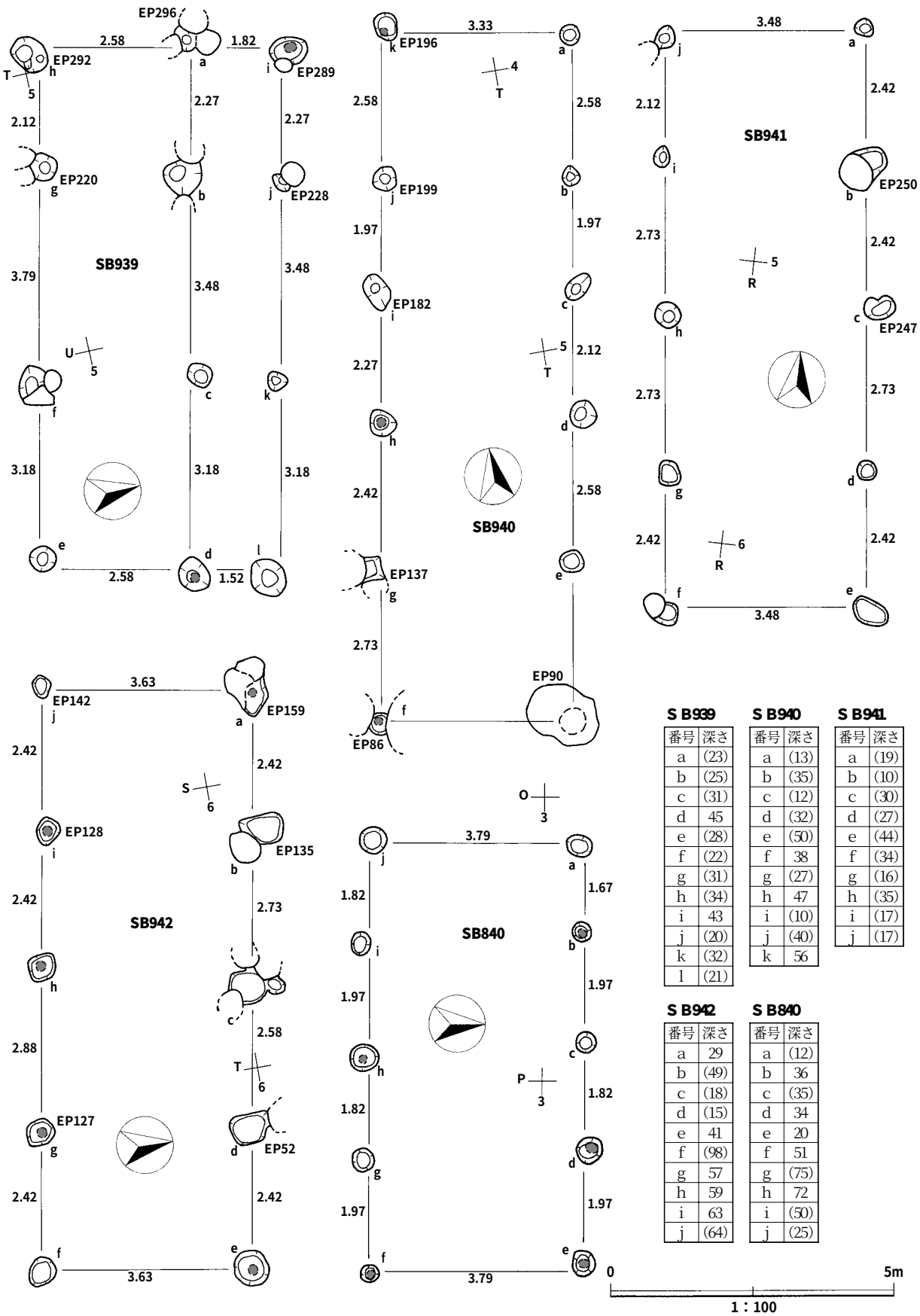
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	26	(17)	(17)	—	(33)	(29)	31	(60)	(20)	(42)	(45)



S B938

番号	深さ
a	30
b	(37)
c	(34)
d	(18)
e	—
f	—
g	(27)

第19図　第１遺構ブロック　ＳＢ934～938



S B939

番号	深さ
a	(23)
b	(25)
c	(31)
d	45
e	(28)
f	(22)
g	(31)
h	(34)
i	43
j	(20)
k	(32)
l	(21)

S B940

番号	深さ
a	(13)
b	(35)
c	(12)
d	(32)
e	(50)
f	38
g	(27)
h	47
i	(10)
j	(40)
k	56

S B941

番号	深さ
a	(19)
b	(10)
c	(30)
d	(27)
e	(44)
f	(34)
g	(16)
h	(35)
i	(17)
j	(17)

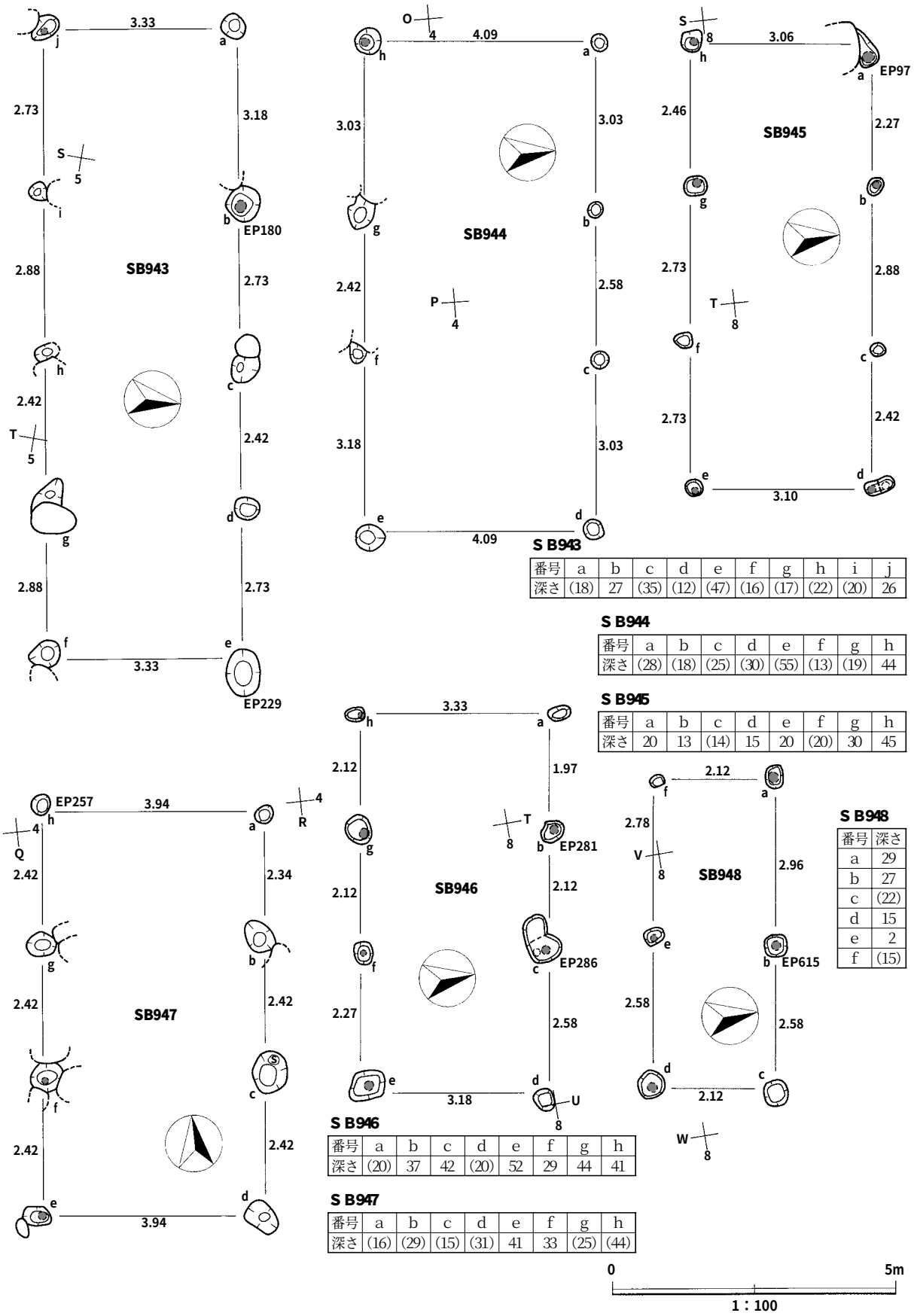
S B942

番号	深さ
a	29
b	(49)
c	(18)
d	(15)
e	41
f	(98)
g	57
h	59
i	63
j	(64)

S B840

番号	深さ
a	(12)
b	36
c	(35)
d	34
e	20
f	51
g	(75)
h	72
i	(50)
j	(25)

第20図　第１遺構ブロック　ＳＢ840・939～942



S B943

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(18)	27	(35)	(12)	(47)	(16)	(17)	(22)	(20)	26

S B944

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(28)	(18)	(25)	(30)	(55)	(13)	(19)	44

S B945

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	20	13	(14)	15	20	(20)	30	45

S B948

番号	深さ
a	29
b	27
c	(22)
d	15
e	2
f	(15)

S B946

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(20)	37	42	(20)	52	29	44	41

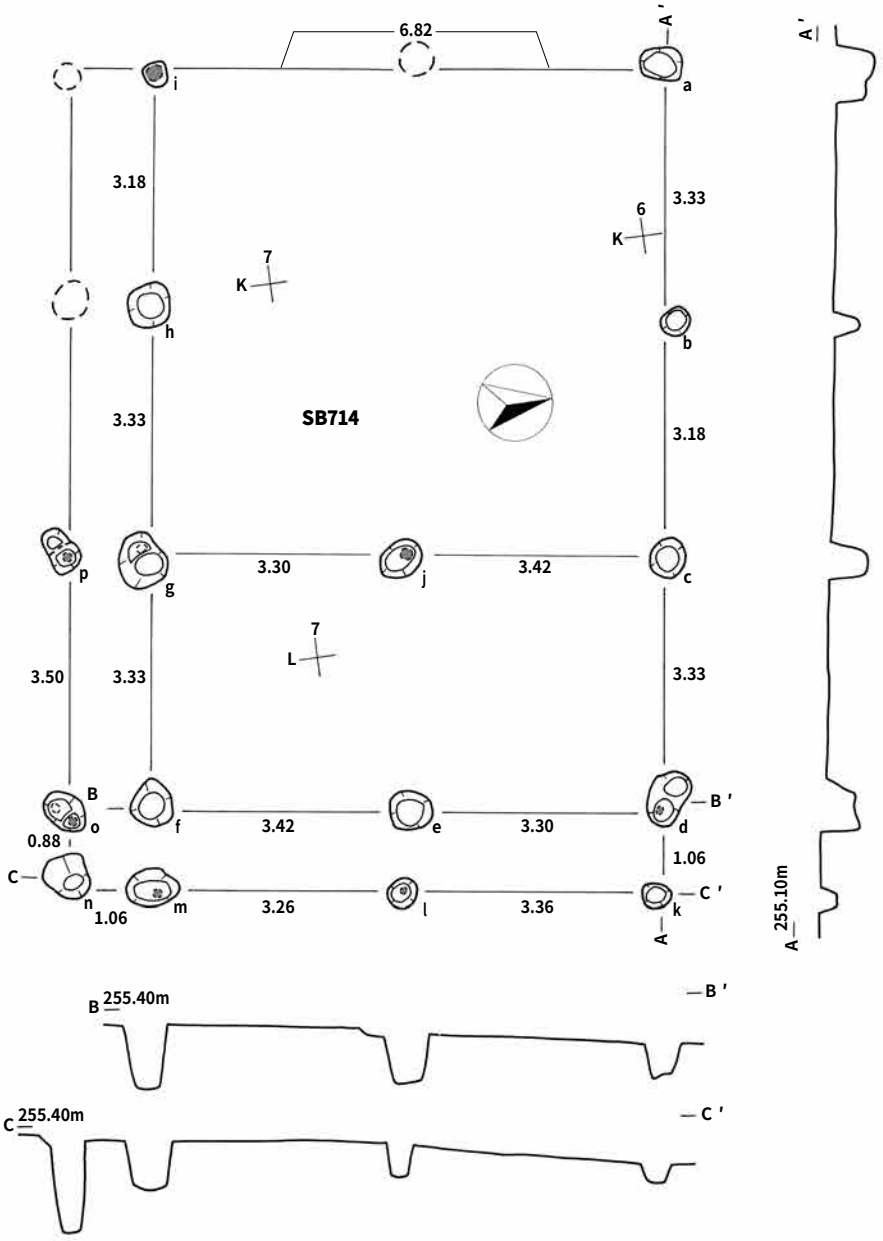
S B947

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(16)	(29)	(15)	(31)	41	33	(25)	(44)

第21図　第１遺構ブロック　ＳＢ943～948

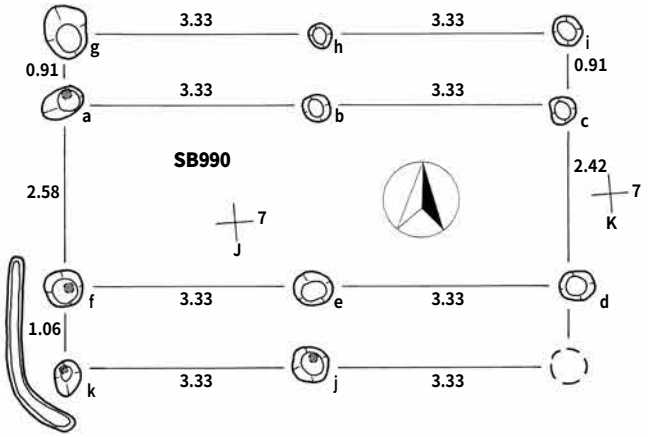
第22図　第２遺構ブロック　遺構配置図

第23図　第３・４遺構ブロック　遺構配置図



SB714

番号	深さ
a	(54)
b	(12)
c	(51)
d	52
e	(70)
f	(43)
g	(111)
h	(96)
i	81
j	43
k	(25)
l	45
m	65
n	(130)
o	51
p	65

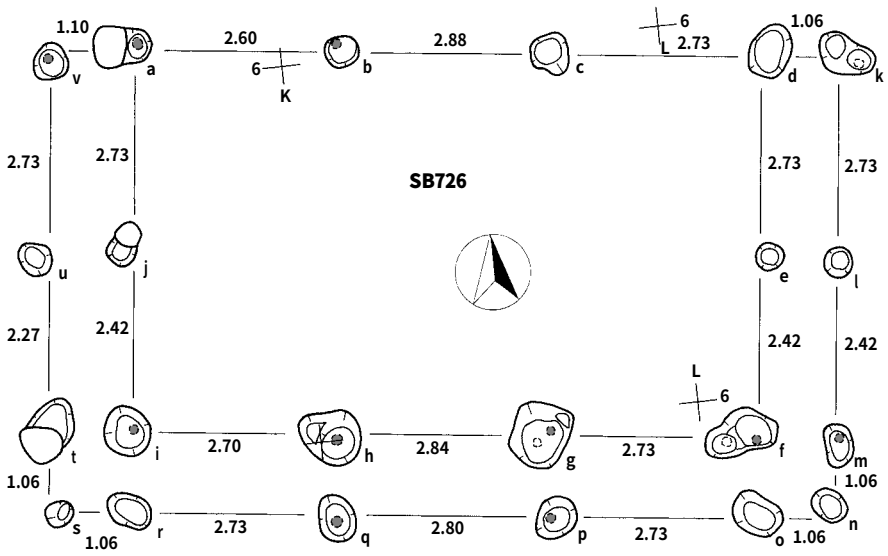


SB990

番号	深さ
a	40
b	(45)
c	(18)
d	(28)
e	(55)
f	39
g	55
h	(31)
i	(22)
j	30
k	53

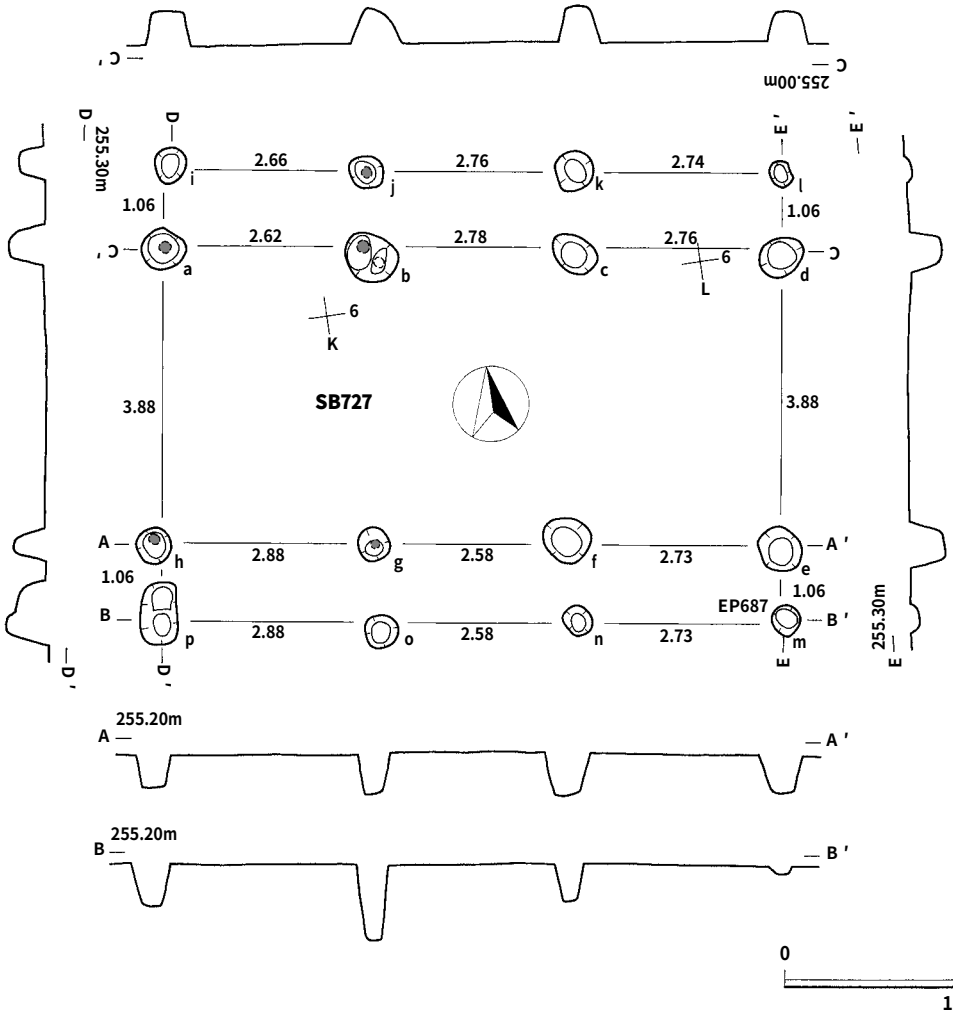
0 5m
1：100

第24図　第２遺構ブロック　ＳＢ714・990



SB726

番号	深さ	番号	深さ
a	41	l	(22)
b	13	m	38
c	(35)	n	(7)
d	(20)	o	(76)
e	(26)	p	69
f	66	q	53
g	78	r	(67)
h	82	s	(30)
i	78	t	(75)
j	(11)	u	(37)
k	(44)	v	22



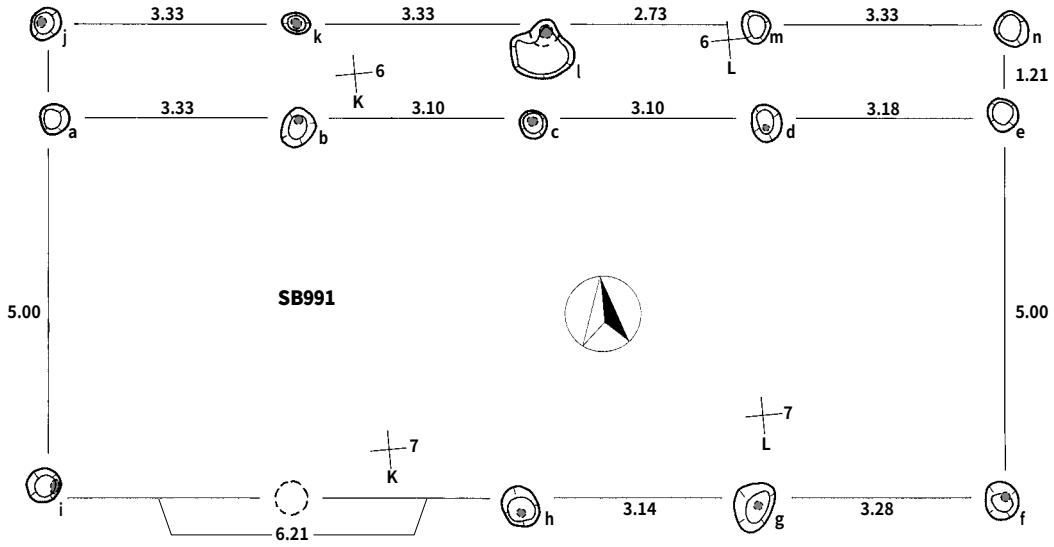
SB727

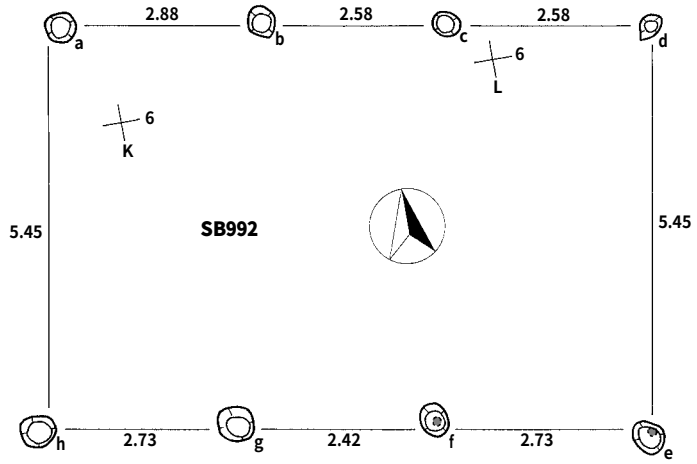
番号	深さ
a	44
b	45
c	(50)
d	(41)
e	(100)
f	(58)
g	52
h	43
i	(34)
j	20
k	(29)
l	(8)
m	(13)
n	(54)
o	(105)
p	(56)

0 5m

1：100

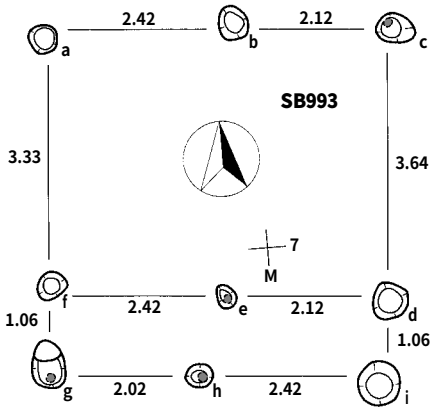
第25図　第２遺構ブロック　ＳＢ726・727





ＳＢ991

番号	深さ
a	(48)
b	42
c	29
d	28
e	(42)
f	73
g	74
h	50
i	23
j	33
k	20
l	26
m	(21)
n	(22)



ＳＢ992

番号	深さ
a	(26)
b	(21)
c	(47)
d	(30)
e	48
f	52
g	(52)
h	(33)

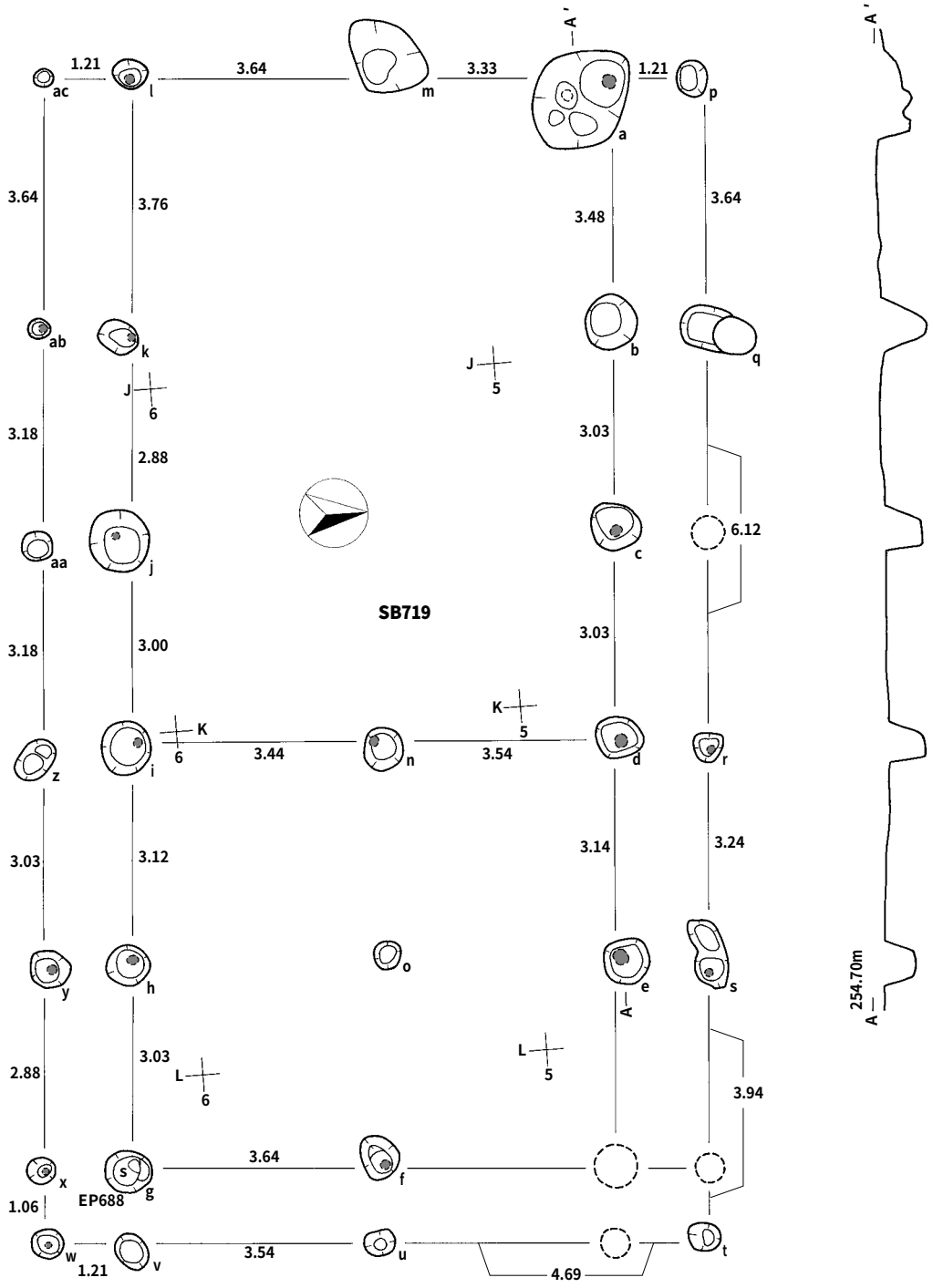
ＳＢ993

番号	深さ
a	(25)
b	(20)
c	28
d	(39)
e	47
f	(44)
g	12
h	39
i	(60)

0　　5m

1：100

第26図　第２遺構ブロック　ＳＢ991～993

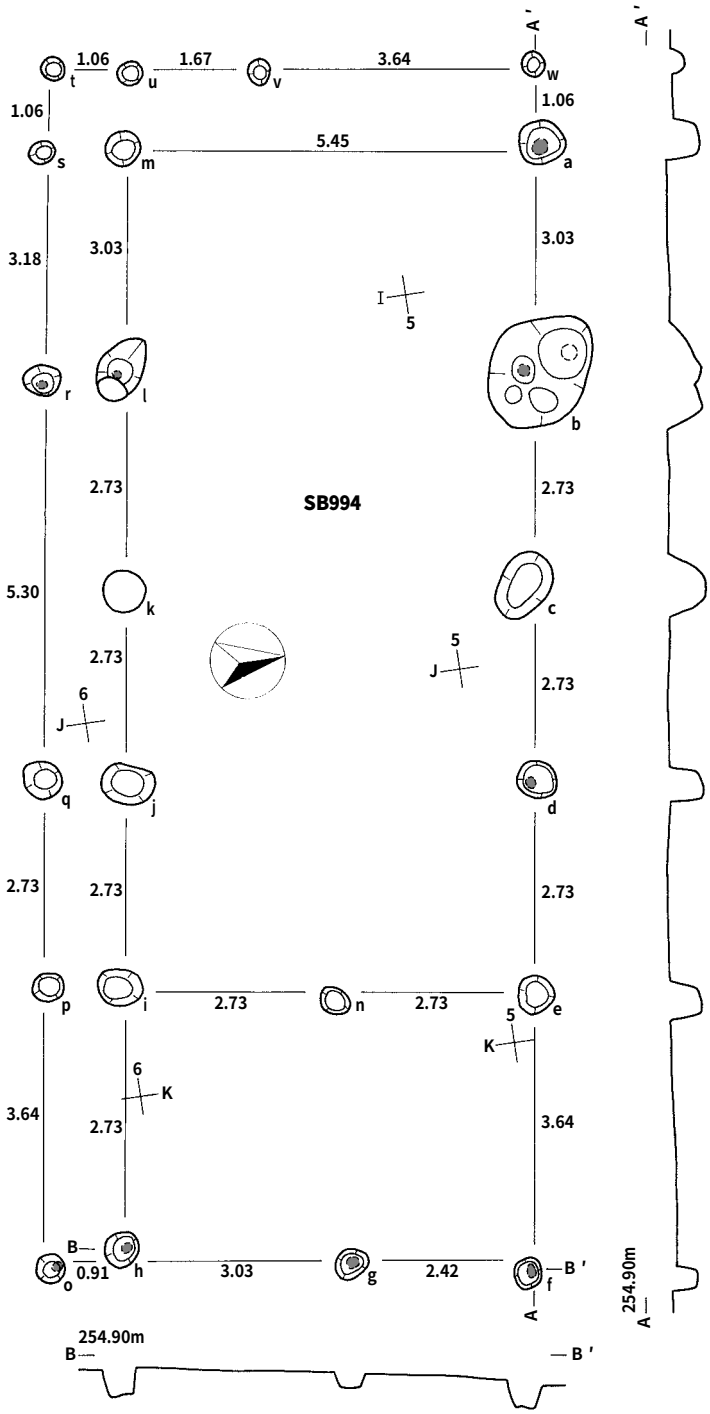


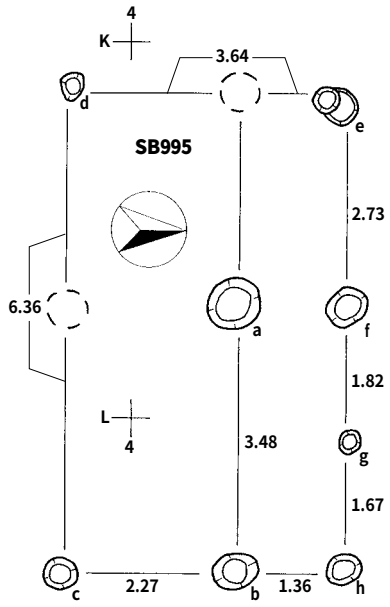
ＳＢ719

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o
深さ	58	(64)	56	53	46	32	(25)	69	79	90	34	30	(20)	69	(38)
番号	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	a a	a b	a c	
深さ	(35)	(24)	10	26	(30)	(31)	(35)	37	43	35	(60)	(41)	19	(50)	

0　5m
1：100

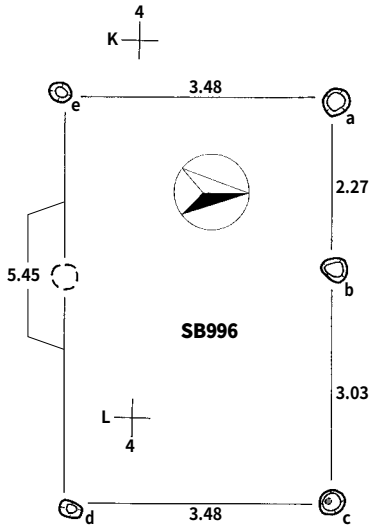
第27図　第２遺構ブロック　ＳＢ719





S B995

番号	a	b	c	d
深さ	(65)	(70)	(23)	(13)
番号	e	f	g	h
深さ	(16)	(32)	(26)	(24)



S B994

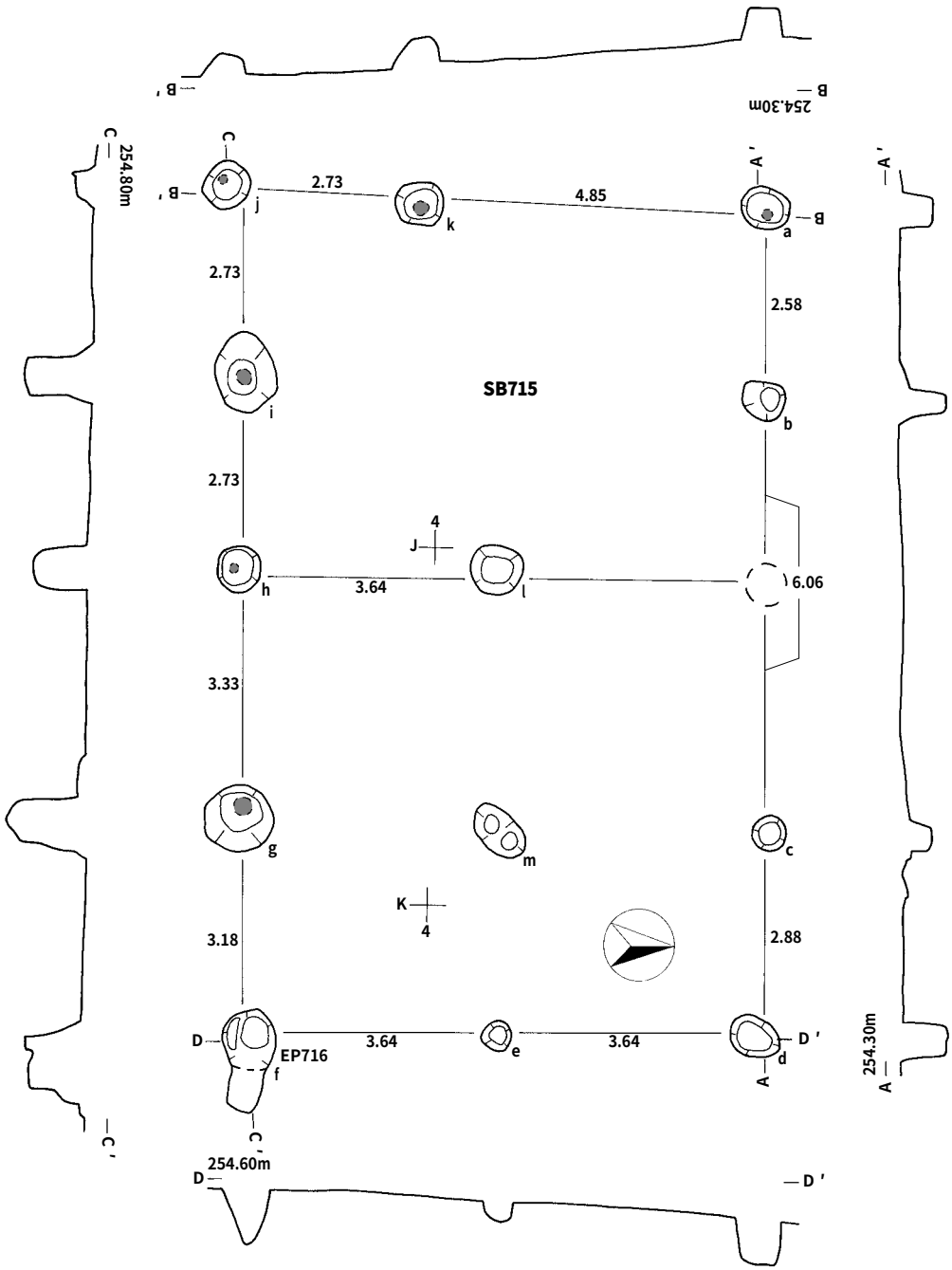
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
深さ	41	46	(50)	42	(45)	33	19	40	(70)	(64)	—	92
番号	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	
深さ	(50)	(24)	37	(46)	(41)	30	(32)	(26)	(28)	(21)	(12)	

S B996

番号	a	b	c	d	e
深さ	(31)	(27)	23	(22)	(13)

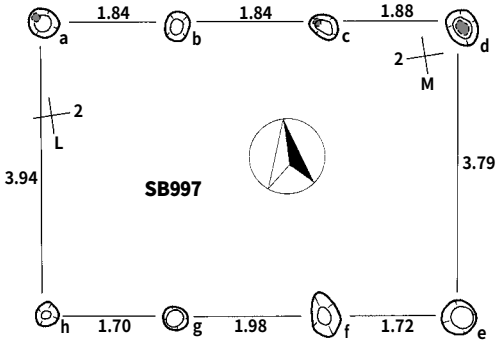
0 5m
1：100

第28図　第２遺構ブロック　S B994～996



SB715

番号	深さ
a	45
b	(66)
c	(45)
d	(67)
e	(25)
f	(23)
g	103
h	78
i	91
j	43
k	37
l	(38)
m	(24)



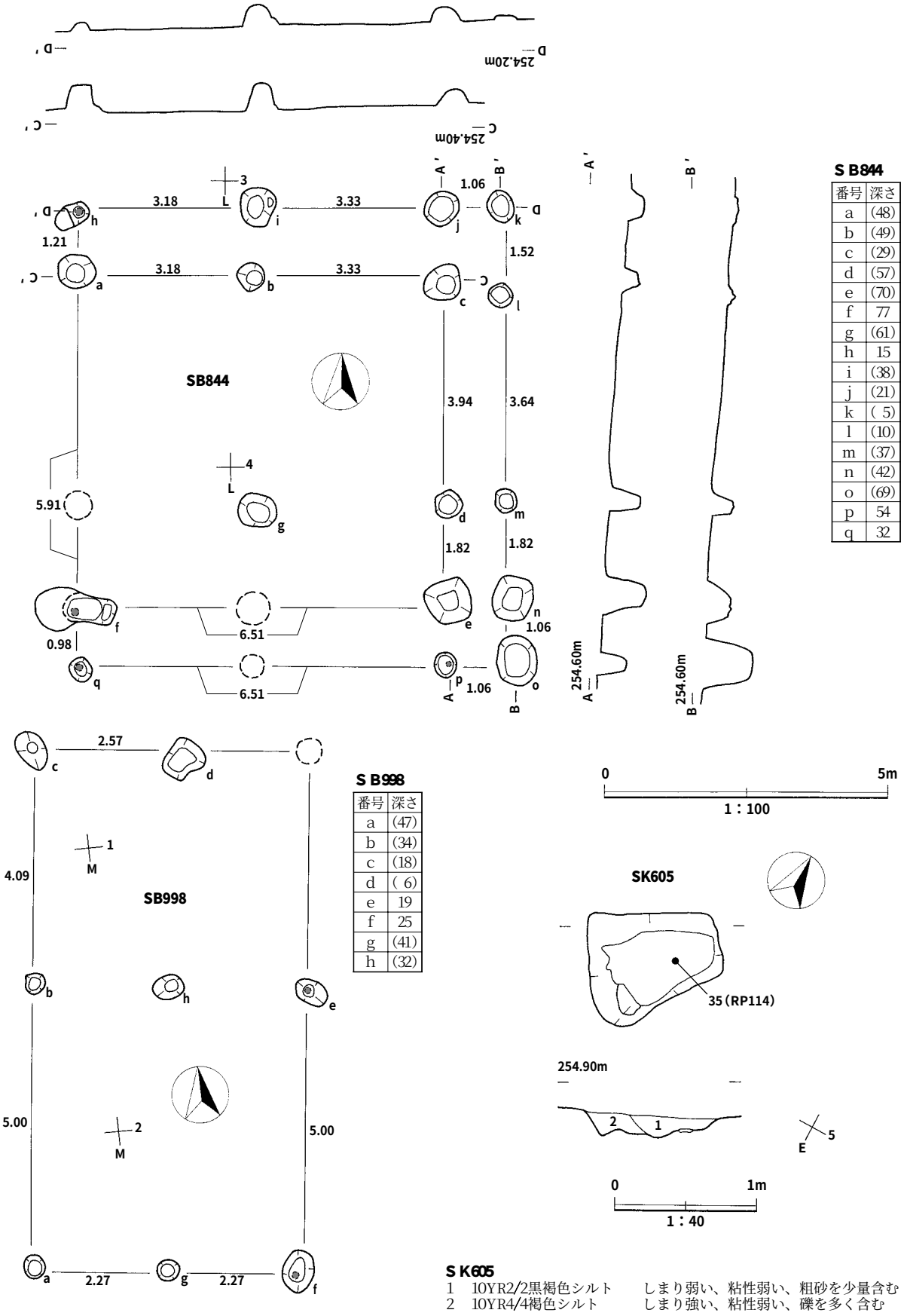
SB997

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	24	(9)	23	24	(46)	(22)	(38)	(13)

0 5m

1：100

第29図　第２遺構ブロック　SB715・997



S B844

番号	深さ
a	(48)
b	(49)
c	(29)
d	(57)
e	(70)
f	77
g	(61)
h	15
i	(38)
j	(21)
k	(5)
l	(10)
m	(37)
n	(42)
o	(69)
p	54
q	32

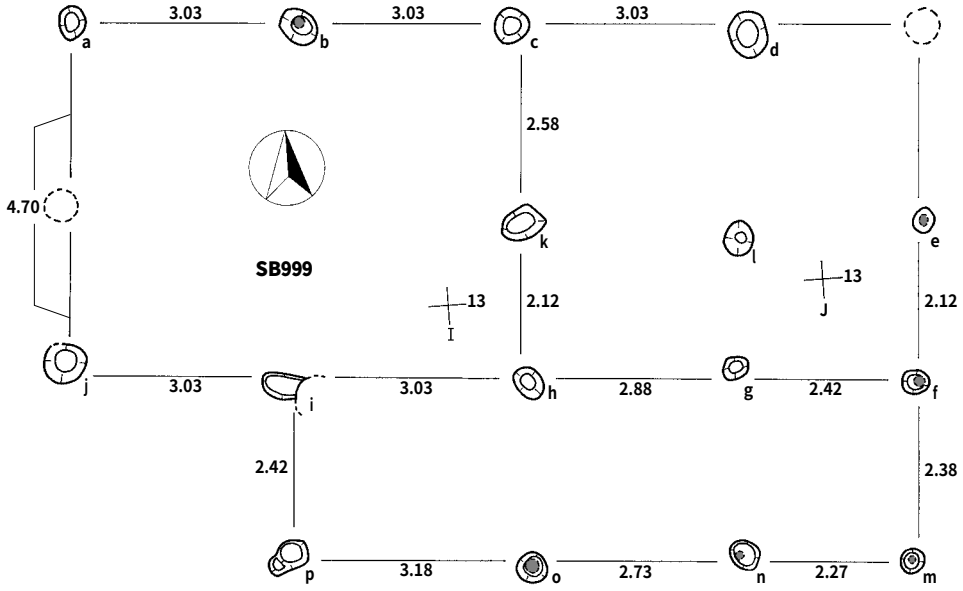
S B998

番号	深さ
a	(47)
b	(34)
c	(18)
d	(6)
e	19
f	25
g	(41)
h	(32)

S K605

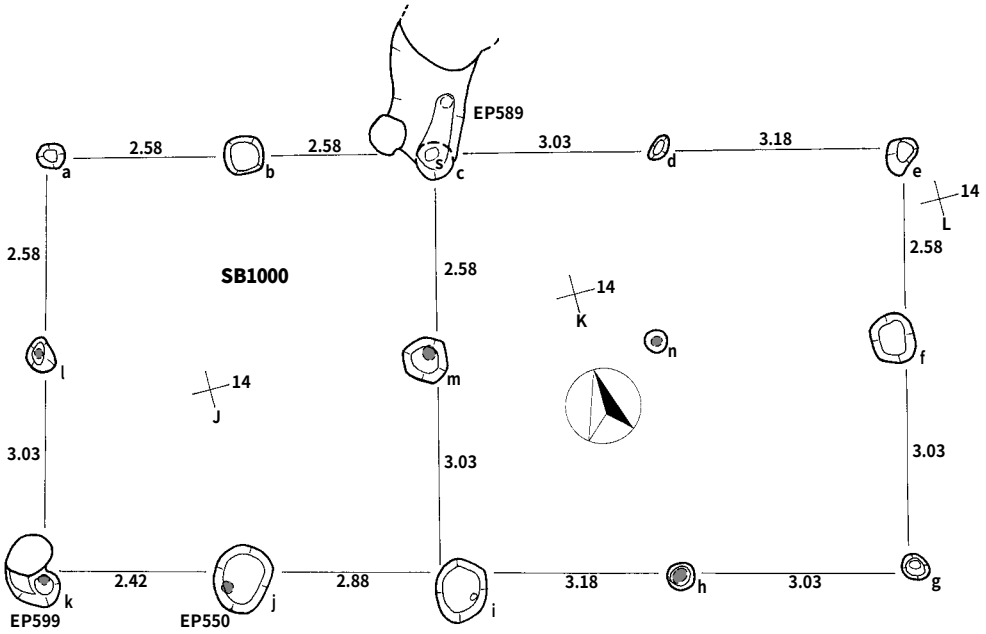
1　10YR2/2黒褐色シルト　　しまり弱い、粘性弱い、粗砂を少量含む
2　10YR4/4褐色シルト　　しまり強い、粘性弱い、礫を多く含む

第30図　第２遺構ブロック　ＳＢ844・998・ＳＫ605



S B999

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(48)	58	(47)	(41)	29	41	(46)	(25)
番号	i	j	k	l	m	n	o	p
深さ	(8)	(71)	(15)	(43)	21	26	28	(40)



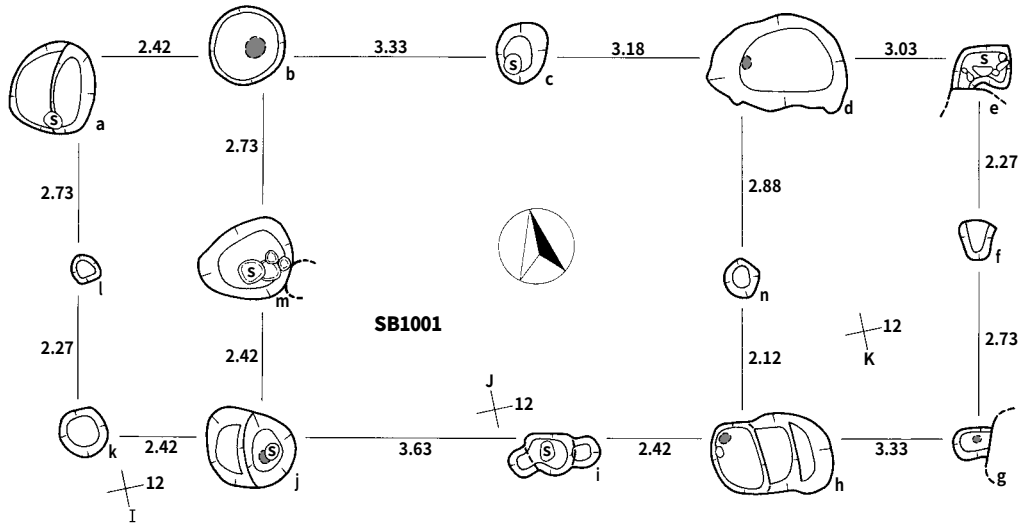
S B1000

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
深さ	(55)	(39)	(53)	(20)	(13)	(60)	(7)	14	(57)	66	48	17	75	29

0 5m

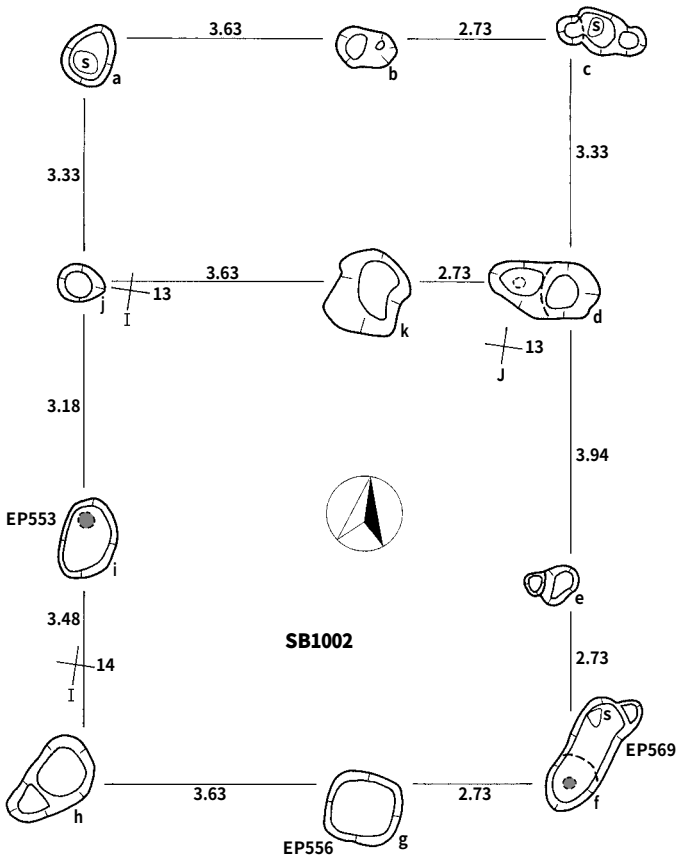
1：100

第31図　第３遺構ブロック　S B999・1000



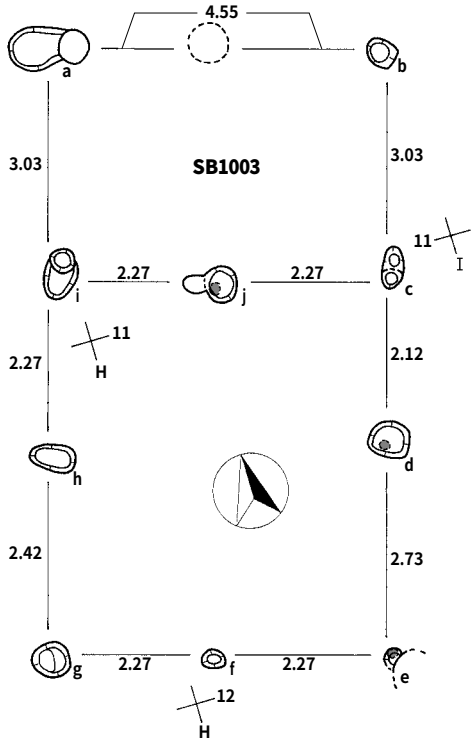
S B1001

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
深さ	(38)	39	(60)	64	(12)	(30)	10	106	(20)	66	(32)	(30)	(68)	(12)



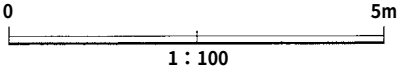
S B1002

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	(44)	(41)	(20)	(55)	(48)	51	(111)	(61)	76	(45)	(82)

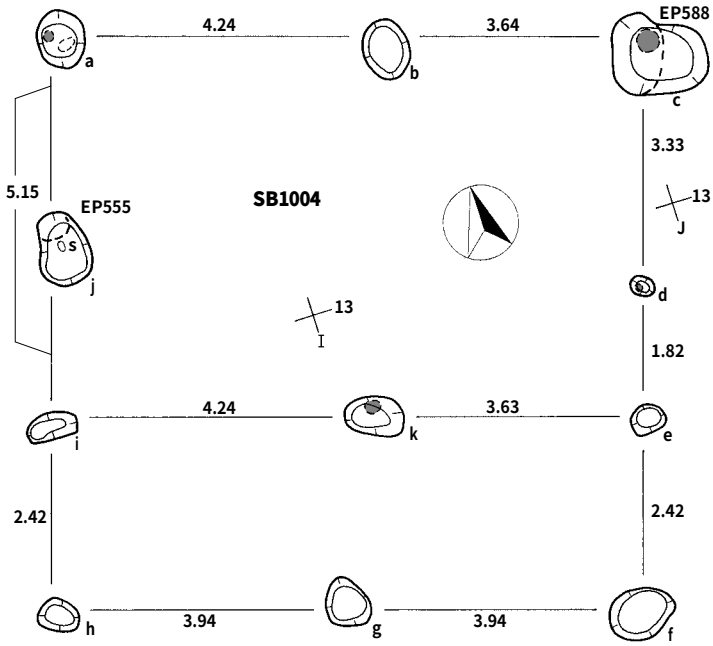


S B1003

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(27)	(24)	(15)	18	11	(10)	(12)	(8)	(19)	14

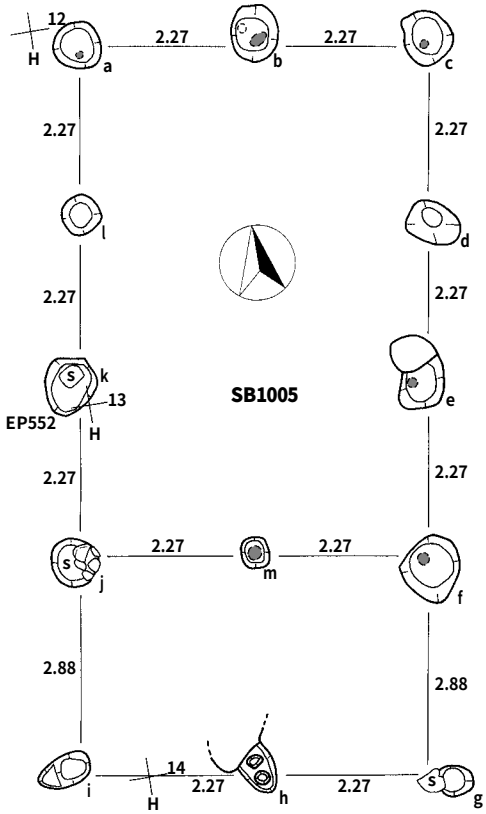


第32図　第３遺構ブロック　ＳＢ1001～1003



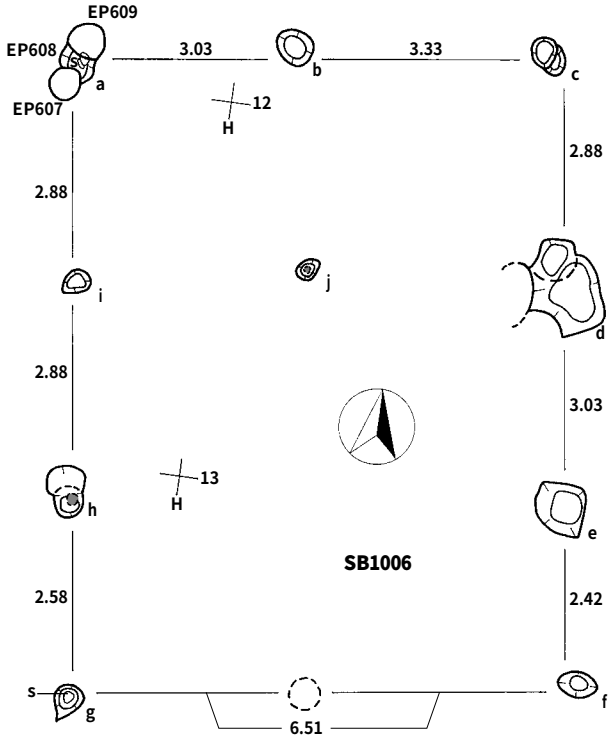
S B1004

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	36	(46)	81	16	(29)	(102)	(71)	(53)	(20)	(70)	89



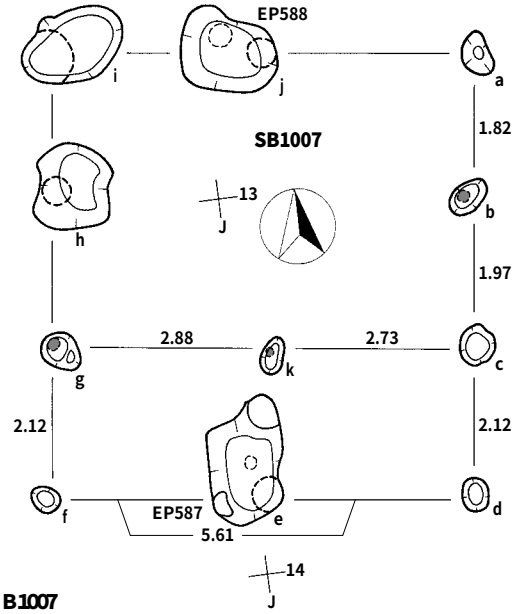
S B1005

番号	a	b	c	d	e	f	g
深さ	42	38	32	(53)	9	84	(80)
番号	h	i	j	k	l	m	
深さ	(35)	(46)	(75)	(52)	(50)	58	



S B1006

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(12)	(16)	(36)	(24)	(28)	(60)	(22)	14	(23)	8



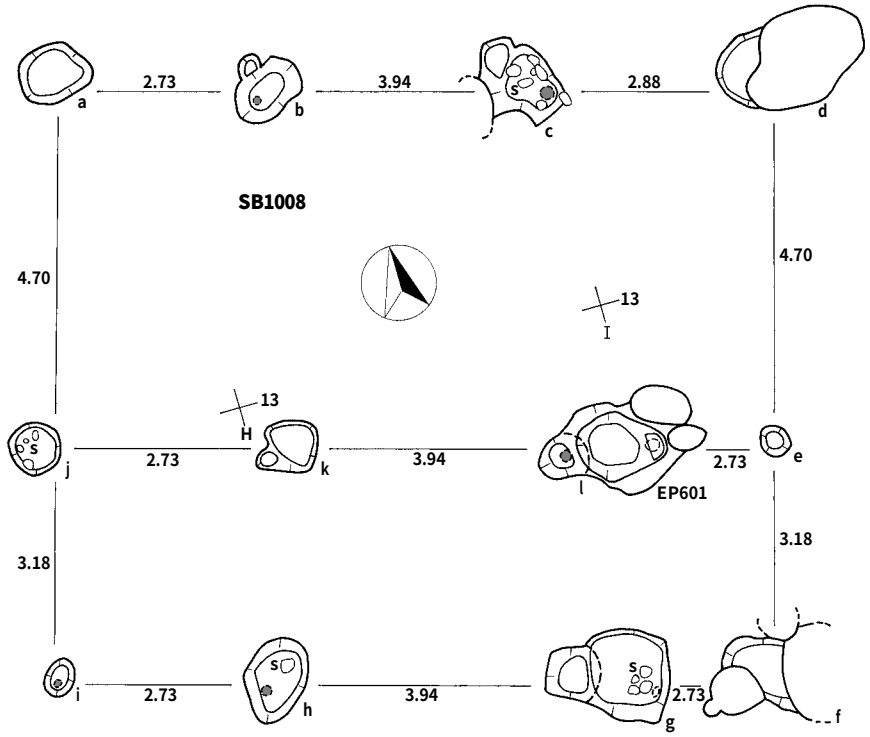
S B1007

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	(45)	22	(50)	(27)	—	(36)	51	—	—	—	26

0　　5m

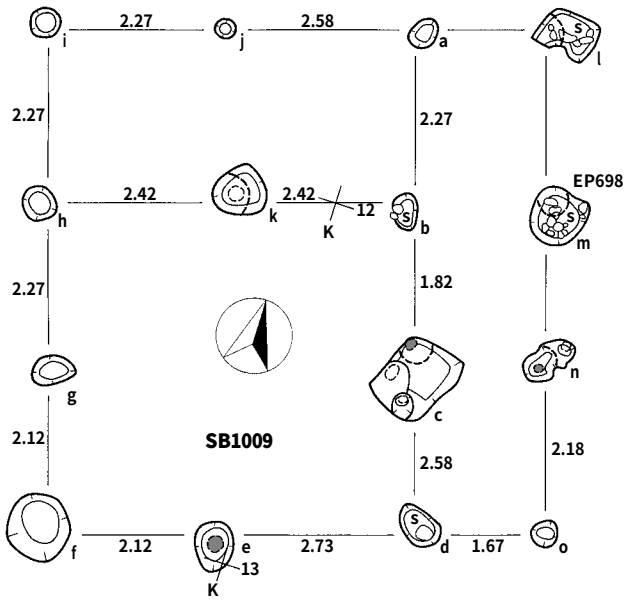
1：100

第33図　第３遺構ブロック　S B1004～1007



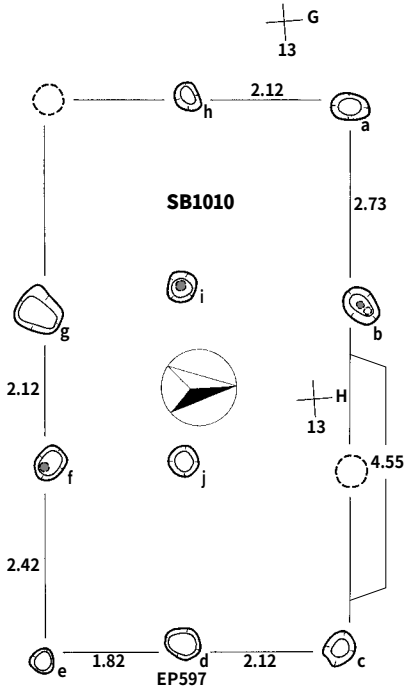
S B1008

番号	深さ
a	(86)
b	90
c	50
d	—
e	(100)
f	(81)
g	(68)
h	79
i	50
j	(14)
k	(26)
l	67



S B1009

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(11)	(8)	55	(14)	83	(56)	(11)	(14)
番号	i	j	k	l	m	n	o	
深さ	(23)	(18)	(66)	(12)	—	17	(40)	



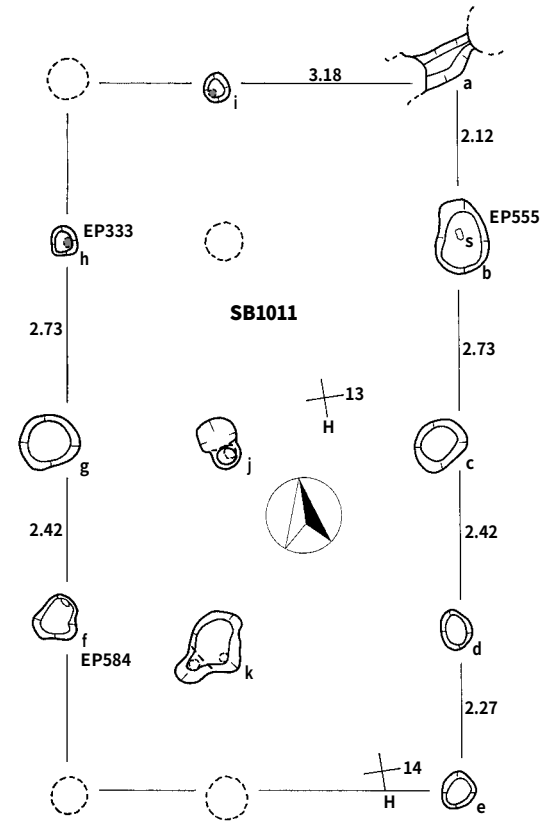
S B1010

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(15)	40	(20)	(25)	(39)	16	(51)	(21)	34	(26)

0 5m

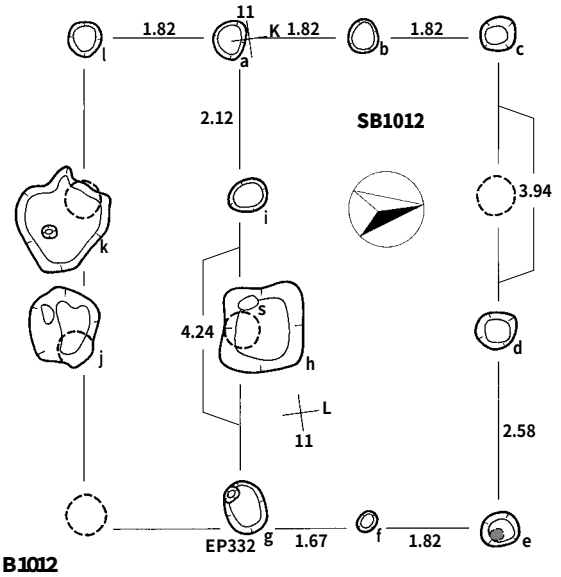
1：100

第34図　第３遺構ブロック　ＳＢ1008～1010



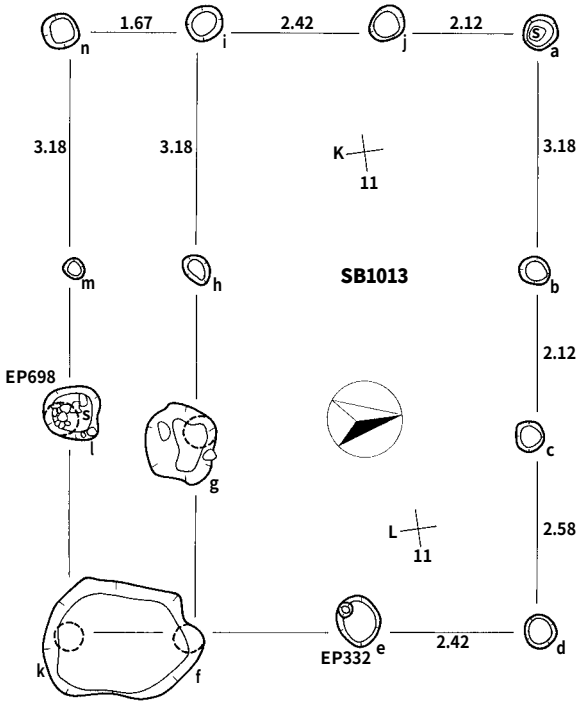
S B1011

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	(91)	(70)	(101)	(39)	(29)	(54)	(55)	28	28	—	(39)



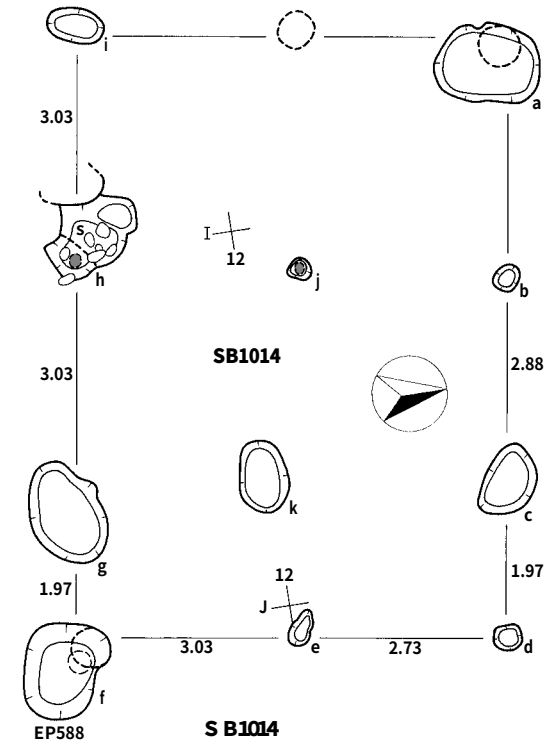
S B1012

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
深さ	(24)	(8)	(31)	(70)	48	(6)	(91)	(80)	(19)	—	—	(27)



S B1013

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
深さ	(9)	(18)	(17)	(19)	(16)	—	(24)	(14)	(29)	(14)	—	—	(8)	(23)



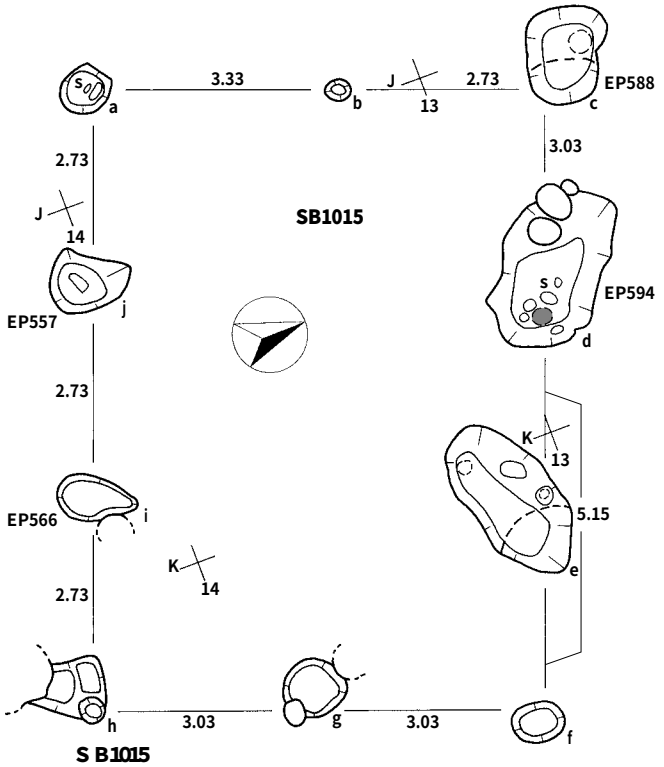
S B1014

番号	a	b	c	d	e	f
深さ	—	(18)	(22)	(47)	(27)	(81)
番号	g	h	i	j	k	
深さ	(72)	52	(14)	34	(65)	

0 5m

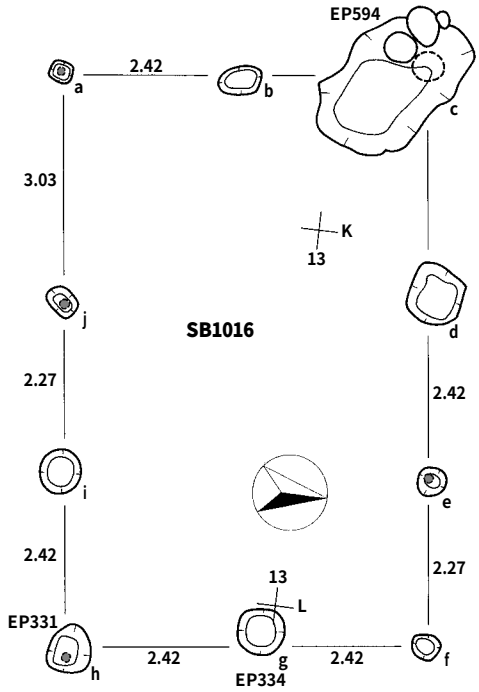
1：100

第35図　第３遺構ブロック　ＳＢ1011～1014



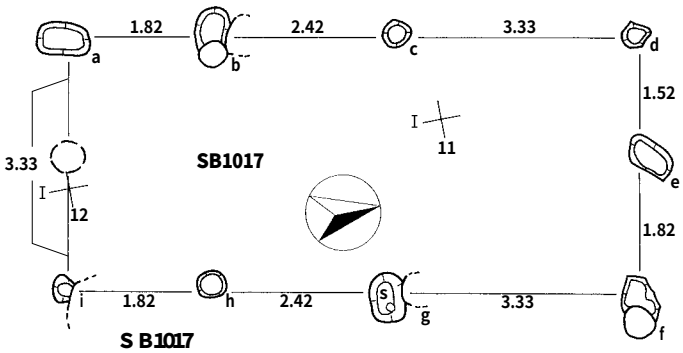
S B1015

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(92)	(16)	—	78	—	(90)	(21)	(13)	—	(48)



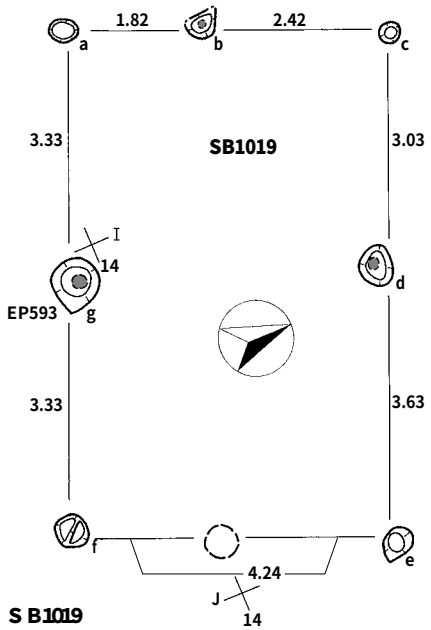
S B1016

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	10	(23)	—	(34)	19	(32)	(18)	40	(27)	59



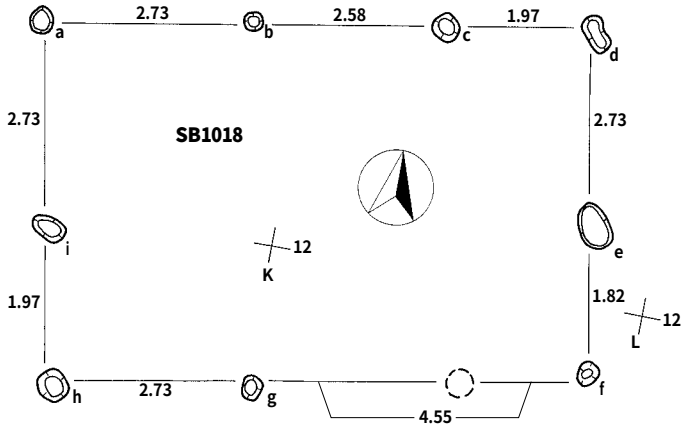
S B1017

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
深さ	(19)	(11)	(13)	(17)	(21)	(21)	(22)	(17)	(13)



S B1019

番号	a	b	c	d	e	f	g
深さ	(26)	18	(7)	63	(54)	(25)	54



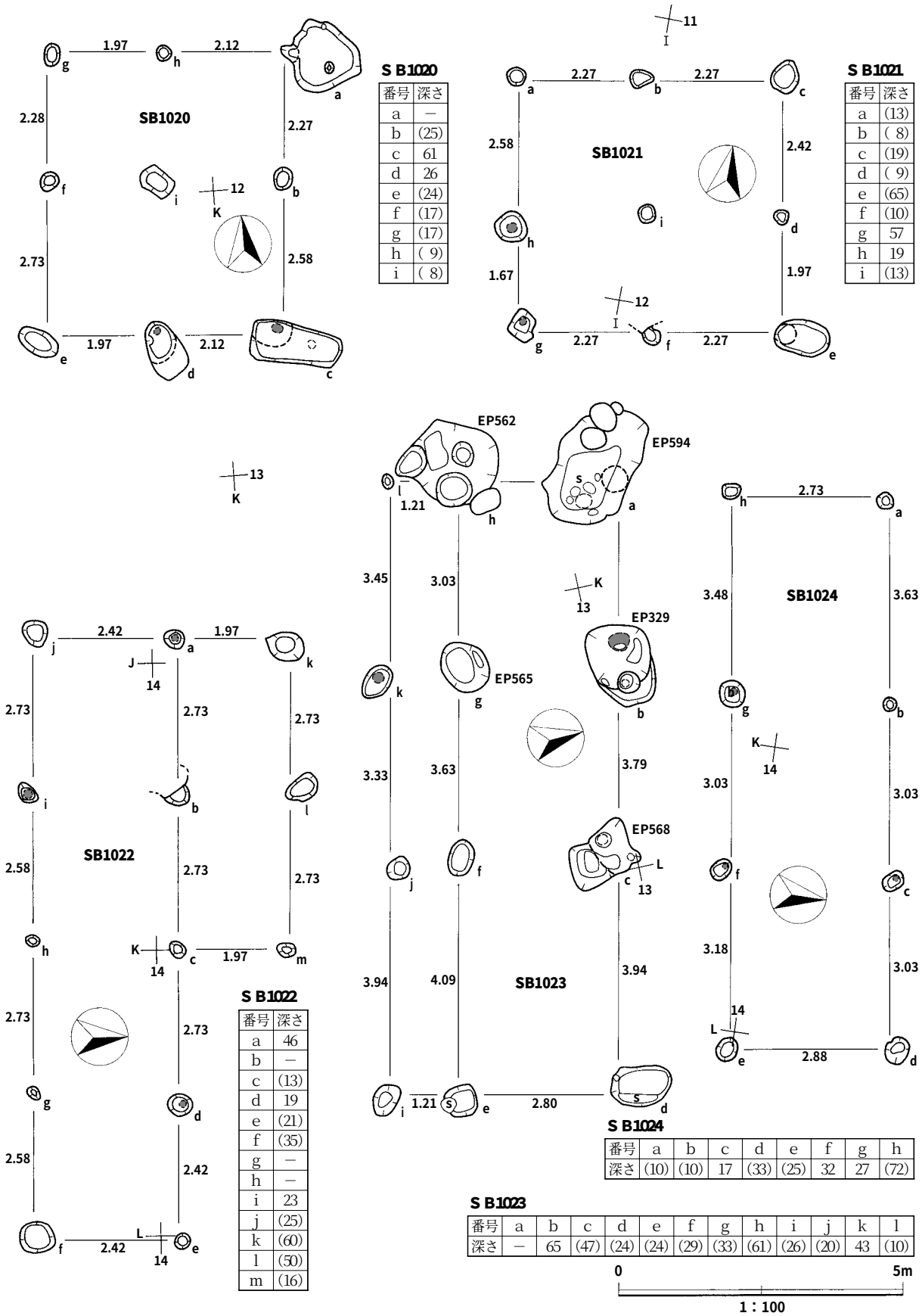
S B1018

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
深さ	(28)	(10)	(15)	(7)	(12)	(15)	(13)	(23)	(17)

0 5m

1：100

第36図　第３遺構ブロック　ＳＢ1015～1019



S B1020

番号	深さ
a	—
b	(25)
c	61
d	26
e	(24)
f	(17)
g	(17)
h	(9)
i	(8)

S B1021

番号	深さ
a	(13)
b	(8)
c	(19)
d	(9)
e	(65)
f	(10)
g	57
h	19
i	(13)

S B1022

番号	深さ
a	46
b	—
c	(13)
d	19
e	(21)
f	(35)
g	—
h	—
i	23
j	(25)
k	(60)
l	(50)
m	(16)

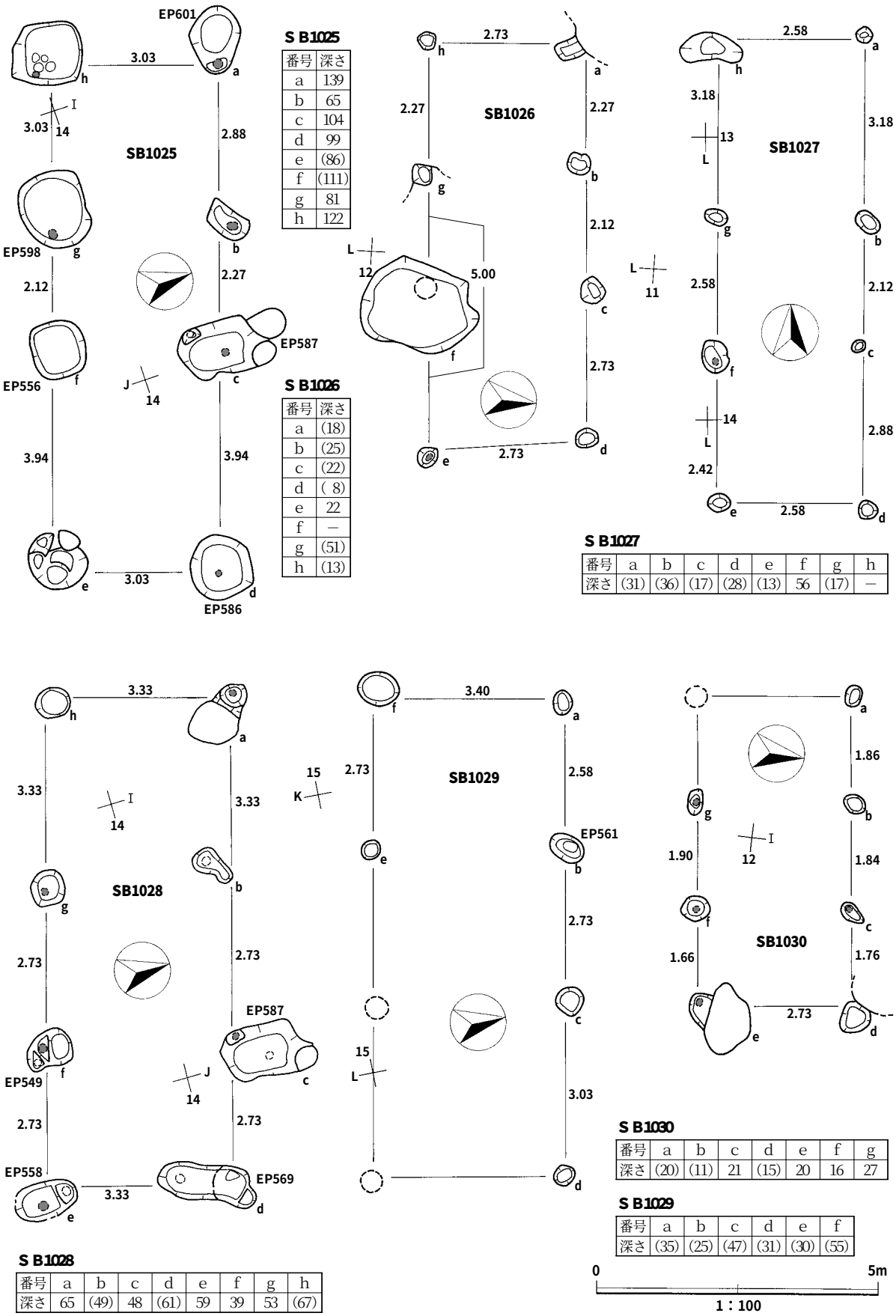
S B1024

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(10)	(10)	17	(33)	(25)	32	27	(72)

S B1023

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
深さ	—	65	(47)	(24)	(24)	(29)	(33)	(61)	(26)	(20)	43	(10)

第37図　第３遺構ブロック　ＳＢ1020～1024



S B1025

番号	深さ
a	139
b	65
c	104
d	99
e	(86)
f	(111)
g	81
h	122

S B1026

番号	深さ
a	(18)
b	(25)
c	(22)
d	(8)
e	22
f	—
g	(51)
h	(13)

S B1027

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(31)	(36)	(17)	(28)	(13)	56	(17)	—

S B1028

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	65	(49)	48	(61)	59	39	53	(67)

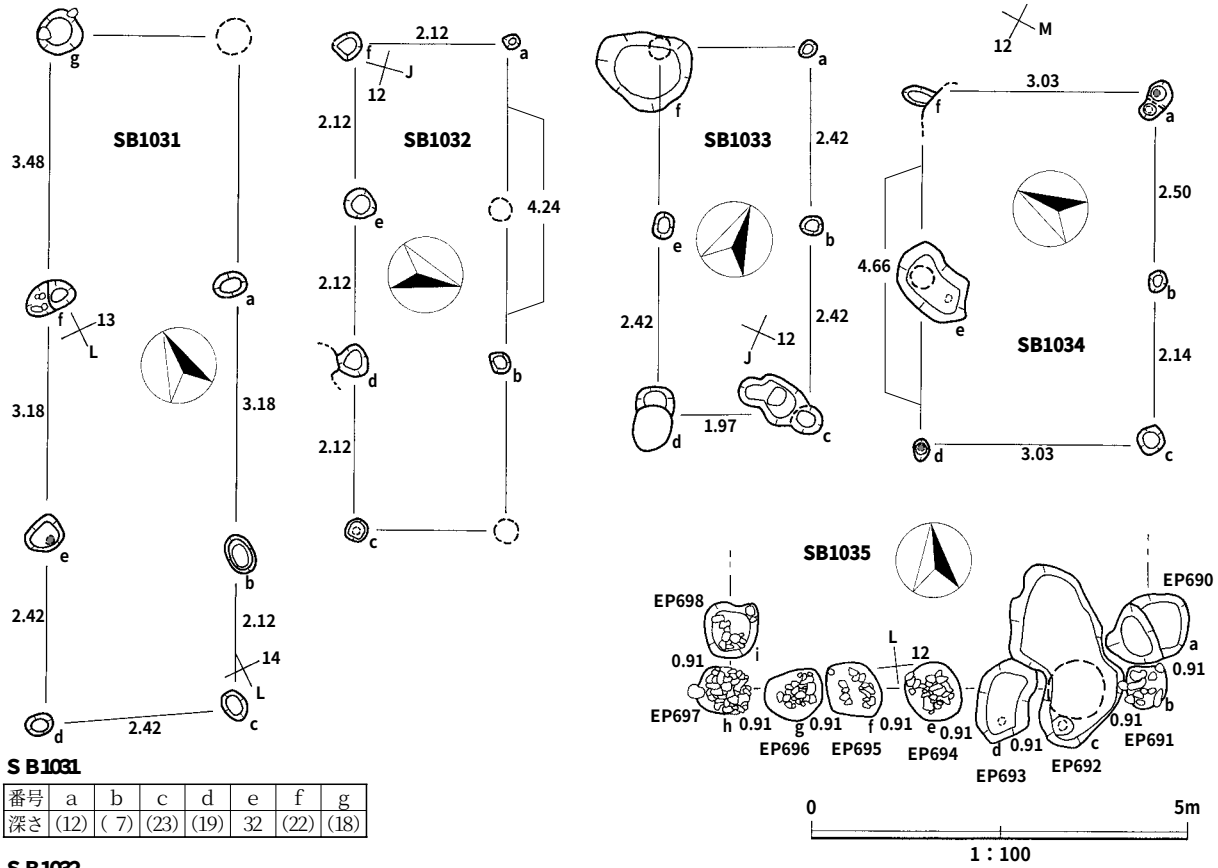
S B1030

番号	a	b	c	d	e	f	g
深さ	(20)	(11)	21	(15)	20	16	27

S B1029

番号	a	b	c	d	e	f
深さ	(35)	(25)	(47)	(31)	(30)	(55)

第38図　第３遺構ブロック　ＳＢ1025～1030



S B1031

番号	a	b	c	d	e	f	g
深さ	(12)	(7)	(23)	(19)	32	(22)	(18)

S B1032

番号	a	b	c	d	e	f
深さ	(17)	(8)	(8)	(11)	(26)	(16)

S B1033

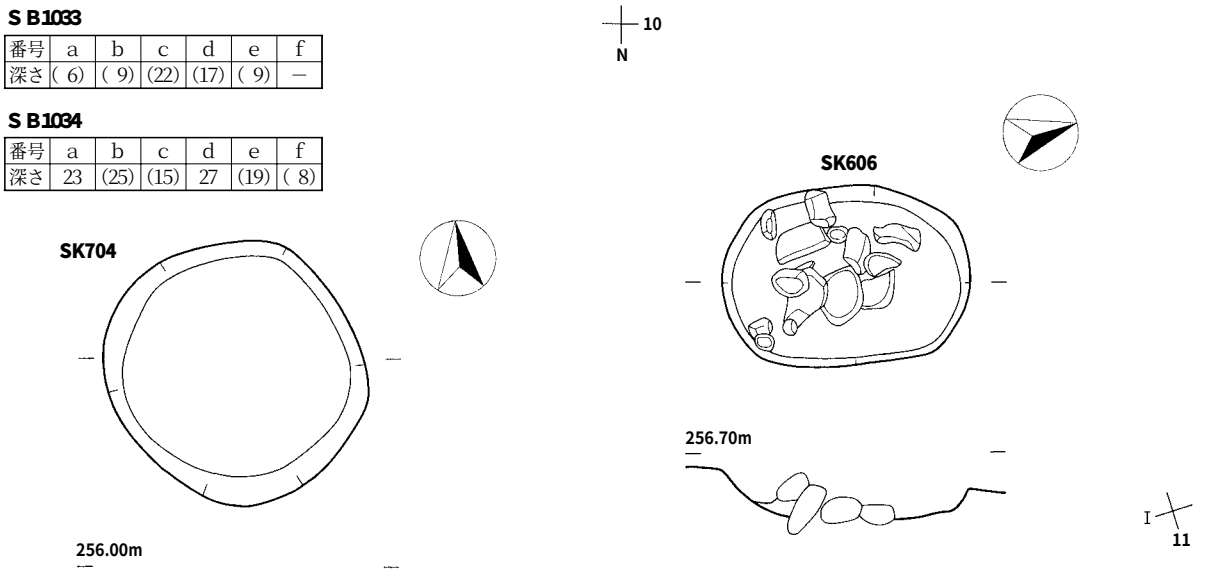
番号	a	b	c	d	e	f
深さ	(6)	(9)	(22)	(17)	(9)	—

S B1034

番号	a	b	c	d	e	f
深さ	23	(25)	(15)	27	(19)	(8)

S B1035

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
深さ	(29)	(0)	(21)	(26)	(13)	(13)	(7)	(0)	(4)



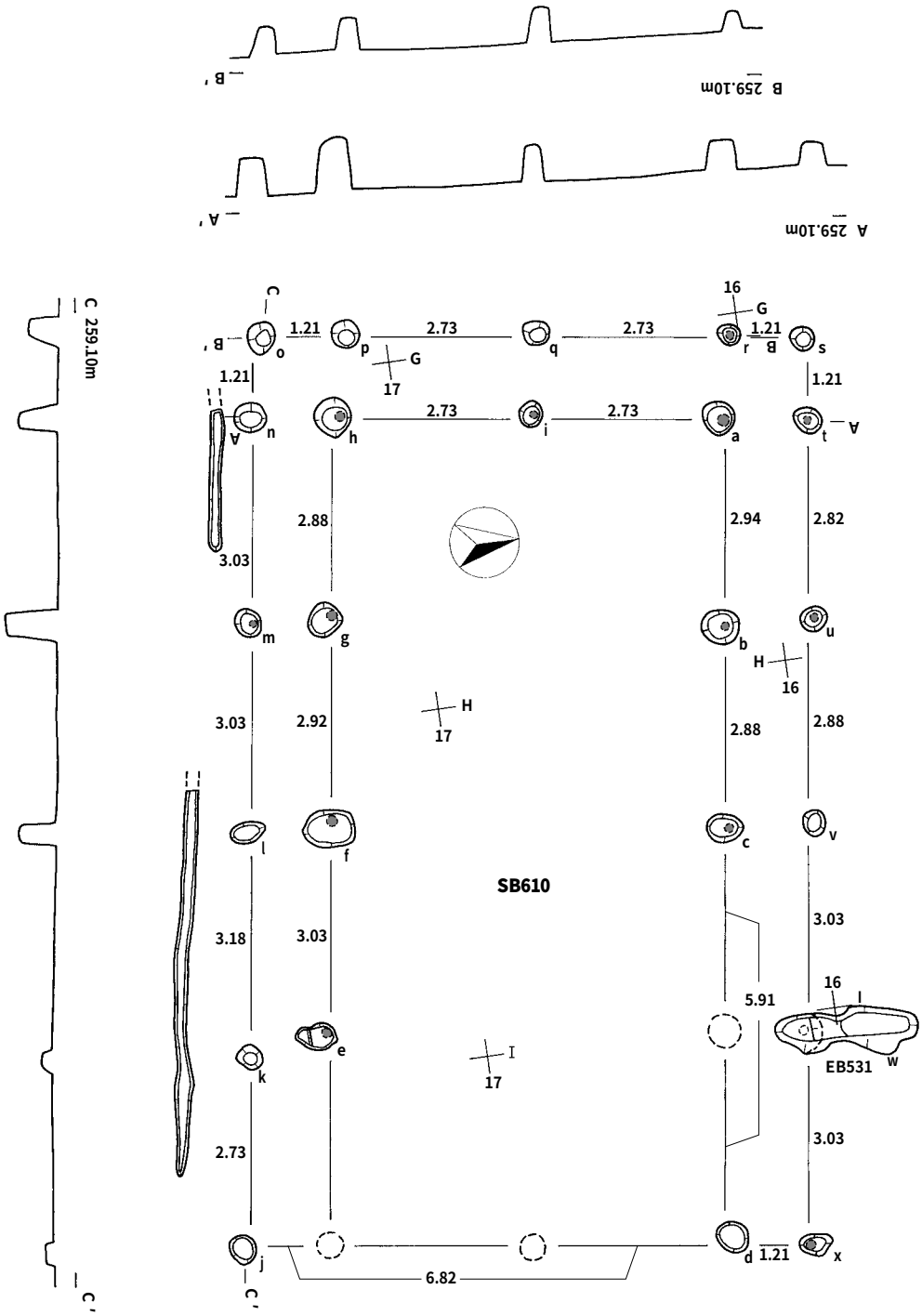
S K606

1　10YR2/2黒褐色シルト　　しまり中、粘性中程度

S K704

1　10YR2/2黒褐色シルト　　炭化物を少量混入、粗砂、礫を含む
2　10YR3/3暗褐色シルト　　根の撹乱を含む、粗砂、礫を含む
3　10YR2/3黒褐色シルト質砂　根の撹乱を含む
4　10YR2/1黒色シルト　　粗砂を含む
5　10YR4/4褐色シルト　　粗砂、小礫を含む

第39図　第３遺構ブロック　ＳＢ1031～1035・ＳＫ606・704

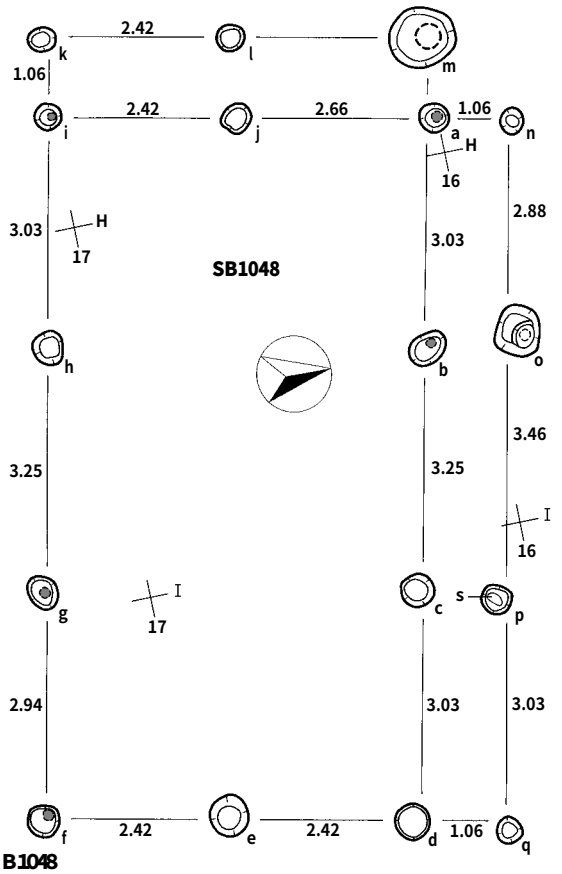


S B610

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
深さ	43	44	33	(33)	56	78	83	74	51	(13)	(15)	(52)
番号	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x
深さ	74	(55)	(41)	(45)	(53)	26	—	34	43	(17)	70	18

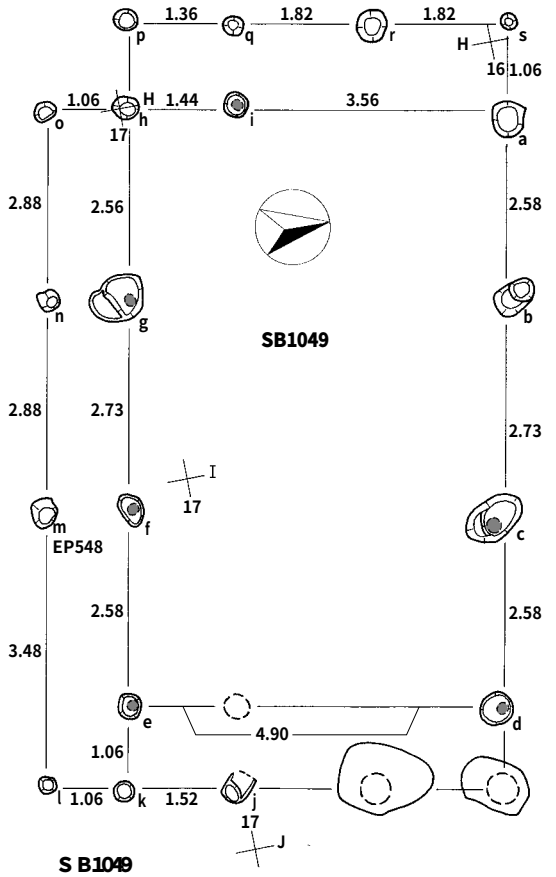
0 5m
1：100

第40図　第４遺構ブロック　S B610



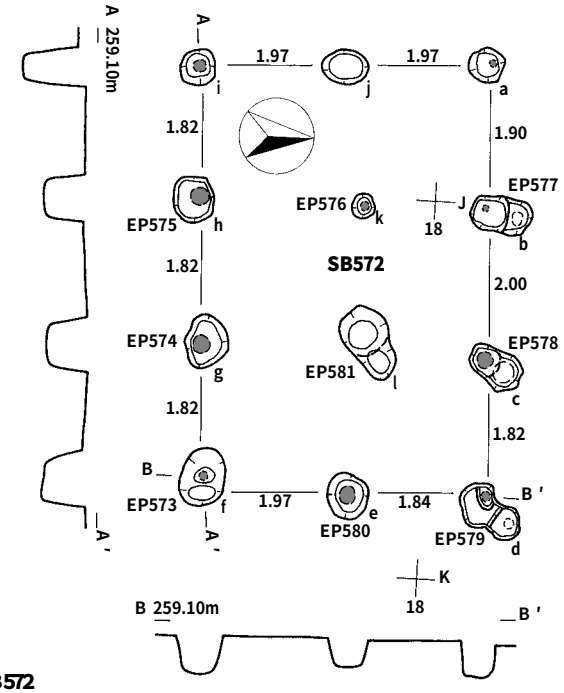
S B1048

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
深さ	36	43	(47)	(52)	(16)	62	57	(75)	43
番号	j	k	l	m	n	o	p	q	
深さ	(35)	(37)	(45)	(51)	(21)	(46)	(22)	(21)	



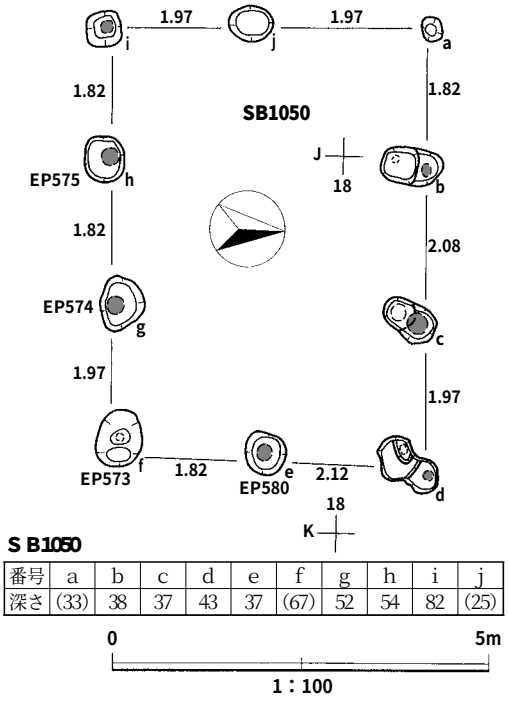
S B1049

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(40)	(23)	25	39	48	44	47	(49)	23	(15)
番号	k	l	m	n	o	p	q	r	s	
深さ	(15)	(53)	(35)	(23)	(15)	(32)	(25)	—	(9)	



S B572

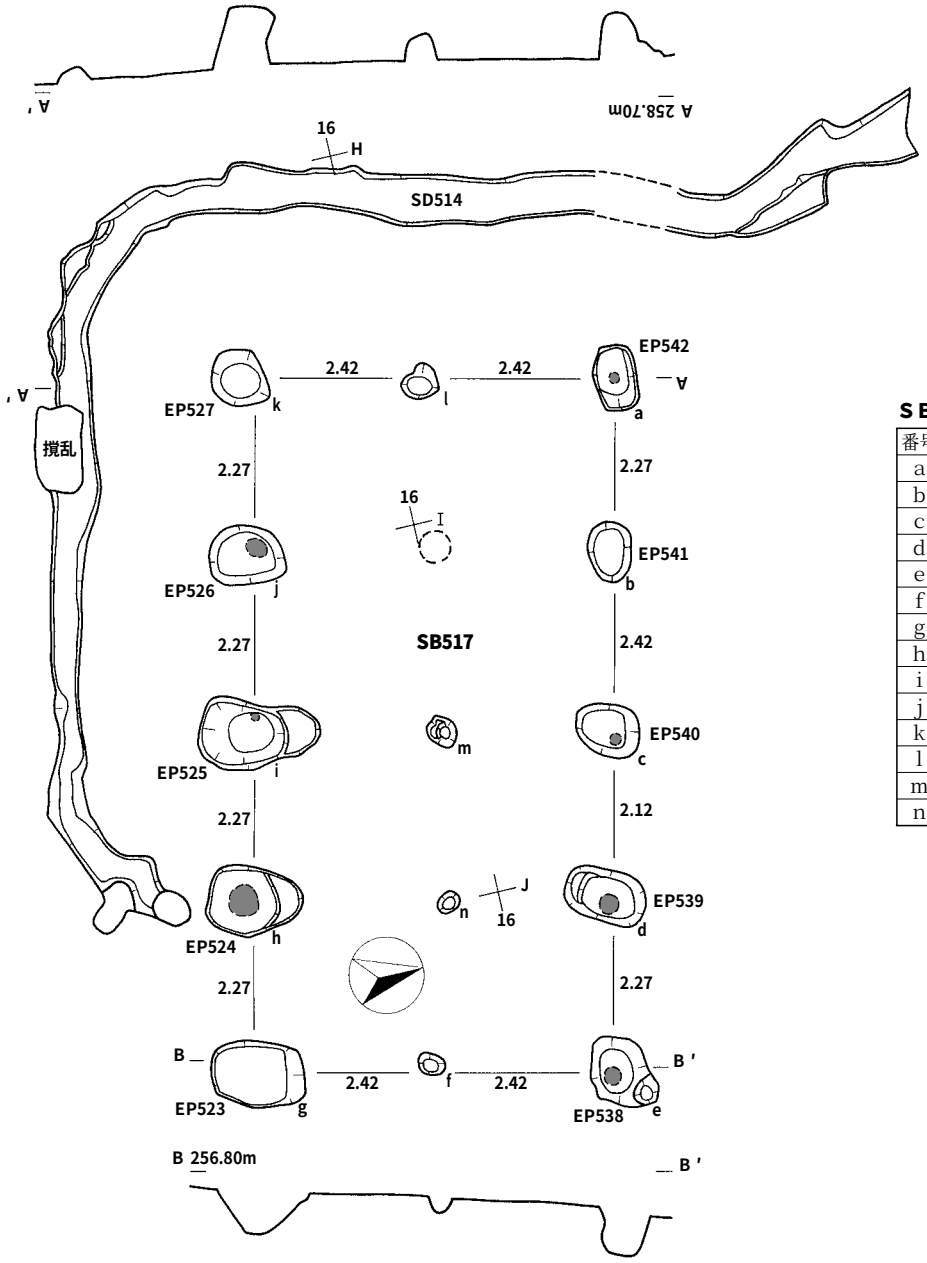
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
深さ	39	49	60	43	37	67	52	54	82	(25)	24	(60)



S B1050

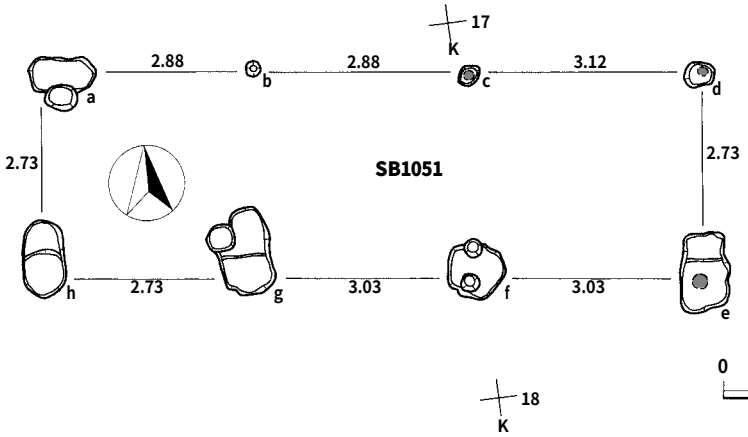
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(33)	38	37	43	37	(67)	52	54	82	(25)

第41図　第４遺構ブロック　ＳＢ572・1048～1050



S B517

番号	深さ
a	52
b	(62)
c	57
d	67
e	58
f	(16)
g	(91)
h	111
i	90
j	92
k	(121)
l	(40)
m	(29)
n	(26)

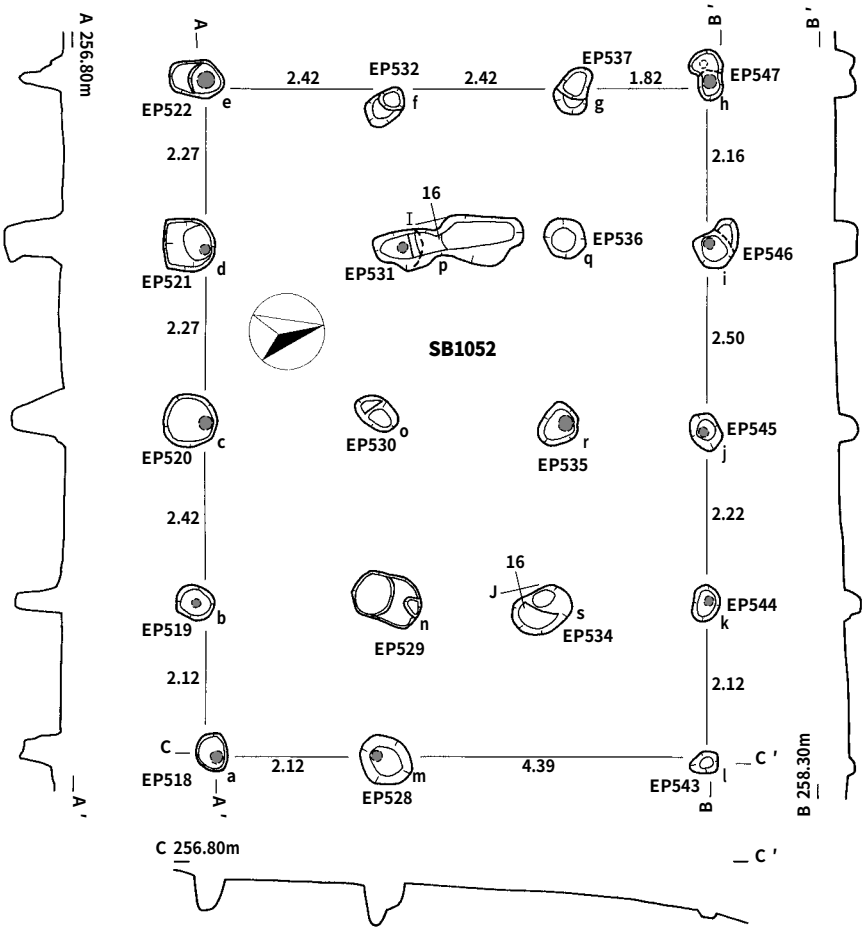


S B1051

番号	深さ
a	(11)
b	(11)
c	19
d	24
e	95
f	(66)
g	(60)
h	(30)

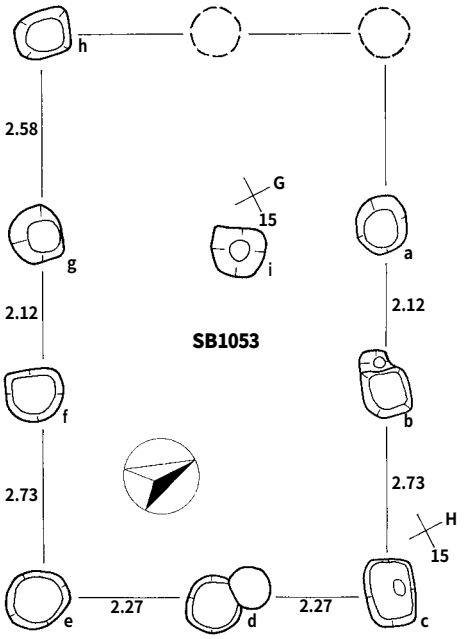
0 5m
1：100

第42図　第４遺構ブロック　ＳＢ517・1051



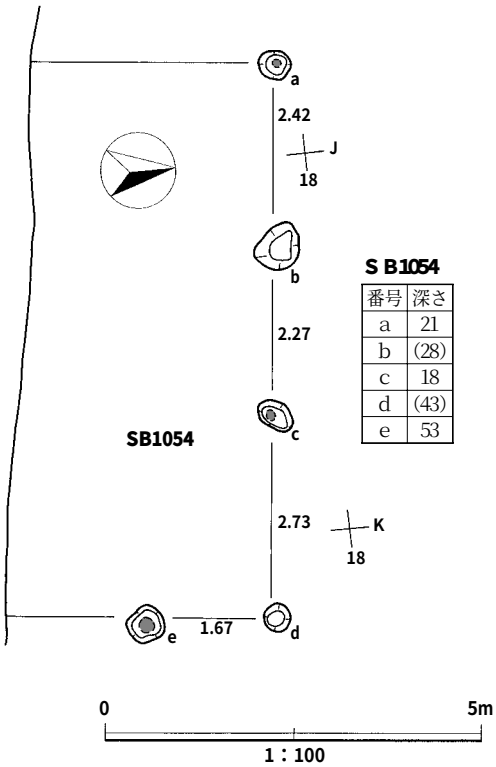
S B1052

番号	深さ
a	47
b	63
c	140
d	73
e	56
f	(35)
g	(32)
h	29
i	32
j	28
k	23
l	(14)
m	59
n	(48)
o	(46)
p	(70)
q	(37)
r	45
s	(11)



S B1053

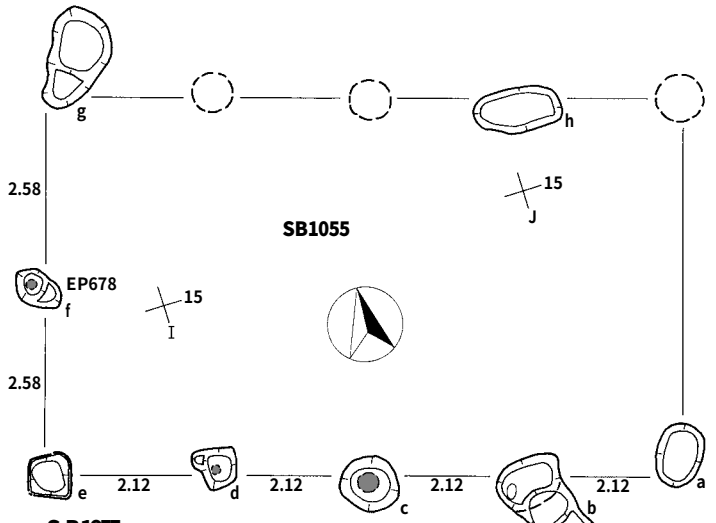
番号	深さ
a	(38)
b	(43)
c	(35)
d	(39)
e	(51)
f	(39)
g	(48)
h	(23)
i	(50)



S B1054

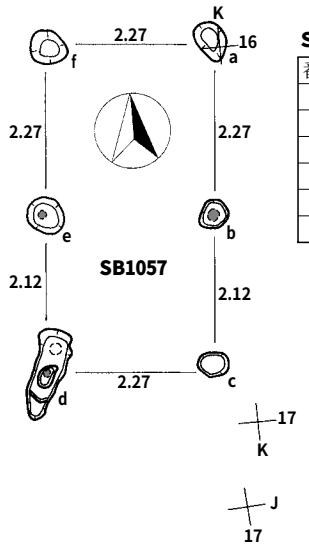
番号	深さ
a	21
b	(28)
c	18
d	(43)
e	53

第43図　第４遺構ブロック　ＳＢ1052～1054



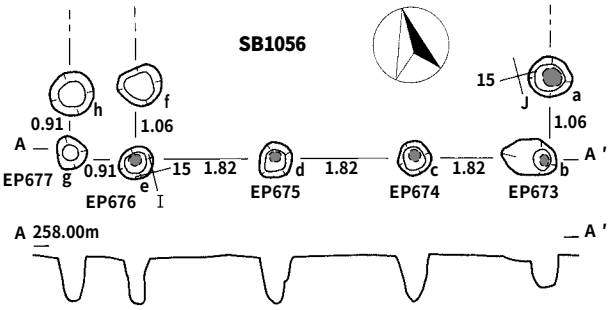
S B1055

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(12)	(16)	43	42	(37)	30	(28)	—



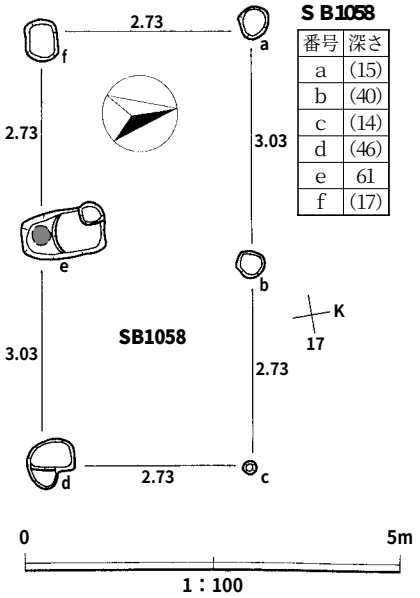
S B1057

番号	深さ
a	(32)
b	12
c	(25)
d	36
e	31
f	(33)



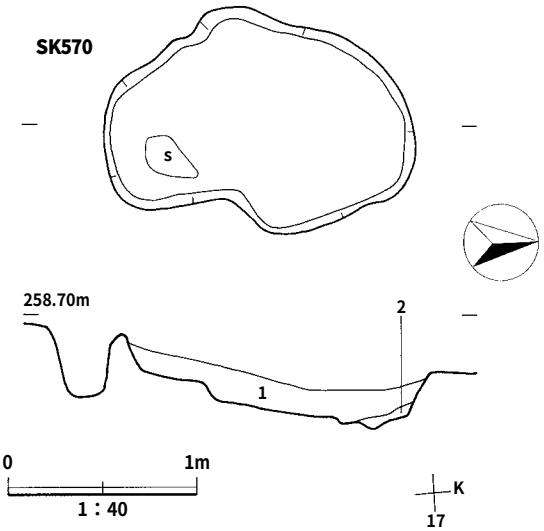
S B1056

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	58	42	65	62	59	(64)	(60)	(43)



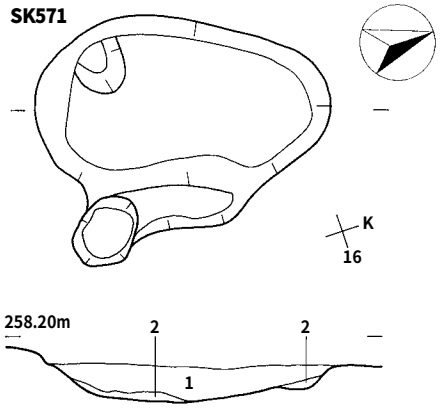
S B1058

番号	深さ
a	(15)
b	(40)
c	(14)
d	(46)
e	61
f	(17)



S K570

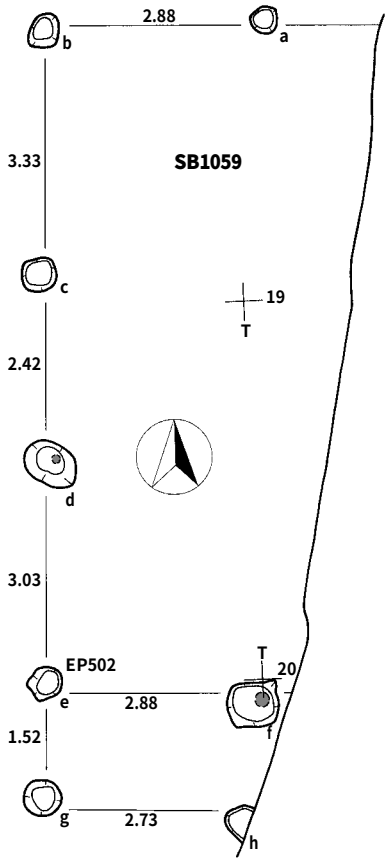
1　10YR2/2黒褐色シルト　　褐色シルトブロックを少量含む
2　10YR3/3暗褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い

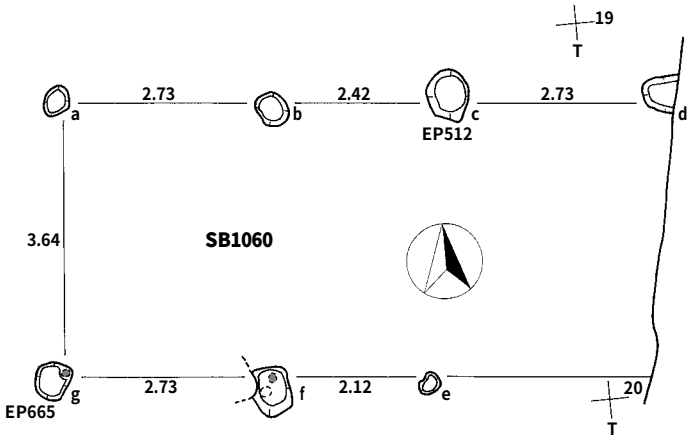


S K571

1　10YR2/3黒褐色シルト　小礫を含む
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまり強い

第44図　第４遺構ブロック　S B1055～1058・S K570・571



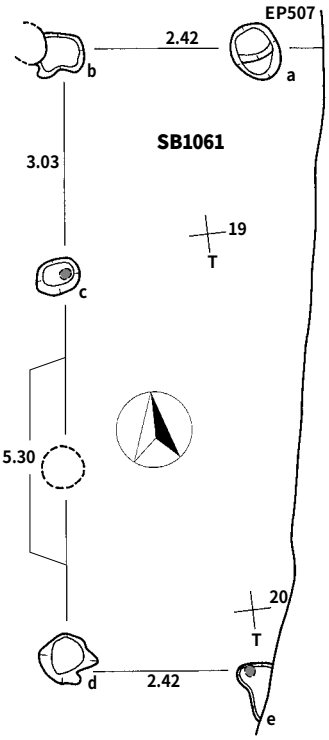


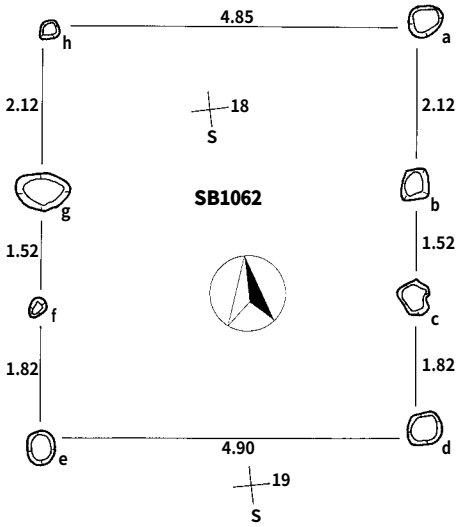
S B1059

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(15)	(30)	(38)	70	(30)	20	(11)	(11)

S B1060

番号	a	b	c	d	e	f	g
深さ	(5)	(48)	(51)	(58)	(13)	(18)	25





S B1061

番号	a	b	c	d	e
深さ	(38)	(13)	27	(23)	10

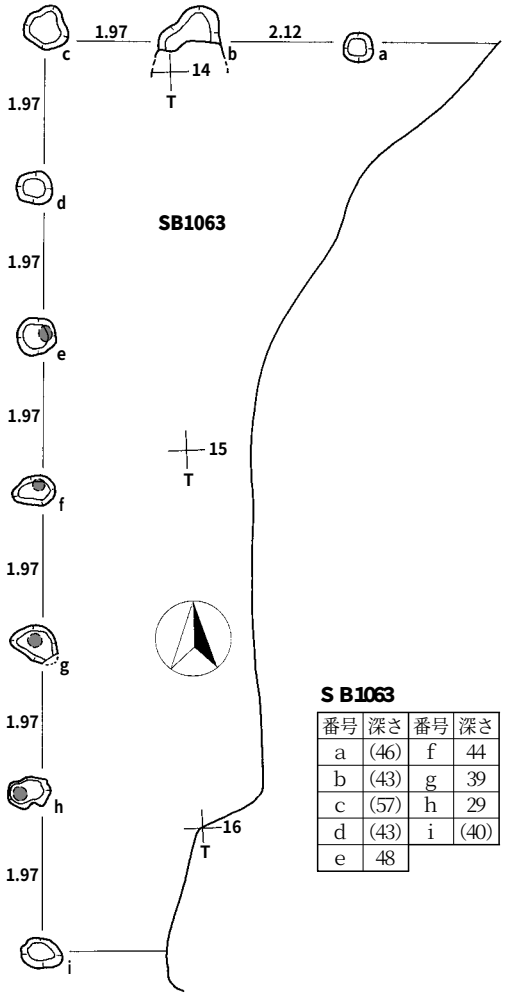
S B1062

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(3)	(30)	(57)	(38)	(34)	(25)	(30)	(43)

0 5m
1：100

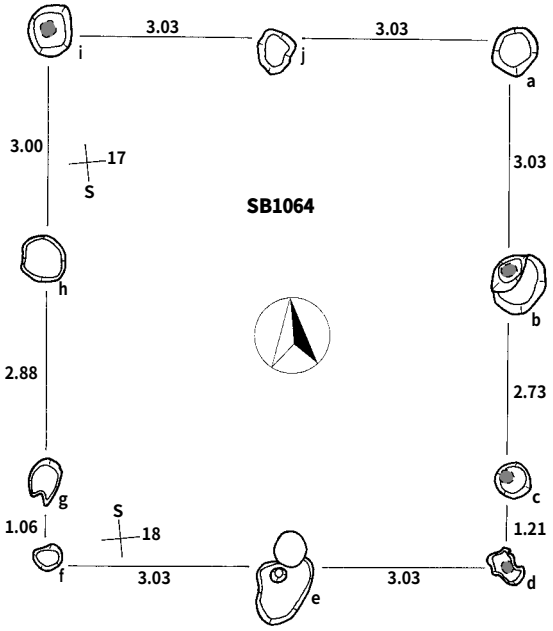
第45図　第５遺構ブロック　S B1059～1062

第46図　第５・６遺構ブロック　遺構配置図



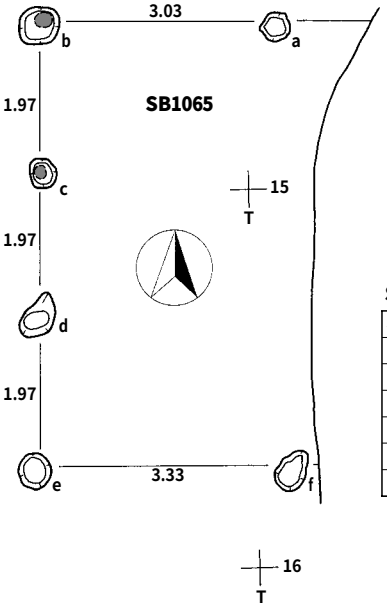
S B1063

番号	深さ	番号	深さ
a	(46)	f	44
b	(43)	g	39
c	(57)	h	29
d	(43)	i	(40)
e	48		



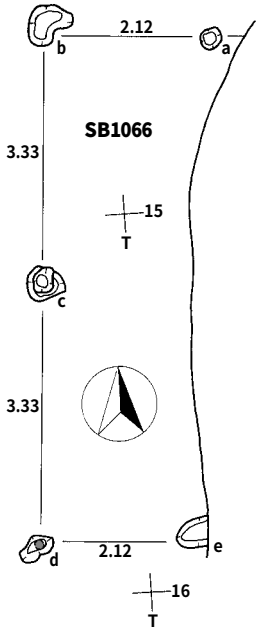
S B1064

番号	深さ
a	(47)
b	20
c	—
d	37
e	(40)
f	(39)
g	(68)
h	(39)
i	51
j	(58)



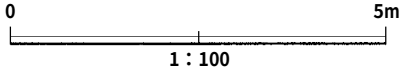
S B1065

番号	深さ
a	(31)
b	19
c	33
d	(44)
e	(62)
f	(39)

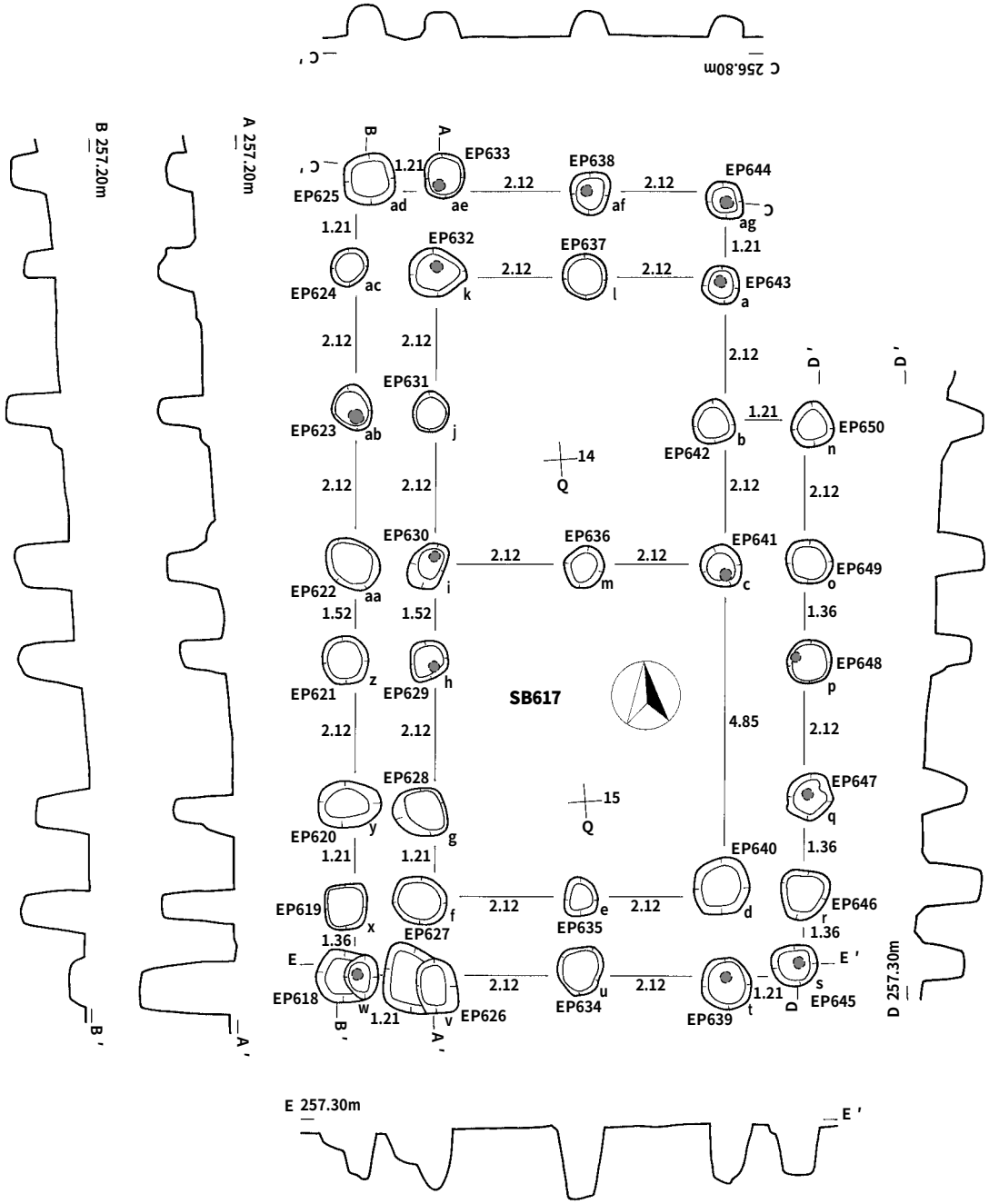


S B1066

番号	深さ
a	(23)
b	(33)
c	(41)
d	20
e	(22)



第47図　第５・６遺構ブロック　ＳＢ1063～1066

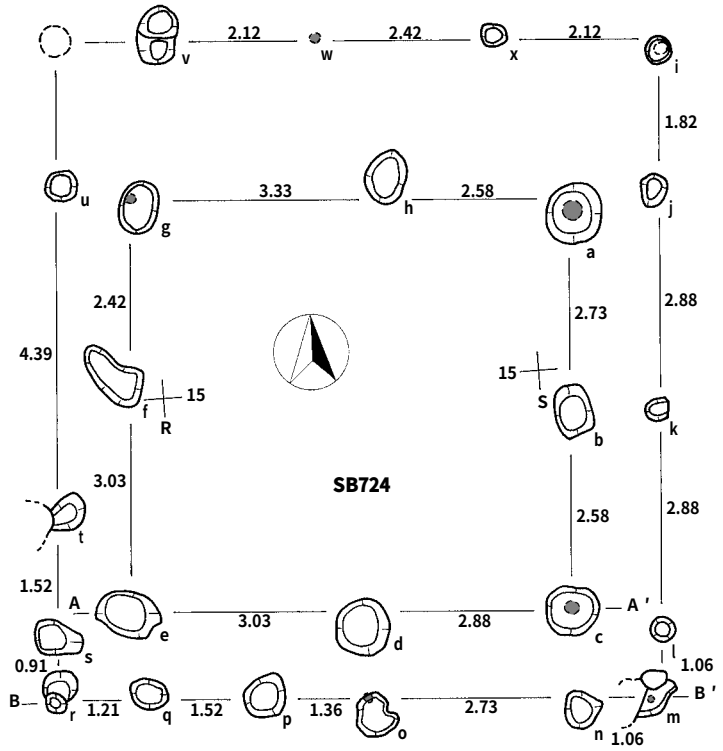


S B617

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
深さ	44	(58)	71	(99)	(88)	(108)	(88)	69	75	(70)	53	(33)	(74)	(54)	(70)	57	58
番号	r	s	t	u	v	w	x	y	z	a a	a b	a c	a d	a e	a f	a g	
深さ	(87)	69	87	(106)	(142)	64	(98)	(81)	(92)	(82)	76	(44)	(54)	39	40	34	

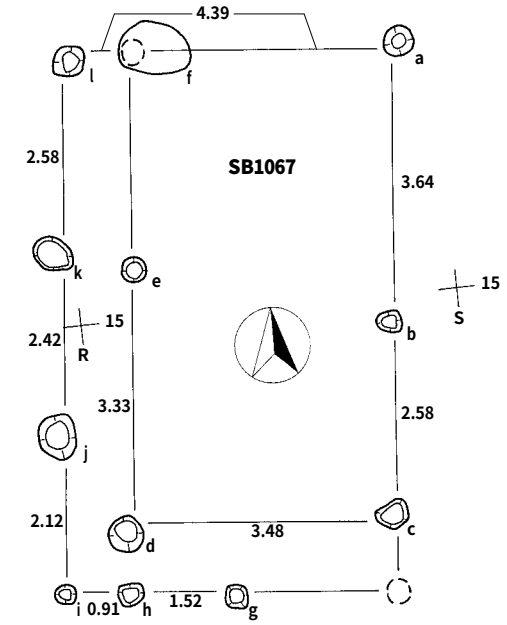
0 5m
1：100

第48図　第６遺構ブロック　S B617



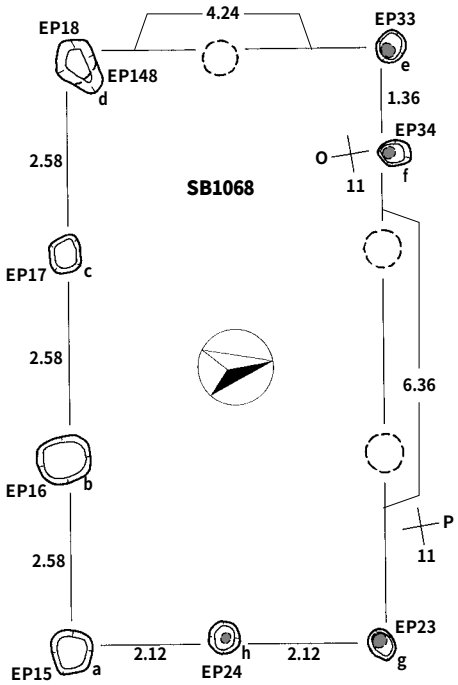
S B724

番号	深さ	番号	深さ
a	64	m	18
b	(65)	n	(63)
c	87	o	49
d	(53)	p	(20)
e	(76)	q	(67)
f	(22)	r	(14)
g	37	s	(43)
h	(10)	t	(16)
i	(18)	u	(26)
j	(27)	v	(29)
k	(30)	w	—
l	—	x	(30)



S B1067

番号	深さ
a	—
b	(25)
c	(17)
d	(14)
e	(5)
f	(23)
g	(24)
h	(21)
i	(25)
j	(24)
k	(14)
l	(37)

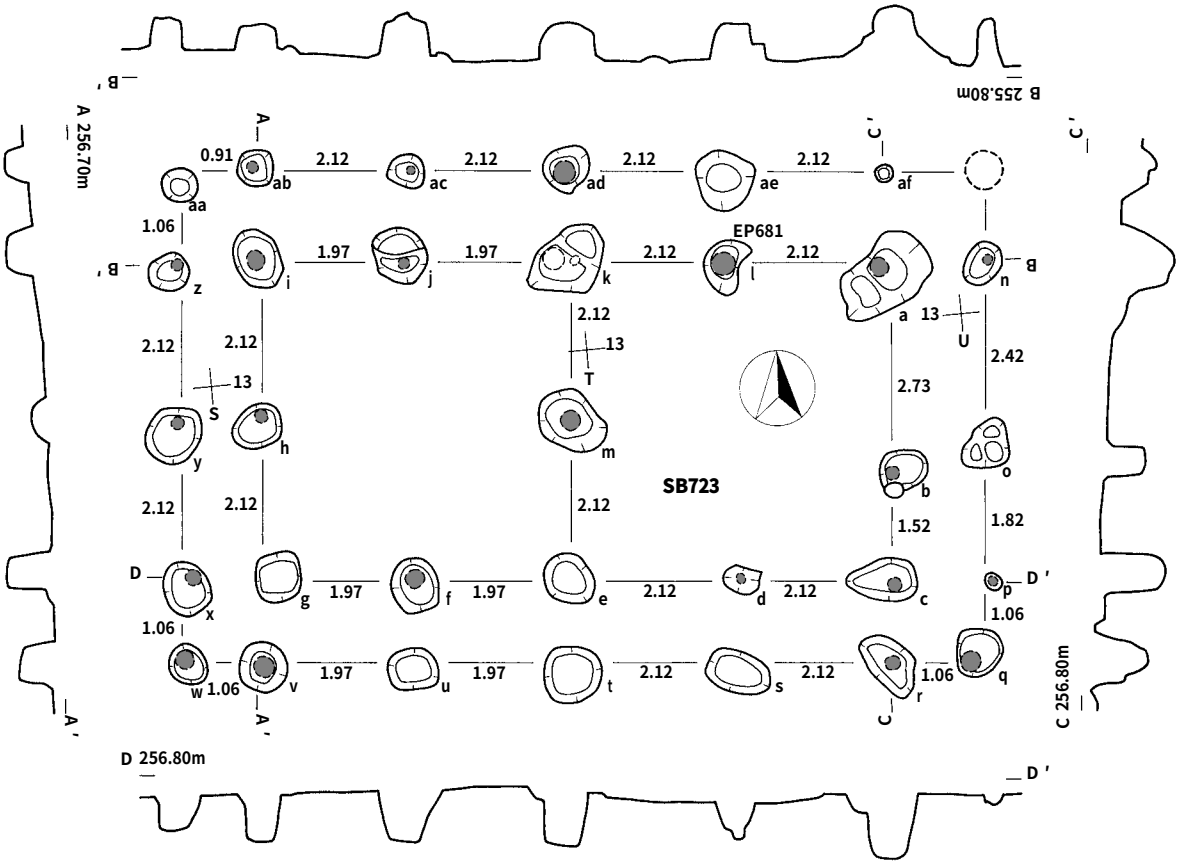


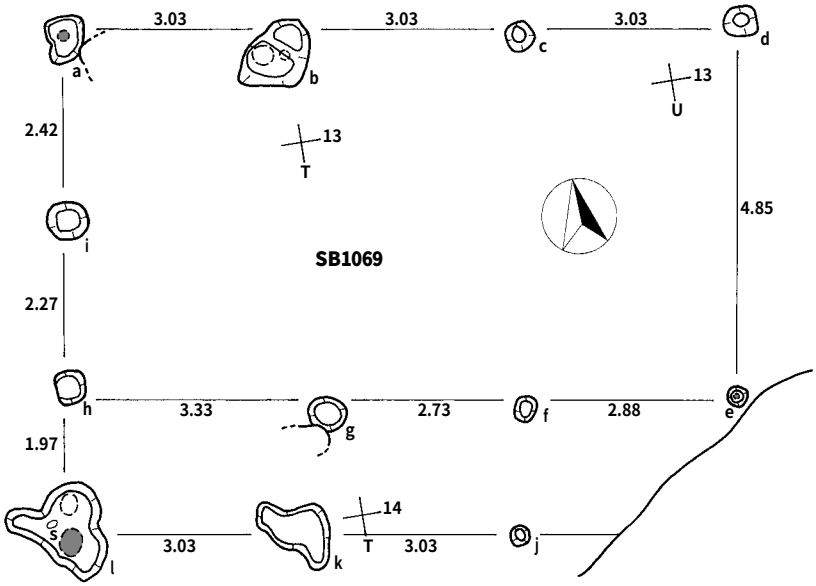
S B1068

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(59)	(61)	(58)	(61)	8	12	7	5

0 5m
1：100

第49図　第６遺構ブロック　ＳＢ724・1067・1068





S B723

番号	深さ	番号	深さ
a	75	q	62
b	54	r	70
c	88	s	(77)
d	—	t	(67)
e	(84)	u	(58)
f	77	v	48
g	(67)	w	41
h	26	x	42
i	35	y	38
j	54	z	59
k	(46)	a a	(34)
l	46	a b	28
m	41	a c	45
n	34	a d	56
o	(68)	a e	(52)
p	14	a f	(39)

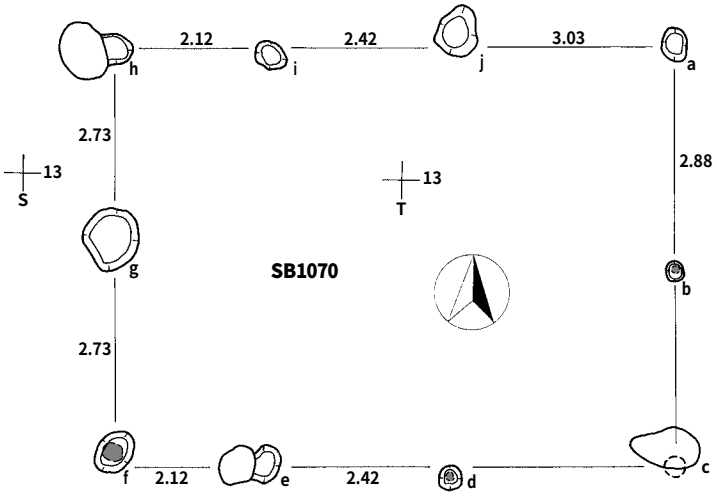
S B1069

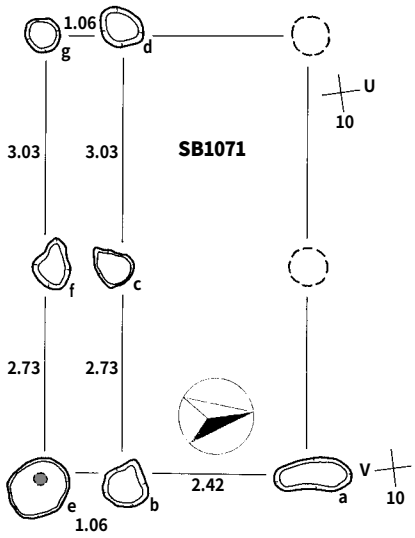
番号	深さ
a	16
b	—
c	(27)
d	—
e	23
f	(23)
g	(25)
h	(47)
i	—
j	(11)
k	(25)
l	48

0 5m

1：100

第50図　第６遺構ブロック　ＳＢ723・1069



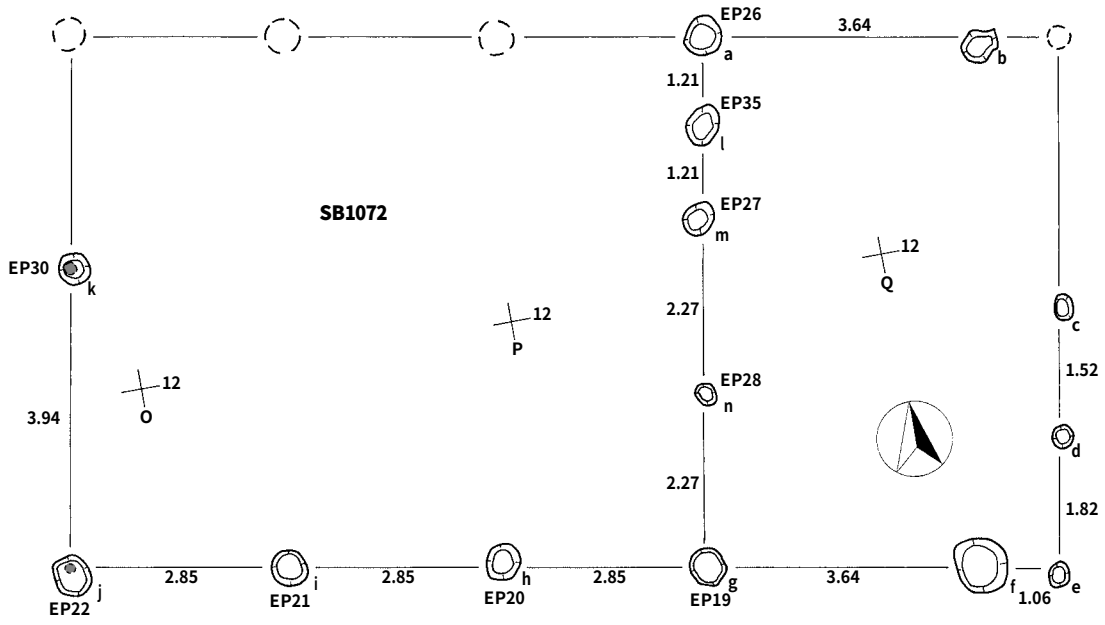


S B1070

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	(12)	14	—	16	(35)	28	(31)	(17)	(25)	(49)

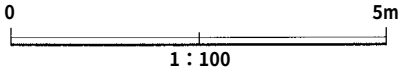
S B1071

番号	a	b	c	d	e	f	g
深さ	(17)	(51)	(41)	(97)	31	(36)	(19)

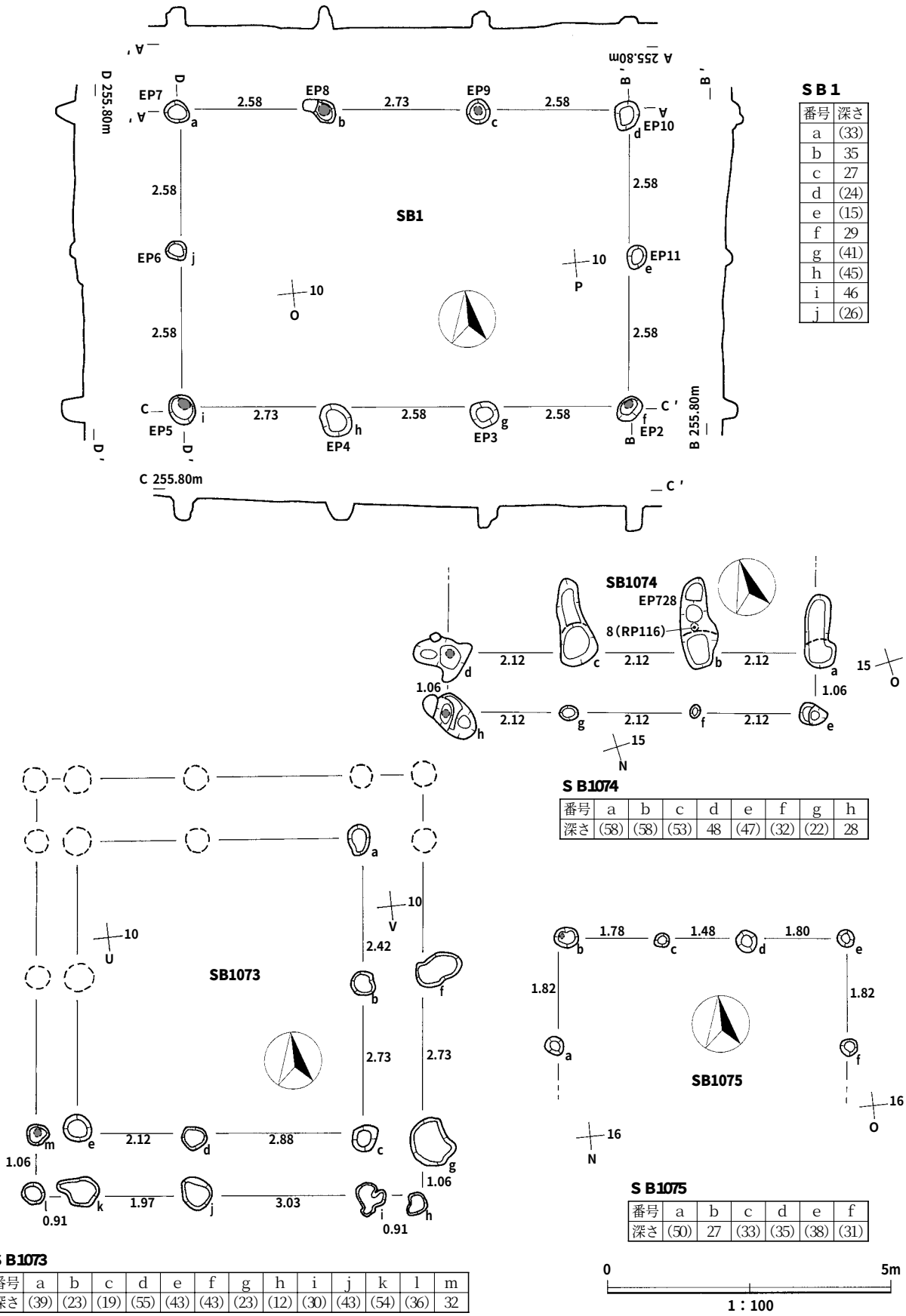


S B1072

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
深さ	(22)	(27)	(20)	(19)	(44)	(69)	(60)	(46)	(51)	44	29	(12)	(41)	(5)



第51図　第６遺構ブロック　S B1070～1072



SB1

番号	深さ
a	(33)
b	35
c	27
d	(24)
e	(15)
f	29
g	(41)
h	(45)
i	46
j	(26)

SB1074

番号	a	b	c	d	e	f	g	h
深さ	(58)	(58)	(53)	48	(47)	(32)	(22)	28

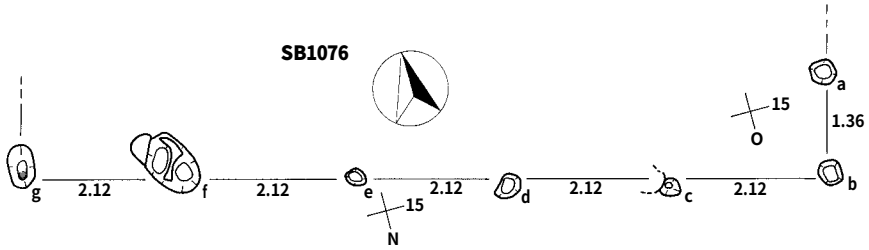
SB1075

番号	a	b	c	d	e	f
深さ	(50)	27	(33)	(35)	(38)	(31)

SB1073

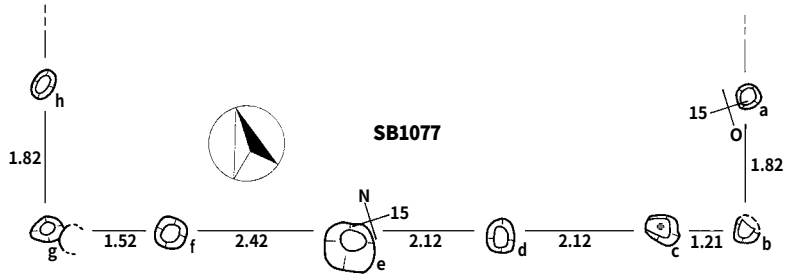
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m
深さ	(39)	(23)	(19)	(55)	(43)	(43)	(23)	(12)	(30)	(43)	(54)	(36)	32

第52図　第６遺構ブロック　ＳＢ１・1073～1075



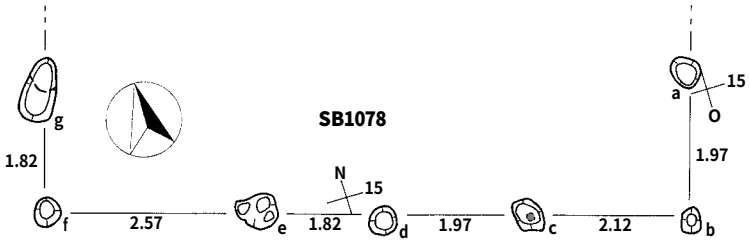
S B1076

番号	深さ
a	(38)
b	(39)
c	(31)
d	(17)
e	(13)
f	(25)
g	29



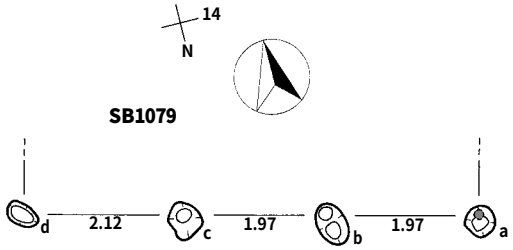
S B1077

番号	深さ
a	(26)
b	—
c	26
d	(54)
e	(12)
f	(60)
g	(42)
h	(27)



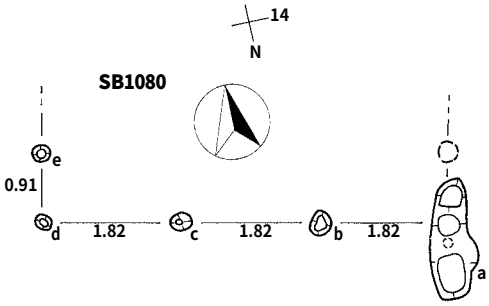
S B1078

番号	深さ
a	(14)
b	(19)
c	48
d	(42)
e	(50)
f	(25)
g	(7)



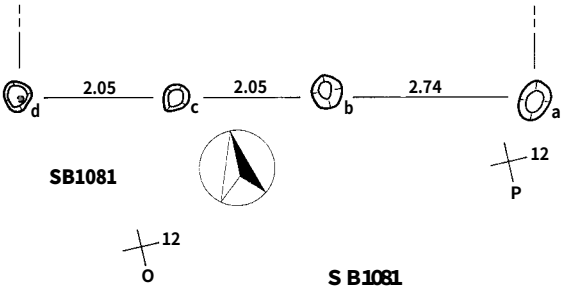
S B1079

番号	a	b	c	d
深さ	29	(42)	(19)	(4)



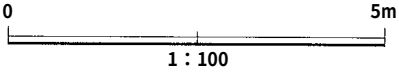
S B1080

番号	a	b	c	d	e
深さ	(70)	(13)	(18)	(13)	(18)

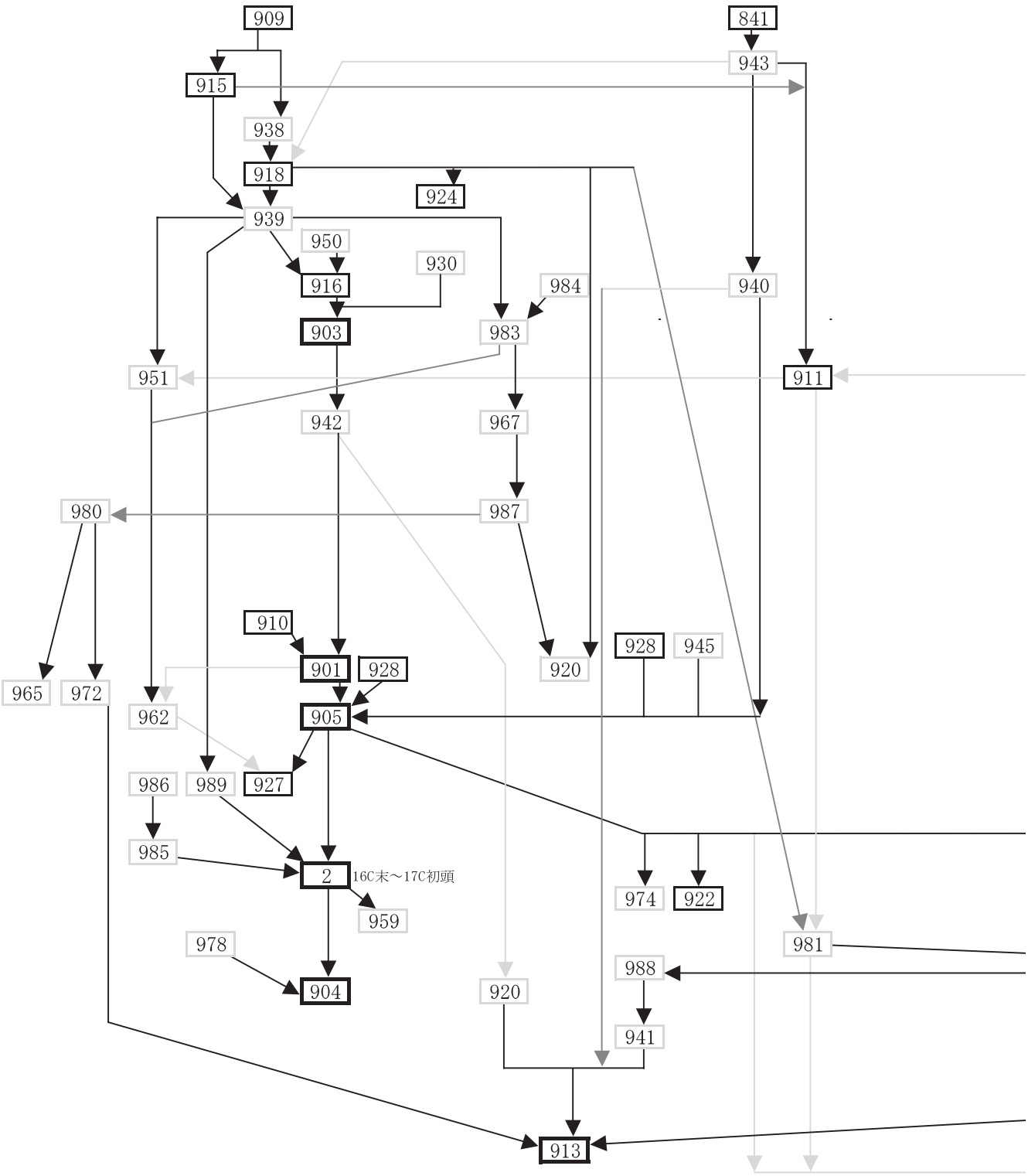


S B1081

番号	a	b	c	d
深さ	—	—	(24)	21



第53図　第６遺構ブロック　ＳＢ1076～1081



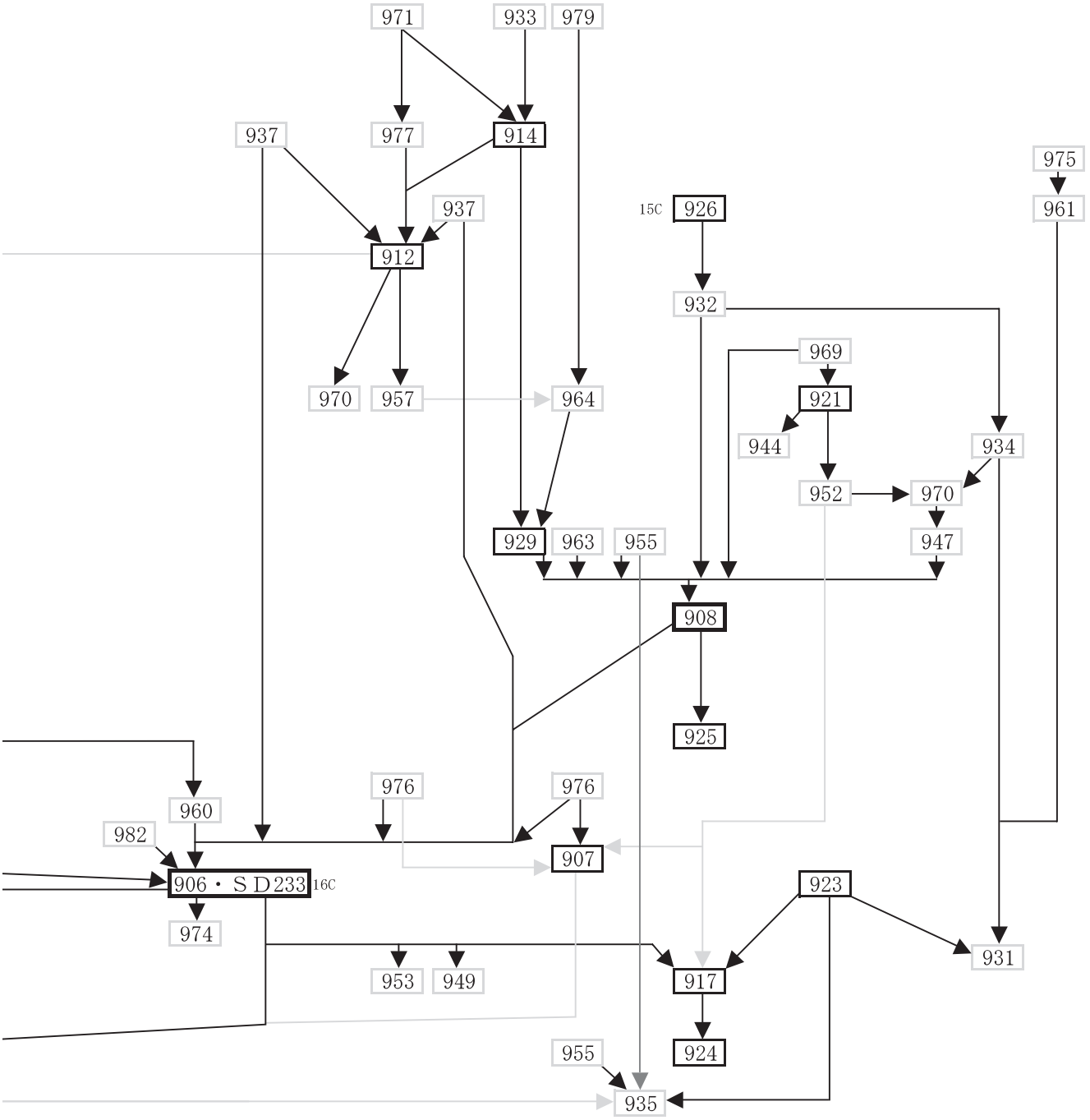
桁行４間以上で梁行が２～３間の大型建物跡

桁行３～４間で桁行２間の中型建物跡

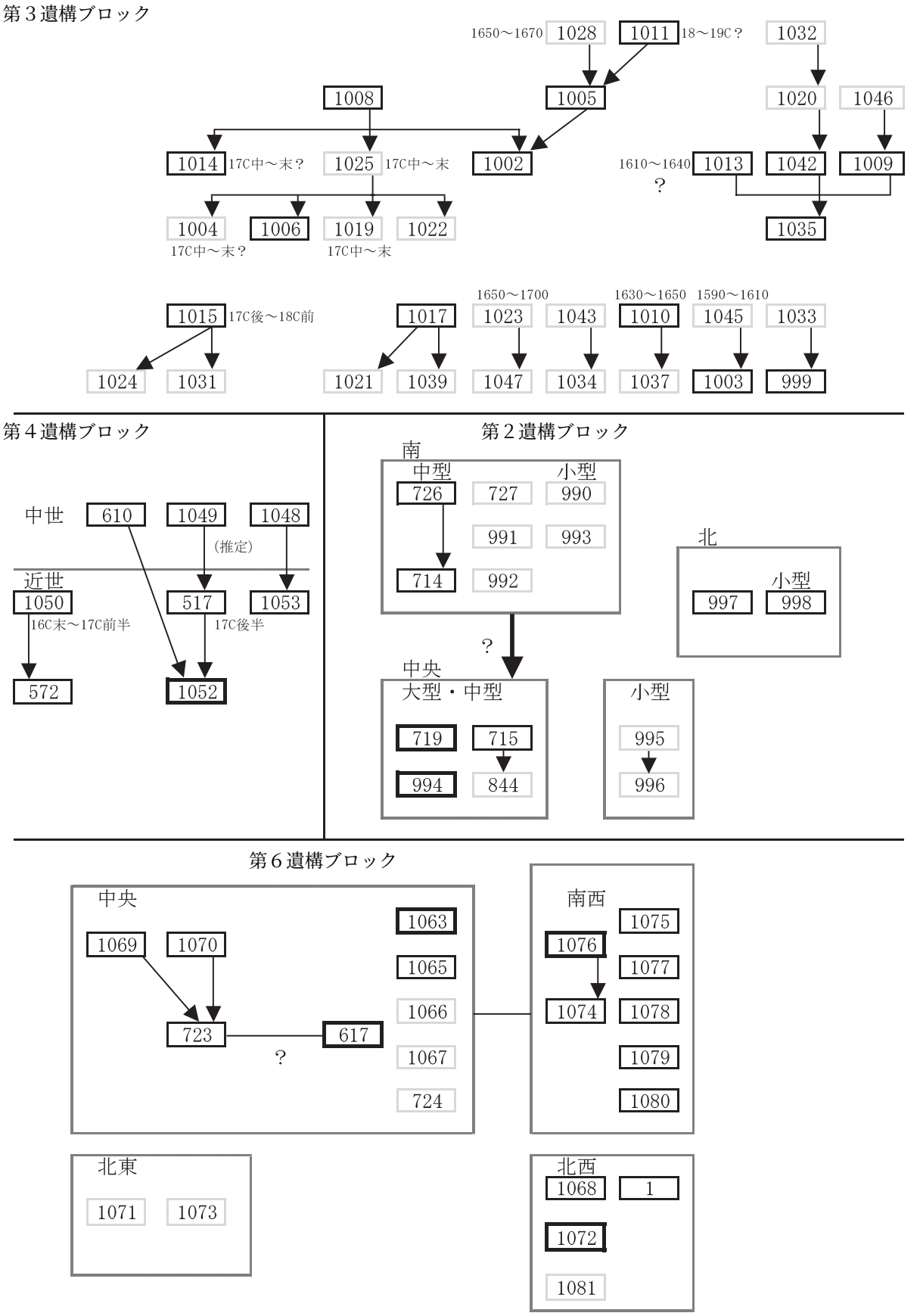
桁行２間×梁行２間、または梁行１間で桁行数間の小型建物跡

※四角は建物跡を示す。数字は遺構番号である。旧→新
　年代は、出土遺物の年代を示している。

第54図　第１遺構ブロック　建物重複関係図１



第55図　第１遺構ブロック　建物重複関係図２



第56図　第２～６遺構ブロック　建物重複関係図

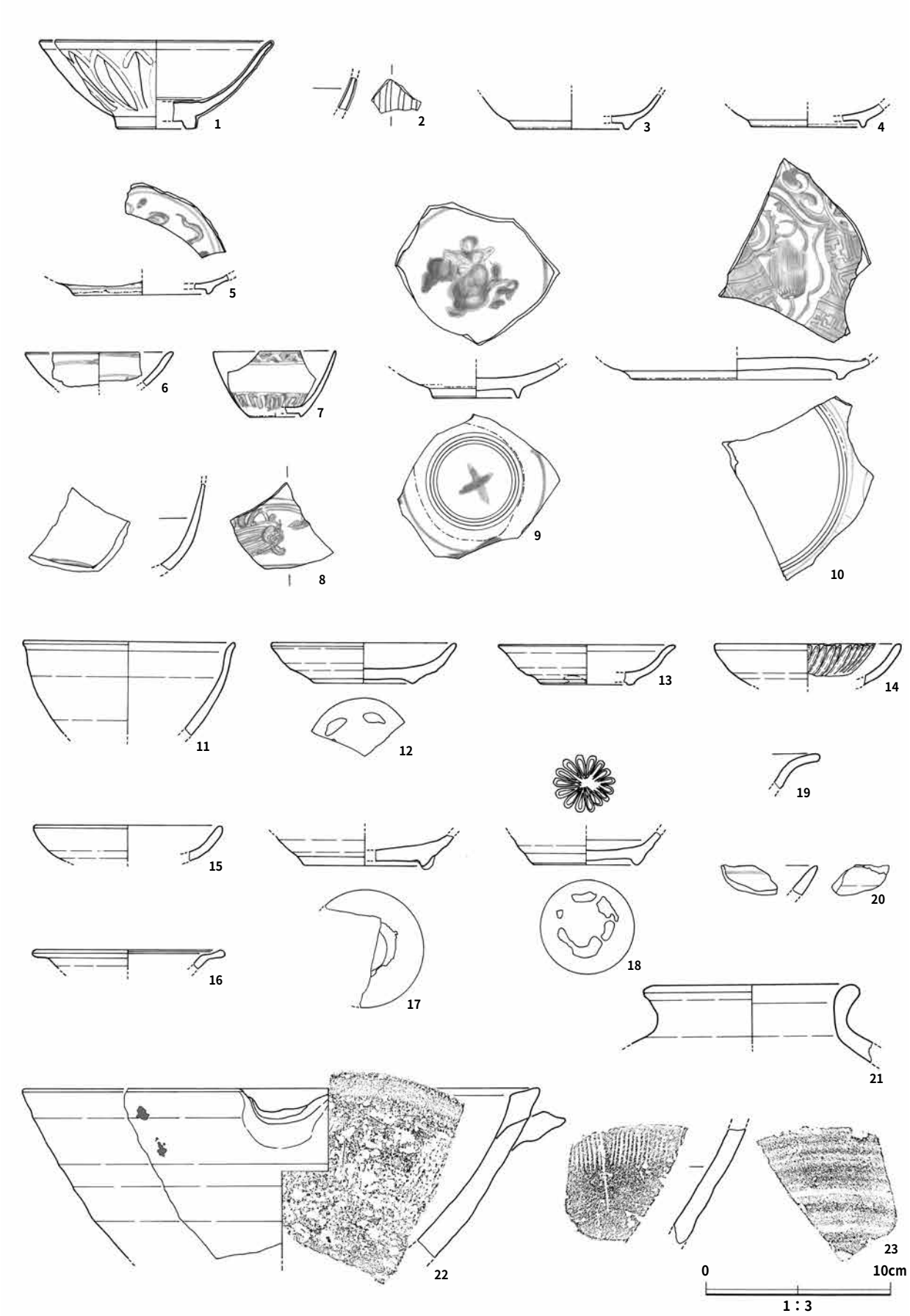
表４　建物跡・柵列観察表

図版	遺構番号	遺構ブロック・グリット		構造 桁行×梁行	構造 庇	規模（m） 桁行×梁行	主軸	新旧関係・（ ）は新旧不明のもの 遺物による時期・（ ）は重複による時期
6	ＳＢ901	1	Ｓ～Ｖ－５～７	４×３間	なし	11.52×6.21	Ｎ－9.0°－Ｅ	910・942→901→905・962（910・922）
6	ＳＡ902	1	Ｕ・Ｖ－５～７	３間	－	9.24	Ｎ－9.0°－Ｅ	なし
7	ＳＢ903	1	Ｒ～Ｕ－５～７	６×２間	１面	16.52×6.81	Ｎ－9.5°－Ｅ	916・930→903→904・913・942・959（２・924・927・962・985・986）
8	ＳＢ２	1	Ｒ～Ｖ－４～８	８×３間	１面	21.69×7.79	Ｎ－8.0°－Ｅ	905・985・989→２→904・959（903・927・928・946・966・986）16Ｃ末～17Ｃ初頭
9	ＳＢ904	1	Ｓ～Ｕ－５～７	４×３間	２面	9.92×9.16	Ｎ－7.0°－Ｅ	２・903・978・→904（916・930・942）15Ｃ末～16Ｃ前半（16Ｃ末～17Ｃ初頭）
9	ＳＢ905	1	Ｒ～Ｕ－５～８	４×３間	２面	12.60×8.09	Ｎ－6.5°－Ｅ	901・927・928・940・945→905→２・906・922・927・935・960・974（910）
10	ＳＢ906	1	Ｑ～Ｓ－４～７	４×３間	１面	14.07×8.04	Ｎ－9.5°－Ｅ	905・908・911・937・940・960・976・981・982→906→974（926・984）16Ｃ
10	ＳＢ907	1	Ｏ～Ｒ－３～５	４×２間	なし	11.82×5.30	Ｎ－1.0°－Ｗ	952・976→907→913（908・926・932・969）
11	ＳＢ908	1	Ｎ～Ｑ－４～６	４×３間	１面	11.52×9.54	Ｎ－9.5°－Ｅ	914・926・929・932・947・955・963・969→908→906・925（907・934・971・986）（15Ｃ以降）
11	ＳＢ909	1	Ｓ～Ｖ－４・５	４×２間	なし	11.22×5.46	Ｎ－5.0°－Ｅ	909→915・938・962・980（910・913・916・920・939・987）
12	ＳＢ910	1	Ｔ～Ｖ－５～７	４×２間	１面	10.61×5.15	Ｎ－9.0°－Ｅ	910→901（905・909・945）
12	ＳＢ911	1	Ｑ～Ｓ－３～５	４×２間	なし	8.93×5.91	Ｎ－11.0°－Ｅ	912・915・943→911→906・951・981（913・917）
12	ＳＢ912	1	Ｏ～Ｑ－４・５	４×２間	１面	10.67×7.17	Ｎ－5.0°－Ｅ	914・937・977→912→911・957・970（924・934）
13	ＳＢ913	1	Ｑ～Ｔ－４・５	６×２間	１面	14.84×5.45	Ｎ－6.5°－Ｅ	903・907・909・915・917・918・920・926・940・941・943・952・972・980・981・987・988・ＳＤ233→913（911・916・947・962・976）（16Ｃ）
13	ＳＢ914	1	Ｏ～Ｑ－３～５	４×２間	なし	10.15×5.45	Ｎ－8.0°－Ｗ	933・971→914→908・912・929（937）
14	ＳＢ915	1	Ｒ～Ｕ－４・５	５×２間	なし	11.51×4.24	Ｎ－2.0°－Ｅ	909→915→911・913・939・962・983（959・967・984）
14	ＳＢ841	1	Ｓ～Ｕ－２～４	３×１間	２面	8.49×7.84	Ｎ－6.0°－Ｅ	841→943→940
14	ＳＢ916	1	Ｓ～Ｕ－４～６	３×２間	１面	9.24×7.37	Ｎ－13.5°－Ｗ	939・950→916→903（904・909・913・918・967・981・987）
15	ＳＢ917	1	Ｑ・Ｒ－４・５	３×２間	１面	7.43×6.66	Ｎ－1.0°－Ｅ	923・952・ＳＤ233→917→913・924（911・941）（16Ｃ）
15	ＳＢ918	1	Ｓ・Ｔ－４・５	３×２間	なし	7.23×5.00	Ｎ－15.0°－Ｗ	938・943→918→913・920・924・939・951・959・981・983（916・940・967・987・989）
15	ＳＢ919	1	Ｓ～Ｕ－８・９	３×２間？	なし	7.88×5.46	Ｎ－19.0°－Ｅ	なし
15	ＳＢ920	1	Ｒ～Ｔ－４・５	２×２間	１面	8.41×6.06	Ｎ－3.5°－Ｅ	918・942・987→920→913（909・980・981）
16	ＳＢ921	1	Ｏ・Ｐ－３～５	３×２間	なし	7.43×6.21	Ｎ－5.0°－Ｅ	969→921→944（931・975）
16	ＳＢ922	1	Ｓ～Ｕ－７・８	３×２間	なし	6.45×4.55	Ｎ－2.5°－Ｅ	905・928→922（901・945）
16	ＳＢ842	1	Ｔ～Ｖ－１・２	４×２間	なし	9.24×4.70	Ｎ－4.0°－Ｅ	なし
16	ＳＢ923	1	Ｏ～Ｑ－５・６	３×２間	なし	7.26×4.54	Ｎ－6.5°－Ｗ	923→917・931・935
17	ＳＢ924	1	Ｑ～Ｓ－４～６	３×２間	なし	6.06×6.21	真北	960→924→917・918・937（903・912・941・943・989）（16Ｃ）
17	ＳＢ925	1	Ｏ・Ｐ－４～６	３×２間	なし	7.27×5.00	Ｎ－2.5°－Ｗ	908・ＳＤ335→925（15Ｃ以降）
17	ＳＢ926	1	Ｐ・Ｑ－４～６	３×２間	なし	6.66×5.15	Ｎ－1.0°－Ｗ	926→908・913・932（906・907・934・947・960）
17	ＳＢ927	1	Ｒ～Ｔ－５～７	３×２間	なし	8.49×6.06	Ｎ－7.5°－Ｗ	905・962→927（２・903・960・981）
17	ＳＢ928	1	Ｓ・Ｔ－７・８	３×２間	なし	6.81×3.56	Ｎ－8.5°－Ｅ	928→905・922（２・974）
18	ＳＢ929	1	Ｎ・Ｏ－４～６	２×２間	１面	8.79×6.13	Ｎ－4.0°－Ｅ	914・964→929→908
18	ＳＢ930	1	Ｓ・Ｔ－７・８	２×２間	なし	5.76×4.84	Ｎ－6.0°－Ｅ	930→903（904）
18	ＳＢ931	1	Ｏ・Ｐ－４・５	２×２間	１面	6.67×5.15	Ｎ－6.5°－Ｅ	923・934・961→931（921・949）（15Ｃ以降）
18	ＳＢ932	1	Ｏ～Ｑ－４・５	２×２間	なし	5.61×4.70	Ｎ－9.5°－Ｅ	926・932→908・934（907・947）15Ｃ以降
18	ＳＢ933	1	Ｐ・Ｑ－３・４	２×２間	なし	4.36×3.79	Ｎ－4.0°－Ｗ	933→914
19	ＳＢ934	1	Ｐ・Ｑ－３～５	２×２間	なし	7.43×6.06	Ｎ－14.0°－Ｗ	932→934→931（908・912・926・969・970）（15Ｃ以降）
19	ＳＢ935	1	Ｐ～Ｒ－５・６	３×１間	１面	9.09×5.30	Ｎ－3.0°－Ｅ	905・923・942・955→935
19	ＳＢ936	1	Ｑ～Ｓ－６～８	２×２間	なし	5.30×5.00	Ｎ－12.5°－Ｅ	（955）
19	ＳＢ937	1	Ｐ・Ｑ－４・５	２×２間	なし	6.81×4.70	Ｎ－6.0°－Ｗ	937→906・912・924・941（914・957・977）
19	ＳＢ938	1	Ｔ・Ｕ－３～５	２×２間	なし	5.76×4.54	Ｎ－13.0°－Ｅ	909・965→938→918・983（939・981）
20	ＳＢ939	1	Ｓ～Ｕ－４・５	３×１間	１面	8.93×4.40	Ｎ－13.0°－Ｅ	915・918→939→916・951・983・989（909・938）
20	ＳＢ940	1	Ｓ・Ｔ－３～６	５×１間	なし	11.97×3.33	Ｎ－11.0°－Ｅ	841・943→940→905・906・913（918）
20	ＳＢ941	1	Ｑ・Ｒ－４～６	４×１間	なし	10.00×3.48	Ｎ－7.0°－Ｗ	937・960・988→941→913（917・924・959）（16Ｃ）

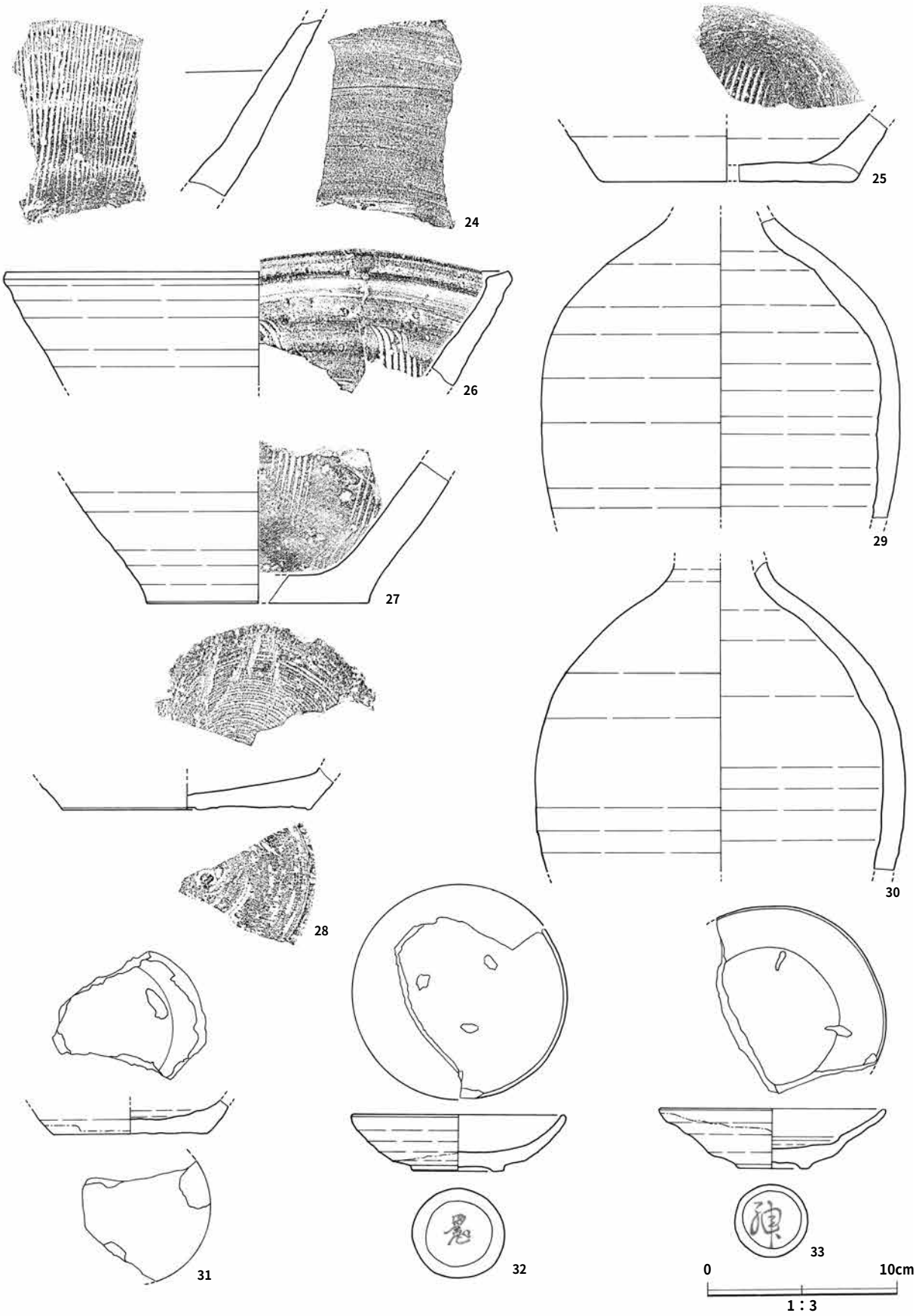
図版	遺構番号	遺構ブロック・グリット		構造 桁行×梁行	規模（m） 底	桁行×梁行	主軸	新旧関係・（ ）は新旧不明のもの 遺物による時期・（ ）は重複による時期
20	ＳＢ942	1	Ｒ～Ｔ－５・６	４×１間	なし	10.15×3.63	Ｎ－10.5°－Ｅ	903→942→901・920・935（904）
20	ＳＢ840	1	Ｏ・Ｐ－２・３	４×１間	なし	7.58×3.79	Ｎ－0.5°－Ｅ	なし
21	ＳＢ943	1	Ｒ～Ｔ－４・５	４×１間	なし	11.06×3.33	Ｎ－10.0°－Ｗ	841・987→943→911・913・918・940（924・950・989）
21	ＳＢ944	1	Ｏ・Ｐ－３・４	３×１間	なし	8.64×4.09	Ｎ－4.5°－Ｅ	921→944
21	ＳＢ945	1	Ｓ・Ｔ－７・８	３×１間	なし	7.92×3.10	Ｎ－6.0°－Ｅ	945→905（910・922）
21	ＳＢ946	1	Ｓ～Ｕ－７・８	３×１間	なし	6.67×3.33	Ｎ－9.5°－Ｅ	（２）
21	ＳＢ947	1	Ｐ・Ｑ－３～５	３×１間	なし	7.26×3.94	Ｎ－6.0°－Ｅ	970→947→908（913・926・932・957）
21	ＳＢ948	1	Ｕ・Ｖ－７・８	２×１間	なし	5.54×2.12	Ｎ－9.5°－Ｅ	なし　16Ｃ末～17Ｃ前半
5青	ＳＢ949	1	Ｐ・Ｑ－５・６	３×１間	なし	6.67×2.42	Ｎ－2.0°－Ｗ	ＳＤ233→949（931）（16Ｃ）
5青	ＳＢ950	1	Ｔ～Ｖ－４・５	３×１間	なし	6.67×3.03	Ｎ－0.5°－Ｅ	950→916（943・967）
5青	ＳＢ951	1	Ｓ・Ｔ－３～５	３×１間	なし	8.48×2.96	Ｎ－3.0°－Ｅ	911・918・939→951→962
5青	ＳＢ952	1	Ｐ・Ｑ－３・４	２×１間	なし	4.84×2.26	Ｎ－20.0°－Ｅ	917・921→952→907・913・917・970（944・961）
5青	ＳＢ953	1	Ｐ～Ｒ－５・６	３×１間	なし	7.88×2.42	Ｎ－8.0°－Ｅ	ＳＤ233→953（16Ｃ）
5青	ＳＢ954	1	Ｒ－７・８	２×１間	なし	3.28×2.48	Ｎ－2.5°－Ｅ	なし
5青	ＳＢ955	1	Ｐ～Ｒ－６・７	３×１間	なし	7.82×3.48	Ｎ－13.0°－Ｗ	955→908・935（936・968・ＳＤ233）
5青	ＳＢ956	1	Ｐ・Ｑ－５・６	３×１間	なし	6.74×2.58	Ｎ－2.0°－Ｅ	なし
5青	ＳＢ957	1	Ｏ～Ｑ－３・４	２×１間	なし	6.78×2.14	Ｎ－17.0°－Ｅ	912・977→957→908・964（937・947）
5青	ＳＢ958	1	Ｍ・Ｎ－５・６	２×１間	なし	4.24×2.73	Ｎ－8.0°－Ｅ	なし
5青	ＳＢ959	1	Ｑ～Ｓ－５	３×１間	なし	7.88×3.42	Ｎ－4.0°－Ｅ	２・903・918・989→959（915・941・976）（16Ｃ末～17Ｃ初頭）
5青	ＳＢ960	1	Ｑ～Ｓ－５・６	３×１間	なし	6.36×2.32	Ｎ－12.5°－Ｅ	905→960→906・924・941（926・927・985・986）
5青	ＳＢ961	1	Ｏ～Ｑ－３・４	３×１間	なし	7.70×3.94	Ｎ－10.0°－Ｅ	975→961→931（952）
5青	ＳＢ962	1	Ｓ・Ｔ－４～６	３×１間	なし	6.00×2.73	Ｎ－35.0°－Ｗ	901・909・915・951・983→962→927（903・913）
5青	ＳＢ963	1	Ｐ・Ｑ－５・６	３×１間	なし	8.06×3.26	Ｎ－4.5°－Ｗ	908→963（968・983）
5青	ＳＢ964	1	Ｏ－３・４	２×１間	なし	4.24×2.58	Ｎ－4.0°－Ｗ	957・979→964→929
5青	ＳＢ965	1	Ｔ～Ｖ－４	４×１間	なし	9.70×2.94	Ｎ－1.5°－Ｅ	980→965（938）
5赤	ＳＢ966	1	Ｖ・Ｗ－６・７	２×１間	なし	4.66×3.20	Ｎ－10.0°－Ｅ	（２）
5青	ＳＢ967	1	Ｓ～Ｕ－４～６	３×１間	なし	8.48×2.42	Ｎ－28.5°－Ｅ	983→967→987（916・918・950）
5青	ＳＢ968	1	Ｏ～Ｒ－６・７	４×１間	なし	11.90×3.18	Ｎ－0.5°－Ｅ	（955・963・ＳＤ233）
5青	ＳＢ969	1	Ｏ～Ｑ－４・５	４×２間	なし	8.94×3.03	Ｎ－3.0°－Ｅ	969→908・921（907・934・976）
5青	ＳＢ970	1	Ｐ・Ｑ－３・４	２×１間	なし	5.12×1.74	Ｎ－25.0°－Ｅ	912・934・952→970→947（15Ｃ以降）
5青	ＳＢ971	1	Ｑ－３・４	２×１間	なし	4.70×2.00	Ｎ－2.0°－Ｗ	971→914・977（908）
5青	ＳＢ972	1	Ｒ～Ｔ－４・５	４×１間	なし	9.80×2.86	Ｎ－13.5°－Ｗ	980→972→913（989）
5青	ＳＢ973	1	Ｕ～Ｗ－５・６	４×１間	なし	9.39×3.03	Ｎ－8.5°－Ｅ	なし
5青	ＳＢ974	1	Ｒ・Ｓ－７	２×１間	なし	4.54×2.04	Ｎ－4.5°－Ｅ	905・906→974（928）（16Ｃ）
5青	ＳＢ975	1	Ｎ・Ｏ－３・４	３×１間	なし	5.45×3.33	Ｎ－15.0°－Ｅ	975→961（921・944）
5青	ＳＢ976	1	Ｑ・Ｒ－４～６	４×１間	なし	10.00×3.18	Ｎ－1.0°－Ｅ	976→906・907（959・969・989）
5青	ＳＢ977	1	Ｐ・Ｑ－３・４	２×１間	なし	4.84×3.33	Ｎ－26.0°－Ｅ	912・957・971→977→（937）
5青	ＳＢ978	1	Ｒ・Ｓ－６・７	３×１間	なし	6.90×2.26	Ｎ－1.0°－Ｅ	978→904
5青	ＳＢ979	1	Ｏ－３・４	２×１間	なし	5.20×3.18	Ｎ－2.0°－Ｅ	979→964
5青	ＳＢ980	1	Ｓ～Ｕ－３・４	４×１間	なし	7.50×3.80	Ｎ－1.5°－Ｅ	909・987→980→913・965・972（920）
5青	ＳＢ981	1	Ｓ・Ｔ－５	３×１間	なし	7.28×2.42	Ｎ－13.0°－Ｗ	911・918→981→906・913（916・920・927・938）
5青	ＳＢ982	1	Ｐ～Ｒ－５・６	４×１間	なし	10.46×2.73	Ｎ－3.0°－Ｅ	ＳＤ233→982→906（963）
5青	ＳＢ983	1	Ｓ～Ｕ－４・５	３×１間	なし	8.40×2.18	Ｎ－13.0°－Ｅ	915・918・938・939・984→983→962・967
5青	ＳＢ984	1	Ｒ～Ｔ－４・５	４×１間	なし	9.76×2.52	Ｎ－12.0°－Ｅ	984→983→915（906）
5青	ＳＢ985	1	Ｑ～Ｓ－５・６	３×１間	なし	7.66×2.73	Ｎ－1.5°－Ｅ	986→２→985→903（960）
5青	ＳＢ986	1	Ｐ～Ｒ－５・６	３×１間	なし	8.18×3.03	Ｎ－12.0°－Ｅ	986→985（２・903・908・960）
5青	ＳＢ987	1	Ｒ～Ｔ－４・５	３×１間	なし	8.02×3.03	Ｎ－4.0°－Ｅ	967→987→913・918・920・943・959・980（909・916・989）
5青	ＳＢ988	1	Ｑ～Ｒ－５・６	３×１間	なし	7.66×3.64	Ｎ－0.5°－Ｅ	ＳＤ233→988→913・941（16Ｃ）
5青	ＳＢ989	1	Ｒ～Ｔ－４・５	４×１間	なし	9.38×3.33	Ｎ－2.0°－Ｗ	939→989→２・959（918・924・943・972・976・987）
24	ＳＢ714	2	Ｊ～Ｌ－５～７	３×２間	２面	11.90×7.68	Ｎ－7.5°－Ｅ	726→714
24	ＳＢ990	2	Ｉ・Ｊ－６・７	２×１間	２面	6.66×4.55	Ｎ－5°－Ｅ	なし

図版	遺構番号	遺構ブロック・グリット		構造 桁行×梁行	庇	規模（m） 桁行×梁行	主軸	新旧関係・（ ）は新旧不明のもの 遺物による時期・（ ）は重複による時期
25	ＳＢ726	2	Ｊ～Ｌ－５～７	３×２間	３面	10.39×6.21	Ｎ－７°－Ｅ	726→714
25	ＳＢ727	2	Ｊ～Ｌ－５・６	３×１間	２面	8.19×6.00	Ｎ－8.5°－Ｅ	なし
26	ＳＢ991	2	Ｊ～Ｌ－５～７	４×１間	１面	12.72×6.21	Ｎ－5.5°－Ｅ	なし
26	ＳＢ992	2	Ｊ～Ｌ－５～７	３×１間	なし	7.88×5.45	Ｎ－9.5°－Ｅ	なし
26	ＳＢ993	2	Ｌ・Ｍ－６・７	２×１間	１面	4.54×4.70	Ｎ－5.0°－Ｅ	ＳＤ685→993
27	ＳＢ719	2	Ｉ～Ｌ－４～６	５×２間	３面	16.85×9.44	Ｎ－4.0°－Ｅ	（994）
28	ＳＢ994	2	Ｈ～Ｋ－４～６	５×２間	２面	15.92×6.51	Ｎ－8.5°－Ｅ	（714）
28	ＳＢ995	2	Ｋ・Ｌ－３・４	２×１間	１面	6.36×3.63	Ｎ－0.5°－Ｅ	995→996
28	ＳＢ996	2	Ｋ・Ｌ－３・４	２×１間	なし	5.45×3.48	Ｎ－1.0°－Ｗ	995→996
29	ＳＢ715	2	Ｈ～Ｋ－３・４	４×２間	なし	11.97×7.58	Ｎ－1.0°－Ｗ	715→844
29	ＳＢ997	2	Ｋ～Ｍ－１・２	３×１間	なし	5.56×3.94	Ｎ－9.0°－Ｅ	なし
30	ＳＢ844	2	Ｋ～Ｍ－３・４	２×２間	３面	7.57×8.03	Ｎ－1.0°－Ｅ	715→844
30	ＳＢ998	2	Ｌ・Ｍ－０～２	２×２間	なし	9.09×4.54	Ｎ－7.0°－Ｅ	なし
31	ＳＢ999	3	Ｇ～Ｊ－12・13	４×２間	１面	11.36×7.12	Ｎ－4.0°－Ｅ	1033→999（ＳＸ551）
31	ＳＢ1000	3	Ｉ～Ｋ－13・14	４×２間	なし	11.51×5.61	Ｎ－14.0°－Ｅ	なし　16～17Ｃ
32	ＳＢ1001	3	Ｈ～Ｋ－10～12	４×２間	なし	11.96×5.15	Ｎ－12.0°－Ｅ	（1002・1009・1033）
32	ＳＢ1002	3	Ｈ～Ｊ－12～14	３×２間	なし	10.00×6.36	Ｎ－8.0°－Ｗ	1005・1008・ＳＸ551→1002（1001・1007・1025・1028・1037・1046・1055）1610～1640年代（18～19Ｃ）
32	ＳＢ1003	3	Ｇ・Ｈ－10～12	３×２間	なし	7.88×4.54	Ｎ－16.5°－Ｅ	1045→1003（1017・1039）（1590～1610年代）
33	ＳＢ1004	3	Ｈ～Ｊ－12～14	２×２間	１面	7.88×7.57	Ｎ－17.5°－Ｅ	1025→1004（1005・1007・1011・1014・1015・1037）17Ｃ中～末？
33	ＳＢ1005	3	Ｇ～Ｉ－12～14	４×２間	なし	9.69×4.54	Ｎ－9.0°－Ｅ	1011・1028→1005→1002（1004）1640～1660年代（18～19Ｃ）
33	ＳＢ1006	3	Ｇ～Ｉ－11～13	３×２間	なし	8.33×6.51	Ｎ－8.0°－Ｗ	1025→1006(1008・1011・1046)(17Ｃ中～末)
33	ＳＢ1007	3	Ｉ・Ｊ－12・13	２×２間	１面	5.45×5.91	Ｎ－7.5°－Ｅ	（1002・1004・1008・1014・1015・1025・1037）17Ｃ中～末
34	ＳＢ1008	3	Ｇ～Ｉ－11～14	３×２間	なし	9.40×7.88	Ｎ－15.5°－Ｅ	1008→1002・1014・1025（1006・1007・1011・1019・1039）
34	ＳＢ1009	3	Ｊ・Ｋ－11～13	３×２間	１面	6.66×6.52	Ｎ－17.5°－Ｗ	1046→1009→1035　（1001・1013・1042）
34	ＳＢ1010	3	Ｇ・Ｈ－12・13	３×２間	なし	7.28×3.94	Ｎ－4.5°－Ｗ	1010→1037　1630～1650年代
35	ＳＢ1011	3	Ｇ・Ｈ－12～14	４×２間	なし	9.54×5.15	Ｎ－8.5°－Ｅ	ＳＸ551→1011→1005（1004・1006・1008・1045）18～19Ｃ？
35	ＳＢ1012	3	Ｊ～Ｌ－10・11	３×３間	なし	6.52×5.46	Ｎ－8.0°－Ｅ	（1013）1610～1640年代
35	ＳＢ1013	3	Ｊ～Ｌ－10～12	３×２間	１面	7.88×6.21	Ｎ－8.0°－Ｅ	1013→1035（1009・1012）1610～1640年代
35	ＳＢ1014	3	Ｈ～Ｊ－11・12	３×２間	なし	8.03×5.76	Ｎ－9.0°－Ｅ	1008→1014→ＳＫ606（1004・1007・1015・1030）17Ｃ中～末？
36	ＳＢ1015	3	Ｉ～Ｋ－12～14	３×２間	なし	8.19×6.06	Ｎ－19.5°－Ｅ	1015→1024・1031（1004・1007・1014・1016・1023・1041）17Ｃ後半～18Ｃ前半
36	ＳＢ1016	3	Ｊ～Ｌ－12・13	３×２間	なし	7.72×4.84	Ｎ－7.0°－Ｅ	（1015・1023）江戸時代
36	ＳＢ1017	3	Ｈ・Ｉ－10～12	３×２間	なし	7.57×3.33	Ｎ－11.0°－Ｅ	1017→1021・1039（1003）
36	ＳＢ1018	3	Ｊ・Ｋ－11・12	３×２間	なし	7.28×4.7	Ｎ－11.5°－Ｗ	（1046）
36	ＳＢ1019	3	Ｈ～Ｊ－13・14	２×２間	なし	6.66×4.24	Ｎ－23.0°－Ｅ	1025・ＳＸ551→1019（1008）17Ｃ中～末
37	ＳＢ1020	3	Ｊ・Ｋ－11・12	２×２間	なし	5.01×4.09	Ｎ－4.0°－Ｅ	1032→1020→1042
37	ＳＢ1021	3	Ｈ・Ｉ－11・12	２×２間	なし	4.54×4.39	Ｎ－10.0°－Ｗ	1017→1021（1014・1030）
37	ＳＢ1022	3	Ｉ～Ｌ－13・14	４×１間	１面	10.62×4.39	Ｎ－1.0°－Ｅ	1025→1022（1028）（17Ｃ中～末）
37	ＳＢ1023	3	Ｊ～Ｌ－12～14	３×１間	１面	10.75×4.01	Ｎ－12.5°－Ｅ	1023→1047（1015・1016・1041）1650～1700年代
37	ＳＢ1024	3	Ｊ～Ｌ－13・14	３×１間	なし	9.69×2.88	Ｎ－8.0°－Ｗ	1015→1024（17Ｃ後半～18Ｃ前半）
38	ＳＢ1025	3	Ｈ～Ｊ－13・14	３×１間	なし	9.09×3.03	Ｎ－18.5°－Ｅ	1008→1025→1004・1006・1019・1022（1002・1007・1028）17Ｃ中～末
38	ＳＢ1026	3	Ｋ・Ｌ－11・12	３×１間	なし	7.27×2.73	Ｎ－6.0°－Ｗ	（1046）
38	ＳＢ1027	3	Ｋ・Ｌ－12～14	３×１間	なし	8.18×2.58	Ｎ－0.5°－Ｅ	（1046）
38	ＳＢ1028	3	Ｈ～Ｊ－13・14	３×１間	なし	8.79×3.33	Ｎ－15.0°－Ｅ	ＳＸ551→1028→1005（1002・1022・1025）1650～1670年代
38	ＳＢ1029	3	Ｊ～Ｌ－14・15	３×１間	なし	8.34×3.40	Ｎ－11.0°－Ｅ	なし
38	ＳＢ1030	3	Ｈ・Ｉ－11・12	３×１間	なし	5.46×2.73	Ｎ－7.5°－Ｗ	（1014）
39	ＳＢ1031	3	Ｋ・Ｌ－12～14	３×１間	なし	9.08×2.42	Ｎ－26.0°－Ｅ	1015→1031（17Ｃ後半～18Ｃ前半）
39	ＳＢ1032	3	Ｉ～Ｋ－11・12	３×１間	なし	6.36×2.12	Ｎ－15.0°－Ｅ	1032→1020
39	ＳＢ1033	3	Ｉ・Ｊ－11・12	２×１間	なし	4.84×1.97	Ｎ－23.0°－Ｅ	1033→999（1001）
39	ＳＢ1034	3	Ｋ・Ｌ－11・12	２×１間	なし	4.66×3.03	Ｎ－22.5°－Ｗ	1043→1034

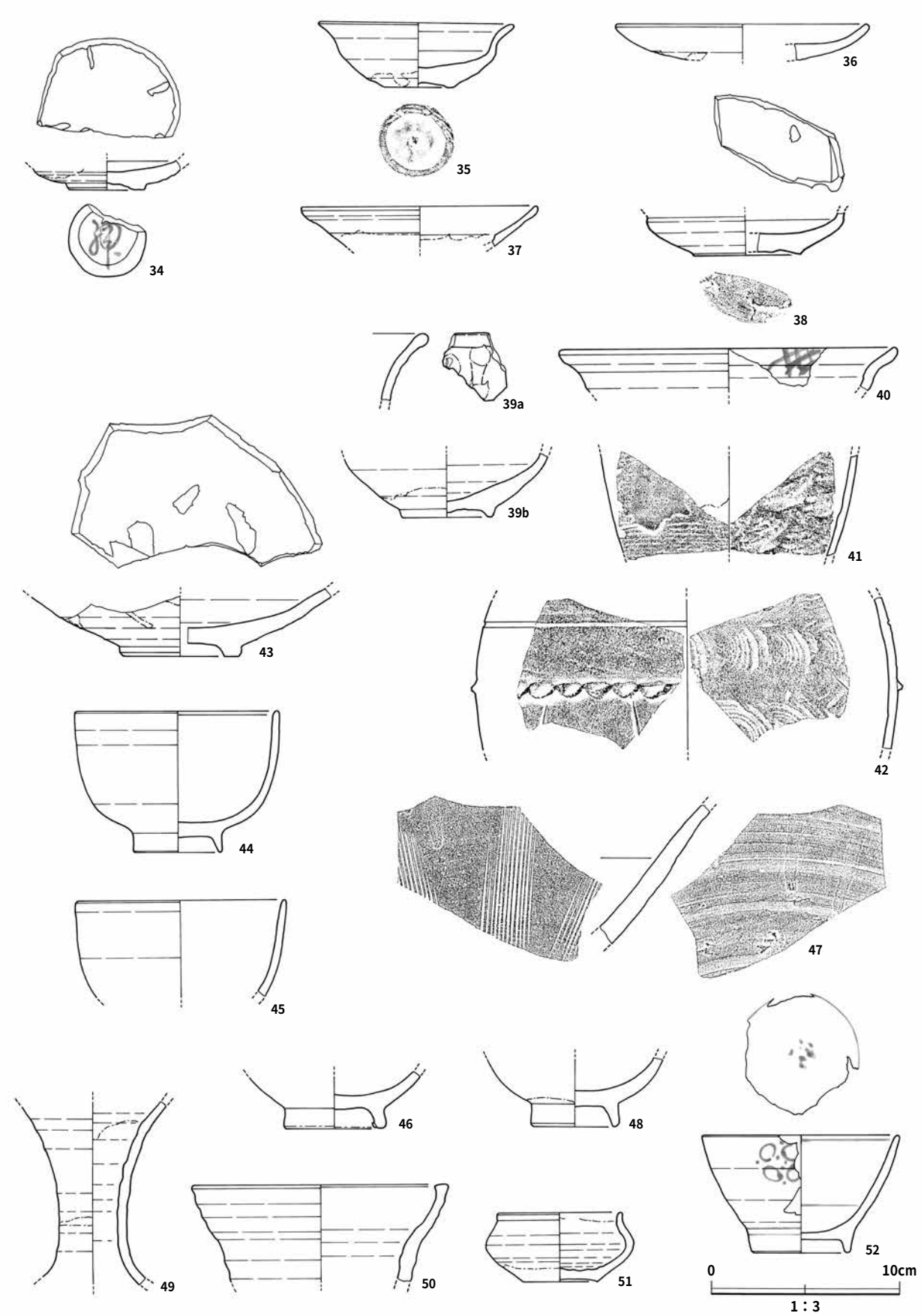
図版	遺構番号	遺構ブロック・グリット		構造 桁行×梁行	構造 庇	規模（m） 桁行×梁行	主軸	新旧関係・（ ）は新旧不明のもの 遺物による時期・（ ）は重複による時期
39	ＳＢ1035	3	Ｋ・Ｌ－11・12	6×1間以上	なし	5.46×	Ｎ－6.0°－Ｅ	1009・1013・1042→1035（1610～1640年代）
23赤	ＳＢ1036	3	Ｇ・Ｈ－10～12	3×1間	なし	7.27×3.03	Ｎ－1.5°－Ｅ	なし
23赤	ＳＢ1037	3	Ｇ～Ｉ－12・13	3×1間	なし	8.48×2.58	Ｎ－11.5°－Ｗ	1010→1037（1002・1004・1007）（1630～1650年代）
23赤	ＳＢ1038	3	Ｋ・Ｌ－12・13	2×1間	なし	4.48×2.36	Ｎ－11.5°－Ｅ	なし
23赤	ＳＢ1039	3	Ｈ－11・12	2×1間	なし	4.85×2.42	Ｎ－6.0°－Ｗ	1017→1039（1003・1008）
23赤	ＳＢ1040	3	Ｋ・Ｌ－10～12	3×1間	なし	8.27×2.42	Ｎ－5.5°－Ｅ	なし
23赤	ＳＢ1041	3	Ｊ～Ｌ－13・14	3×2間	なし	7.42×4.17	Ｎ－13.0°－Ｅ	（1015・1023）
23赤	ＳＢ1042	3	Ｊ・Ｋ－11・12	2×2間	なし	5.46×4.84	Ｎ－0.5°－Ｗ	1020→1042→1035（1009）
23赤	ＳＢ1043	3	Ｋ・Ｌ－12～14	4×1間	なし	7.27×2.88	Ｎ－32.0°－Ｅ	1043→1034
23赤	ＳＢ1044	3	Ｉ・Ｊ－11・12	3×1間	なし	5.31×2.73	Ｎ－23.0°－Ｗ	なし
23赤	ＳＢ1045	3	Ｇ・Ｈ－11・12	2×1間	なし	5.15×3.03	Ｎ－21.0°－Ｅ	1045→1003（1011）1590～1610年代　第59図37 肥前陶器皿出土
23赤	ＳＢ1046	3	Ｉ～Ｋ－11～13	3×1間	なし	14.12×4.85	Ｎ－5.0°－Ｗ	1046→1009（1002・1006・1018・1026・1027）
23赤	ＳＢ1047	3	Ｊ・Ｋ－11・12	3×1間	なし	7.27×2.27	Ｎ－24.0°－Ｅ	1023→1047（1650～1700年代）
40	ＳＢ610	4	Ｆ～Ｉ－15～17	4×2間	3面	12.94×7.88	Ｎ－7.0°－Ｅ	610→1052
41	ＳＢ1048	4	Ｇ～Ｉ－15～17	3×2間	2面	10.37×6.14	Ｎ－11.5°－Ｅ	1048→1053
41	ＳＢ1049	4	Ｇ～Ｊ－15～17	3×2間	3面	10.01×6.06	Ｎ－10.0°－Ｅ	1049→517・1052　15Ｃ
41	ＳＢ572	4	Ｉ・Ｊ－17・18	3×2間	なし	5.72×3.94	Ｎ－4.5°－Ｗ	1050→572　1590～1630年代
41	ＳＢ1050	4	Ｉ・Ｊ－17・18	3×2間	なし	5.87×3.94	Ｎ－1.0°－Ｅ	1050→572
42	ＳＢ517	4	Ｈ～Ｊ－15・16	4×2間	なし	9.08×4.84	Ｎ－12.5°－Ｅ	1049→517→1052　17Ｃ後半
42	ＳＢ1051	4	Ｉ～Ｋ－16～18	3×1間	なし	8.79×2.73	Ｎ－7.0°－Ｅ	なし
43	ＳＢ1052	4	Ｈ～Ｊ－15・16	4×3間	なし	9.08×6.66	Ｎ－13.0°－Ｅ	610・517→1052　17Ｃ後半
43	ＳＢ1053	4	Ｆ～Ｈ－14～16	3×2間	なし	7.43×4.54	Ｎ－27.0°－Ｅ	ＳＤ515・1048→1053
43	ＳＢ1054	4	Ｉ～Ｋ－18・19	3×2間以上	なし	7.42×	Ｎ－8.0°－Ｅ	なし
44	ＳＢ1055	4	Ｈ～Ｊ－14～16	4×2間	なし	8.48×5.16	Ｎ－17.5°－Ｅ	ＳＤ515→1055
44	ＳＢ1056	4	Ｈ～Ｊ－14・15	3×2間以上	1面	6.37×	Ｎ－14.0°－Ｅ	なし
44	ＳＢ1057	4	Ｊ・Ｋ－15・16	2×1間	なし	4.39×2.27	Ｎ－5.5°－Ｅ	なし
44	ＳＢ1058	4	Ｊ・Ｋ－16・17	2×1間	なし	5.76×2.73	Ｎ－9.5°－Ｅ	なし
45	ＳＢ1059	5	Ｓ・Ｔ－18～20	3×2間以上	1面	10.30×	Ｎ－3.0°－Ｅ	（1062）1590～1620年代
45	ＳＢ1060	5	Ｒ～Ｔ－19・20	3以上×1間	なし	[7.88]×3.64	Ｎ－5.0°－Ｅ	なし　18Ｃ中葉～末葉
45	ＳＢ1061	5	Ｓ・Ｔ－18～20	3×2間以上	なし	8.33×	Ｎ－7.0°－Ｅ	なし
45	ＳＢ1062	5	Ｒ・Ｓ－17・18	3×1間	なし	5.46×4.90	Ｎ－7.0°－Ｅ	（1059）
47	ＳＢ1063	6	Ｓ・Ｔ－13～16	6×2間以上	なし	11.80×	Ｎ－2.5°－Ｅ	なし
47	ＳＢ1064	5	Ｒ～Ｔ－16～18	3×2間	なし	6.97×6.06	Ｎ－6.0°－Ｅ	なし
47	ＳＢ1065	6	Ｓ・Ｔ－14・15	3×2間以上	なし	5.91×	Ｎ－1.5°－Ｅ	なし
47	ＳＢ1066	6	Ｓ・Ｔ－14・15	2×2間？	なし	6.66×	Ｎ－4.5°－Ｅ	なし
48	ＳＢ617	6	Ｐ・Ｑ－13～15	5×2間	4面	11.51×6.66	Ｎ－4.0°－Ｅ	なし
49	ＳＢ724	6	Ｑ～Ｓ－13～15	2×2間	4面	8.34×8.03	Ｎ－4.0°－Ｅ	なし
49	ＳＢ1067	6	Ｑ・Ｒ－14・15	2×1間	2面	7.13×4.39	Ｎ－5.0°－Ｅ	なし
49	ＳＢ1068	6	Ｎ～Ｐ－10～12	3×2間	なし	7.74×4.24	Ｎ－10.0°－Ｅ	なし
50	ＳＢ723	6	Ｒ～Ｕ－12・13	4×2間	4面	10.45×6.51	Ｎ－5.0°－Ｅ	1069・1070→723
50	ＳＢ1069	6	Ｓ～Ｕ－12～14	3×2間	1面	9.09×6.66	Ｎ－9.5°－Ｅ	1069→723
51	ＳＢ1070	6	Ｓ・Ｔ－12・13	3×2間	なし	7.57×5.46	Ｎ－1.5°－Ｗ	1070→723
51	ＳＢ1071	6	Ｔ～Ｖ－10・11	2×1間？	1面	5.78×	Ｎ－8.0°－Ｅ	なし
51	ＳＢ1072	6	Ｎ～Ｑ－11・12	5×3間？	なし	13.25×6.96	Ｎ－10.0°－Ｅ	なし
52	ＳＢ１	6	Ｎ～Ｐ－９・10	3×2間	なし	7.89×5.16	Ｎ－6.0°－Ｅ	なし
52	ＳＢ1073	6	Ｔ～Ｖ－９～11	2×2間	4面？（南・東）	6.21×6.82	Ｎ－6.0°－Ｅ	なし
52	ＳＢ1074	6	Ｍ・Ｎ－14・15	3間×	1面	6.36×	Ｎ－17.0°－Ｅ	1076→1074
52	ＳＢ1075	6	Ｍ・Ｎ－15	3×2間以上	なし	5.06×	Ｎ－7.0°－Ｅ	なし
53	ＳＢ1076	6	Ｍ～Ｏ－14・15	5×2間以上	なし	10.60×	Ｎ－15.0°－Ｅ	1076→1074
53	ＳＢ1077	6	Ｍ～Ｏ－14・15	5×1間以上	なし	9.39×	Ｎ－17.5°－Ｅ	（1078）
53	ＳＢ1078	6	Ｍ～Ｏ－14・15	4×2間以上	なし	8.48×	Ｎ－17.0°－Ｅ	（1077）
53	ＳＢ1079	6	Ｍ・Ｎ－14	3間×	なし	6.06×	Ｎ－15.5°－Ｅ	なし
53	ＳＢ1080	6	Ｍ・Ｎ－14・15	3×2間以上	なし	5.46×	Ｎ－13.0°－Ｅ	（1074）
53	ＳＢ1081	6	Ｎ～Ｐ－11	3間×	なし	6.84×	Ｎ－13.0°－Ｅ	なし



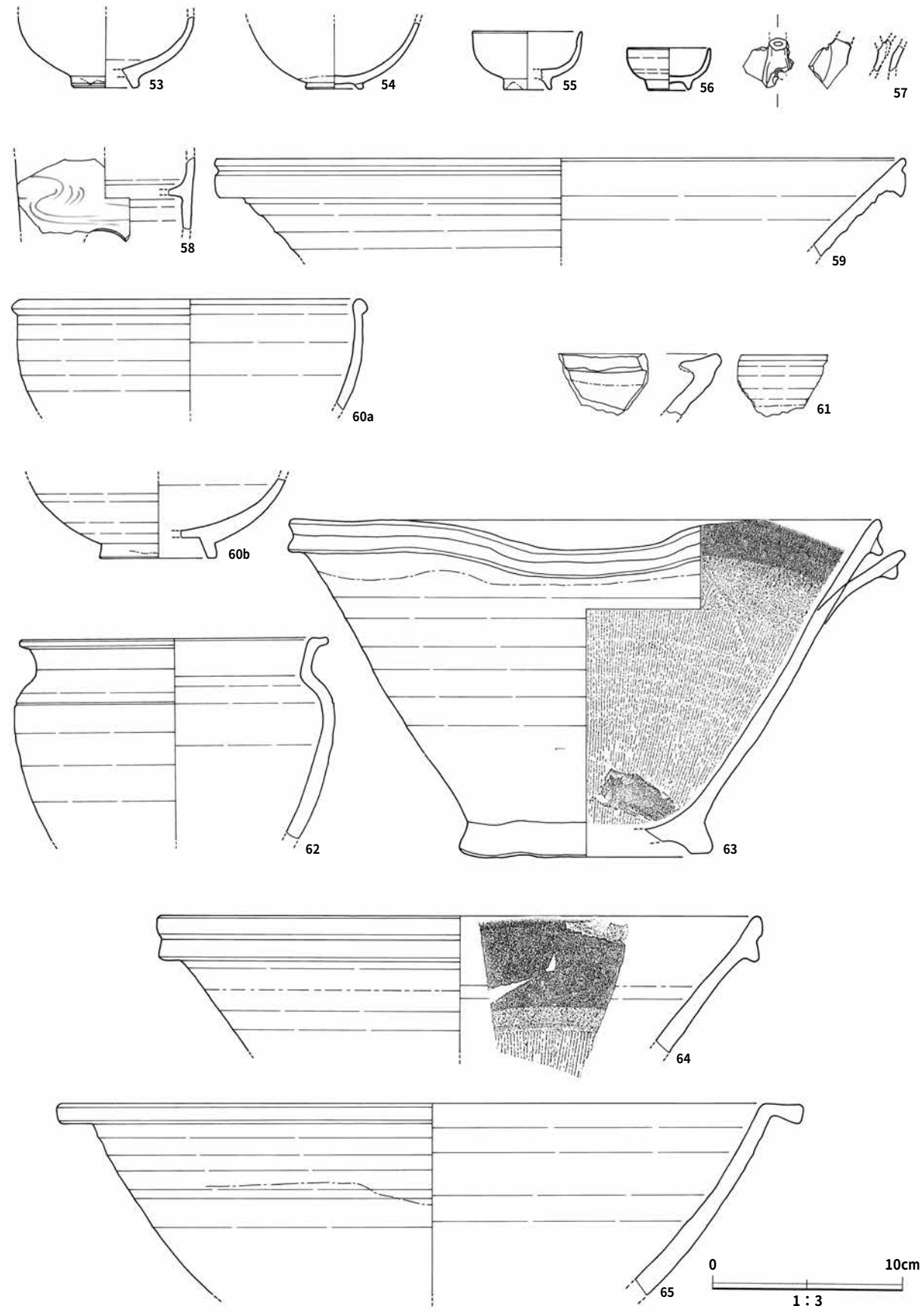
第57図　青磁・白磁・青花・瀬戸美濃系陶器・珠洲



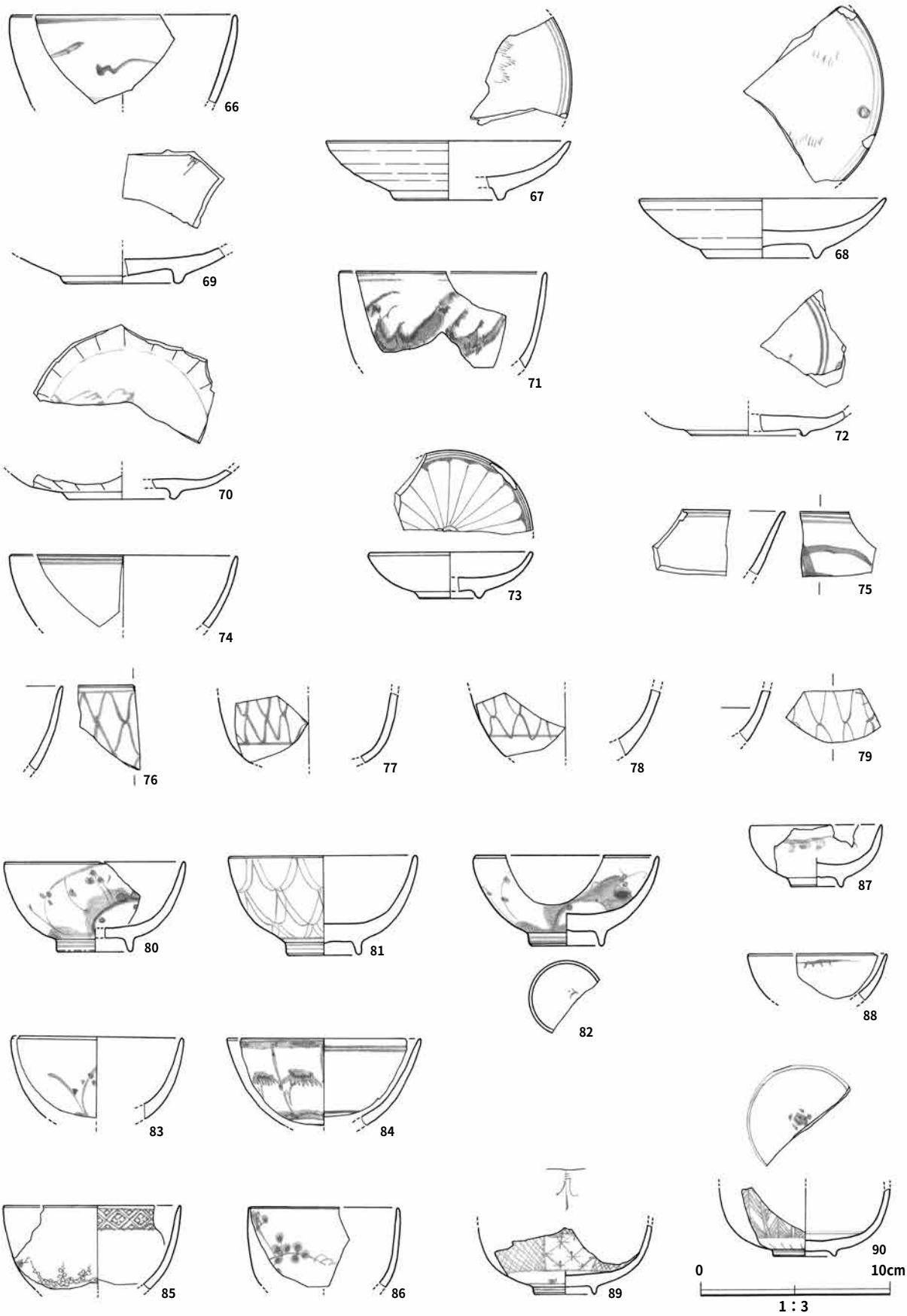
第58図　珠洲・戸長里・肥前系陶器他



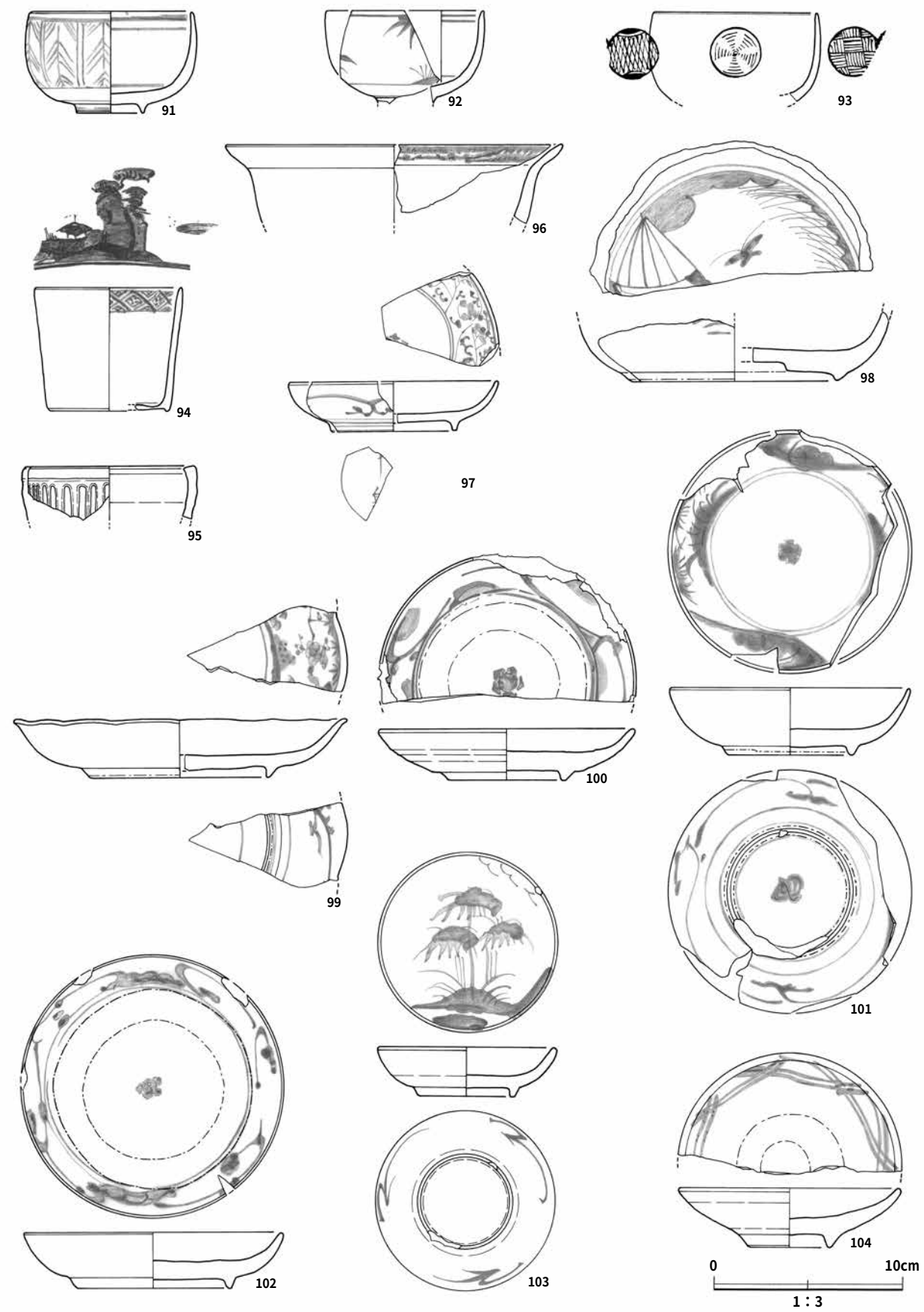
第59図　肥前系陶器・瀬戸美濃系陶器他



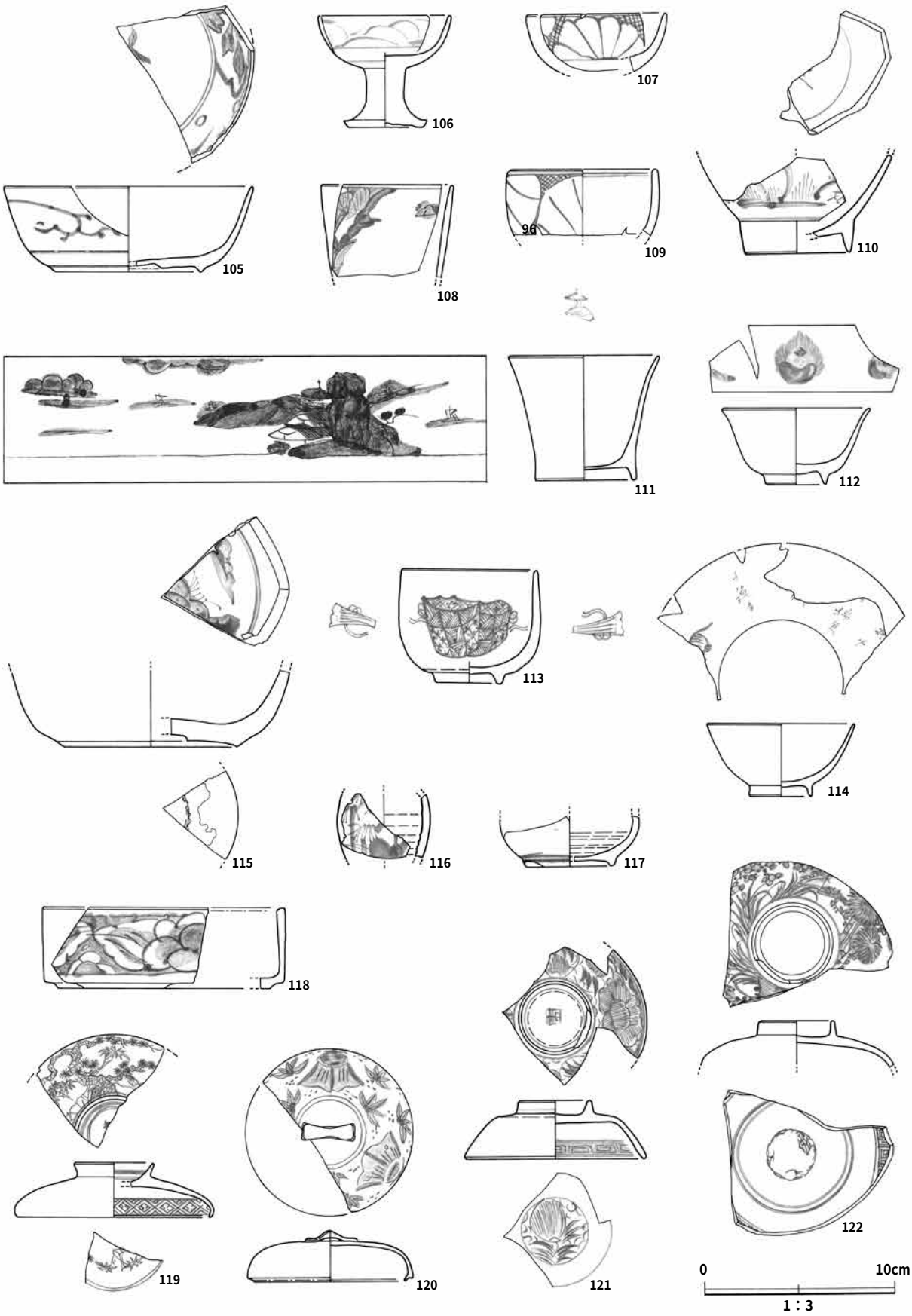
第60図　在地系陶器他


66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
0
10cm
1：3

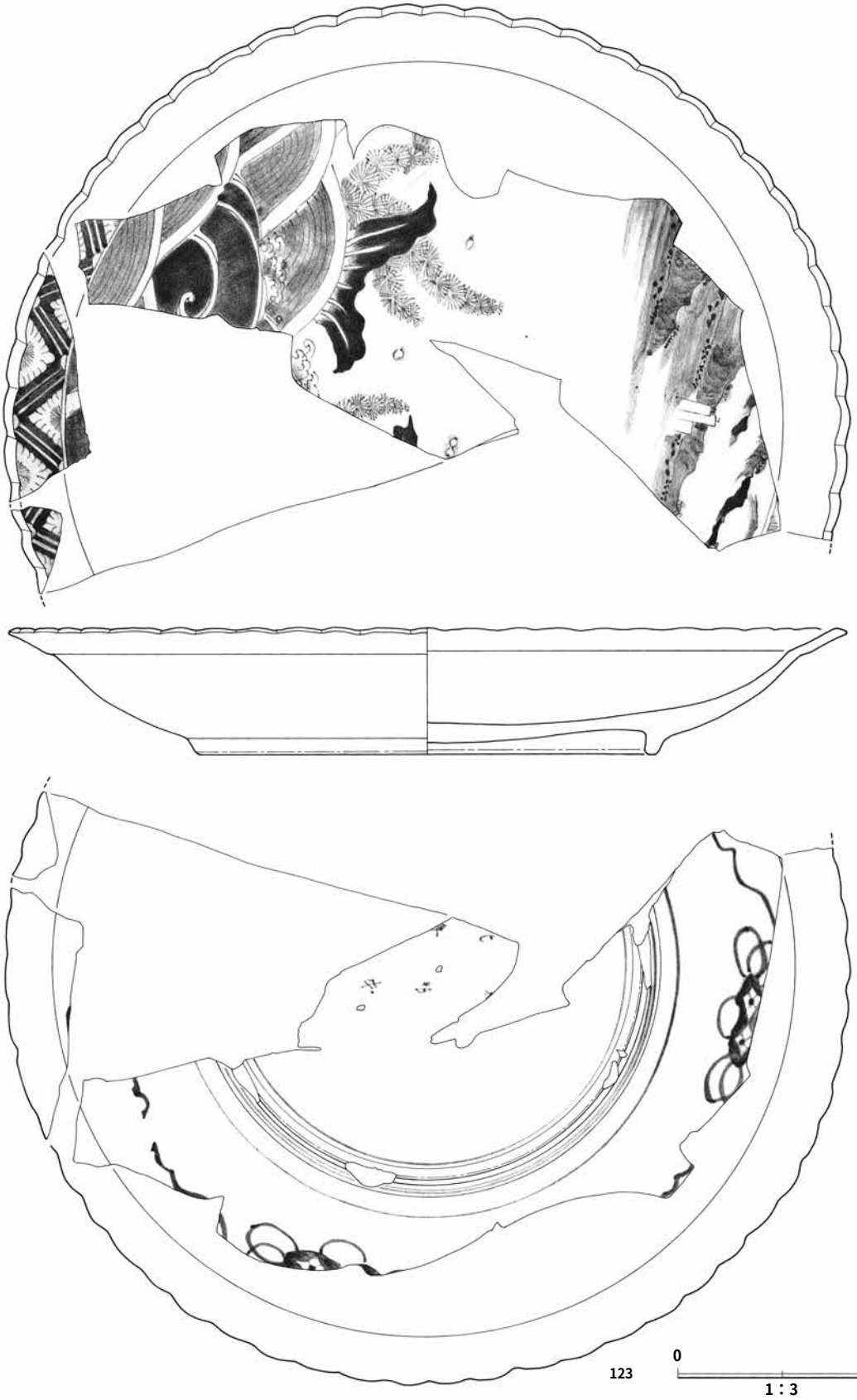
第61図　肥前系磁器



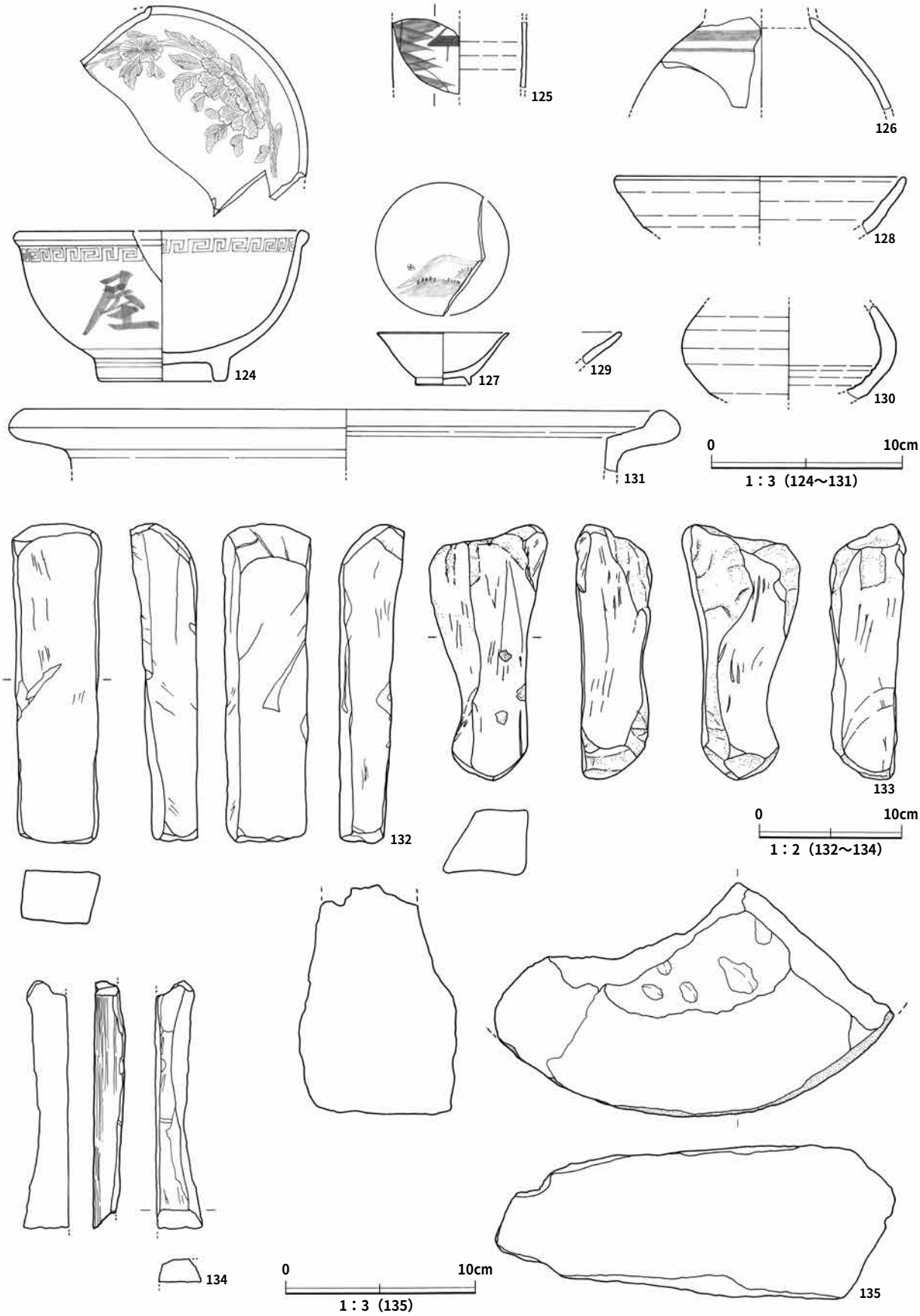
第62図　肥前系磁器


106
107
105
108
96
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
0
10cm
1：3

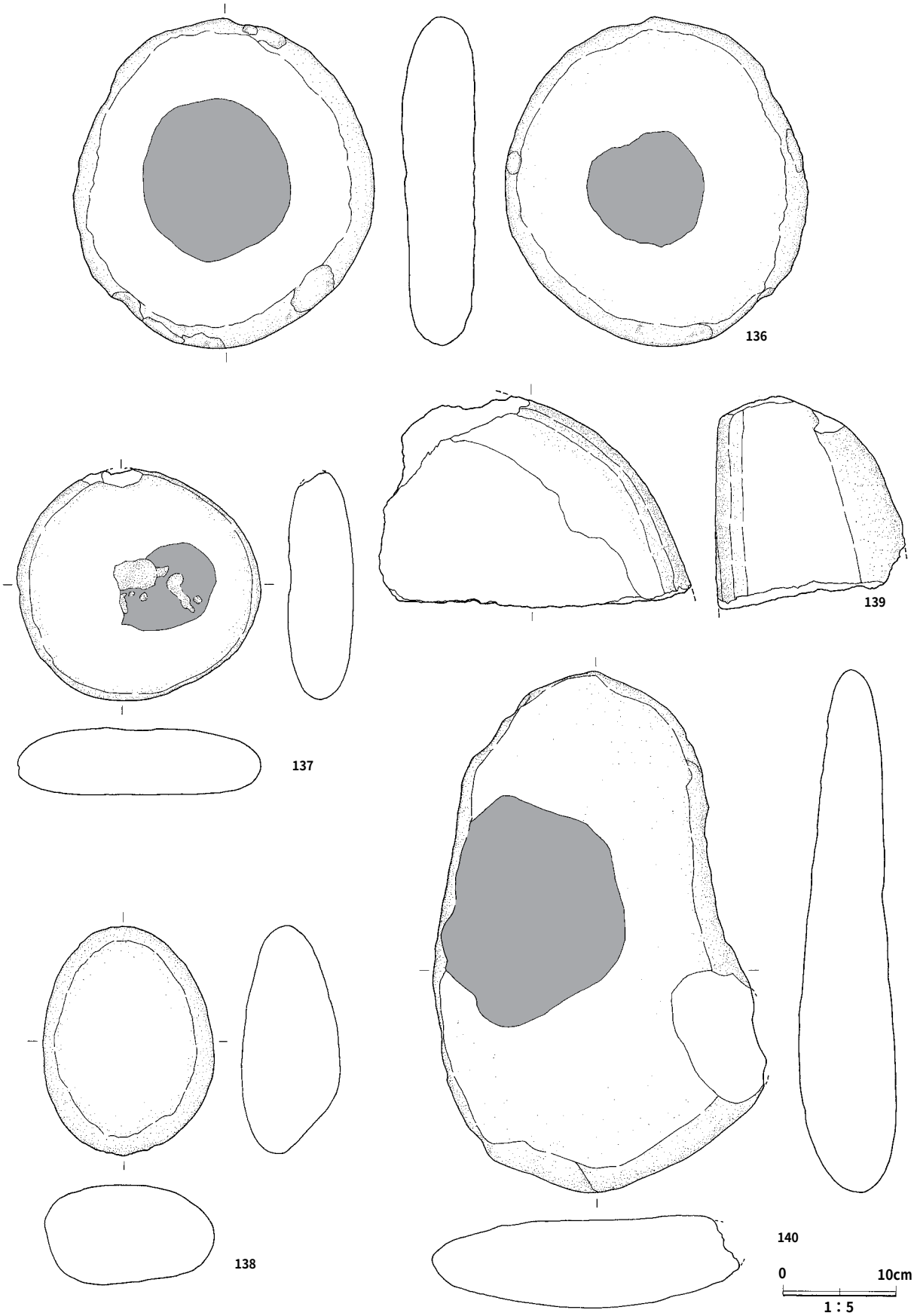
第63図　肥前系磁器他



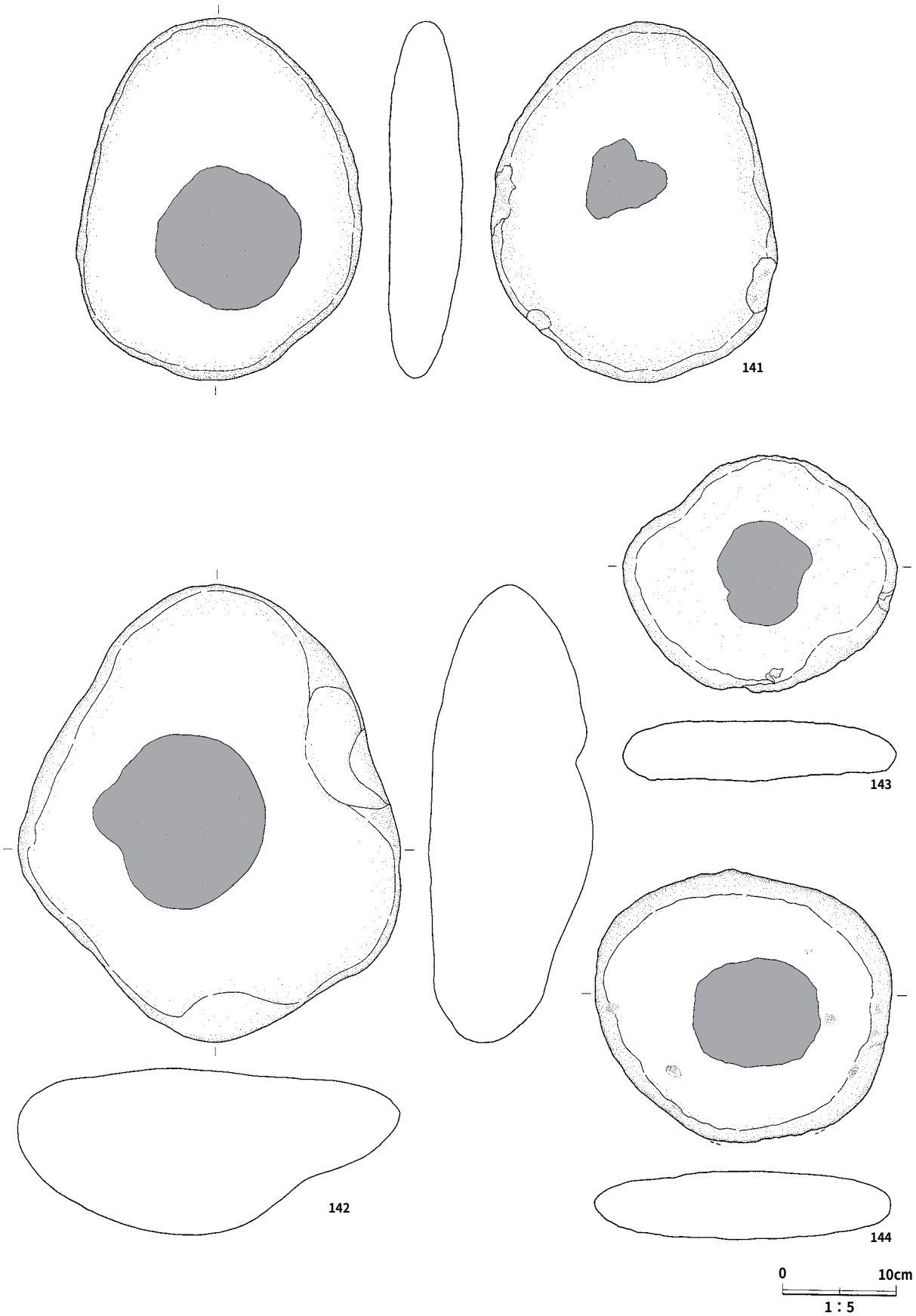
第64図　肥前系磁器



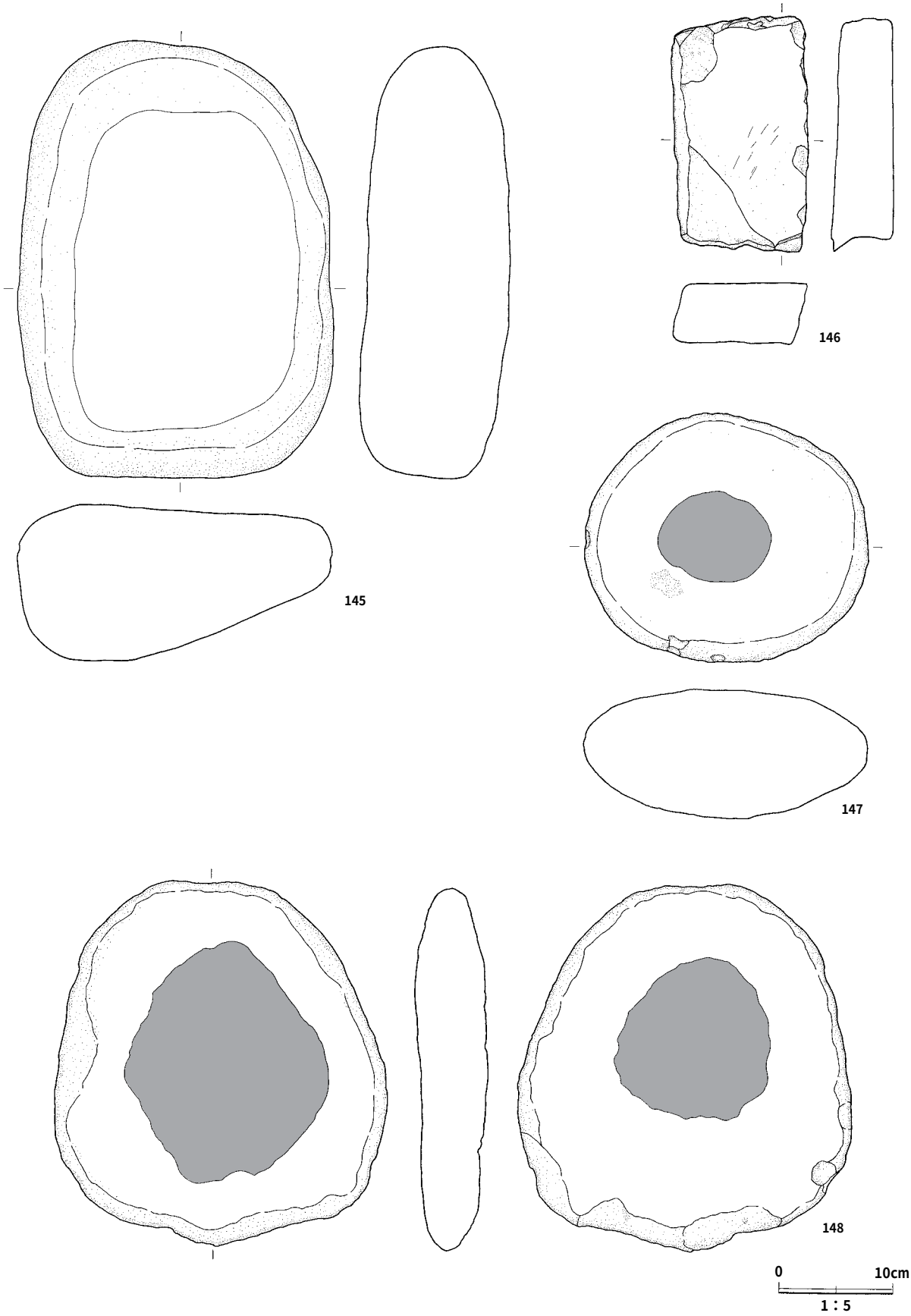
第65図　近代の陶磁器・かわらけ・瓦器・石製品



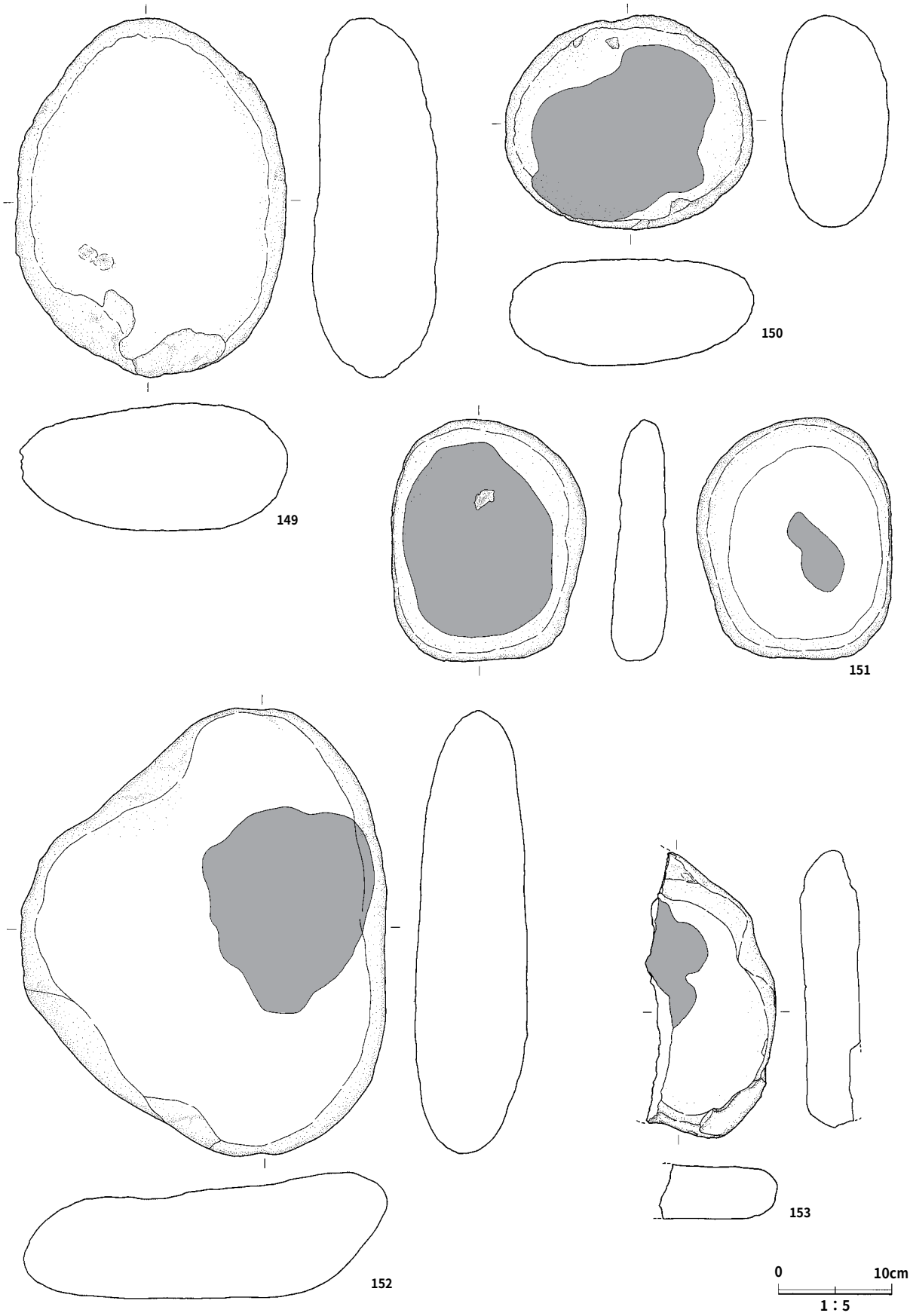
第66図　礎石



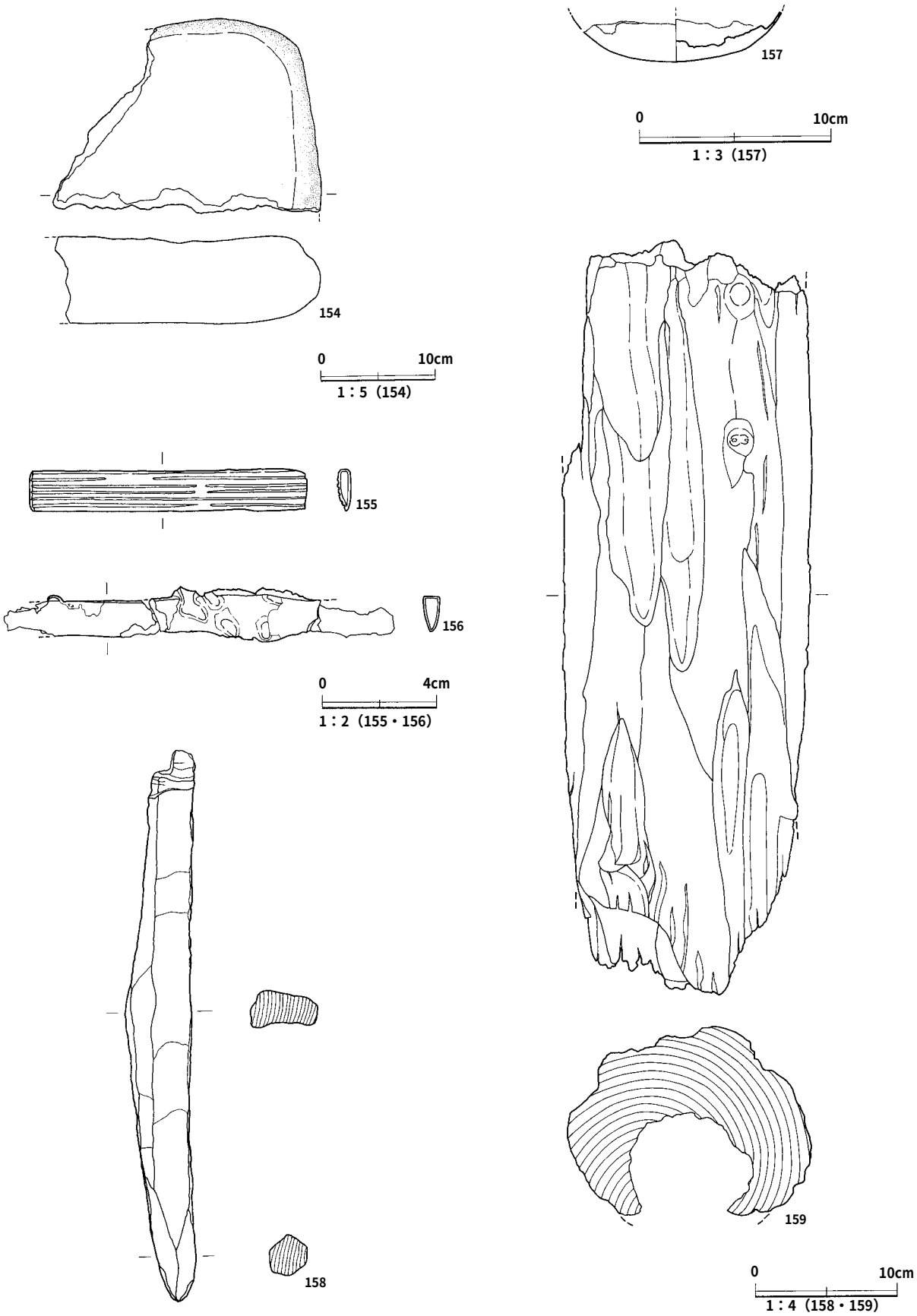
第67図　礎石



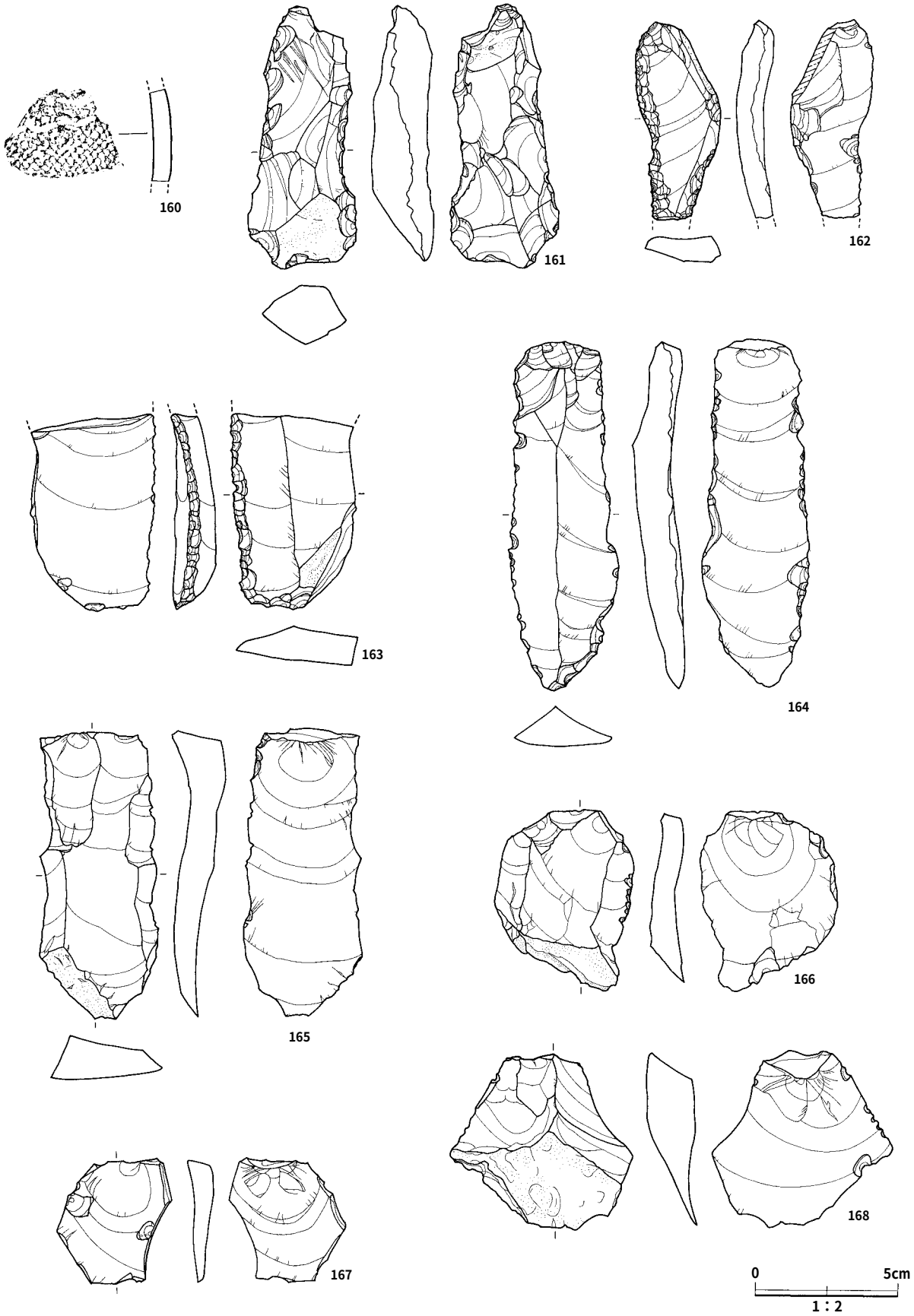
第68図　礎石



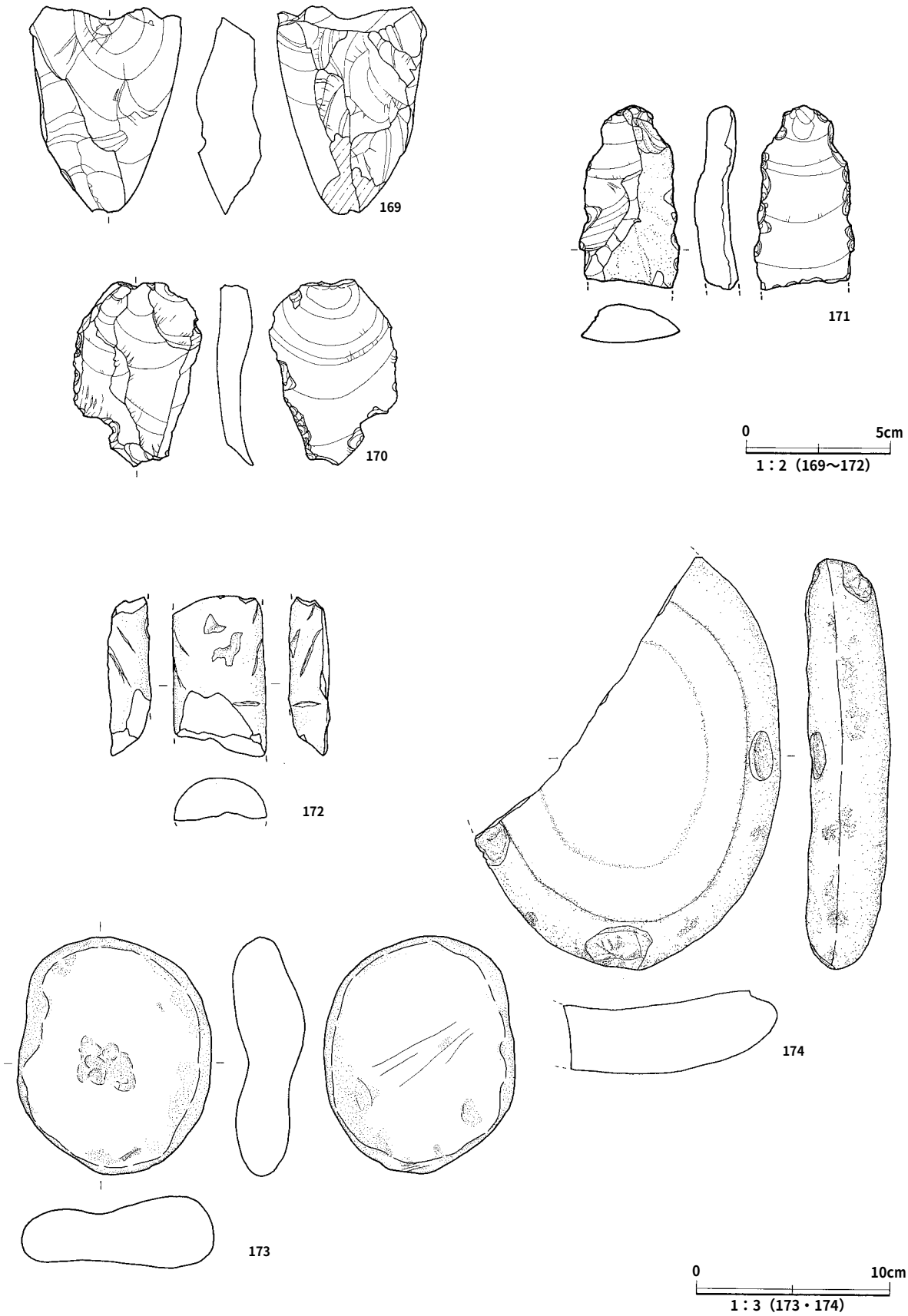
第69図　礎石



第70図　礎石・金属製品・木製品



第71図　縄文土器・石器



第72図　石器・石製品

表５　陶磁器観察表

番号	図版	写真	種類・器種	生産地	地区	出土地点・層	計測値（mm）口径	底径	器高	文様・調整・遺物番号・年代　他
1	57	15	青磁碗	中国龍泉	Ｄ区	表土	(126)	48	(42)	鎬蓮弁文　ＲＰ118　13Ｃ末～14Ｃ前半
2	57	15	青磁碗	中国龍泉		北Ｉ層				細描連弁文　15Ｃ
3	57	15	白磁皿	中国景徳鎮	Ｂ区南	ＳＢ1000ＥＰ589		(60)		高台に砂付着　16Ｃ
4	57	15	白磁皿	中国景徳鎮	Ｄ区	表土		(60)		高台付近に砂付着　16Ｃ
5	57	15	青花皿	中国景徳鎮	Ｂ区南	ＳＢ1000ＥＰ599－Ｆ		(70)		玉取り獅子文　16Ｃ前～中葉
6	57	15	青花皿	中国漳州	Ａ区北	ＥＰ661	(80)			圏線（内外面）　貫入　16Ｃ後半
7	57	15	青花小坏	中国景徳鎮	Ｃ区北	ＳＢ948ＥＰ615	(66)	(28)	36	鋸歯文・櫛歯文（外面）　ケズリ出し高台　16Ｃ末～17Ｃ前半
8	57	15	青花碗	中国景徳鎮	Ｃ区南	ＥＰ728				龍文（外面）　ＲＰ116　16Ｃ末～17Ｃ前半
9	57	15	青花皿	中国漳州	Ｂ区南	ＳＤ514－Ｆ		49		花卉文（外面）　ＲＰ102　底面に墨書　16Ｃ後半～17Ｃ初
10	57	15	青花皿	中国景徳鎮	Ｂ区南	ＳＸ551－Ｆ		(110)		芙蓉手　宝文（内面）　高台に砂付着　ＲＰ107　1590～1630年代
11	57	15	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＳＢ906ＥＰ79－Ｆ	(114)			鉄釉　16Ｃ
12	57	15	陶器皿	瀬戸・美濃	Ｃ区南	ＳＢ1060ＥＰ512	(102)	(56)	22	灰釉　底面にトチン跡　16Ｃ後半
13	57	15	陶器皿	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＥＰ684	(96)	(52)	22	灰釉　15Ｃ末～16Ｃ前半
14	57	15	陶器皿	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＳＢ978ＥＰ722	(100)			灰釉　菊花文　16Ｃ
15	57	15	陶器皿	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＥＰ327	(100)			灰釉　ＲＰ14　16Ｃ後半
16	57	15	陶器折縁皿	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＳＢ２ＥＰ84	(104)			灰釉　ＲＰ２　16Ｃ末～17Ｃ初頭
17	57	15	陶器皿	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＳＢ２ＥＰ84		64		灰釉　ＲＰ１（ＳＢ904ＥＰ85）・13　底面に輪トチン痕　15Ｃ末～16Ｃ前半
18	57	15	陶器皿	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＥＰ720		50		灰釉　印花の菊文　ＲＰ117
19	57	15	陶器皿	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＥＰ328				灰釉　ＲＰ15　16Ｃ後半　15Ｃ末～16Ｃ前半
20	57	15	陶器皿	瀬戸・美濃	Ａ区北	ＥＰ683				志野釉　鉄絵圏線（内面）　17Ｃ初頭
21	57	16	陶器壷	珠洲	Ａ区北	ＳＢ904ＥＰ94	(116)			ＲＰ11　15Ｃ
22	57	16	陶器片口鉢	珠洲	Ａ区北	ＳＢ932ＥＰ721	(280)			卸目　外面に漆付着　15Ｃ
23	57	16	陶器擂鉢	珠洲	Ａ区南	ＥＰ509				卸目　15Ｃ
24	58	16	陶器擂鉢	珠洲	Ｂ区南	ＳＢ1049ＥＰ548－Ｆ				卸目　ＲＰ105　15Ｃ
25	58	17	陶器擂鉢		Ｄ区	３Ｔ－Ⅱ		(132)		卸目　内面摩耗　15Ｃ
26	58	16	陶器擂鉢	戸長里	Ｂ区南	ＳＢ1025ＥＰ586	(264)			鉄釉　卸目　漆接
27	58	16	陶器擂鉢	戸長里	Ｂ区南	ＳＢ1004・1007・1014・1015ＥＰ585		(116)		鉄釉　卸目　漆接　ＲＰ109　ＲＰ７（ＳＢ1023ＥＰ329）と接合
28	58	17	陶器	戸長里？	Ｃ区南	ＳＤ510		(130)		底面回転ヘラケズリ　17Ｃ初頭
29	58	16	陶器瓶	戸長里	Ｂ区南	Ｉ－17				鉄釉　ＲＰ８　漆接　17Ｃ初頭
30	58	16	陶器瓶	戸長里	Ｂ区南	ＳＢ1004・1007・1014・1015ＥＰ585				鉄釉　ＲＰ108　ＥＰ588・ＳＢ1028ＥＰ558・ＳＢ1023ＥＰ562の破片と接合　17Ｃ初頭
31	58	17	陶器壷？	瀬戸・美濃？	Ｃ区南	Ｓ－20盛土		(80)		鉄釉　二次加熱　内面と底面にトチン痕　16～17Ｃ？
32	58	17	陶器皿	肥前	Ｃ区南	ＳＢ1059ＥＰ502	(110)	48	30	灰釉　胎土目　底面に墨書「鬼ヵ」　1580～1620年代
33	58	17	陶器皿	肥前	Ｂ区南	ＥＰ596－Ｆ		(38)	32	灰釉胎土目底面に墨書「神ヵ」ＥＰ596と接合　1580～1620年代
34	59	17	陶器皿	肥前	Ｂ区南	Ｋ－17		(40)		灰釉　胎土目　底面に墨書「神ヵ」　1580～1620年代
35	59	17	陶器皿	肥前	Ｂ区北	ＳＫ605－Ｆ	103	37	35	灰釉　ロクロ　回転糸切り　ＲＰ114　1580～1610年代
36	59	17	陶器皿	肥前	Ｂ区南	ＳＢ1011ＥＰ584	(134)			灰釉　胎土目
37	59	17	陶器皿	肥前	Ｂ区南	ＳＢ1045ＥＰ592－Ｆ	(126)			灰釉　ＳＢ1006ＥＰ608から同一　1590～1610年代
38	59	17	陶器皿	肥前	Ａ区南	Ｍ－９		(58)		灰釉　回転糸切り　ＲＰ５　1590～1610年代
39	59	17	陶器沓形碗	肥前	Ｃ区南	ＳＢ1059ＥＰ502		48		鉄釉　長石釉の文様　1590～1620年代
40	59	17	陶器皿	肥前		表土	(176)			鉄絵　絵唐津　1590～1610年代
41	59	17	陶器瓶	肥前・福岡	Ｃ区南	ＥＰ513				鉄釉平行タタキメ（外面）同心円状アテ痕（内面）　16Ｃ末～17Ｃ初
42	59	17	陶器壷・甕	肥前・福岡	Ｂ区南	ＳＢ1019ＥＢ593－Ｆ				鉄釉　沈線・縄状突帯（外面）　ＲＰ101　16Ｃ末～17Ｃ初
43	59	18	陶器皿	肥前	Ｃ区南	ＳＤ510		(60)		灰釉　砂目　1610～1630年代
44	59	18	陶器碗	肥前	Ｂ区南	ＳＢ1007・1025ＥＰ587	(108)	46	75	透明釉　呉器手　17Ｃ中葉～末
45	59	18	陶器碗	肥前	Ｂ区南	ＳＢ1004・1007・1014・1015ＥＰ588	(110)			透明釉　呉器手　17Ｃ中葉～末
46	59	18	陶器碗	肥前	Ｂ区南	ＳＢ1019ＥＰ593－Ｆ		52		透明釉　呉器手　ＲＰ103　17Ｃ中葉～末
47	59	17	陶器擂鉢	肥前	Ｂ区南	ＳＢ517ＥＰ525				鉄釉　卸目　ＲＰ104　17Ｃ前半
48	59	18	陶器碗	福岡	Ｂ区南	ＥＰ590－Ｆ		(44)		藁灰釉　ＥＰ329から同一個体出土　17Ｃ代

番号	図版	写真	種類・器種	生産地	地区	出土地点・層	計測値（mm）口径	底径	器高	文様・調整・遺物番号・年代　他
49	59	18	陶器瓶	肥前	C区南	SD510				灰釉　17C代
50	59	18	陶器火入？	肥前？	B区南	EP595－F	(134)			灰釉　RP113　17C代
51	59	18	陶器茶入	福岡？	C区南	SD501	(64)	40	37	鉄釉　漆接　17C代？
52	59	18	陶胎染付碗	瀬戸・美濃	C区南	SX324－F	(104)	52	63	透明釉　花文（内外面）　19C前半
53	60	18	陶器碗	大堀相馬	B区南	EP564		(50)		灰釉　RP106　18C～19C初
54	60	19	陶器碗	大堀相馬	C区南	S－18		29		白色釉　18C
55	60	18	陶器小坏	大堀相馬		表土	(58)	(26)	31	透明釉　18C
56	60	18	陶器小坏		B区北	SD700	48	24	23.5	透明釉　撹乱中から出土
57	60	18	陶器水注		A区北	Ⅰ層				透明釉
58	60	18	陶器涼炉	関西系	C区南	S－20				透明釉　透かし孔あり
59	60	19	陶器擂鉢	会津本郷	C区南	SD501	(360)			鉄釉　18～19C
60	60	19	陶器鉢	関西系		表土	(177)	(60)		透明釉　18C後半～末
61	60	19	陶器擂鉢	岸？	C区南	EP682				灰釉　17C前半？
62	60	19	陶器甕	在地	C区南	SX324－F	(160)			鉄釉　沈線１条（外面）　18～19C
63	60	18	陶器擂鉢	在地	C区南	SX324－F	(308)	(130)	177	鉄釉　卸目　体部下半ヘラケズリ　18～19C
64	60	19	陶器擂鉢	在地	C区南	S－18	(320)			鉄釉？　卸目　18～19C
65	60	19	陶器鉢	在地	C区南	SX508	(392)			灰釉？　19C
66	61	20	磁器染付碗	肥前	B区南	SB1002EP553－F	(118)			EP847出土破片と接合・SB1012・1013EP332から同一個体　1610～1640年代
67	61	20	磁器染付皿	肥前	C区南	SD510－F	(130)	(56)	31	月に雁　1610～1640年代
68	61	20	磁器染付皿	肥前		X－0	(130)	58	32	内面文様あり　1630～1640年代
69	61	20	磁器染付皿	肥前	C区南	SD510－F		(58)		内面文様あり　RP4　1630～1640年代
70	61	20	磁器染付皿	肥前	D区	表土		(56)		型打ち成型　柳文（内面）　1630～1640年代
71	61	20	磁器染付碗	肥前	B区南	SB1025EP601－F	(110)			雲文（外面）　SB1010EP597から同一個体出土　1630～1650年代
72	61	20	磁器染付皿	肥前	B区南	SB1025EP586－F		(58)		文様あり（外面）　1630～1640年代
73	61	20	磁器染付手塩皿	肥前	D区	3T－Ⅱ	(86)	(31)	24.5	菊花文（内面）　1630～1640年代
74	61	20	磁器染付碗	肥前	B区南	SB1028EP558－F	(118)			圏線２本（外面）　焼成むら、赤い斑あり　1650～1670年代
75	61	20	磁器染付碗	肥前	B区南	SD514－F				内外面に文様あり　17C後半
76	61	20	磁器染付碗	肥前	C区南	SD510				一重網目文（外面）　1650～1660年代
77	61	20	磁器染付碗	肥前	B区南	SB517EP526－F				一重網目文　漆接　1650～1700年代
78	61	20	磁器染付碗	肥前	B区南	SX551－F				一重網目文　1650～1700年代
79	61	20	磁器染付碗	肥前	B区南	SB1023EP562－F				一重網目文　1650～1700年代
80	61	20	磁器染付碗	波佐見	D区	表土	(94)	(40)	48	雪輪梅樹文（外面）　18C中葉～末
81	61	21	磁器染付碗	波佐見	C区南	S－20盛土	(96)	40	53	二重網目文（外面）　18C後半
82	61	21	磁器染付碗	波佐見	C区南	SX324－F	(98)	39	48	雪輪梅樹文（外面）　崩れた「大明年製」（高台内）
83	61	20	磁器染付碗	波佐見	C区南	SD501	(90)			梅樹文？　18C後半
84	61	20	磁器染付碗	肥前系	C区南	SX324－F	(110)			雪持ち笹文（外面）　圏線３本（内面）　18C後半～19C初
85	61	20	磁器染付碗	肥前	C区南	SD510－F	(92)			松竹梅文（外面）　四方襷文（内面）　1760～1800年代
86	61	20	磁器染付小碗	肥前系	C区南	SX325－F	(80)			植物文？（外面）　1780～19C中葉
87	61	21	磁器染付小碗	肥前		表土	(69)	26	33	笹文（外面）　18C後半
88	61	20	磁器染付小坏	肥前	C区南	SB1060EP665	(72)			笹文（外面）　18C中葉～末
89	61	21	磁器染付湯飲碗	肥前系		表土		32	(37)	市松網目文（外面）　崩した「壽」（内面）　1780～1800年代
90	61	21	磁器染付湯飲碗	肥前系		表土		34	(36)	矢羽根文（外面）　手描き五弁花（内面）　1780～1800年代
91	62	20	磁器染付湯飲碗	肥前系	C区南	SX324－F	(86)	(36)	54	矢羽根文（外面）　圏線（内面）　1780～1810年代
92	62	20	磁器染付湯飲碗	肥前系	C区南	SX324－F	(83)			笹文（外面）　圏線（内面）　1780～1810年代
93	62	20	磁器染付湯飲碗	肥前	C区南	SX324－F	(85)			丸文（外面）　SD510から同一個体破片　1780～1810年代
94	62	20	磁器染付猪口	肥前	C区南	SX324－F	(76)	(62)	65	楼閣山水文（外面）　四方襷文（内面）　1780～18C初
95	62	20	磁器青磁香炉	肥前？		表土	(88)			鎬状の文様（外面）
96	62	21	磁器青磁染付深皿	肥前	A区南	SD680	(178)			波頭文（内面）　SD510から同一個体出土　18C後半
97	62	21	磁器染付皿	肥前	C区南	S－20	(110)	(66)	26	唐草文（内外面）コンニャク印判五弁花（内面）「大明年製」（高台内）　18C前半

番号	図版	写真	種類・器種	生産地	地区	出土地点・層	計測値（mm）口径	底径	器高	文様・調整・遺物番号・年代　他
98	62	21	磁器染付皿	肥前系		Ⅱ層		(114)		外面文様あり　扇に蝶（内面）　蛇ノ目凹形高台　18C第４四半期
99	62	21	磁器染付皿	肥前		表土	(176)	(94)	31	唐草文（外面）　梅樹文？（内面）　18C前～中葉
100	62	21	磁器染付皿	波佐見	C区南	ＳＸ324－Ｆ	(134)	62	27	コンニャク印判五弁花（内面）　蛇ノ目釉剥ぎ　18C後半
101	62	21	磁器染付皿	波佐見	C区南	ＳＸ324－Ｆ	128	68	36	唐草文（外面）　崩し渦福（高台内）　18C後半
102	62	23	磁器染付皿	波佐見	C区南	ＳＸ324－Ｆ	138	80	29.5	コンニャク印判五弁花・崩し唐草（外面）　蛇ノ目釉剥ぎ　18C後半
103	62	21	磁器染付手塩皿	波佐見	C区	トレンチ外	94	50	25.5	折れ松葉文（外面）　雪持笹文（内面）　18C後半
104	62	23	磁器染付皿	波佐見	D区	表土	(118)	44	32	二重斜格子文（内面）　蛇ノ目釉剥ぎ　18C後半
105	63	23	磁器染付皿	肥前		表土	(132)	(75)	45	唐草文（外面）植物文？（内面）蛇ノ目凹形高台　18C末～19C前半
106	63	23	磁器染付仏飯器	肥前	C区南	Ｔ－18撹乱	(68)	44	59.5	菊花ちらし（外面）　18C中葉～末
107	63	23	磁器染付仏飯器	肥前		Ｘ－０	(72)			氷割菊文（外面）　18C後半
108	63	23	磁器染付猪口	肥前	B区南	ＥＰ564－Ｆ	(69)			山水文？（外面）　ＲＰ106　1780～1820年代
109	63	23	磁器染付碗	肥前		表土	(76)			氷割菊文（外面）　1780～1810年代
110	63	23	磁器染付広東碗	肥前		Ｘ－０		(56)		植物文？（外面）　見込に文様あり　1780～1840年代
111	63	23	磁器染付広東碗	肥前	C区南	表土	80	53	66	山水文（外面）岩波に東屋（見込）1780～1840年代
112	63	23	磁器染付端反小碗		C区南	ＳＤ501	(78)	32	41	宝珠文（外面）　1820～1860年代
113	63	23	磁器染付湯飲碗	肥前	C区南	ＳＸ324－Ｆ	71	36	60	宝文（外面）ＳＸ325出土破片と接合　1820～1860年代
114	63	23	磁器染付小碗	肥前	B区北	Ｍ－９	(78)	33	39	文字（外面）　1820～1860年代
115	63	23	磁器青磁鉢	肥前？		Ｘ－０		(90)		外面に青磁釉　植物文？（内面）　蛇ノ目凹形高台　18～19C
116	63	23	磁器染付瓶	肥前		Ⅰ層				笹文？（外面）　18C
117	63	23	磁器染付瓶	肥前		表土		(48)		圏線（高台外面）　漆接
118	63	23	磁器染付段重	肥前		Ｓ－21Ⅱ層	(127)	(111)	43	草花文（外面）　19C前半
119	63	23	磁器色絵蓋	肥前		表土	(106)	(43)	29	松竹梅文（外面）四方欅・松竹梅文（内面）「大明年製」（つまみ内）ＳＸ324から同一個体　1760～1800年代
120	63	23	磁器染付蓋	肥前		表土	80		28	昆虫文（外面）　漆接　1820～1860年代
121	63	23	磁器染付碗蓋	肥前系	C区南	ＳＸ325－Ｆ	(98)	38	31	牡丹文（外面）　雷文・植物文（内面）　1820～1860年代
122	63	24	磁器染付碗蓋			表土		38		草花文（外面）　雷文・松竹梅文（内面）　明治以降
123	64	22	磁器染付大皿	肥前	C区南	ＳＸ324－Ｆ	(400)	(219)	61	七宝結び（外面）　山水文・魚？（内面）　「太明成化年製」（高台内）　ハリ支え　1820～1860年代
124	65	24	磁器染付鉢			表土	(148)	(66)	79	雷文・「屋」の文字（外面）　牡丹文・雷文（内面）　明治以降
125	65	24	陶器染付徳利？	平清水	B区南	ＥＰ564－Ｆ				楼閣山水文？（外面）　ＲＰ106　明治～大正
126	65	24	磁器青磁染付瓶		A区北	ＳＢ912ＥＰ718				青磁釉　圏線（外面）　明治～大正
127	65	24	磁器色絵小坏		B区南	ＥＰ330	70	28	27.5	山（見込）　明治以降？
128	65	24	かわらけ・皿		B区南	ＥＰ583	(150)			ロクロ　内外面に炭化物付着　江戸？
129	65	24	かわらけ・皿		B区南	ＳＢ1015ＥＰ557－Ｆ				ロクロ　江戸？
130	65	24	土器瓶？		B区南	ＳＢ1016ＥＰ331				ロクロ　江戸？
131	65	24	瓦器火鉢		C区南	ＳＸ324－Ｆ	(354)			黒色処理　ミガキ（内外面）　江戸？

表６　石製品・礎石観察表

番号	図版	写真	種類	地区	出土地点・層	計測値（mm）長さ・径	幅	厚さ	調整・遺物番号・備考
132	65	24	砥石	A区北	ＥＰ663	112	28	17	研面４面　黒色の付着物あり
133	65	24	砥石	B区南	ＥＰ686	90	41	23	研面４面
134	65	24	砥石	A区北	ＳＢ959ＥＰ662	[87]	[16]	[10]	被熱　周囲を破損
135	65	24	石臼	C区南	Ｔ－16	(283)		[82]	上臼　外周に鑿跡あり
136	66	25	礎石	A区北	ＳＢ978ＥＰ722	289	261	64	両面に炭化物付着あり
137	66	25	礎石	A区北	ＳＢ906ＥＰ45	213	203	59	１面に炭化物付着あり　凹あり
138	66	25	礎石	A区北	ＥＰ75	199	150	86	
139	66	25	礎石	A区北	ＳＢ905ＥＰ57	[266]	[181]	[165]	破損

番号	図版	写真	種類	地区	出土地点・層	計測値（mm） 長さ・径	幅	厚さ	調整・遺物番号・備考
140	66	25	礎石	A区北	SB905EP57	450	282	83	1面に柱痕跡あり
141	67	25	礎石	A区北	SB905EP57	316	246	65	両面に炭化物付着あり
142	67	25	礎石	A区北	SB905EP80	398	338	145	1面に炭化物付着あり
143	67	25	礎石	A区北	SB904EP68	238	209	53	1面に炭化物付着あり
144	67	26	礎石	A区北	SB904EP68	258	239	60	1面に炭化物付着あり
145	68	26	礎石	A区北	SB904EP68	375	284	136	
146	68	26	礎石	A区北	SB904EP68	204	115	54	擦痕あり
147	68	26	礎石	A区北	SB904EP68	245	215	112	1面に炭化物付着あり　被熱あり
148	68	26	礎石	A区北	SB904EP68	317	258	61	両面に炭化物付着あり
149	69	26	礎石	A区北	SB904EP68	313	236	110	
150	69	26	礎石	A区北	SB2EP130	215	187	93	1面に炭化物付着あり
151	69	26	礎石	A区北	SB2EP62	211	170	47	両面に炭化物付着あり　被熱あり
152	69	26	礎石	C区北	SB2EP655	389	320	99	1面に柱痕跡あり
153	69	27	礎石	D区	SB841EP817	[240]	[113]	51	1面に炭化物付着あり　破損
154	70	27	礎石	D区	SB841EP818	[232]	[167]	75	破損

表7　金属製品観察表

番号	図版	写真	種類	地区	出土地点・層	計測値（mm） 長さ（直径）	幅	厚さ	材質	備考
155	70	27	刀子の鞘	B区南	EP595－F	96	14	5.5	銅	溝状の装飾あり
156	70	27	刀子	C区北	EP614	[136]	19	5.5	銅	3片に破損
175		27	銭貨（寛永通寶）	B区南	SB1025・1002EP556－F	25		1.3	銅	文銭（1668～1683年）
176		27	銭貨（寛永通寶）	C区南	SX508	23		1.2	銅	古寛永（1636～1659）
177		27	銭貨（寛永通寶）		X－0	24		1.3	銅	新寛永（1697～1747・1767～1781）
178		27	銭貨（銭種不明）	B区南	SB1007・1025EP587－F	24		1.3	銅	銭種不明　□□通寶

表8　木製品観察表

番号	図版	写真	種類・器種	地区	出土地点	長さ・口径	幅・底径	高さ・厚さ	備考
157	70	27	漆器鉢？	B区南	SB1011EP584		[103]	[22]	外面赤色漆　内面に漆膜付着　漆容器の用途か
158	70	27	杭	A区北	SB2EP248－F	[384]	46	28	先端は加工され尖る
159	70	27	柱材	A区北	SB2EP55－F	[502]	[157]		丸太材　両端を欠く

表9　縄文土器観察表

番号	図版	写真	種類・器種	地区	出土地点・層	文様・調整・遺物番号　他
160	71	27	深鉢	B区北	SX671	LR縄文　内面ナデ調整

表10　石器・石製品観察表

番号	図版	写真	種類・器種	地区	出土地点・層	計測値（mm） 長さ・径	幅	厚さ	調整・石材・遺物番号・備考
161	71	28	石箆	D区	SK805	90	38	20	背面・腹面のほぼ全周に二次加工　頁岩
162	71	28	削器	D区	表土	[69]	28	10	背面の両側縁、腹面の左側面に二次加工　先端折れる　頁岩
163	71	28	削器	C区北	SB910EP613	[68]	44	14	背面の左側縁と先端に二次加工　破損　頁岩
164	71	28	剥片	B区北	EP668	121	37	13	両面の縁辺に微小剥離あり　頁岩
165	71	28	剥片		I層	100	40	16.5	頁岩
166	71	28	剥片	D区	T－3	63.5	47.5	11	頁岩
167	71	28	剥片	D区	表土	[43]	40	8	頁岩　先端折れる
168	71	28	剥片	C区南	SD510	61	63	17	頁岩
169	72	28	剥片		EP616	82	52	22	節理多い　頁岩
170	72	28	二次加工のある剥片	D区	X－0	64	44	11	腹面の左側縁に二次加工　頁岩
171	72	28	二次加工のある剥片	B区北	L－8	63	34	12	背面の右側縁・腹面の両側縁に二次加工　破損　頁岩
172	72	27	石棒	D区	表土	[55]	[32]	[14]	横方向の切れ込みあり　研磨
173	72	27	凹石	B区南	SK606	120	99	36	凹は1ヶ所
174	72	27	石皿	B区南	SK606	[213]	[156]	35	磨面は1面　裏面に敲打痕あり

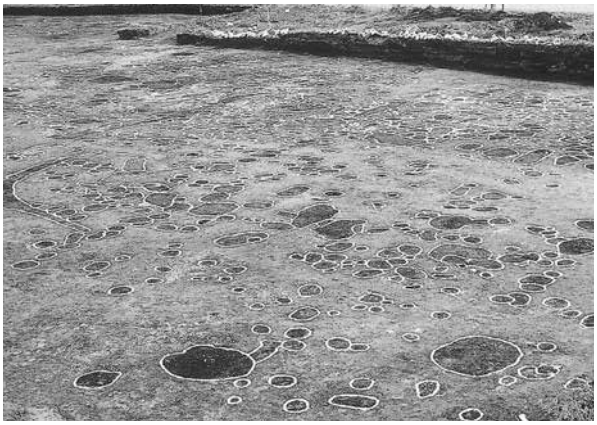
写真図版

遺跡遠景（平成元年８月撮影・南東から）

飛泉寺（地蔵尊）と銀杏の木（平成５年11月撮影・南から）

調査区近景（北東から）

表土除去・面整理作業（南から）



Ａ区遺構検出状況（南東から）

Ｄ区掘立柱建物跡の精査（西から）

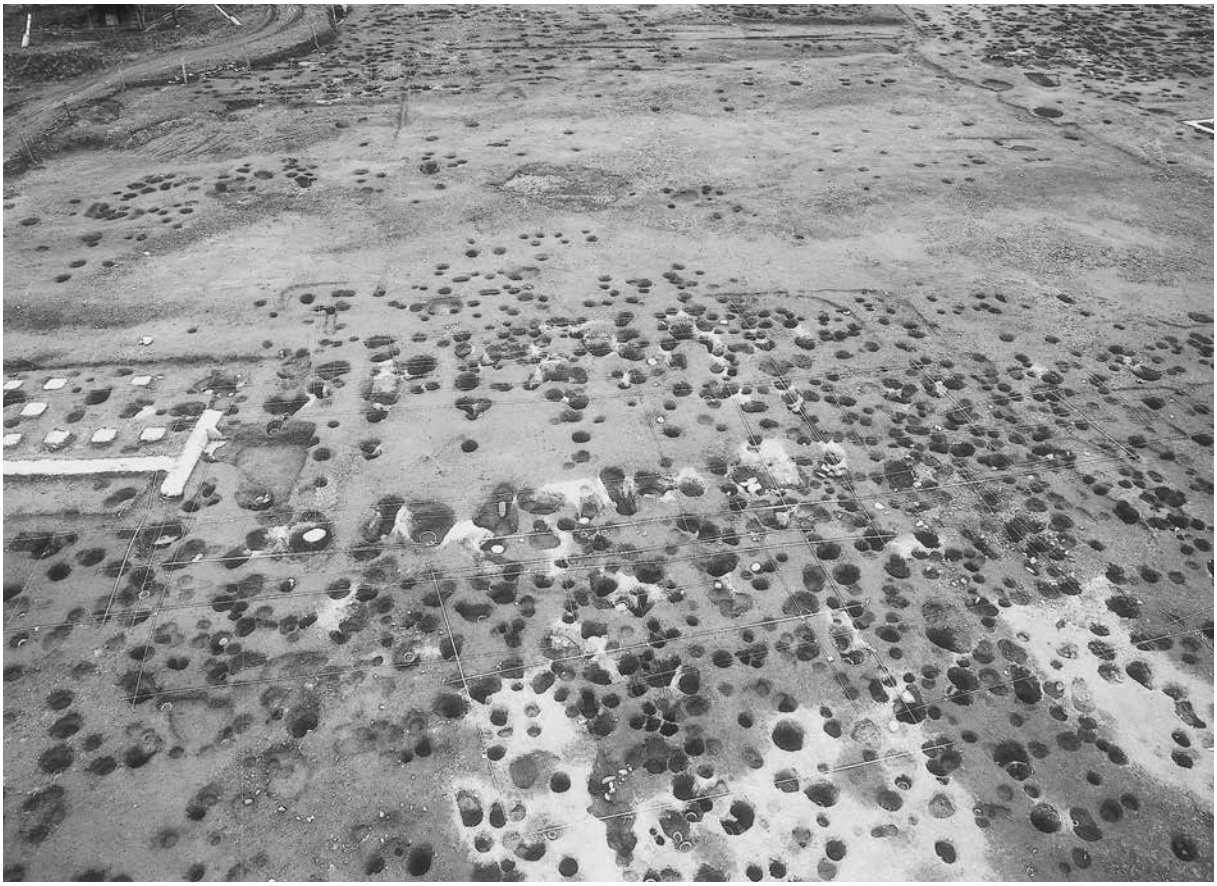
Ｂ区南北土層断面（西から）

調査区全景（北から）

調査区全景（北から）

第１遺構ブロック（Ａ区）完掘状況（東から）

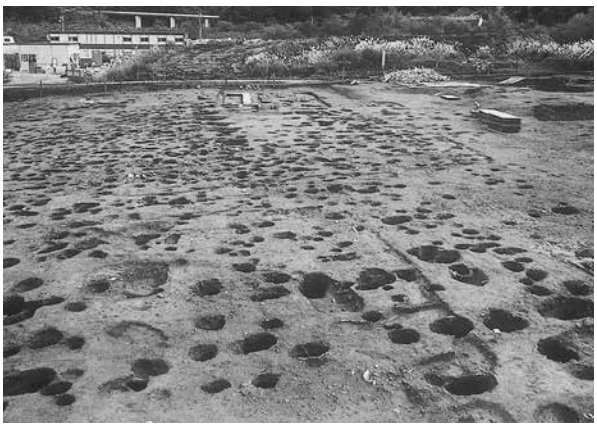
第１遺構ブロック（Ａ・Ｄ区）完掘状況（東から）



第１遺構ブロック完掘状況（北から）

第１遺構ブロックＳＢ２完掘状況（東から）

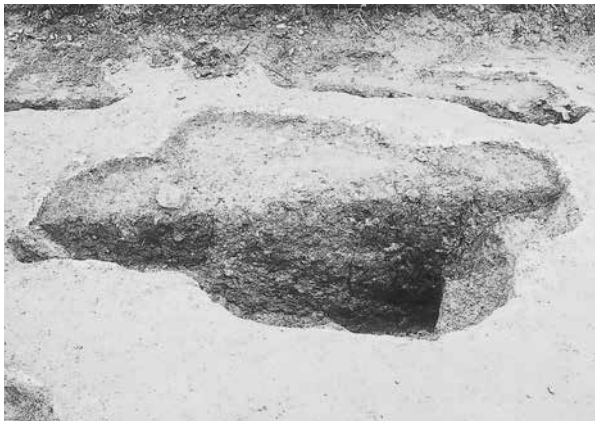
ＳＢ２ＥＰ653完掘状況（南東から）



第１遺構ブロック（Ａ区）完掘状況（西から）

第１遺構ブロック完掘状況（南から）

Ｄ区ＳＢ842（前）・ＳＢ841（奥）完掘状況（北から）



ＳＢ901ＥＰ83(左)・ＳＢ905ＥＰ81(右)断面(西から)

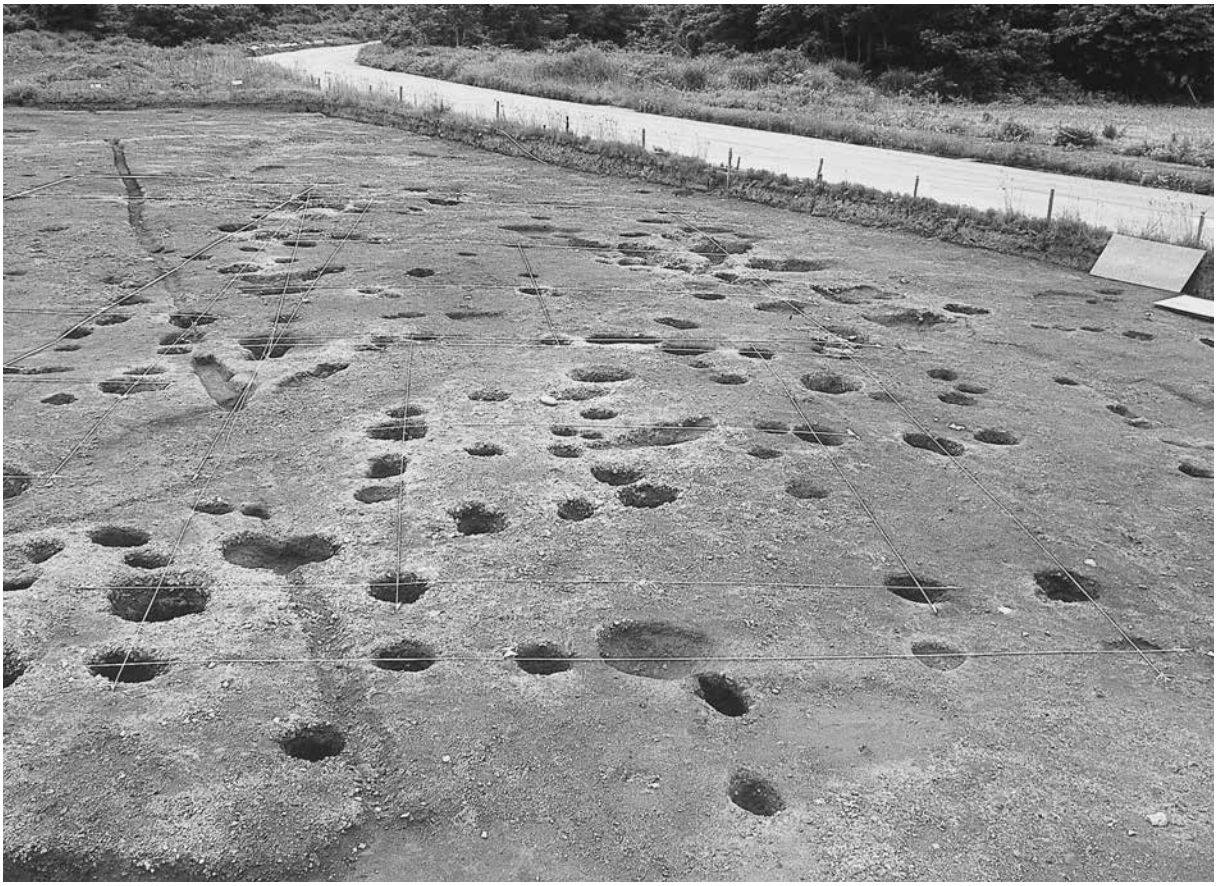
ＳＢ905ＥＰ87断面（南西から）

ＳＢ905ＥＰ57完掘状況（南東から）

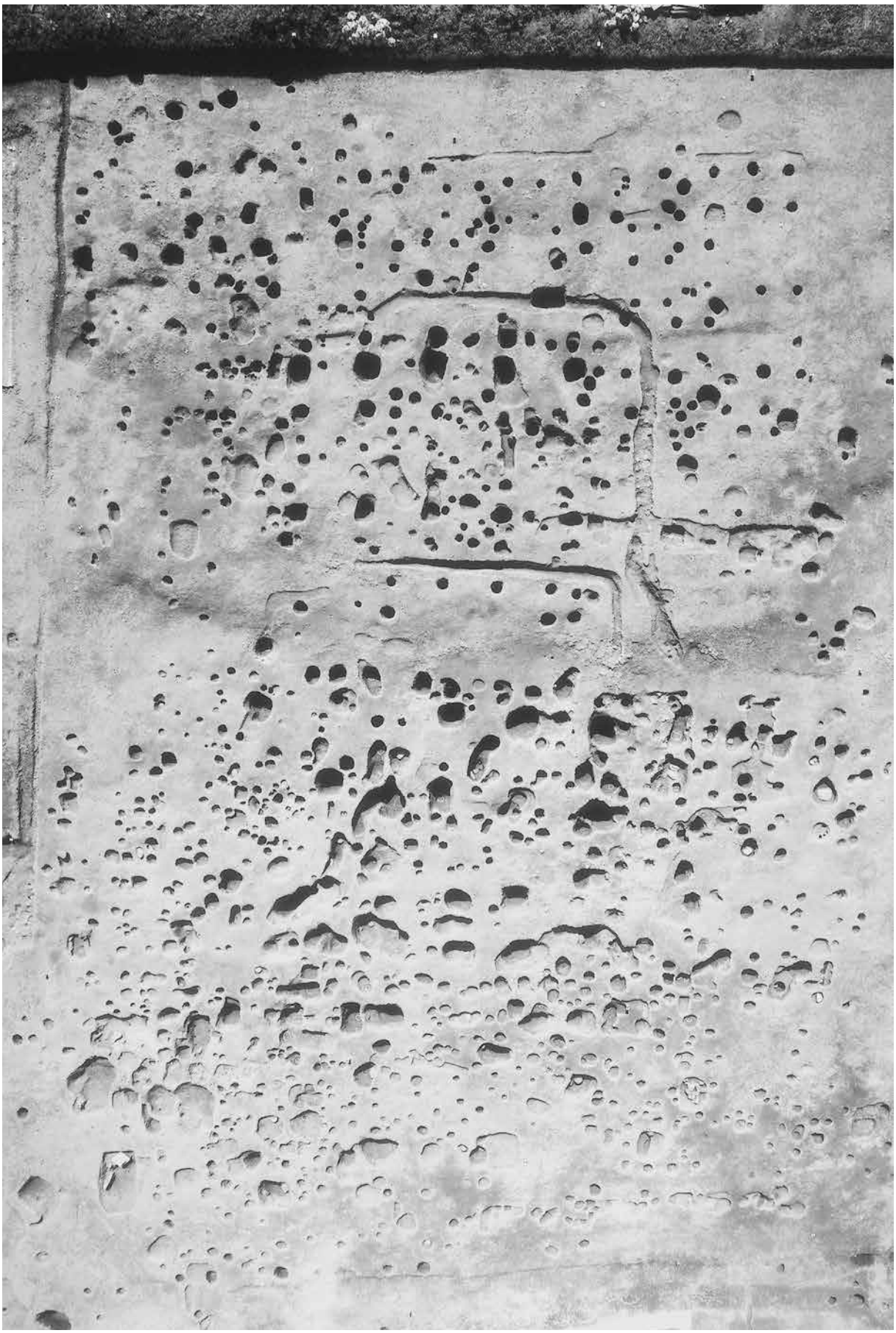
ＳＢ904ＥＰ68（奥）完掘状況（北西から）

第２遺構ブロック（Ｂ区北）完掘状況（北から）

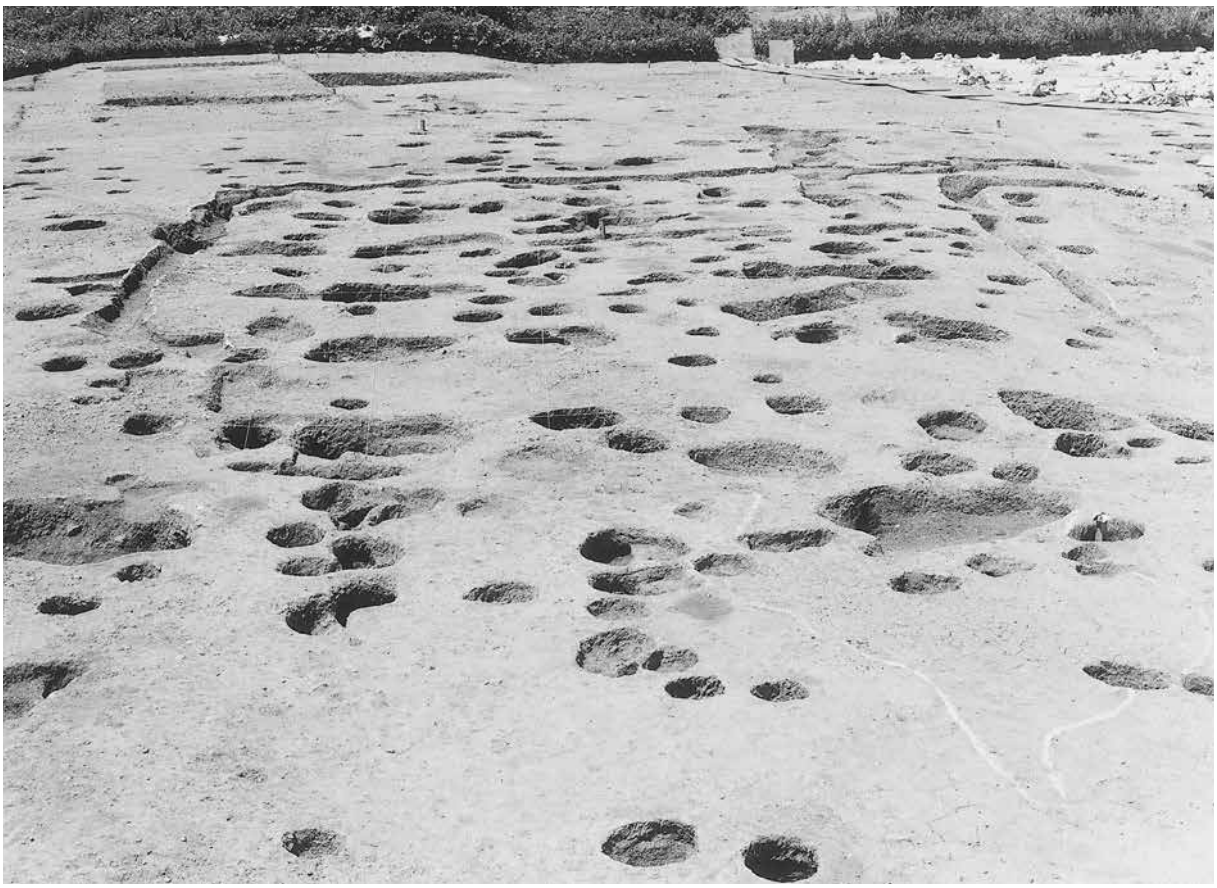
第２遺構ブロック（Ｂ区北）ＳＢ714・726・727完掘状況（東から）



第２遺構ブロック（Ｂ区北）ＳＢ844（前）・ＳＢ715（奥）完掘状況（東から）



第３・４遺構ブロック（Ｂ区南）完掘状況（北から）



第４遺構ブロック（Ｂ区南）完掘状況（東から）

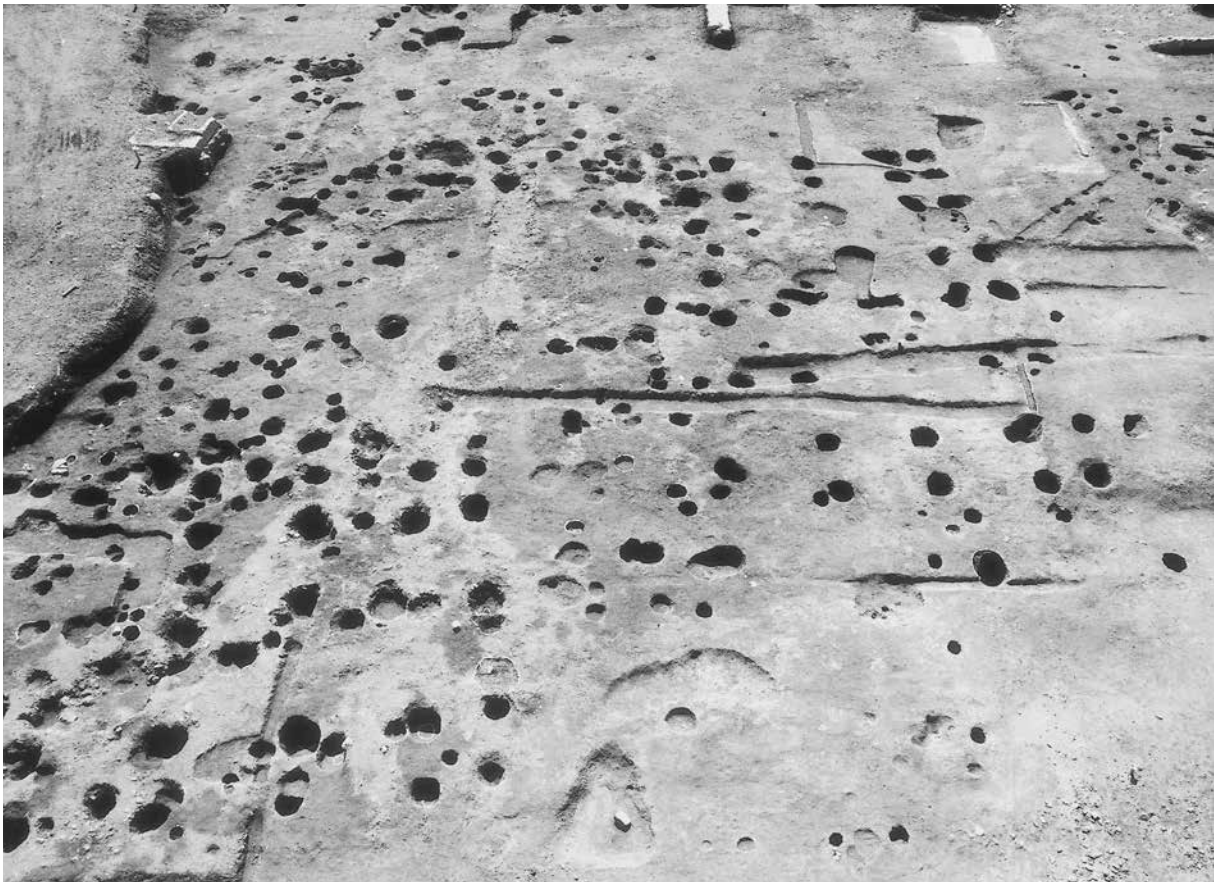
第３遺構ブロック（Ｂ区南）完掘状況（東から）

第３遺構ブロック完掘状況（北東から）

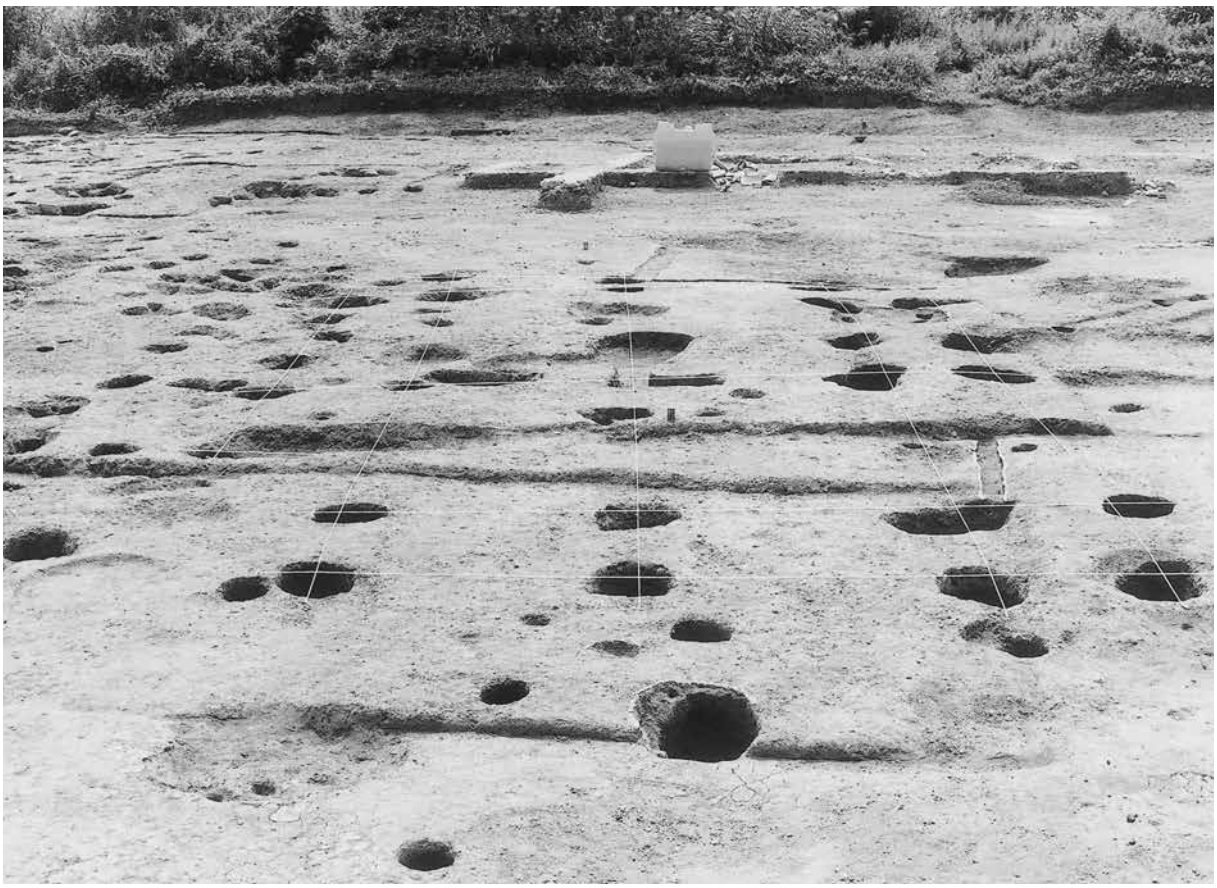
第３遺構ブロック完掘状況（南から）

第３遺構ブロックＳＫ606（東から）

ＲＰ107青花皿出土状況（南東から）



第６遺構ブロック（Ｃ区）完掘状況（北から）

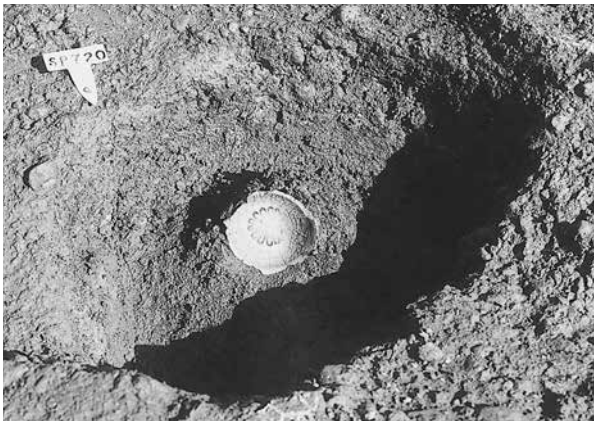


第６遺構ブロック（Ｃ区）ＳＢ617完掘状況（北から）

第６遺構ブロック（Ｃ区）ＳＢ723完掘状況（東から）

第５遺構ブロック（Ｃ区）完掘状況（北から）

第６遺構ブロックＳＢ１完掘状況（東から）

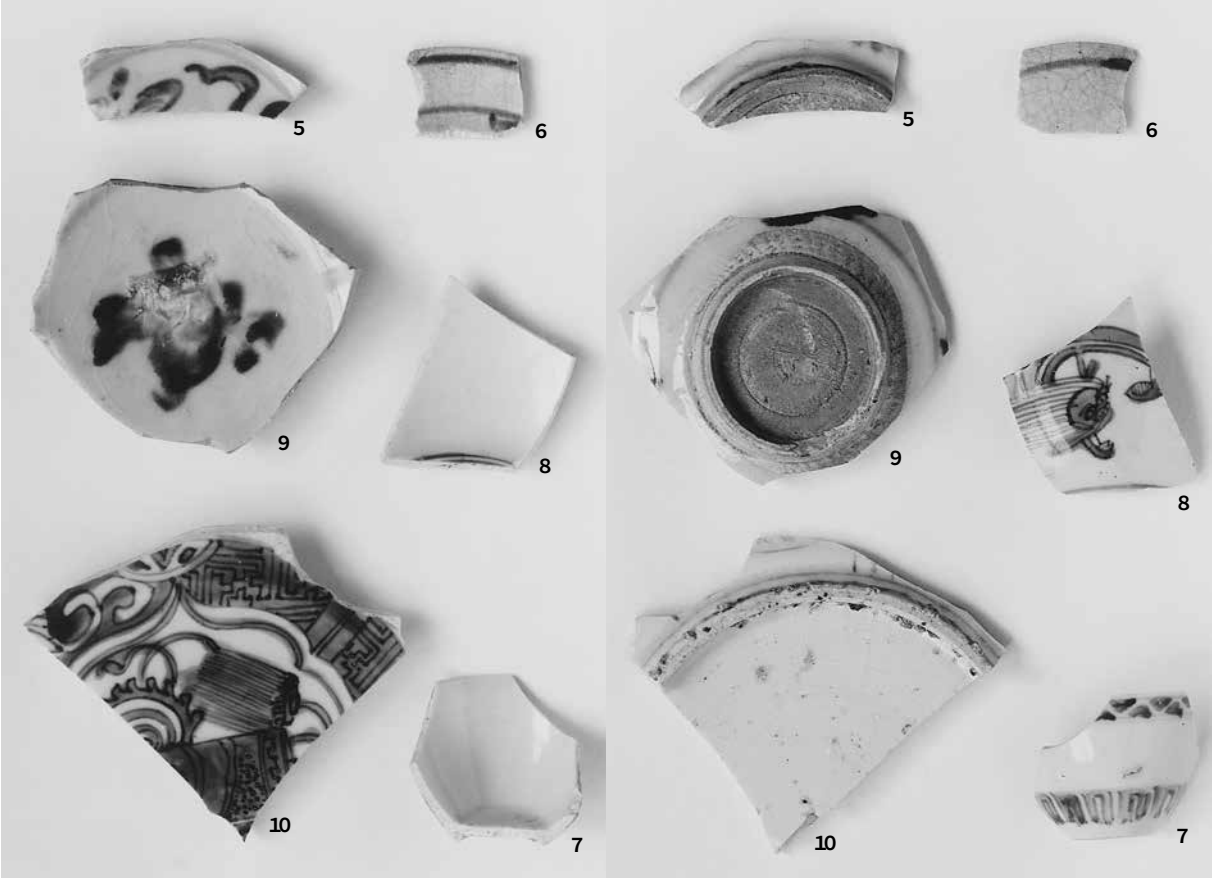


Ａ区ＳＰ720瀬戸小皿出土状況（西から）

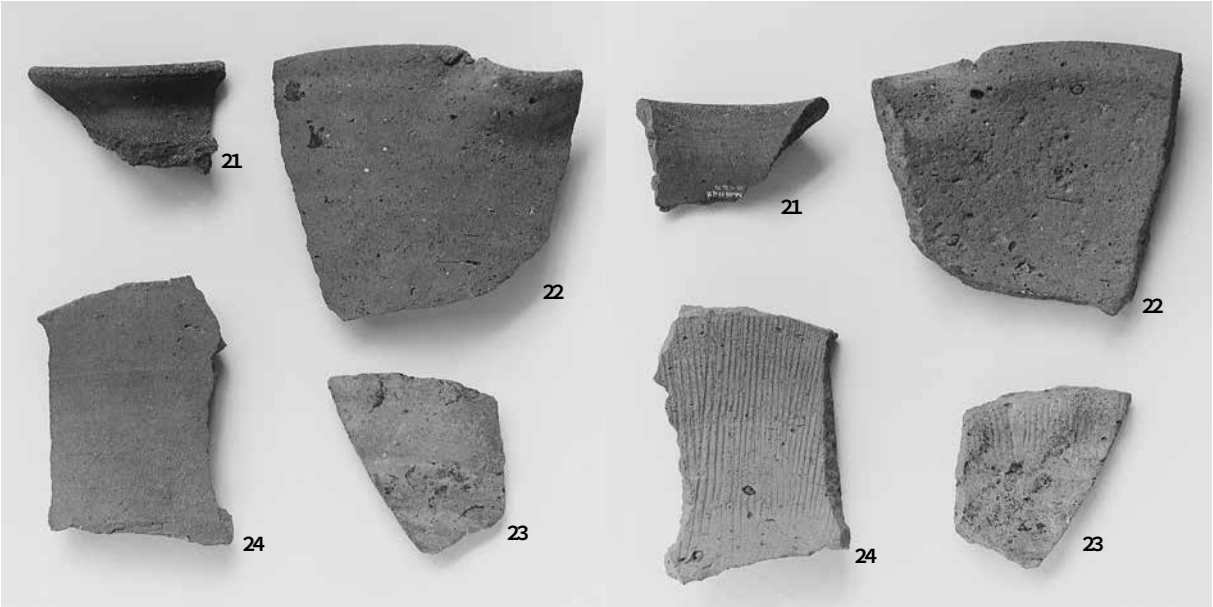
Ｄ区青磁碗出土状況（西から）

第２遺構ブロック（Ｂ区北）ＳＫ605唐津皿出土状況（南から）

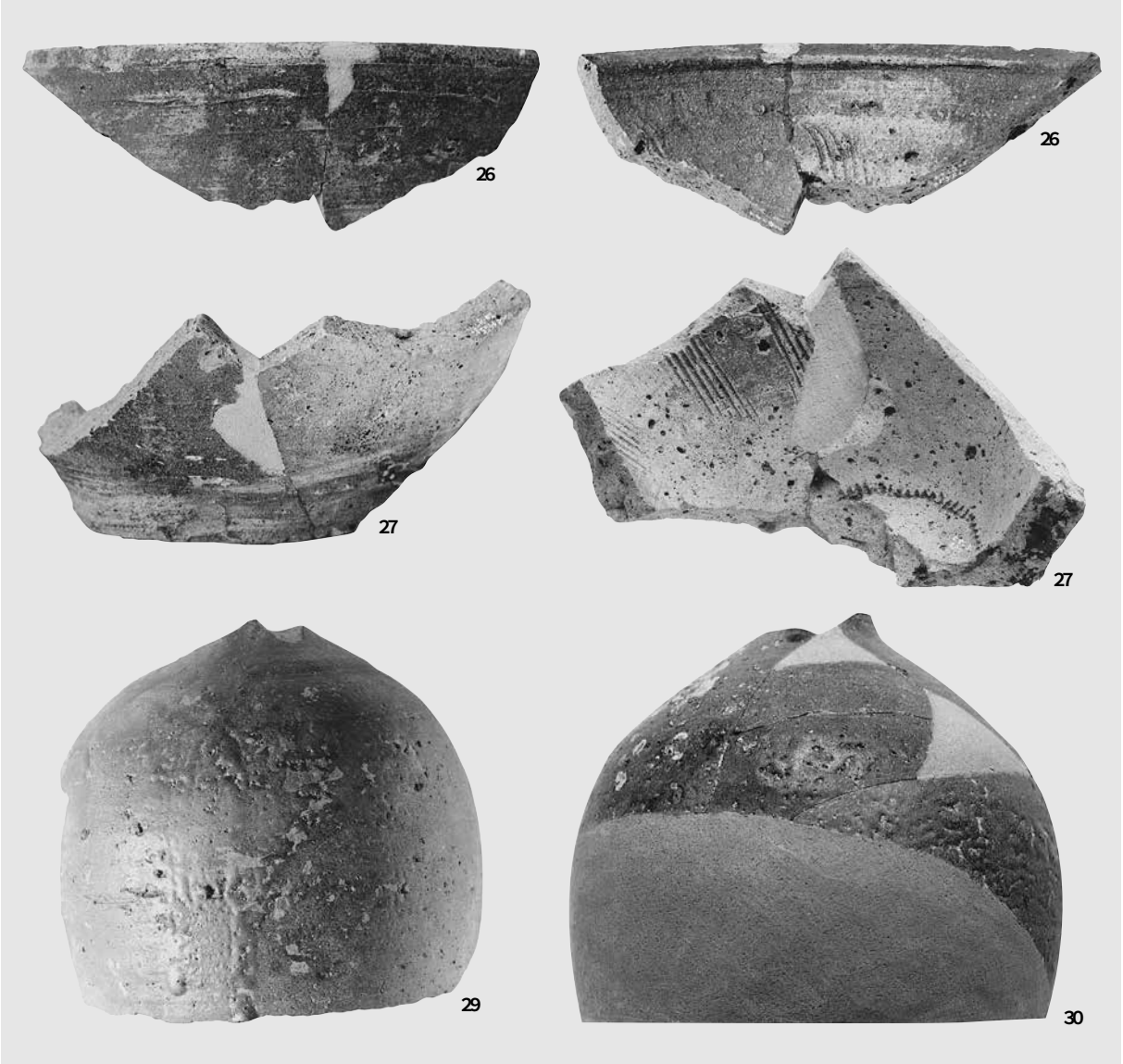
青磁・白磁・青花・瀬戸美濃系陶器



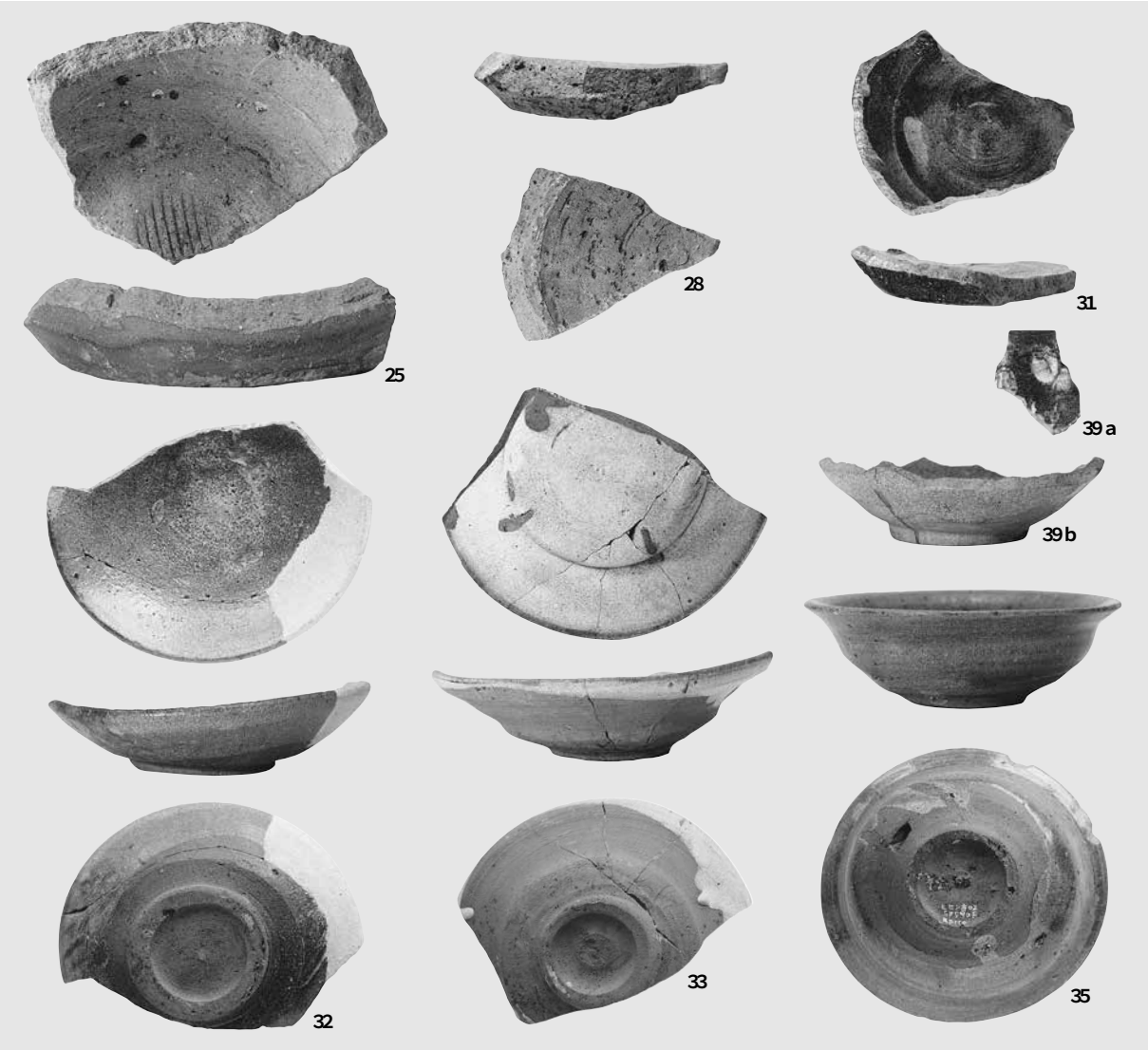
青花

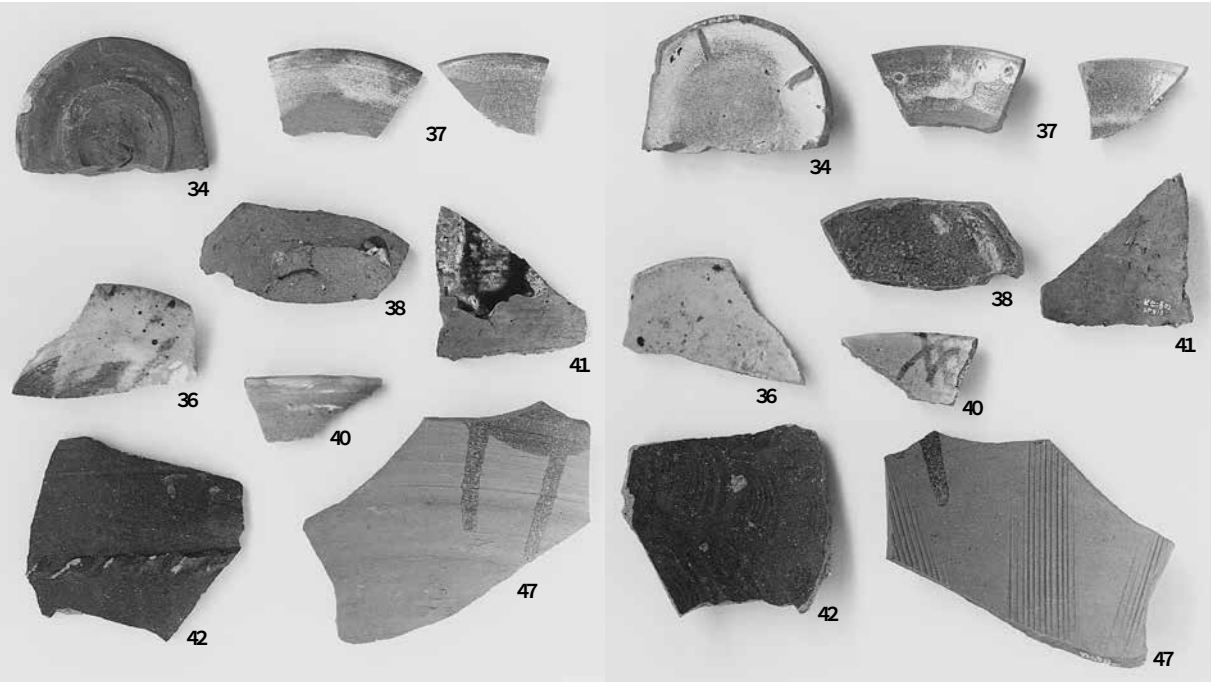


珠洲

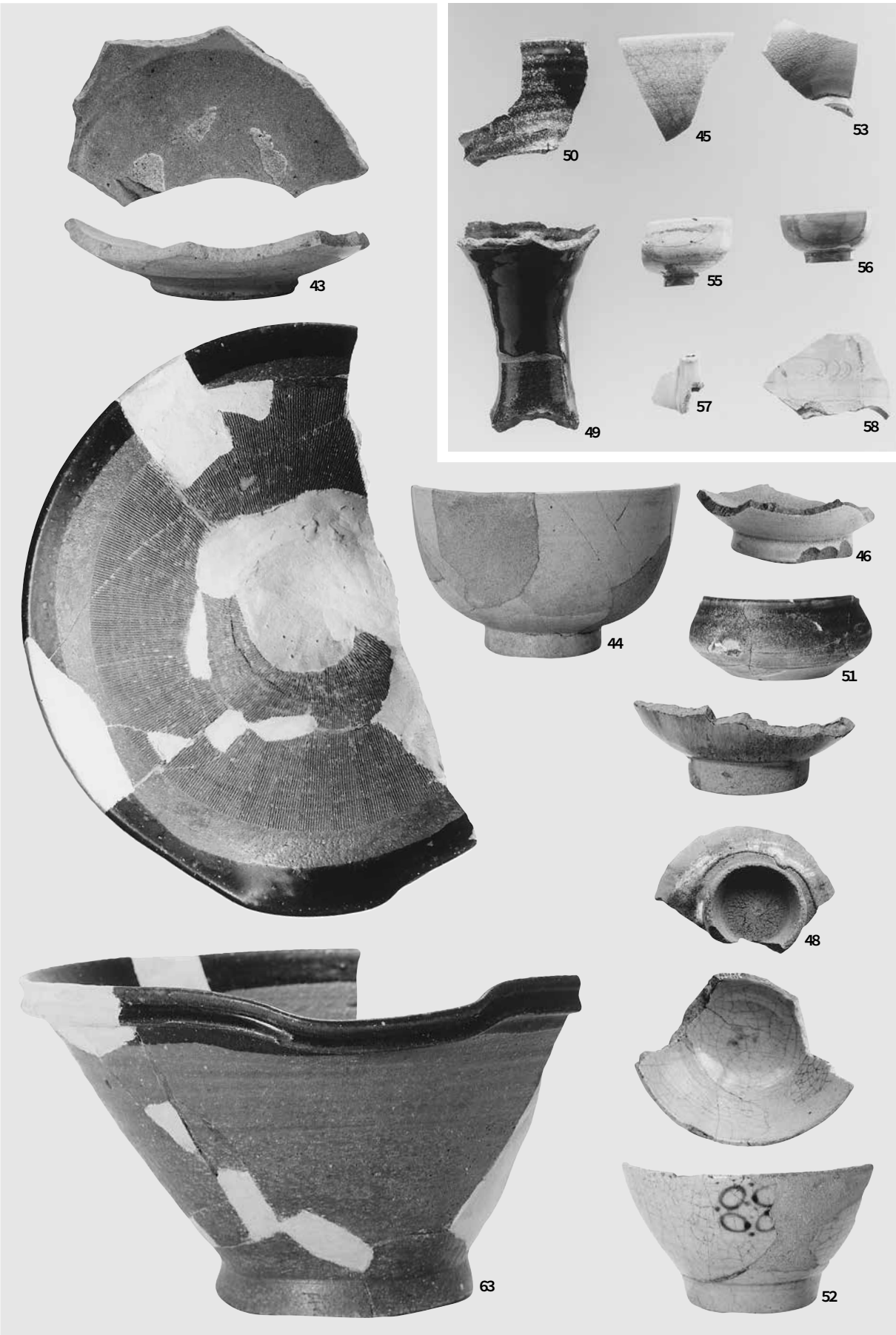


戸長里

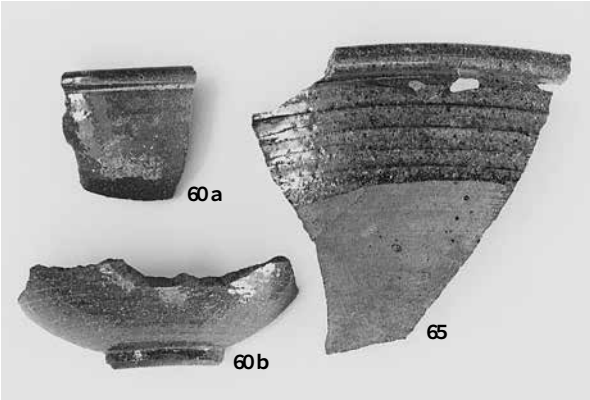


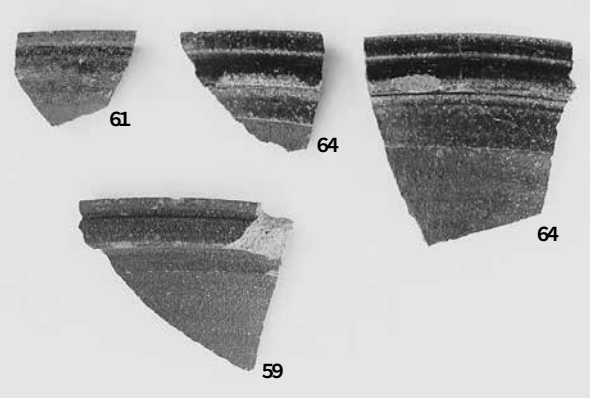


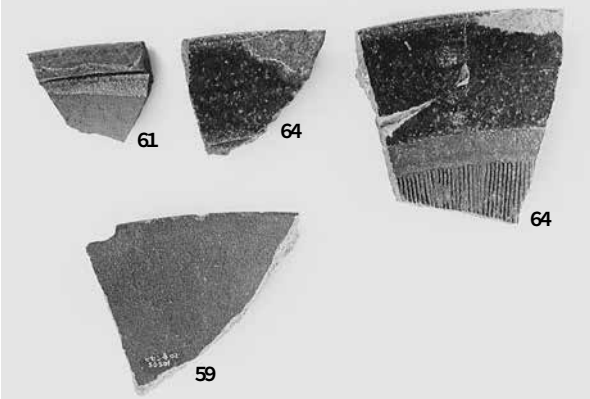
戸長里・瀬戸美濃系陶器・肥前系陶器他



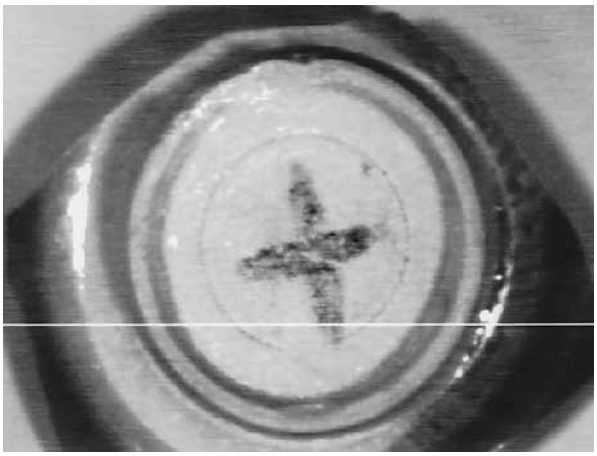
肥前系陶器・瀬戸美濃系陶器・在地系陶器他







在地系陶器他

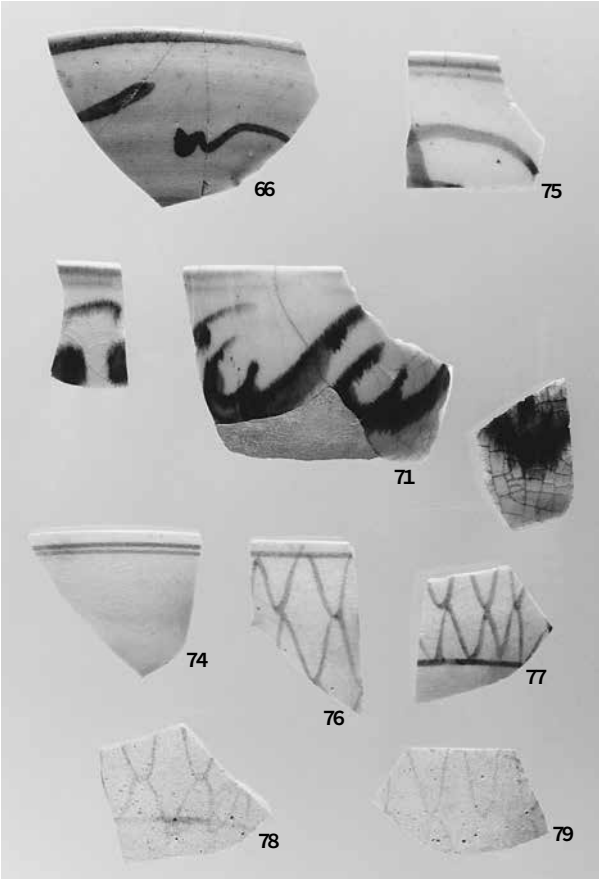


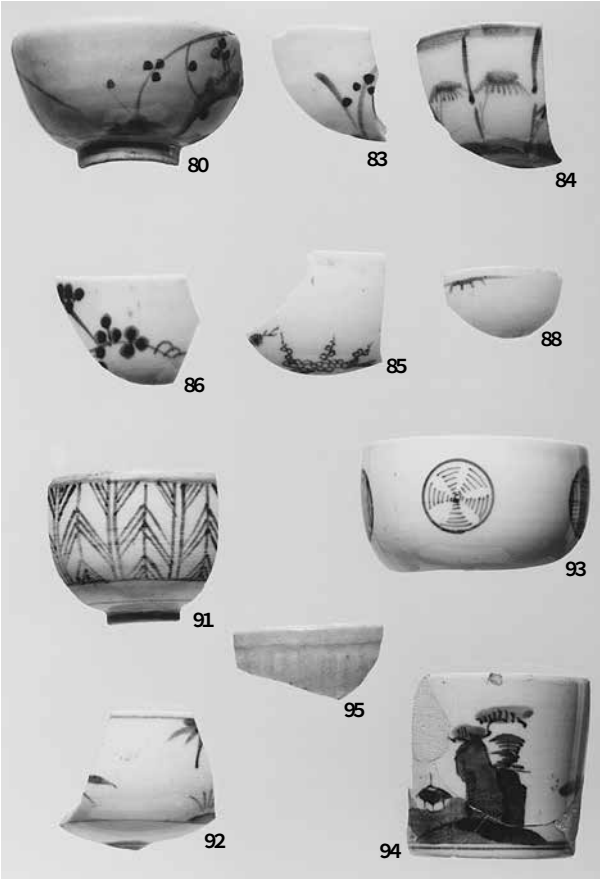
9 底面の墨書（赤外線写真）

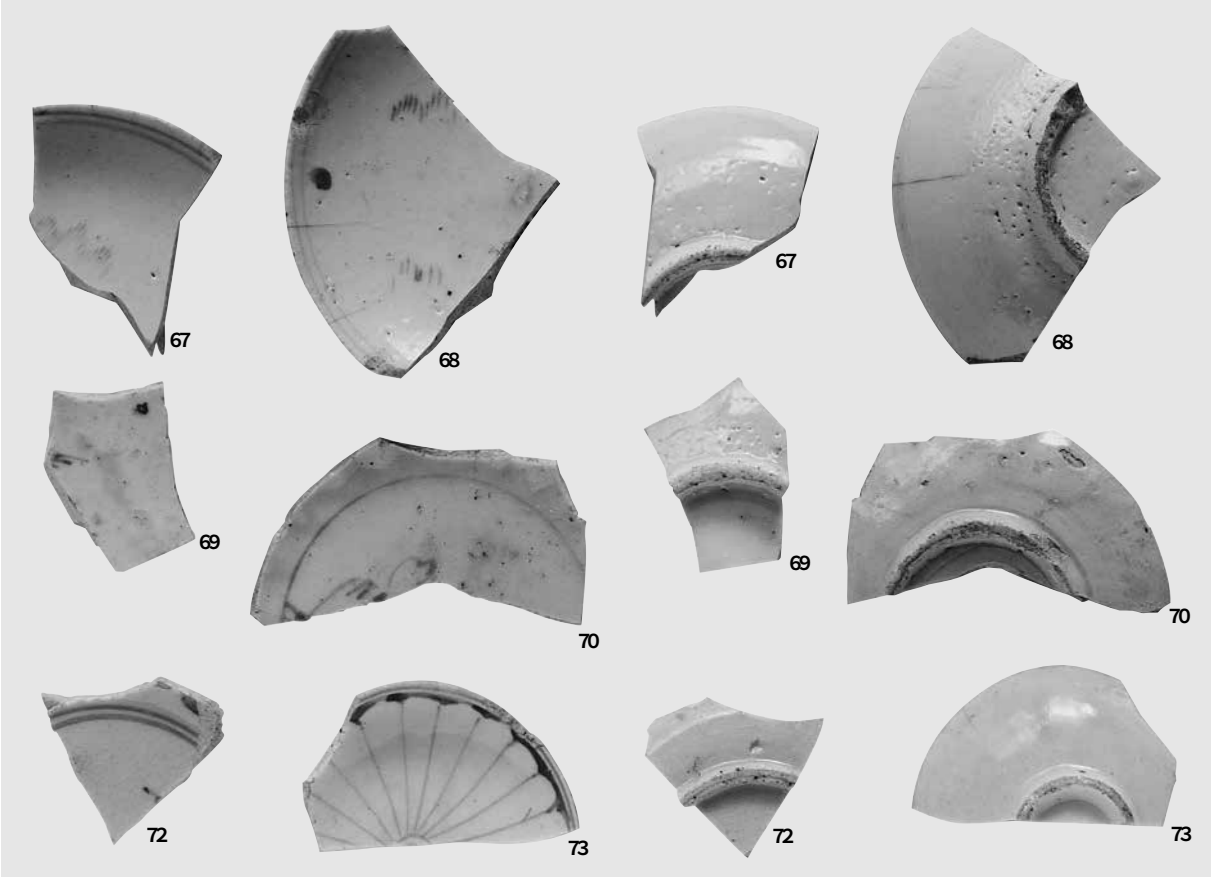
32底面の墨書（赤外線写真）

33底面の墨書（赤外線写真）

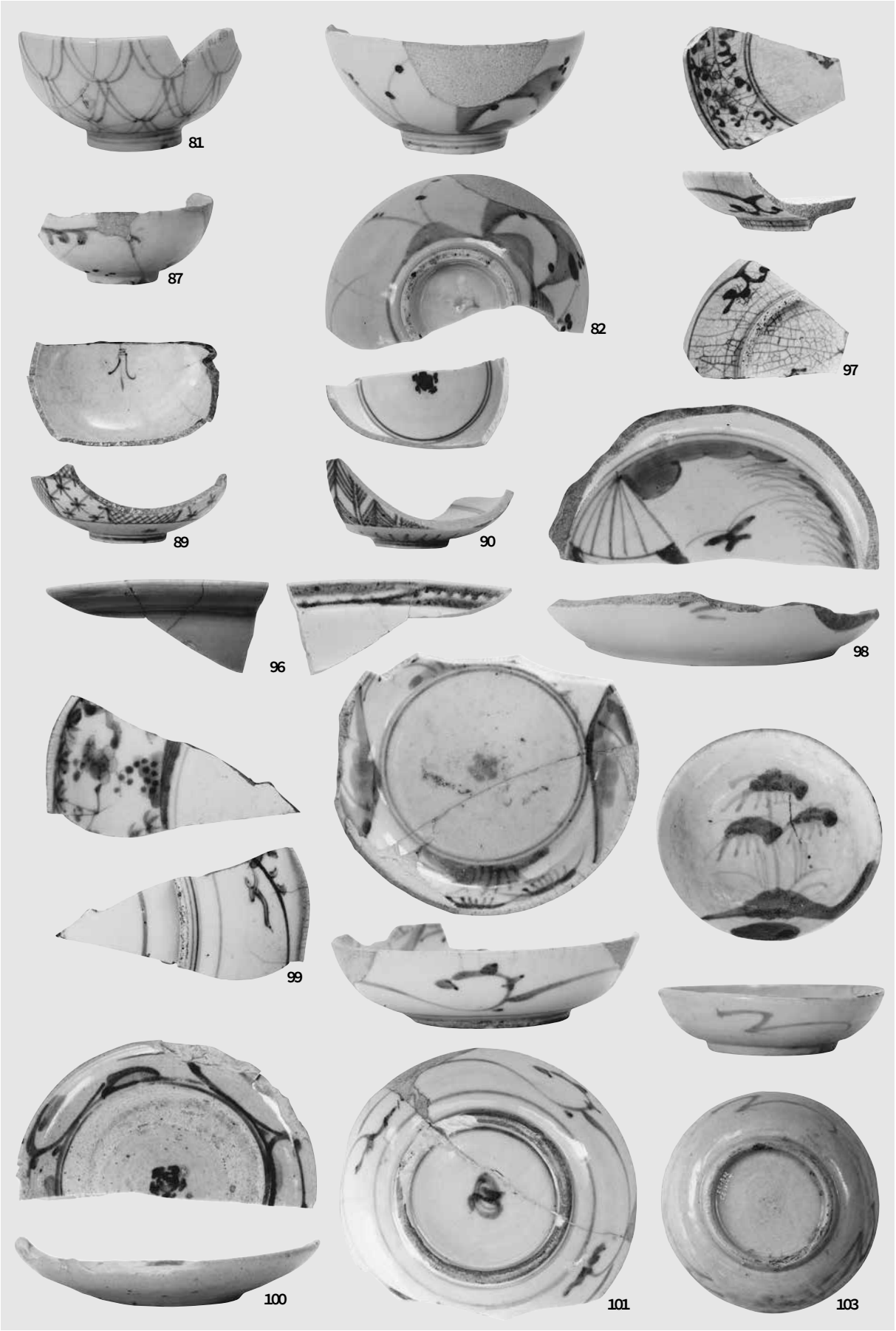
34底面の墨書（赤外線写真）


66
75
71
74
76
77
78
79


80
83
84
86
85
88
91
93
95
92
94

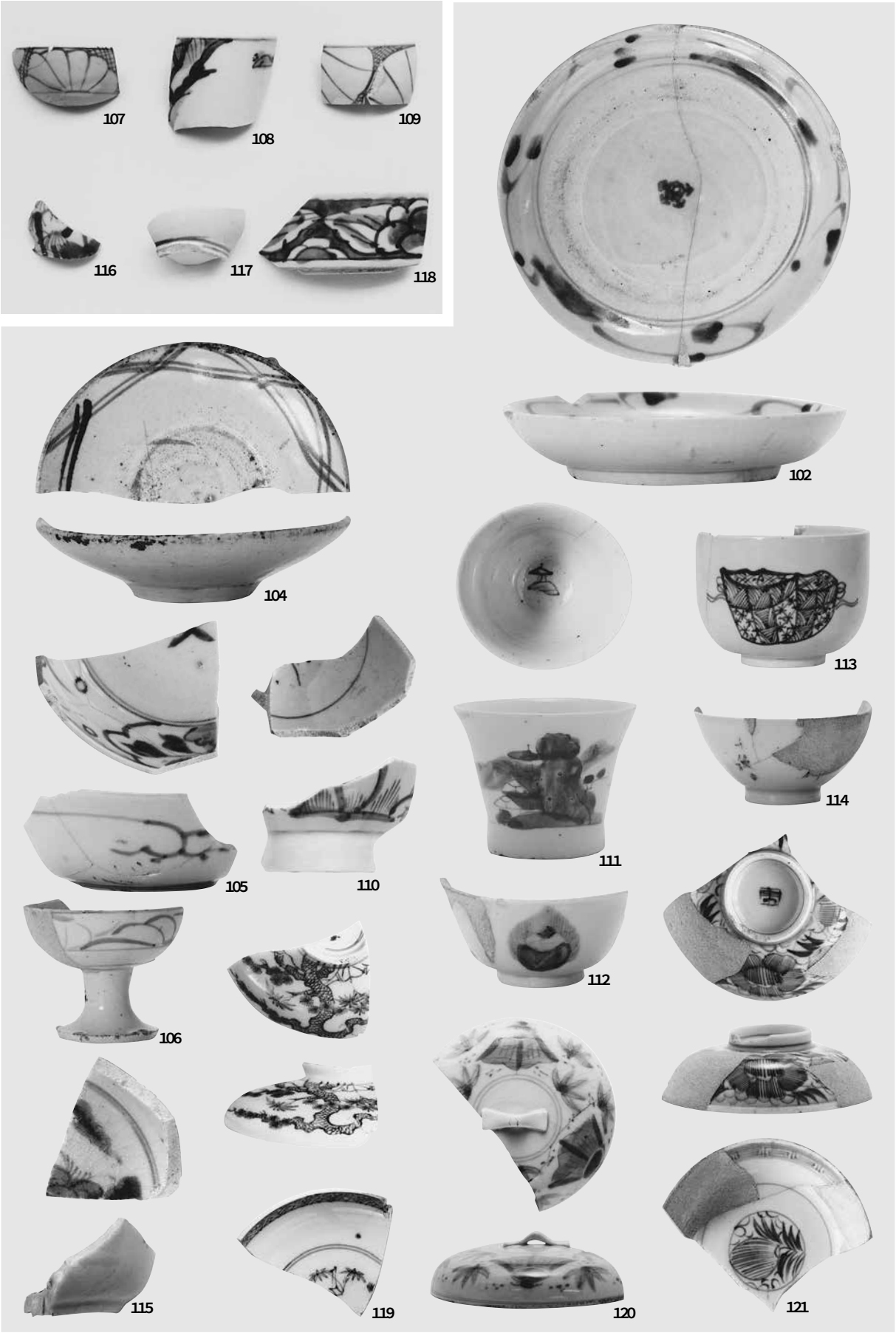

67
68
67
68
69
70
69
70
72
73
72
73

肥前系磁器

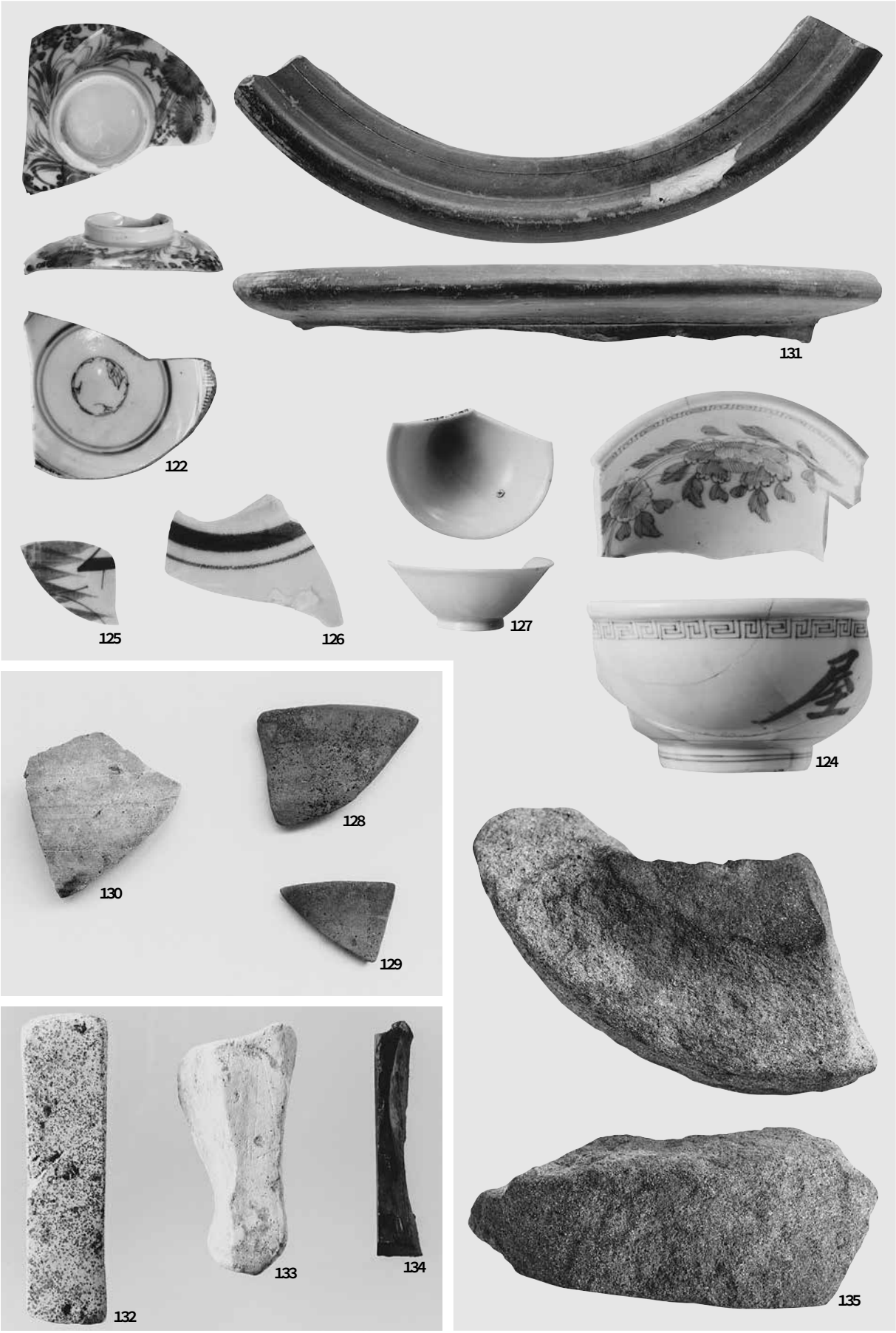


肥前系磁器

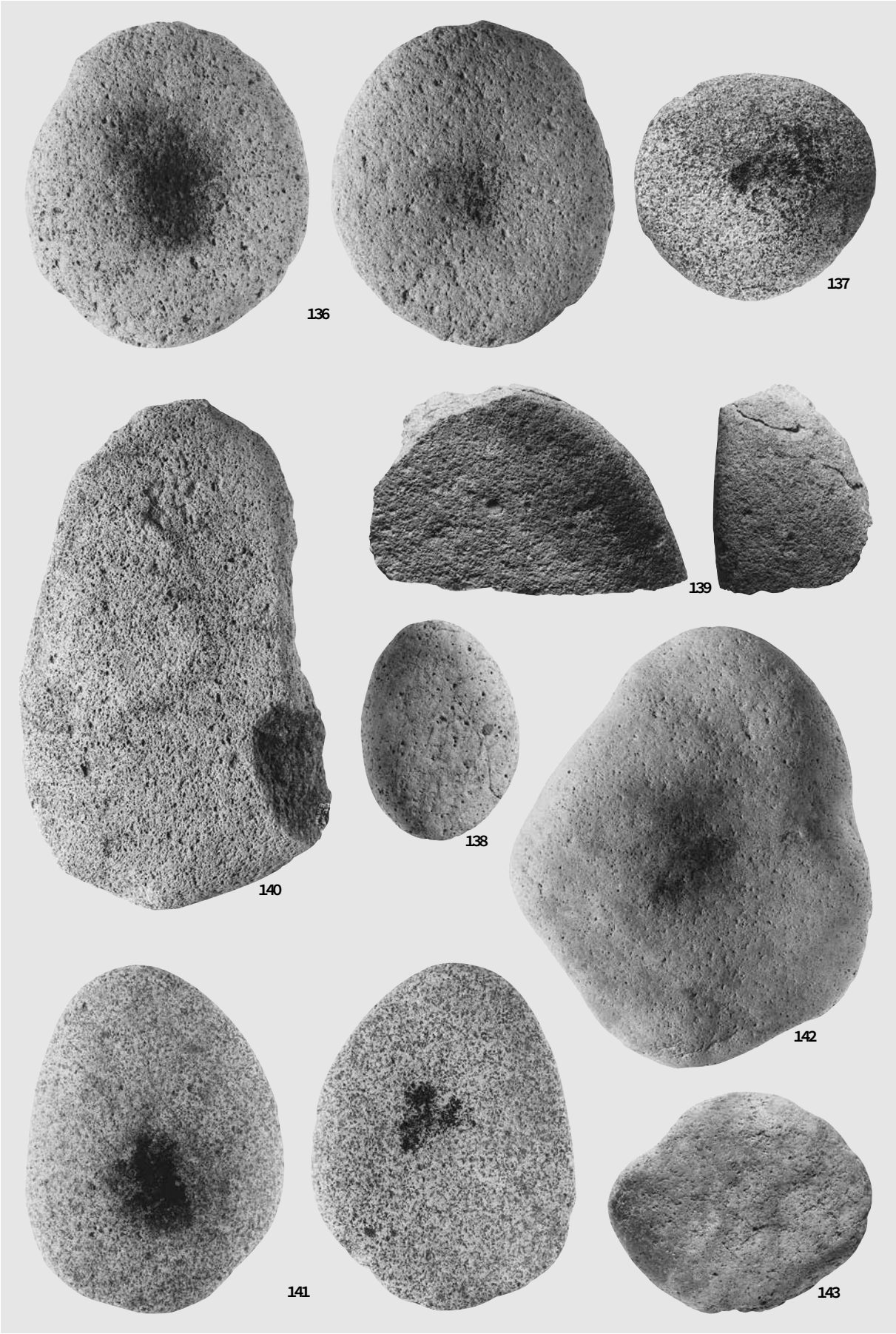
肥前系磁器


107
108
109
116
117
118
102
104
113
105
110
111
114
112
106
115
119
120
121

肥前系磁器他

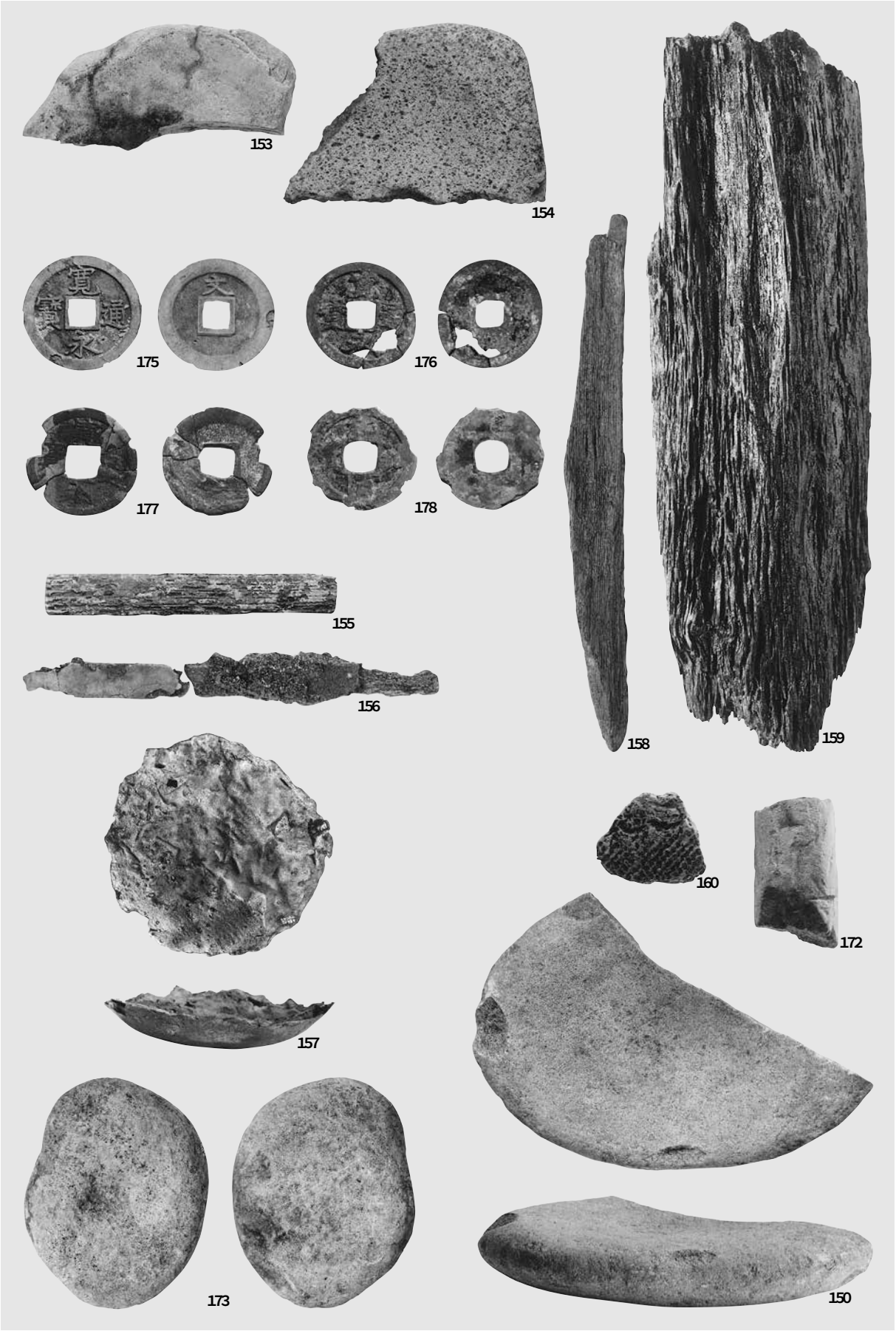


近代の陶磁器・瓦器・かわらけ・石製品

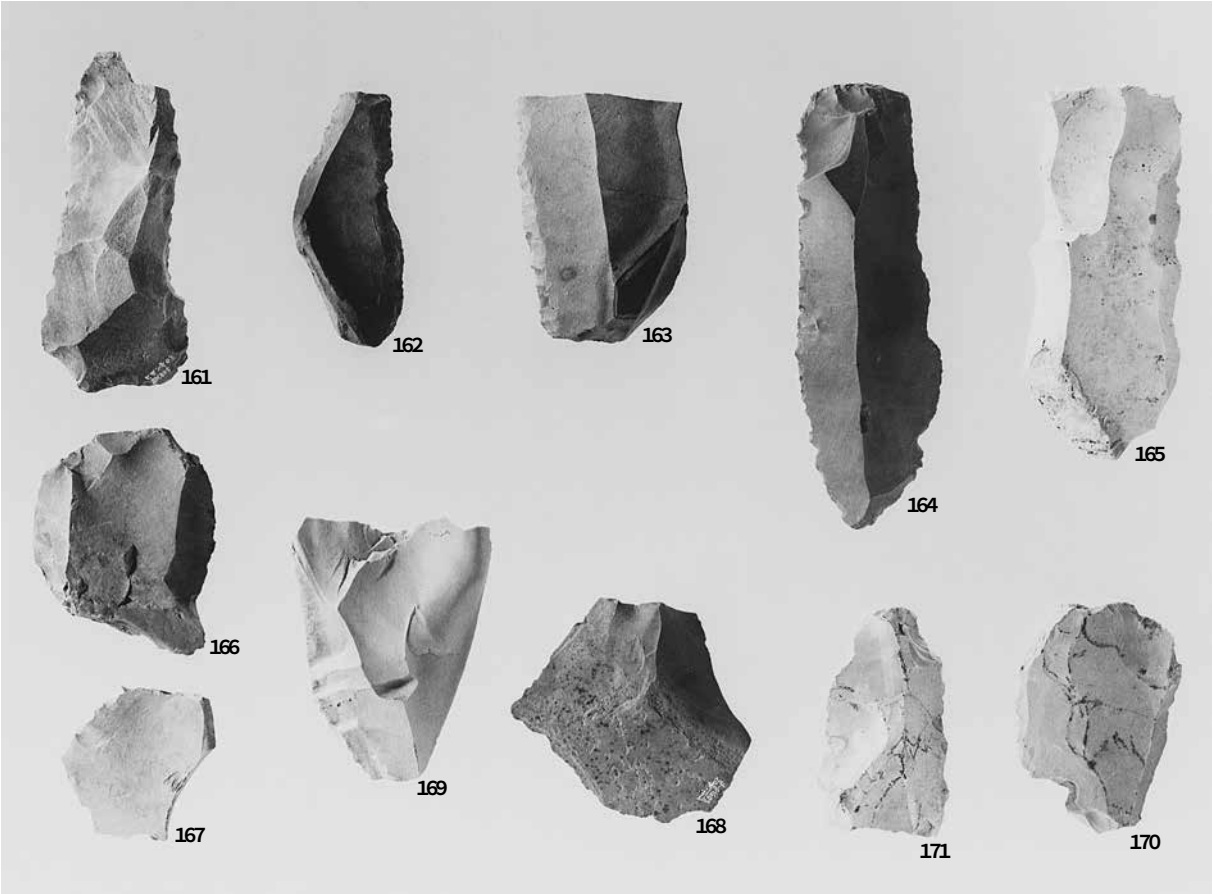


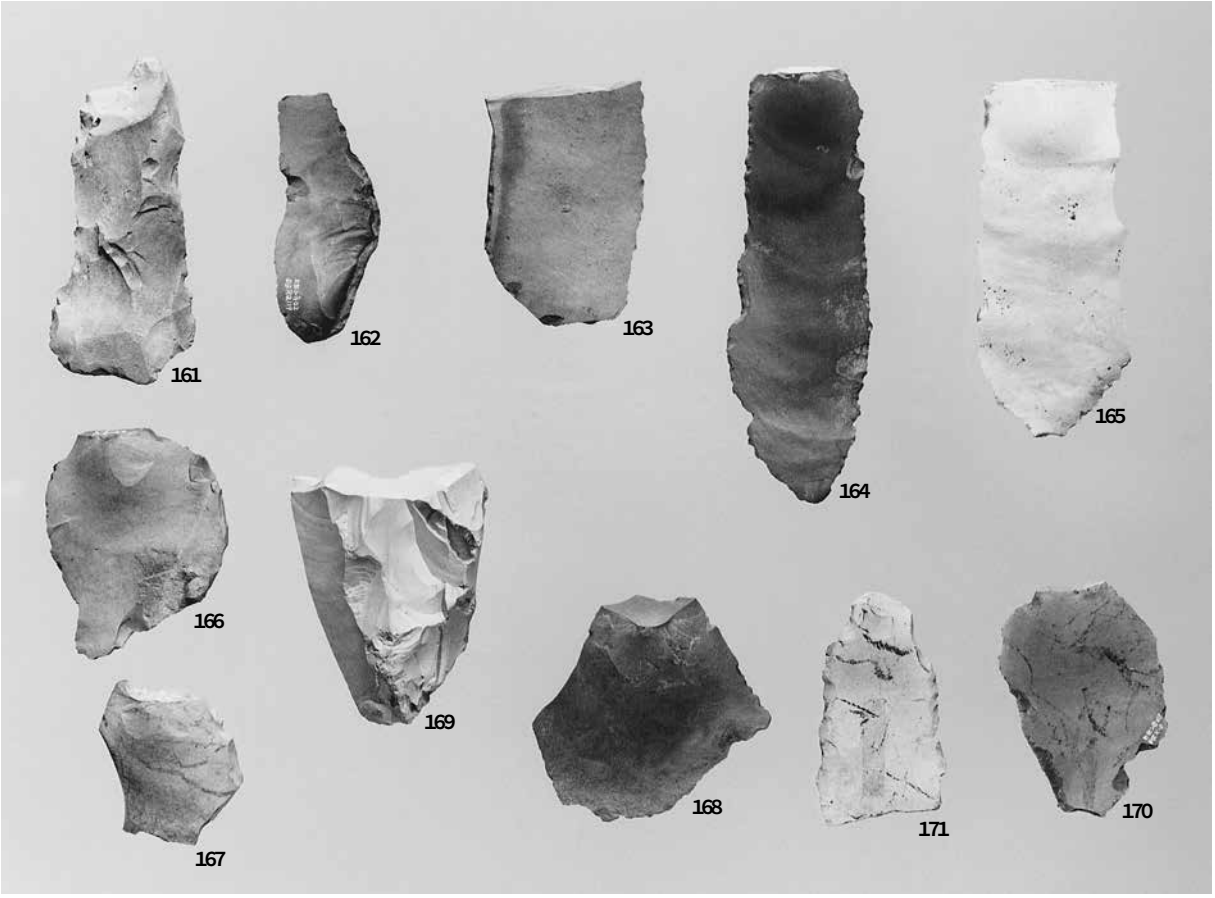
礎石

礎石

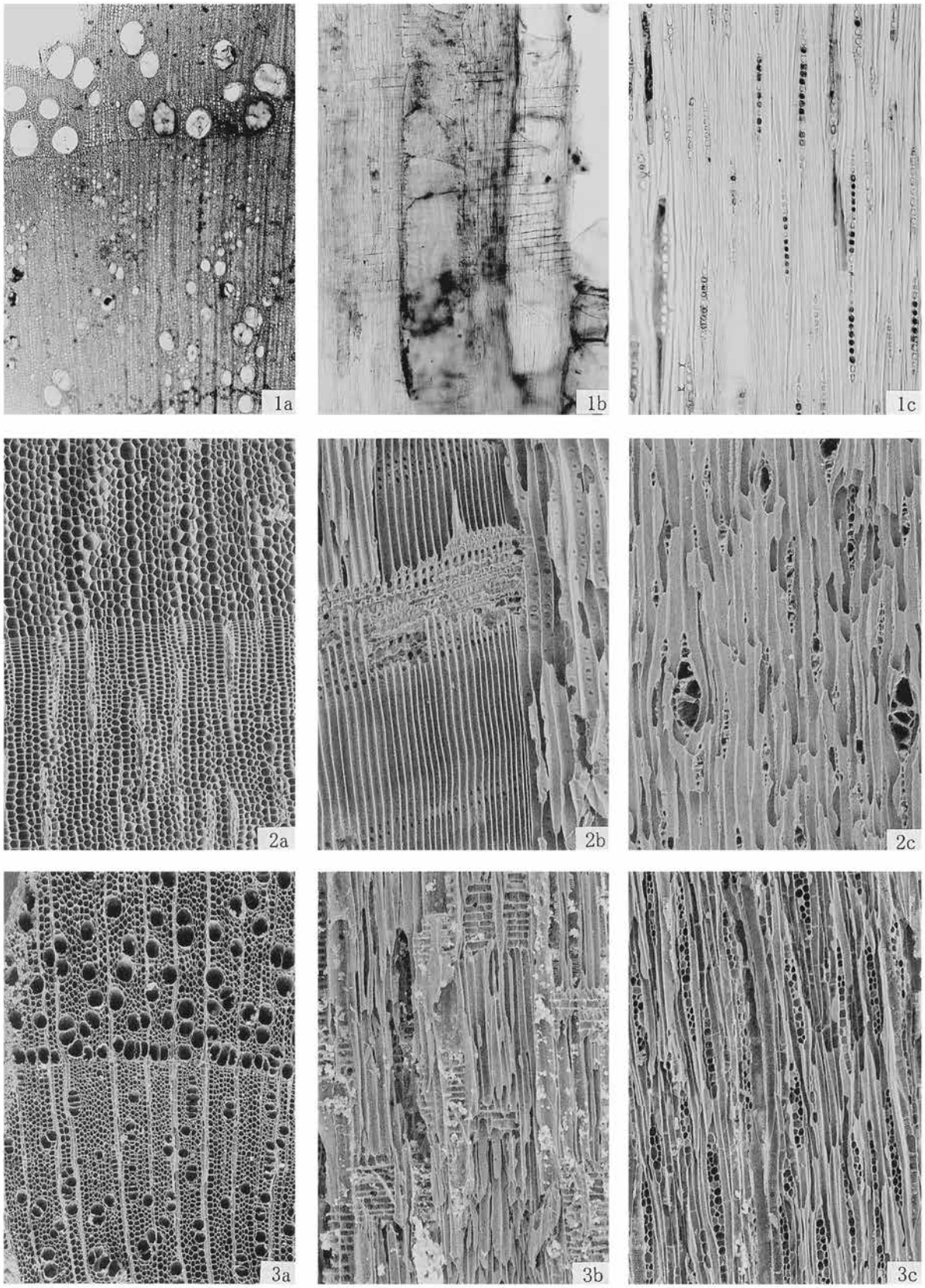


礎石・金属製品・木製品・縄文土器・石器・石製品


161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171


161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171

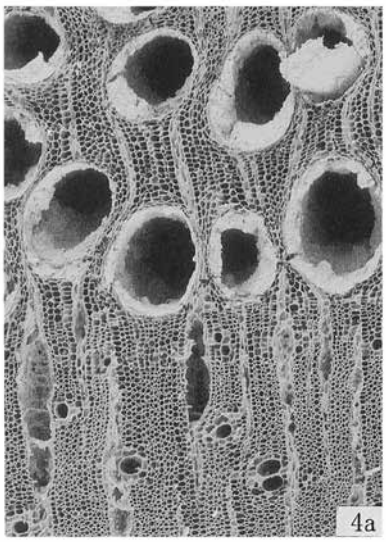
石器

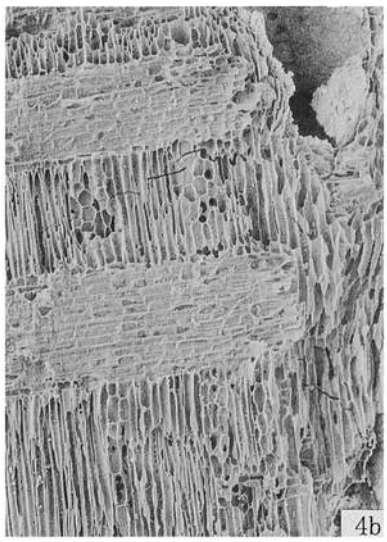


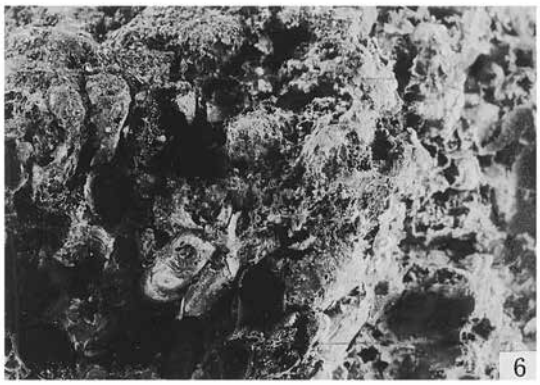
1. クリ（試料番号5）
2. マツ属複維管束亜属（試料番号1）
3. モクレン属（試料番号7）
   a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm:1a
200 μm:1b,c
200 μm:2,3a
200 μm:2,3b,c

木材・炭化材・種実遺体（1）







4. トネリコ属（試料番号18）　a：木口，b：柾目，c：板目
5. イネ（試料番号2）
6. イネ（試料番号2）

200 μm:4a
200 μm:4b, c
1cm:5
5mm:6

木材・炭化材・種実遺体（2）

報告書抄録

ふりがな	ひせんじあといせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	飛泉寺跡遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第134集
編著者名	菅原哲文　佐竹弘嗣　石垣岳彦
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL　023-672-5301
発行年月日	2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （m²）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
飛泉寺跡遺跡 （ひせんじあといせき）	山形県（やまがたけん） 西置賜郡（にしおきたまぐん） 小国町（おぐにまち） 大字市野々（おおあざいちのの） 字寺ノ前（あざてらのまえ）	6401	平成９年度 登録	38度 03分 48秒	139度 49分 01秒	１次調査 20010820 ～ 20011102 ２次調査 20020513 ～ 20021025 ３次調査 20030512 ～ 20030704	１次調査 1,700 ２次調査 6,500 ３次調査 820	横川ダム 建設事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	中世～近世	掘立柱建物跡　197 柵列　1 溝跡　23 土坑 柱穴	中世陶磁器 近世陶磁器 木製品 金属製品 石製品	中世から近世にかけての建物跡が繰り返し建替えられる遺構ブロックが６カ所確認された。これらは町割り・屋敷割りに該当すると考えられる。 建物では、間取りが８×３間で桁行21m以上に及ぶ大型掘立柱建物跡が確認された。 遺物は、中世では瀬戸・珠洲などの国産陶磁器の他、中国からの輸入陶磁器が見られ、近世では肥前産を中心とした陶磁器が出土した。 （総出土箱数：54）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第134集

飛泉寺跡遺跡発掘調査報告書

2004年３月26日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　中央印刷株式会社
〒990-0051　山形県山形市銅町一丁目１番５号
電話　023-631-5533

付図1　飛泉寺跡遺跡調査区全体図

付図2　飛泉寺跡遺跡調査区全体図